女子文壇

第七巻 十二月號 第十五號



明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

十二月一日より

歳暮大賣出し

◎御贈答品　贈りてよく、贈られてよき品々、種々取揃へ有之候

◎御仕着類　柄合、價格共に御恰好の品々、澤山陳列致し置候

◎勅題模樣　帶地、帛紗、半襟其他に應用し意匠を凝らし置候

◎商品切手　横濱鶴屋呉服店と共通にて、高尙優美に調進致候

◎羽子板　流行の逸品特に別室に陳列致し廉價に販賣致し候

東京今川橋

松屋呉服店

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女子文壇十二月號（第七年第十五號）目次

最も進步せる子宮藥

可要球

婦人病諸症は初期に於て格別の苦痛なく且つ局所の病に醫師の診察を受くる事の厭はしきより隱蔽放任して治療を怠るより病勢昂進して身心共に衰弱し遂に不妊娠早產流產の不幸を生じるに至る如斯は未だ家庭に於て有効簡便に使用する適當の婦人藥なきに因る一大缺點なり而して在來の婦人藥は頗る幼稚舊式にして直接病原に關係なき草根木皮的なれば其効力眞に謂ふに足らず近世醫藥學の進步は直接に藥劑を局所に挿入し或は外科的手術を行ひて治療の目的を達するなり

獨乙の婦人科大醫フロインド博士の處方に則り調劑せる『可要球』は是等總ての缺點を補ふ子宮病一切の外用藥にして子宮內膜炎にて下腹痛み產前產後又は平素に白帶下赤帶下に苦み腰より下腹へ筋張り子宮糜爛し或は出血し局所に臭氣ありて搔痒を感じ月經時の疼痛月經の過多なる等に外用する時は直に輕快全癒する驚くべき卓効ある新劑なれば子宮病諸症にて苦める婦人は一度是非使用して病氣を根治し給ふべし

尚梅毒淋渇の疑ある人は唯一丸を併用せば其の効最も大なり

定價
八球入金五十錢
十八球入金一圓〇〇
四十球入金二圓〇〇
特製百十球入金五圓〇
內地遞送無料

東京市本郷區湯島天神町壹丁目五拾參番地
唯一丸發行所 中西葆光堂藥局
振替貯金東京口座千五百番（電話下谷五四七番）

◎全國到る所の有名なる藥店にて販賣す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

牧場の女



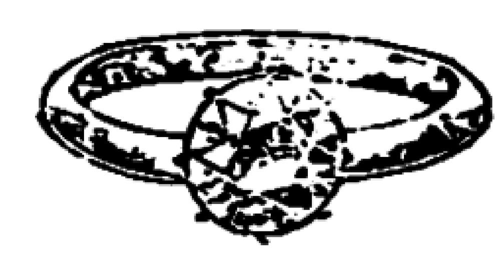
（大江[illegible]）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

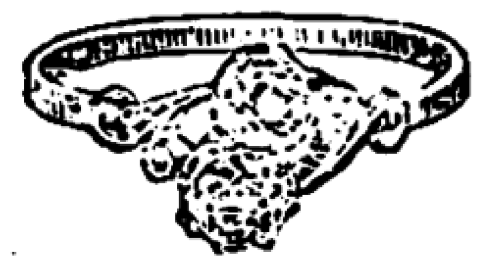
Digitized by Google

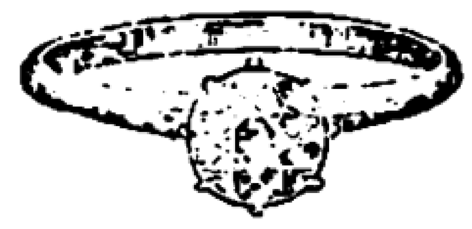
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

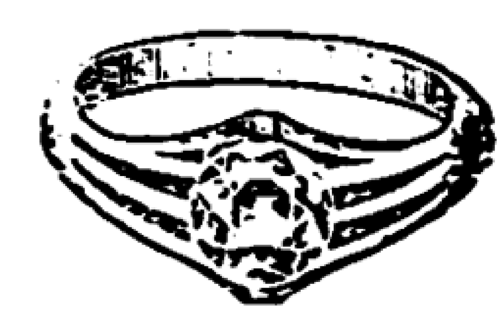
天賞堂製作品價格一斑


（1）ダイヤモンド入
十八金製價五百圓

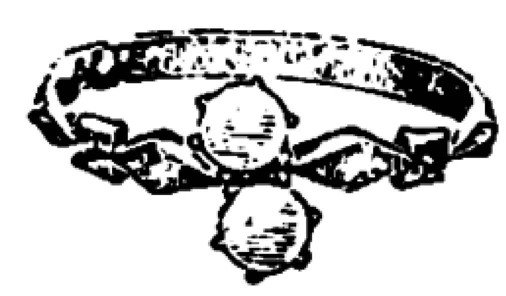

（8）眞珠入十八金製
價二十圓

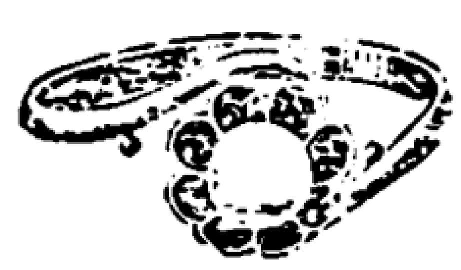

（12）白サフイヤ、ルビー入
十八金製價十圓

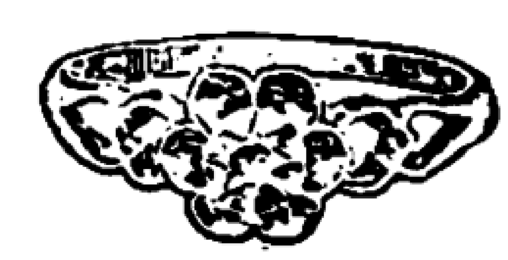

（16）色サフイヤ入十八金製
價十四圓

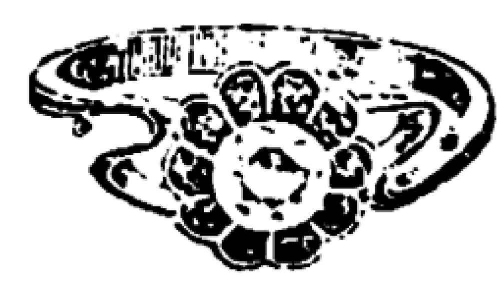

（2）ダイヤモンド入
十八金製價三百卅圓

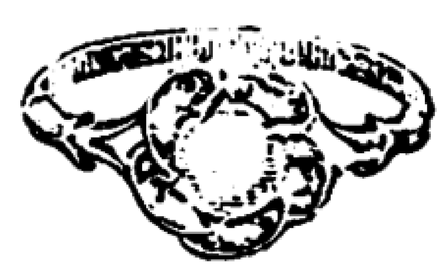

（9）ダイヤモンド入
十八金製價九百圓

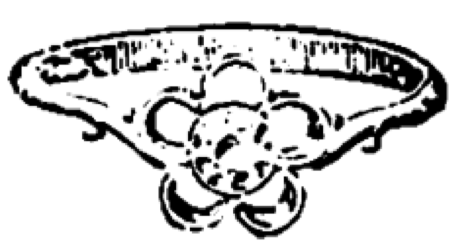

（13）眞珠入十八金製
價十圓半

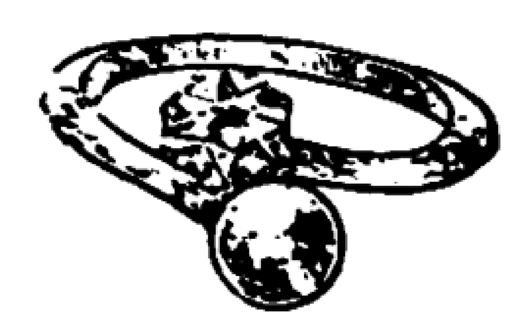

（17）眞珠入十八金製
價十五圓


（3）ダイヤモンド入
十八金製價百二十圓

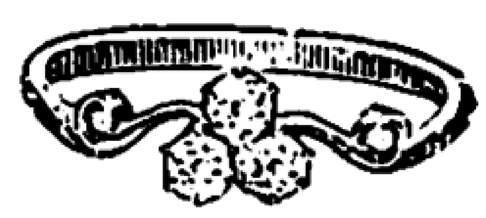

（10）ダイヤモンド入
十八金製價百二十圓

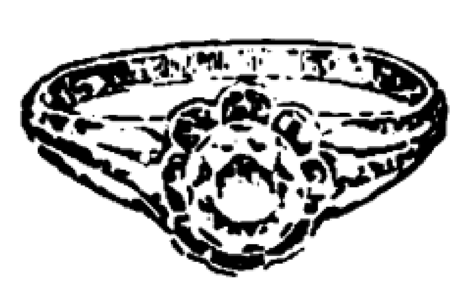

（14）眞珠入十八金製
價十八圓

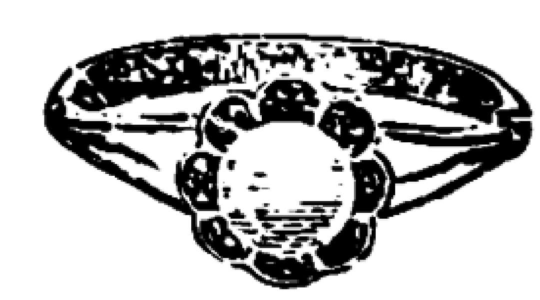

（18）ダイヤモンド入
十八金製價四十圓


（4）ダイヤモンド、眞珠入
價百七十五圓

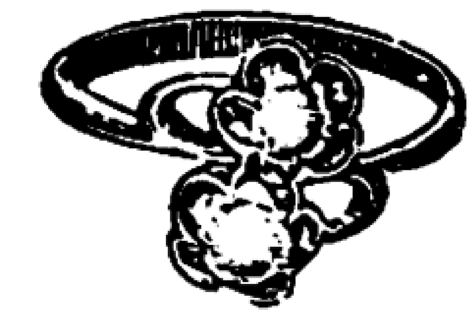

（11）ダイヤモンド入
十八金製價三十圓

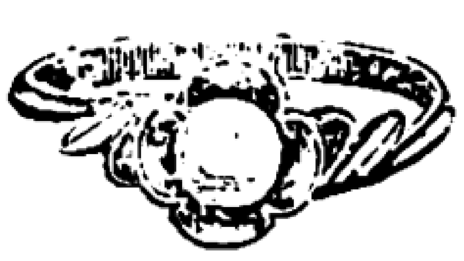

（15）ダイヤモンド、ルビー
入十八金製價廿八圓


（19）ルビー入十八金製
價八圓五十錢


（5）半肉眞珠入十八金製
價十五圓


（6）眞珠入十八金製
價十八圓


（7）眞珠入十八金製
價十二圓


（20）眞珠入十八金製
價三十圓


（21）ダイヤモンド、ルビー
入十八金製價百圓


（22）ルビー入十八金製
價八十圓

本圖は本堂諸工場に於て製作せる多數の指環中特に寶石嵌入の一斑を掲げ大小形狀に據り概價の標準を知るの一助となせるものなり此他美術彫刻指環印面付指環等を始め貴婦人用として、襟根掛、簪、櫛、笄、眼鏡、襟針、襟留、帶締、羽織鐶、時計鎖、同提物等に至る迄悉く現時流行の粹を抜き專ら品質の優秀と價格の低廉とを主眼とし以て斯界先覺の實を擧げんを期す冀くは愛顧諸君多少を問はず高需の榮を給はらんことを

天賞堂本店

東京市京橋區尾張町二丁目

電話新橋特長三三三○長三三四○長三一五三

振替貯金口座番號東京五五

大阪支店●東京神田出張所●横濱出張所

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新學期開始

◎本會は眞面目に短歌を研究試作せんとする初學者の爲に現代詩歌壇の名家が特に講演せられたる平易簡明なる和歌講義錄を發行し、懇切なる作歌の指導と、短歌に關する專門的知識を供給する。短歌に趣味を有する人、短歌を眞面目に試作せんと欲する人、現に作りつゝある人の入會を待つ！

此際至急入會者に限り**入會金を免除す**

見よ!!! 船來ラフ紙印刷は本講義錄唯一なり

和歌講義錄

十ケ月卒業

科目

△短歌作法
△新派和歌講義
△新派和歌評釋
△歌話
△萬葉集評釋

△歌人評傳
△詩歌の流派
△詩の評釋
△新派和歌史
△新歌語と作例

▲添删實例
▲歌人經歷談
△講師は皆當代新派歌壇の名家！

見本會則附き往復端書にて申込次第無代送呈

東京市神田區旅籠町一丁目
大日本短歌會 振替東京一九五五番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女學世界

第十一巻第十六號
十二月一日發行

菊判紙數二百〇八頁
口繪石版寫眞版浮山
正價二十錢 郵税二錢



東京本町
博文館

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

歳暮と年始の贈答品

三越はデパートメントストーアなれば、老若男女、あらゆる御方様の御贈答品を漏れなく取揃へて居ります特に三越の「商品切手」は御贈答品として御便利此上もなし。お正月も日一日と近づいて参りました。歳暮年始の御贈答品は此際是非三越より御求め下さる様ひとへに奉願上候。

十二月一日より
玩具展覧會
膳椀茶碗食器新製品陳列會

十二月十日より
羽子板大賣出し

東京駿河町

三越呉服店

伯爵寺島誠一郎氏家庭



（伯爵夫人京子）　（令孃茶子）　（伯爵母堂）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



代議士犬養毅氏令嗣及夫人



長谷川鐵五郎氏及夫人豊子



三春專賣局主事植木康氏及夫人敬子

U.C. BERKELEY LIBRARY

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

タカヂアスターゼ

高峰博士の發見の本劑は効力顯著なる胃腸新藥なり類似品あり注意

グリコナール錠

北里博士指導佐伯矩氏創製の本品は衰弱者肺病其他慢性諸症に卓効ある滋養新劑なり

説明書郵呈

東京市日本橋區室町三丁目 三共合資會社

ユーキリン

肺結核唯一の治療藥たる結列阿曾篤の副作用を除き然も其効果を完全にせしはスパイヤー博士發見の本劑なり

説明書郵呈

プノイミン

鈴木博士發見の本品は結核腺病特に神經衰弱症の最良强壯劑として現時治療界を風靡する有機性燐劑なり

東京市日本橋區室町三丁目 三共合資會社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

日本女子商業學校學監 嘉悦孝子女史案

最新實用 家計簿

一ケ年一册之豫定
但何月からでもつけられる組織です

定價金五拾錢
郵送料八錢

如斯完全なる家計簿他にありや？

はし書の一節 箇便につけられて、各經費が明細に分る物をと、皆樣の御要求により、工夫して附けさして見ましたら、略ぼ理想的の物を得ました。

この帳簿は

一册で賄帳●日記帳●金錢出納帳●元帳の四册を兼用します。

一度つけると賄帳●日記帳●金錢出納帳●元帳をつけることになります。

一頁の中に凡ての費目の合計が別々に記されます。また毎日出入の小計と現金殘高とが記入されます。

たえず豫算高と支出高との差が、分るやうになつてゐます。

收支一覽表は一年中の收支が分り月々の豫算超過又は減少高が分りますから年々保存しますと家計の歷史となります。

それ故

一册で何册もの用を兼ますから 費用が省け 一度つけると凡ての用をしますから 時間の經濟となり 一頁の中に凡てのものが現れますから 家事經濟の模樣が一目で分り 絶えず豫算と支出の差が分りますから 生活費の膨脹を防ぎ 一覽表の保存により 家計の歷史を知ることができます 是非御採用を願ます。

東京京橋區南鍛冶町

松邑三松堂

振替東京七九三四

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

婦人雜誌

十二月號

正價十五錢郵税一錢五厘

▼新年を迎ふる準備　高山昇
▼支那の賢者と家庭の團欒　棚橋絢子
▼新らしき主婦にての親族交際をのぞむ　宮田修
▼日本の女は餘りに世間見ずである　原龍豐
▼規則正しき生活　市川源三
▼誠實なる主婦の務め　宇山祿子
▼家事經濟の第一歩　嘉悦孝子

附録　クリスマス號　ドルトルシユレーダー　松美佐雄　竹貫佳水　小崎弘道　島貫兵太夫

- 眞情ある贈物　三谷民子
- 新年の御題と書初め　岡山高蔭
- 私の雇人の使ひ方　吉岡彌生子
- 婦人評論　蘆谷蘆村
- 歳暮の家庭學校　錦古里以次
- 愛兒を失つた母の述懷　高山七枝
- 乳母の選び方　弘田博士
- さまぐの廢物利用　しめ女
- 大阪と京都の女　加藤みどり

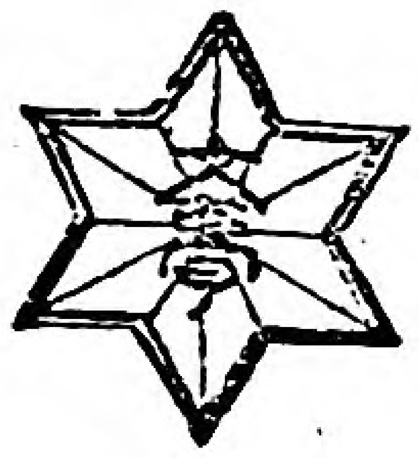
- 着心地よき木綿ものの洗濯と着物のしまつ　花燮
- 變つた餅の拵へ方　瀧浦潭
- 十二月の和洋料理　清齋軒
- 歸途の夕ぐれ　宇山祿子
- 家庭講談　蘭の一株　若葉

口繪

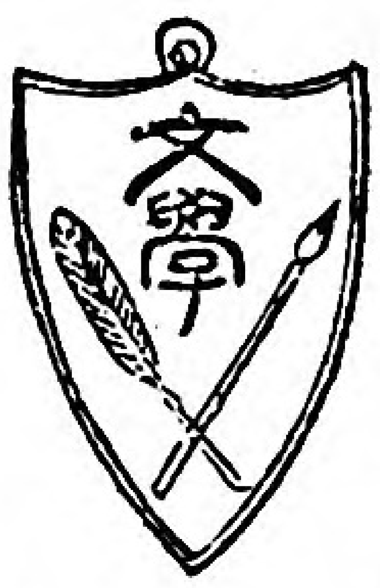
- 石版畫　池田蕉園
- 石版畫　平尾眞正
- 寫眞版……

東京芝區宇田川町
增澤出版社
振替東京一三二三

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA


本會員帽章

新學期開始
實物三分の一大
實物二分の一大


本會員徽章

文學研究の唯一機關出でたり

本會員及本會卒業生の特典

此際入會者に限り種々の大特典を與ふ

本會員には大家の所論を載せ會員の作品を滿載せる文學雜誌を無代進呈す◉本會員には文章其他の無料添削の特典を與ふ◉本會員には事情に依り無料講習の便あり◉本會卒業生には學資貸與の特典あり◉本會卒業生には各新聞雜誌記者に就職紹介の便宜を與ふ

初等文學講義錄

教授科目

文典。論文。小說。書翰文。記事文。新聞學。和歌。俳句。新體詩。國語。漢文。文學概論。日本文學。西洋文學。雜科。

各科講師は專門の學士文士

五ヶ月卒業 會費一ヶ月金廿五錢 全學期一圓廿錢

講義錄見本附き 規則書 無代進呈

東京市神田區西小川町二ノ九

大日本文學會

好評三版出來

產科婦人科 櫻井病院長 醫學士櫻井郁二郎先生序

姙婦必讀 安產の心得 附育兒法

婦人科小兒科 吉田賢子先生著

▲御婦人の一番大役なのはお產であります！

▲本書は月經閉止後の狀態より姙娠中の攝生產褥中の心得產後の養生等章を分つこと四十附するに育兒法を以てし細大漏さず懇切平易にして一讀會得實地に應用して遺憾なからしむ是れ近來の好著にして姙婦の必讀書なり

洋裝菊版美本
總ふりかな付
挿畫入全一冊
正價金四拾錢
送料金四錢
郵券一割增

發兌 東京京橋區南鍛治町三 宇宙堂

學友



中山よれ子



岡田はま子



加納せい子、安永梅子、遠藤さう子

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

菊の葉



實業家岩谷松藏氏夫人政子





實業家梅田潔氏夫人きよ子



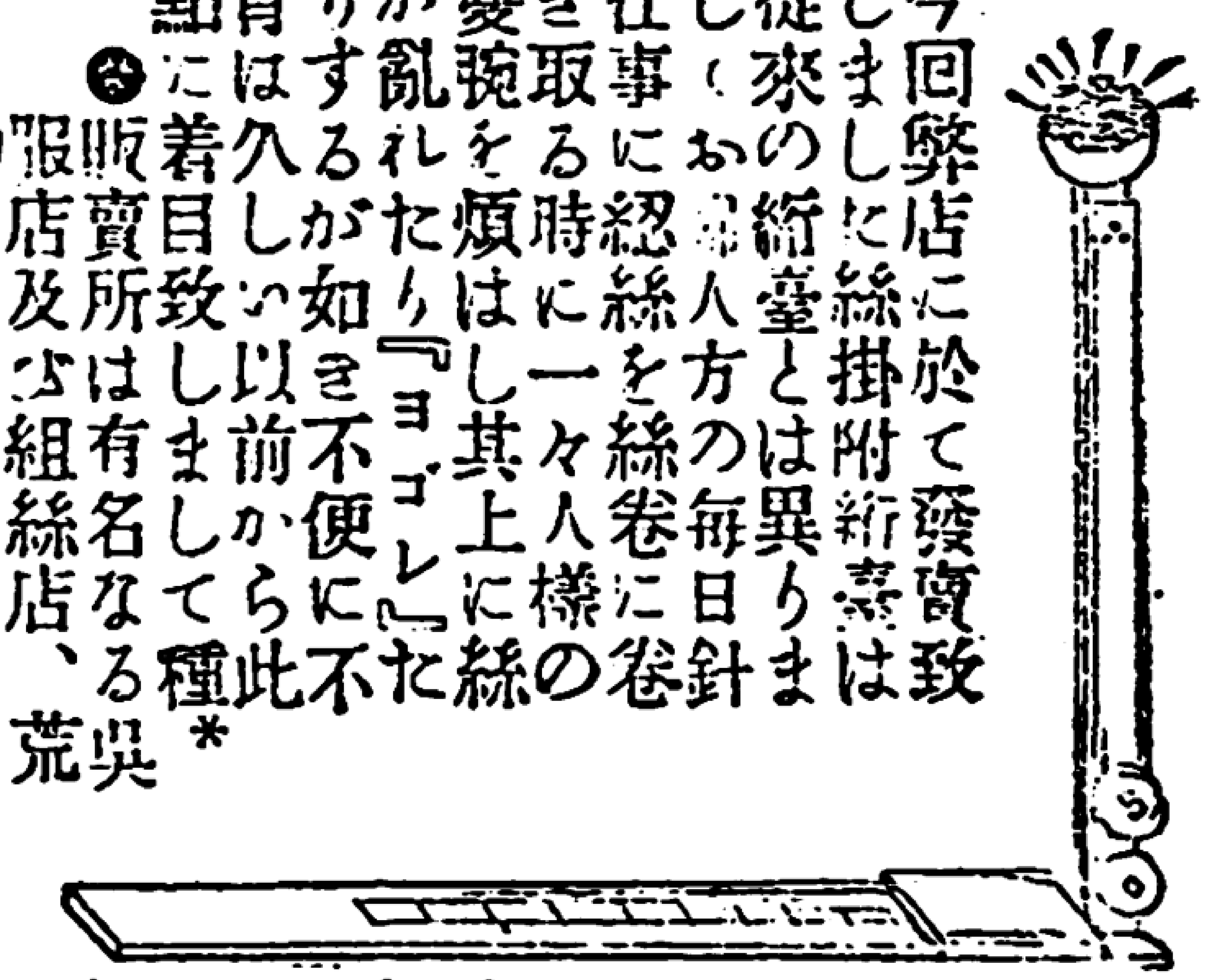
U.C. BERKELEY LIBRARY

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

特許竹中式 絲掛附絎臺

今回弊店に於て發賣致しました絲掛附絎臺は從來の絎臺とは異りましゝお婦人方の毎日針仕事に絎絲を絲卷に卷き取る時に一々人様の雙腕を煩はし其上に絲が亂れたり『ヨゴレ』たりするが如き不便に不肖は久しい以前から此點に着目致しまして種*



*種々苦心しました結果上圖の如き人手を煩はさず單獨にて絲卷へ自由に卷き取ることを得る絲掛附絎臺を發明致し特許局の特許を得て廣く賣出すことに致しました右絲掛附絎臺を御使用の節は從來の絎臺の様に決して不便もなく御使用後は『ヲリタヽミ』が輕便で且つ針差しや尺度を自由に『シマイ』得る様に出來て居りますから一般の家庭用並に女學生諸君の學校用として輕便此上もありません

歳末年始贈答最適品

(御婦人方の新福音)

❂販賣所は有名なる吳服店及び組絲店、荒物店にあります

【定價】

御誂朱塗製	美製箱入	金七拾錢
御誂黑塗製	(同)	金六拾錢
特別上製	(同)	金四拾錢
特上製	(同)	金參拾錢
上製	(同)	金廿五錢
並製		金貳拾錢

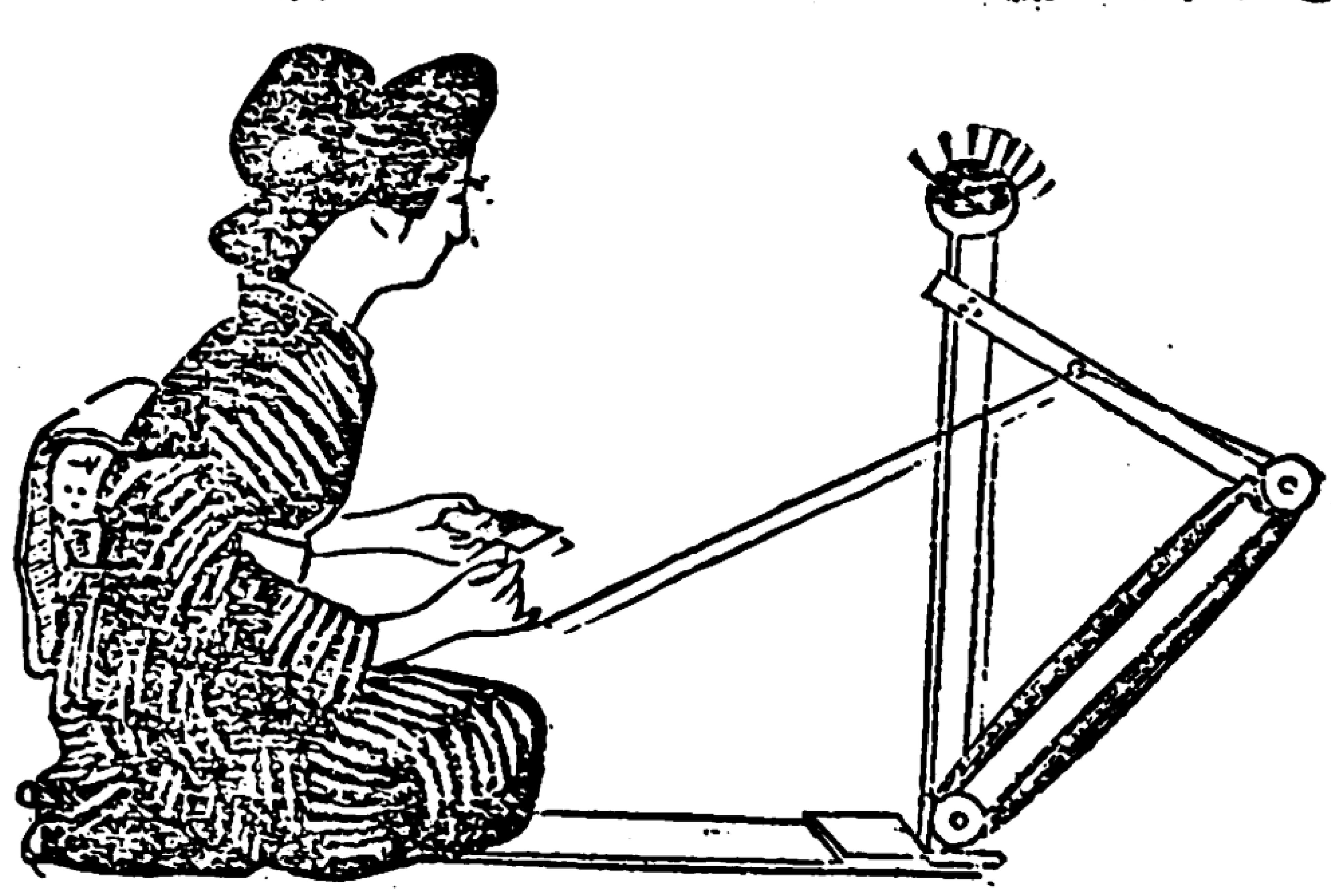
▲他方は送料拾貳錢海外卅五錢市内は無料
▲代金引替は拾錢增郵券代用は壹割增

使用法

右絲掛附絎臺は下圖の如く下部にある二個の絲掛車を絲の輪の長短に因りて『ネジ』鋲を以て自由に『シメ』絲口を中央にある輪に通して絲卷に卷く時は二個の絲掛車は自由に廻轉して他人のお手を煩はさず絲の亂れるが如き心配なく單獨にて容易に絲卷に卷くことを得て輕便此上もありません是非御使用を願ひます

◎特約販賣お望の方は至急御來談あれ

製造發賣元 東京市赤坂區青山南町二丁目十六番地 **竹中商店**
電話芝二千八百八十[illegible]番
振替貯金口座東京二三二三番



婦人畫報

十二月十一日　十二月卷　一冊二十五錢　六冊一圓五十五錢　十二冊二圓八十八錢

桃われ……石川寅治氏筆 二頁大三色版

◎女子美術生徒の活人畵 ◎雨傘の製法順序 ◎十一月十五日七五三の祝ひ
◎松原氏の邸宅庭園及び茶室… ◎正親町公和氏と婚約成し大谷綾子姫…

初冬の果物……石版二十度刷表紙

伏見若宮殿下御出發と妃殿下御見送

◎三輪田高女運動場の五分間 ◎女學館生徒の舟遊び ◎女子大學運動會…
◎樣々な手つき ◎お茶の水高女生の芋ほり ◎第一第二第三高女運動會

久邇宮三女王殿下最近御眞影

天長節夜會々場……

◎棚橋、淑德、京華、京都師範精華各女校運動會 ◎川島氏と隈氏の家庭
◎待宵會 ◎臨地會書道大會 ◎弘道會女子部大會 ◎琴の浚 ◎令孃かゞみ

皇太子妃殿下學習院女學部台臨……

見よ本年最終の我婦人界を飾る本誌の冬の裝ひを

暮れ行く歲の瀨……井上博士

▼今年の女學界と婦人界……下田次郎
▼新年の御題詠進心得……大口鯛二

借家の注意……佐治實然

▼皇后陛下御歌註解……遠山稻子
▼十二月の婦人の仕事……井上秀子

年の暮と家庭の經濟……添田博士

▼育兒十二ヶ月……加藤博士
▼召使の仕込方……加藤常子

暮し向の上手下手……嘉悦孝子

▼女子大學運動會の印象 ▼歲暮贈答品しらべ…
▼十二月の趣味 ▼お正月の用意……吉村里子

同情心……小河博士

▼婦人の眼……山口博士
▼兩內親王殿下の御事……

訪問の快不快……齋藤秋子

▼冬のしたくしらべ…… ◎安價に出來る子供帽子
▼女歌人……佐々木博士 ▼泣くと云事……久保眞英

歲暮の感……濱尾、高田諸夫人

其日其日……三宅花圃

東京麴町區飯田町四丁目四番地　東京社　電話番町二三三九　振替貯金口座東京一一八一八

満天下の少女諸君に謹告

四十五年一月一日創刊

少女画報

毎月一回一日發行　定價十五錢　郵税一錢五錢

◎理想的の少女雑誌生る◎

▽少女さん方のよいお友達として來年の正月から少女画報と云ふ可愛らしい、無邪氣な、而して怜悧な妹が生れます。歳は十三か四、婦人画報の唯一人の妹です。

▽女學校や家庭で如何に良い教育を受けても、若し悪いお友達に交つたなら、白き絲の紅きに染まる比喩の通り、皆さんは決してよい心、美くしい心の婦人になれません。皆様の益友として少女

▽画報は生れました。無垢な清らかな花のやうな、皆さんの心に些の汚點でも附けては大變です。少女画報の讀物はいづれも水の如く清く、花の如く美くしく、鳥の如く音色よいものばかりです。画

▽報には皆さんの學校も出ます、家庭も出ます、遊びも出ます。珍らしい事、樂しい事、而して爲になる事、それはそれは面白い、をかしいものが澤山あります。皆さんは一目見て、あゝ、

▽うつくしい善いお友達が出來たと、さぞお喜びになりませう。讀物はこれまた面白くてそして有益なものばかり。内證で二つ三つお話すれば花園女史の筆になる感心な梅子さん。羽子板娘のすゞ子さん。文子さんのお手傳、其他

▽まだ〱澤山あります。面白い懸賞だの、愉快な遊びだの學校參觀だのあとはわざと申しますまい出るのをお待ち下さい。それから附錄としてパラダイス双六を差上ます

▽るから目の醒めるやうな、家庭の遊びとして好いものです。

尚有名な高島平三郎、倉橋惣三兩先生は本誌發刊に非常に同情を寄せられ、編輯の顧問として御意見を述べて下されることになりました。

◎美くしくて面白くてそして爲になるお友達◎

東京麹町區飯田町四丁目四番地　東京社　電話番町二三三九番　振替口座一一八一八番

ニキビ

ニキビは若き男や女の顔にボツ〳〵とふき出す小さい吹出物で終にはウミを持ち顔色を黒くしユツの皮の樣なアトが殘り人には嫌はれ結婚の妨げとなる故に捨ておかず治療せよ藥は維也醫科大學教授發見カボジー氏軟膏最よし他の藥でなほらずも此藥なら必全治する故に皮膚科專門病院でも盛に賞用して居る此藥は顔につけても人に知れずアトを殘さずキレイに全治し且色も白くなる東京神田區錦町高柳藥房發賣價五十錢重症用一圓五拾錢此廣告切拔き注文者は送料不要遠に御注文あれ（女子文壇）



色白くなる藥

私は性來色黒く色々の藥などを用ゐましたが少しも効能なく實に困つて居ましたが、ふとした事より色白くキメ細かにしハタケ、アセボを治し日にやけたなどはすぐ白くなる良藥を發見しました、郵券三錢封入申込あれば委しき説明書を差上げます、冬になるとアレ性の方は困りますが此藥を用ゐればすぐなほり、お正月のお化粧もたいそうお美しく出來ませう

東京神田錦町三ノ二　高柳しう子

◎見よ!!! 若き男女の必讀書出づ!!!

第三版

最新美人法

第一 白色法　色白くなるつけ藥飲み藥等實驗有効の方法十餘種を分りやすく詳說す外に藥品等を用ゐぬ簡短の良法數種あり

第二 美髪法　髪の毛を美しく柔かにツヤをよく長くする十餘種の方法ゝ縮れ毛癖毛薄毛赤毛白毛等を治す良法其他種々詳述す

第三 美顔法　顔を洗ふ最良の方法眼口唇等の注意油顔赤顔靑顔等を治する方法シワのよらぬ法齒を白くする方法等を詳記せり

第四 治療法　やせる法こえる法鼻高くする法髪をよくする法イボあざワキがひぜん田蟲ナマヅ其他秘密病の必治法を記述せり

第五 養生法　根本的美人となる平生の養生法食物と美人との關係婦人病と顔色との關係其他睡眠運動の注意等を面白く記せり

第六 化粧法　化粧品の撰び方最新の化粧法鼻高く見せる法目を大きく又は小さく見せる法唇を薄く又は厚く見せる法其他色々

第七 服裝上　衣服の色合や縞柄の見分け法衣服裁縫の注意より着物の着方帯のしめ方に至るまで皆一冊の中に分りよく記述す

◎學理實驗上必ず有効なるを證す　◎定價送料共金廿七錢振替廿八錢切手三十錢

最近刊

[illegible]女王手箱

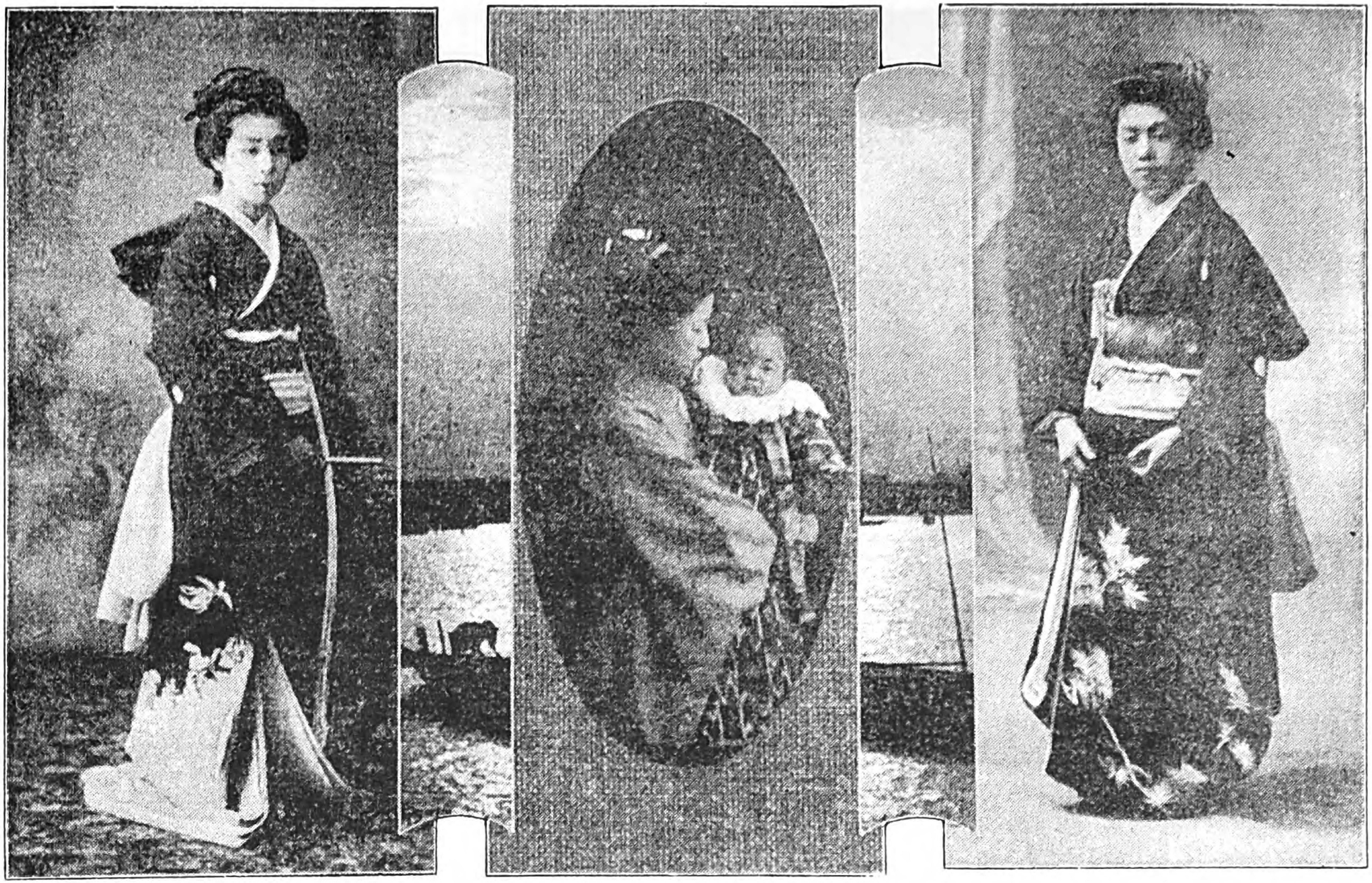
◎本書は有益にして且甚面白し　◎定價送料共金卅四錢振替卅五錢切手卅八錢

●目次●夫又は妻を選ぶ注意●財產と學問●血統の善惡●近親結婚●自由結婚●無理結婚●早婚の弊害●晩婚の弊害●夫婦年齢の差●美人ならぬ妻如何●妻の學問の利害●夫婦の相性●夫婦將來の和不和を期知する方法●如何なる婚は最幸福なりや…●結婚の習慣●法律と結婚●媒妁●見合の方法●結納の贈答●結婚と衣裳●結婚式の順序●結婚後の心得●結婚届…●夫婦身體上の差異●結婚後夫の衛生上の注意十二件●結婚後妻の衛生上の注意十五件●月經とは如何●月經時の注意其他婦人[illegible]白し●子を持つ月のくり方●姙娠せし事を如何にして知るか●姙娠中の心得●姙娠中の惡食物●姙娠中各力の變化●出產した時の子の大きさ●出產の日を前知する法●子を產む時の注意●如何せば安產するか●生れたる子の取扱法●授乳の注意●出產屆…●子宮病の話●夫婦の圓滿を來する種々の病氣・原因及療法…●ある若き女のザンゲ談●出產失敗談●ある女の日記等皆面白し……

右外目次數十項皆青年男女必讀の好文字委細本書に就て見よ

發行所　東京神田錦町三ノ二　振替東京一六一八番　學友社書店

晴小袖



理學士本多貞氏夫人玉子

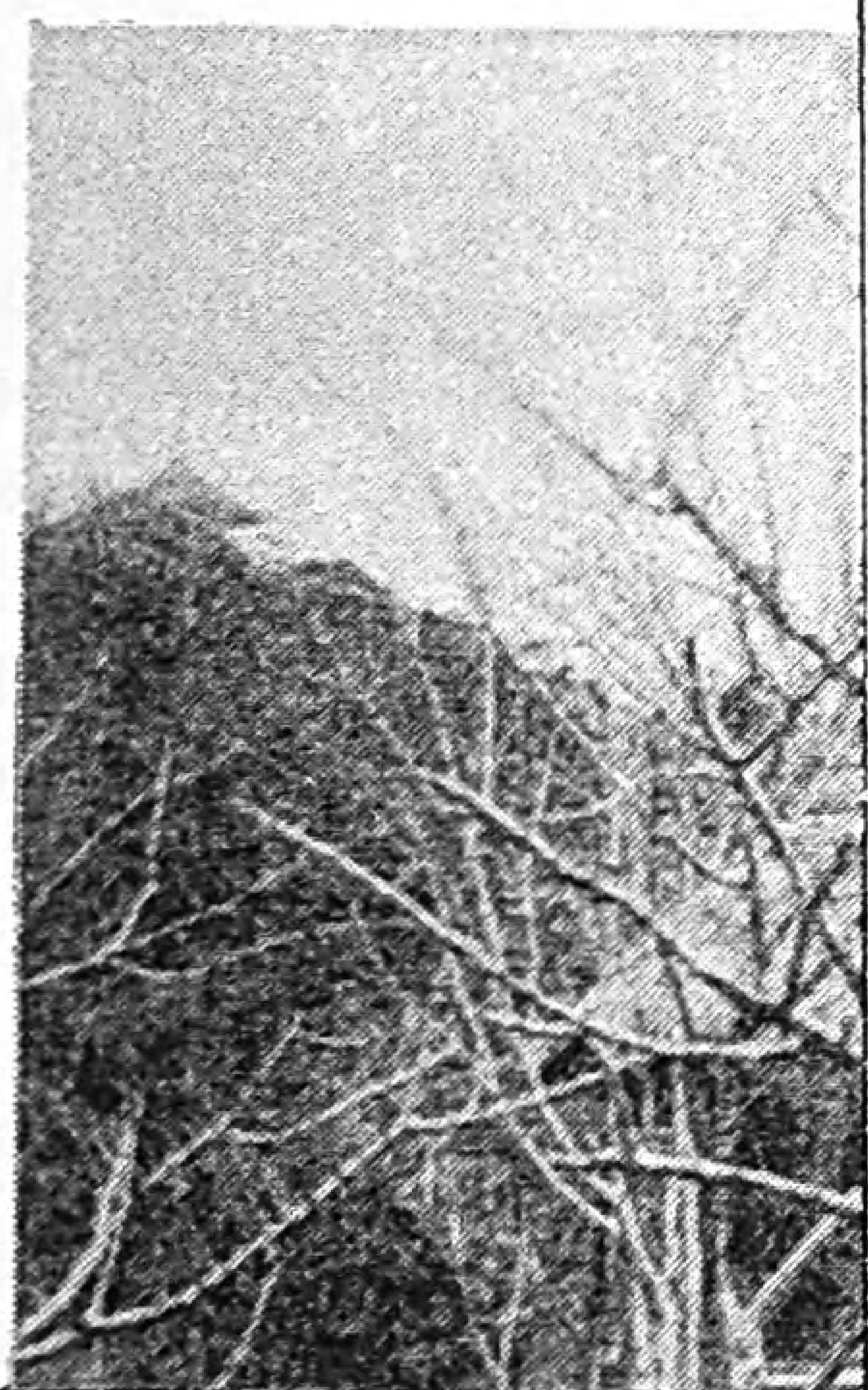
佐橋病院長夫人きよ子と愛兒

佮渡陸軍大尉夫人豐子

超然



三枝いく子孃（米國エマーソン、カレーヂ卒業）







ドクトル加藤時次郎氏夫人崎子

U.C. BERKELEY LIBRARY

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

毛ぬき 新劑

從來脫毛劑の類頗多きも之が製劑の原料は洋の東西を通じて硫化劑を配合して發賣せられつゝありと雖も皮膚に有害にして惡臭を有する不利あり先年所主數種の脫毛劑を研究して皮膚に無害なる一新脫毛劑ヘルーピンを發明せるに多數の實驗成功者を生じたり本劑は皮膚に害なく根本より脫毛せしむる唯一の良劑なり毛深き人毛多くして苦む人達は速に本劑を試用せられよ

原名ヘルーピン
定價 壹圓
特製 參圓
內地送料十五錢
海外 三十五錢

飲んで色白くなる藥

藥名ビオール錠
壹劑 壹圓
參劑半 參圓
內地送費十五錢

近來美白劑としては外用的化粧水の類頗る多きも其確效あるものなく色黑き人の種々なる藥劑に迷ふの時代は過去り日進の醫藥學は一日も休止する事なく美白劑の製法も已に一變し內服劑應用の時代となれり當所製藥の惡液排泄劑ビオール錠は極て强度の淸血劑にして一般惡血惡液性の人本劑を服用するときは血液を淸淨となし惡液を排泄して皮膚を艶麗美白ならしむる根本的美白劑なりあらゆる賣藥に外用的化粧水を用ゆるも目的を達せざる人速に本劑を愛用して天賦の美白を保存せられよ

東京市牛込區
北山伏町壹番地
百合園製藥所

東宮侍講本居豐穎先生題詠
文學博士小杉榲邨先生序文
下田歌子先生題詠
國文學士 小森松風先生編

好評

美文作法

▲全一冊大判二百卅頁 賣價貳拾錢 郵稅四錢

美文の作り方を最も明瞭に解說し、加ふるに大家の名文を模範として擧げたれば文章を作り、文章を愛する者には寸時も座右を離すべからざる良書なり

報知新聞記者中村木公君編

好評

實地精査 女子遊學便覽

▲全一冊中判洋裝 賣價拾五錢郵稅四錢

子女を東京に遊學せしめんとする父兄も之を讀め自ら學校の選擇に迷ふ諸孃も之を讀め一讀釋然として東京女學校の消息を知悉するを得む

出版元 東京市京橋大鋸町 女子文壇社 賣捌 到處書店
（振替口座東京參七貳九番）

羽仁もと子主筆

婦人之友

迎年準備號 十二月發行

一冊十五錢 郵税一錢半 半年九十錢

物質的に、精神的に、心安く年末に處し、幸福なる新年を迎へんとする方々は必ず「婦人之友」の十二月號をお讀み下さいませ。

まづ明年一年の豫算のたて方、改めて子供や雇人に與ふべき規律などを初めとして、年の内に決めて置くべき家事のいろいろ、年末贈物の心づもり、新春娯樂の用意、正月着の見立、重詰の拵へ方に至るまで細かに、親切に、實際的に書き記されてあります。

▲附錄には、迎年準備の日課表が添へて御座います。

◉妻の勝利（理想の生活 花子の巻）……羽仁もと子

◉孔子の女性觀……文學博士三宅雄二郎

◉年末のすゝめ（七則）羽仁もと子

◉私の時間割……山脇房子

◉年末賞與で建てた家…

▲ショールの研究

▲お歳暮とお年玉

▲婦人股引の仕立方

▲新年料理のいろく

發行所 東京市小石川區雜司ヶ谷町（振替口座東京壹壹六〇〇） 婦人之友社

U.C. BERKELEY LIBRARY

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あざ

なまず●ほくろ●にきびそばかす●いぼ全治保險の新藥教示す

東京牛込區赤城元町

池田兵三郎

音聲どもる人に告ぐ

種々療養効なく音聲惡しくどもる人にても全治美音となり再發せざる新藥發賣す郵税三錢封入御申越あれ自宅療法説明書進呈す

東京牛込區赤城元町

好生藥院

●肥滿病者の福音

やせる新藥

●多血症●脂肪過多●便秘●中氣●酒ふとり●凡てふとりすぎた人やせて中肉美容となる新藥あり郵券三錢封入御申越あれ自宅療法説明書進呈す

東京市牛込區赤城元町三十三

池田製藥部

梅どく りん病 ぢ疾症 わきが 生殖器諸病 神經衰弱症 婦人科

中央醫院

東京淺草瓦町廿八淺草橋通瓦町電車停留場横●朝八時より夜九時迄

色の黒き人 にきび 子宮病 月やくとまりたる病 子なき婦人 皮膚病

梅どく諸病 りん病消渇 わきが ぢ た蟲等

生殖器諸病 神經衰弱 陰萎 遺精 早漏 發育不充分 記臆力減衰

▲病狀を記し郵券四錢を送れば其病を速治する専門醫中央醫院々長處方の特効新藥説明書を送る

東京淺草區瓦町廿八番地淺草橋通り瓦町電車停留場横

東京 中央藥院

●自宅隆鼻術

じたくはなたかくする

注射療法にあらず自宅にて簡易にして完全に如何に低鼻の人も自然に形狀を良くし隆鼻法あり郵券三錢要す説明書呈

東京市外大森八景阪

東洋堂藥院

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

若き婦人の誇

女子文壇 七月十日増刊 好評

新文章

紙數二百頁美装 定價廿錢 送料壹錢五厘

◎一呼吸

◎七色の虹

△生の斷片
△覺め際の淋しみ
△自ら警める記
△學生の都會
△初夏の人々
△寝息

○男子の手紙に迷ふ
○不標緻な私の哀愁
○父と娘が別れの涙
○尼になつた若い女の記
○楊子江畔の新婚生活
○落日のかなた
○私の心は破れてゐる
○更衣室

◎轉宅 小説

◎淋しい道 小説

◎温泉宿 小説

△梅雨日記
△姉の家
△心の離散
△黑き洋傘
△別れてゐる間

◎呪ふべき時代
◎年のあぢはひ
◎生立のつらさ
◎解けし謎
◎五月の水邊
◎繪筆

◎課題 △顔 △髪 △浴場 △山 △海 △劇場

◎和歌、俳句

執筆婦人

服部貞子 早川花子 長曾我部菊子 小川夢の女 小笠原ゆり子 太田喜志子 若杉はま子 河野槇子 加藤筆子 高橋りう子 田中港の女 内藤千代子 野村きやう子 山田邦枝子 八代やゑ子 松田梅子 松田妙子 前島優梨子 松村らく子 月[illegible]子 江森美子 佐藤滿壽子 佐分韮影 木村あやの 夕はし 三宅やす子 三島よし子 平塚白百合 ひなげし 鈴木春子

●發行所 東京市京橋區大鋸町十二番地 女子文壇社（振替口座第七九壹貳番） 賣捌全國書店●

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

唯一の女流文學雜誌

第一巻 第四號

青鞜

十二月一日發行

定價貳拾五錢

發行所 東京本郷區駒込林町九番地 青鞜社
電話下谷三七七六●振替東京一一六〇

發賣所 東京堂 電本 一三 二三 四八

耳を病める人

▲何人も心得置は益する事大なり
▲速かに實行せよ驚くべき奇効あり
▲如何なる重患も自宅にて根治す
▲希望者切手二錢送れ治療法を教ゆ

耳遠く聽力不全症・耳だれ・耳なり中耳炎鼓膜炎其他耳科一般吾人が幾多の研究に依り發明完成せし根治療法と數千人が全治の實證也

東京府荏原郡大森村棚橋樂院

一大奇法

本法は女髪結師安部歌子女史の多年實地研究したる秘法にて是迄の使用者を悉く滿足せしめたる一大奇法なり照會者は往復はがきにて申込あれ

東京麹町區三番町六十七 小林濟世園

ぢ

●イボ痔 ●脫肛痔 ●裂痔 ●痒痔
●痔核 ●痔出血 ●痔瘻 ●痔一切

にて御困難の方は二錢郵券を添へ御照會あらば病原理由全癒說明書を送附す

●東京市京橋區疊町 小松盛林堂

◉萬邦無比の肉色白色劑

本品は、豫て各新聞紙上に廣告せし、佛國巴黎ピノウ商會製造の美容劑にして、近時歐米各國の紳士淑女間を驚倒せしめ、名聲嘖々として、歡迎を博し、今哉白色劑の覇王と認められ、擴く需用せられあるは、その效力の奈何に顯著なるかは、既に本品御愛用各位の熟知せらるゝ處であるが、今茲に一言を述べたきは、一體此日本人の特長としては、總て皮膚が粗質である、假りに、色白きは多少青みを帶び黒き人、又は、赤ら顏の人は、氣目甚だ粗にして、爲に容貌の點に於て其損する事果して幾何である就中婦女子に於ては、顏面に重きをおかれ、あらゆる、賣藥或は化粧品類に絶えず、浮身をやつされあると雖も、多くは其效力の不完全に絶望せらるゝ如き、後來往々と耳にする處である。

然るに本品は、苟しくも世界に冠たる、ピノウ商會が、幾多藥學應用の研究を重ねたるの結果、在留邦人に就き、再び數回の實試を遂げ、爰に完全無缺なる本品を完成せしむると同時に、肉色、白色の兩種に製造を區分し、便宜其使用に應じ、理想的に漸次顏貌を美色に化せしめ、且つ總ての皮膚病を未然に防ぎ、夏は、「アセモ」「ニキビ」の發生を止め、冬は、如何なる皮膚の荒れ性と雖も、必ず其患ひを除き、從て、皮膚を柔軟にし、氣目を細密ならしむる如きは、本品の特有として、慥に偉大の効力を認めたるの結果輸入を約したる者なれば、從來の化粧品と同一視するなく、寸時も早く其偉効を確め賜はらん事を切望する次第である。

◉佛國巴黎ピノウ商會製造

白色。肉色劑

價格
白色（百三十五入）壹圓貳拾錢
肉色（同上）壹圓參拾錢
外に小包料箱代共｛内地一般金拾錢／淸、鮮、臺、樺、參拾錢｝

◉注意

半ダース以上御注文は左記割引額を以て舶來元箱入にて郵送仕候

△半ダース入｛白四本／肉二本｝割引價格 金七圓也
但小包料｛内地無料／◎淸、鮮、臺、樺は半ダース三十錢一ダース五拾錢｝

◎御注文に對する金額は、郵便爲替又は、價格表記にて御送附の事◎代金引換の御注文は、郵便局の手數料を要する爲め、御注文と同時に、貳拾貳錢分郵券にて前以て御送附の事（これは御求めの御方が無用の損失故可成郵便爲替が好都合で有ます）

◎郵券代用の御注文は、必ず一割増にて御送附の事

發賣元 横濱市蓬萊町二丁目 宮川輸入部

代理店 東京市京橋大鋸町十一 女子文壇社代理部（振替口座一七二九番）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

日本一好評

少女

每月一日發刊……口繪挿畫澤山
定價金十錢　郵税壹錢
半年六十三錢〇　一年壹圓廿錢

第三卷十二號　十二月一日號要目

懸賞新題大變が起りました

東京市京橋大鋸町　女子文壇社出版　（振替東京壹七貳九）　賣捌到處書店

本年掉尾の大飛躍を見よ!!

懸賞文藝

秀才文壇

每號滿載

十二月一日發行 第十一卷第十六號

(正價)一册 拾五錢 半年分一圓三十五錢〇一年分二圓五十錢

▲感想の斷片……德田秋聲

▲「藝」と「藝術」……森田草平

▲自然趣味と人事趣味……幸田露伴

▲夜(小說)……野中賢三

▲仔犬……佐藤綠葉

冥々の句(二)……高田蝶衣

青年と作家(文壇小品)……黄金冠

放浪者の手帳……尾山篤二郎

モウパスサン(承前)……神崎沈鐘譯

繪畫 正宗得三郎 坂本繁次郎

花袋氏初對面觀……

文士の風采(夏目漱石氏他八名)……

伯爵邸の一室(吉井男子)……

眼閉ぢたる生活……

色(詩)……大脇秋四郎

記臆と古沼(詩)……矢野峰人

若山牧水氏に……杉情三

町端(小說)……小林山男

夕暮の諧調(散文)……林原青花

旅人と十月(詩)……水月穗草

新刊 高潮號 正價卅五錢 送料二錢

發兌元 東京神田旅籠町壹 振替東京一九五五番 文光堂

東京堂○東海堂
至誠堂○北陸館

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

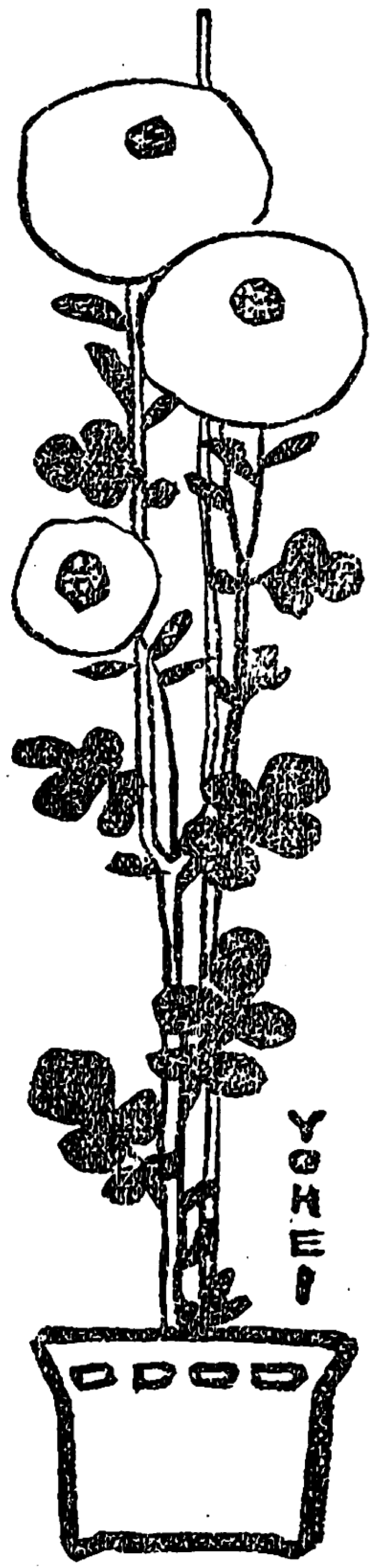
女子文壇

第七年第十五號

（明治四十四年十二月一日發行）



Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



與へられたる婦人

文學博士　福來友吉

一體婦人といふ者は、家庭の内に實力を費やして、自己といふものを思ふ樣に發揮することが出來ないものであります。即ち婦人は子孫を作るといふ上に、大なる犠牲を拂つて居りますから、男子はそこに同情して婦人を助くべきであります。だから女子は又男子に反抗して立つて行かうといふことはよくありません。婦人が自己意識の强くなるといふことは、決して惡いことではありませんが、自己を處するに自己の力でやつて行くといふことは間違つた考へであります、婦人はどこまでも家事に心を用ゐて、良夫の力により自己の要求をみたすべきであります。

男子が女子を愛するといふにも、只人形を愛すると同樣に、何の理由もなく、好きだから愛する、嫌ひになつたらよすと、さう簡單なものではありません。男子には女子がすべてのものを犠牲にして、人類の爲に盡すといふ處に對して、どこまでも愛せねばならぬ義務があるのであります。又女子にもそれらによつて愛さるべき權利を有して居ります。だから其權利を社會

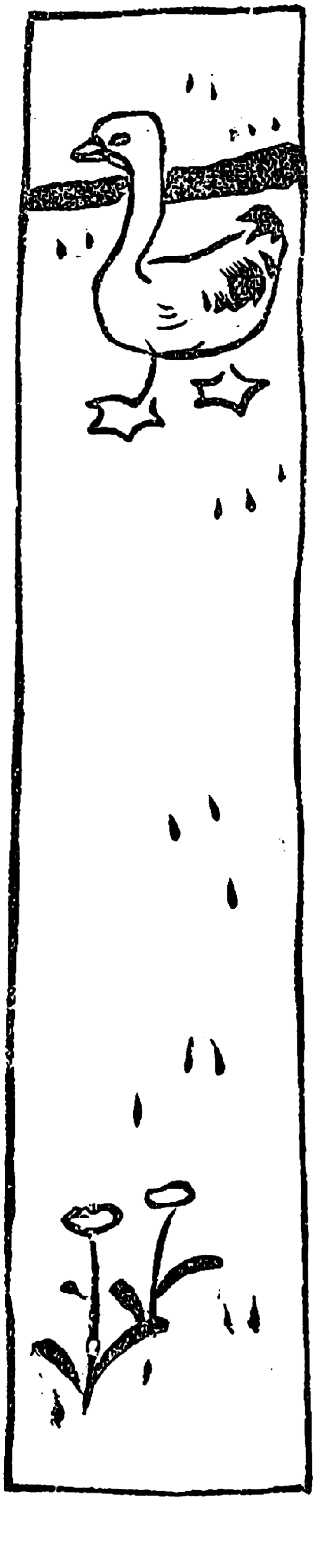
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

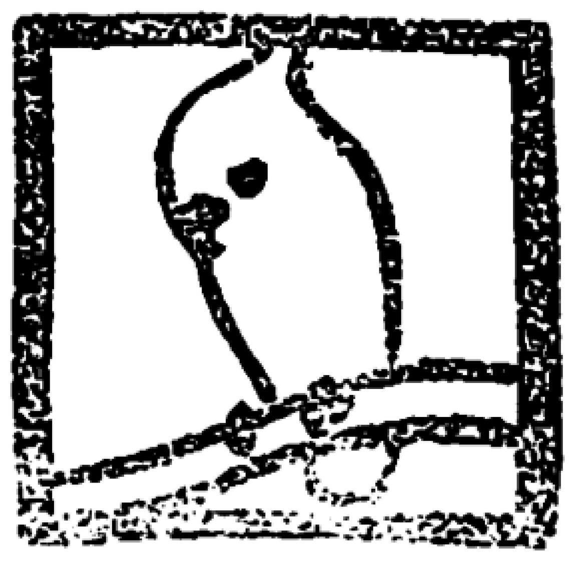
から認められる丈の行爲をなすべきであります。只、それらのこともせず獨力にて世に立たん爲に、權利を主張するといふことはよくありません。婦人が只、自己を主張するのは單に個人主義に流れて其要求のみ強く實力がそれに伴なつて居りません。

婦人が一家を治め、種屬を繁殖せしむるといふことは、天が分類の結果、婦人に與へたるものですから、其天意にそむくといふことはいけません。そしてこの天職を完うするといふことは、社會文明進歩のためであります。

すべて愛情といふものは、婦人は男子より子に、男子は子より婦人に向つて働くものであります。そして男子は自己の力によつて、自己の要求を遂し、婦人は良夫により、子は母によつて達するものであります。處が婦人が人生に存在する意義を了解せぬ結果、自己の本職を忘れて、子孫などいふことに全く意を用ゐないで、子供はいらぬの欲しくないのといふ婦人がある樣ですが、これは自己の天職を無視した考へであります。最も婦人でも非凡の天才があつて數千年の後まで名を殘すといふ樣なのは例外であります。即ち精神的子孫は天才が作り、肉體的子孫は婦人が作るべきであります。だから婦人に家庭の修養をよそにさせて哲學などゝいふのは、却つて婦人を妙にしてしまひます。やはり婦人の本能といふ處に注意して致ふべきであります。

＊　＊　＊　＊　＊





意味なき反抗心

山脇高等女學校長　山脇房子

反抗心は生物識の人によく起るもので御座いまして人が左といつた折、右と云はねば何となく意氣地なく思はれはすまいかといふ心から起ることが多い樣で御座います。誰れでも自分の云ふことに反對されてうれしと思ふ人はありませんから、自分も又人の心よく思はぬことは、なるべく避けた方がよう御座います。

雪もなし力を見せぬ柳かな

といふ句が御座います通り、出來るだけは從順に人の心に從つて行くといふことが、婦人の美德でございます。恰も柳が雪の積るまゝに受けて居るやうに、僅のことに其力を見せずとも、さて此まゝにして置いては一身一家の浮沈にかゝるとか、國家の大事に關するとかいふやうなことが起つた時には、日頃つゝみし力をあらはし、あくまでも反抗するのが、誠の婦德でございます。

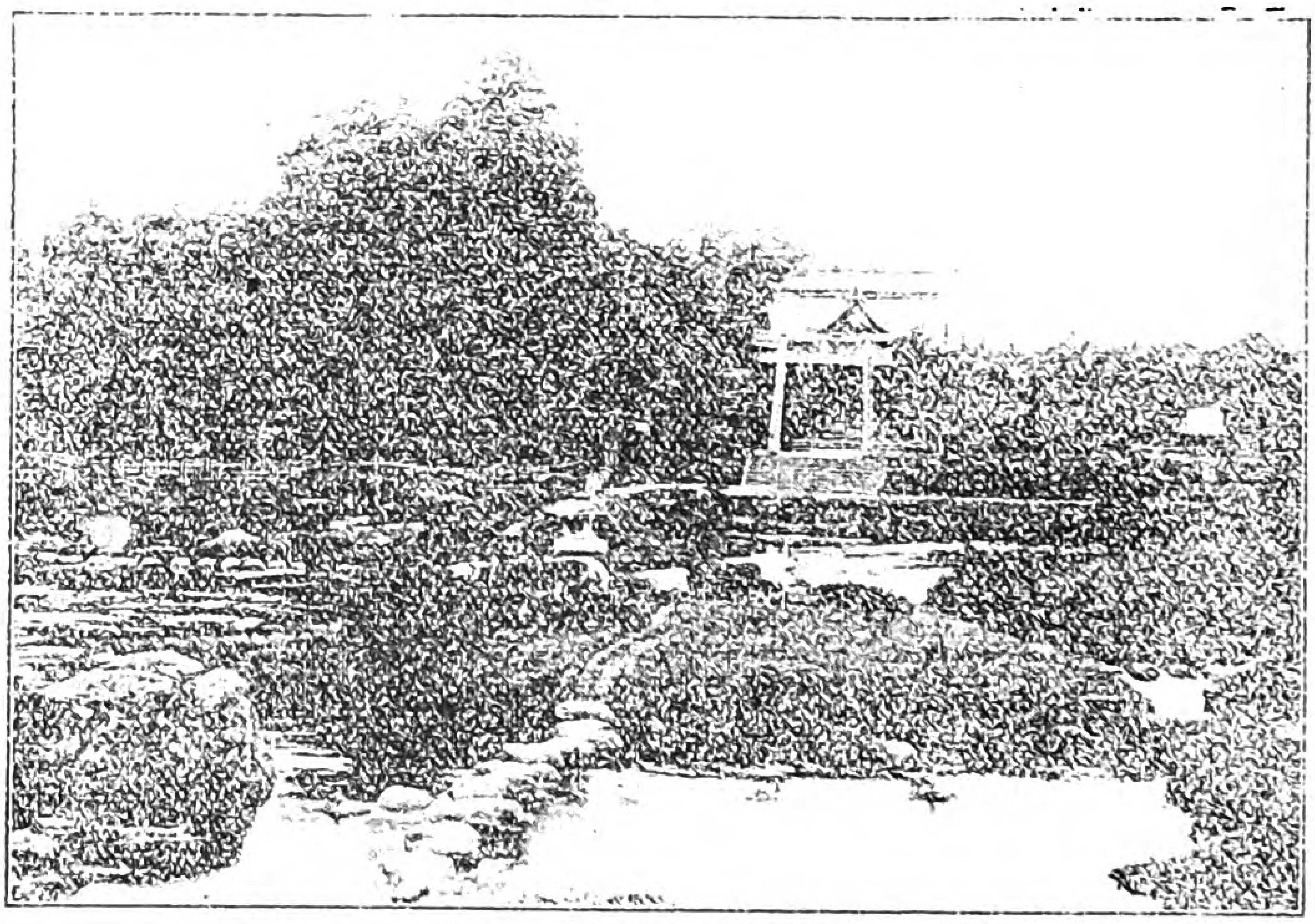
此の事に就いて、昔から今日までの婦人の徑路を考へて見ますると、昔の婦人は如何なる無理非道なことゝでも、只命の儘に從うて、父母夫に仕ふるのが孝貞の道と考へて居りましたが、中頃の婦人はそれを盲目的從順として、それらの習慣から脫したいとつとめ、いやしくも敎育ある婦人は、只むやみに夫や父母の命に從ふはよろしくないといふやうな考からして、兎角反抗的態度に出る婦人が出來たかと思はれます。然るにそれが近頃になりましては反對に、柔弱に流れたと申ませうか、意氣地がなくなつたと申ませうか、善いことゝ知つても、之を言ふこともせず、行ふこともせず、惡い



こと〻知つても、之を退けるだけの勇氣もなく、たゞぐづ／＼と一向明かならぬ態度をして居つて、しかも心中不平に充ちて蔭での小言の絶えぬといふ始末のつかぬ婦人が多くなつたやうに存じます。

反抗すべきことには、どこまでも反抗するがようございます、けれどもどちらでもよいことに、わざ／＼反抗して人の氣持を惡くしたり、事物の進捗を後かしたりすることは誠によくありません、柔よく剛を制すと申しますが、やさしくして居て强いものに勝つのが女子の長所ではありますまいか。

また幼い三四歳位の頃から兎角人の言ふことと行ふことに反對する癖のある人が往々ありますが、かういふ人は實に可哀想な重病にかゝつて居る人のやうなものでして、病人ならば自分が病氣だといふことを大抵心得て居りますから治療も出來ますがこの憐むべき病人は自分の病氣を氣附かずして平氣で居るのですから實に始末がつきませぬ。此惡い病氣の原因は大抵家庭教育にあることが多いやうです。その家庭を調べて見ると十中八九は親から傳染して居る樣です。このことは子女敎育上大に考ふべきことゝ思ひます、成人してからでも、もし自分が、此惡むべき病氣にかゝつて居ることを心附きましたならば、一日も早く投藥して早速全治することに、つとめなければなりません。



熊本縣水前寺全景

今の女の反抗心と云ふのもつまり子供の間から養はれた不良い心の習慣が害をなすものもありませう。

新しき女優の覺悟

松井すま子

◎女優に尊卑はない

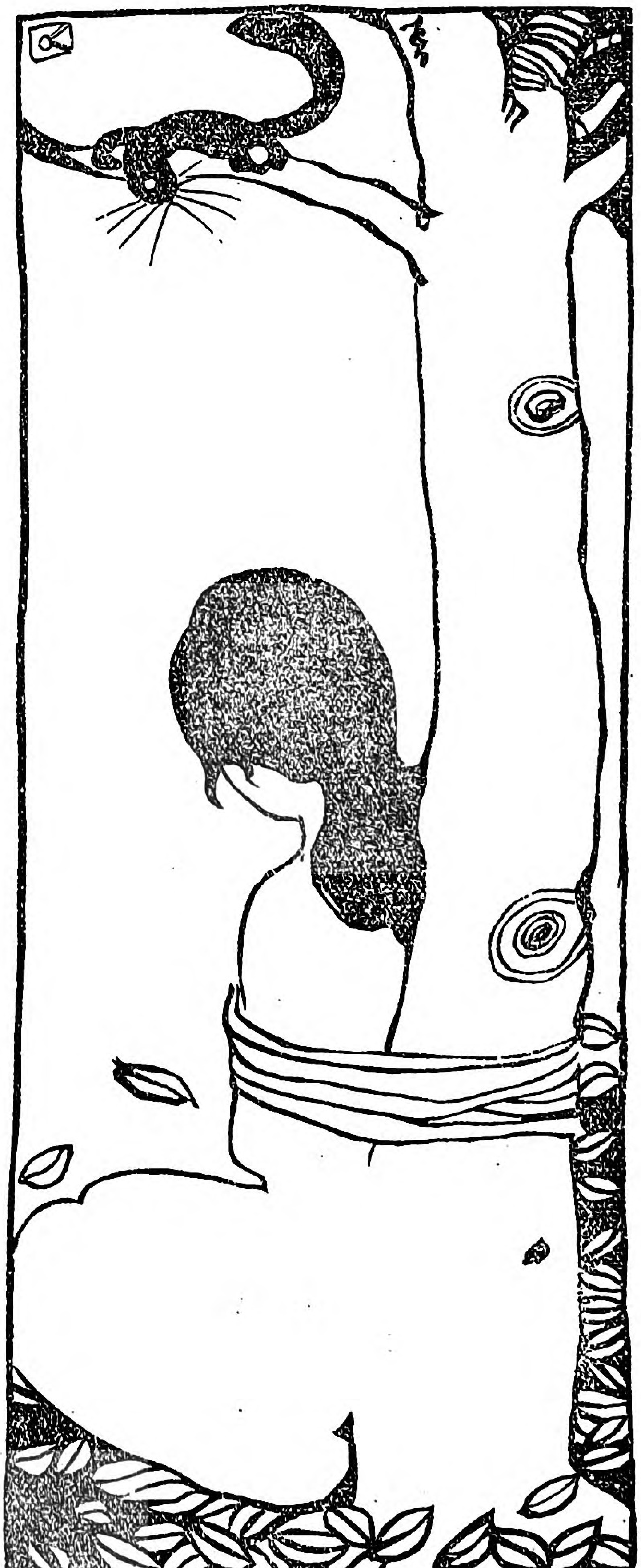
女優としての私の苦心と申しますものは、どうかして立派な藝術家としての女優になりたいのと、自分についた役を詩化し美化したいのと、この二つの外はございませぬ。

一口に女優と申しますと、世間の方は直ぐ卑しい者と言ふ感じをお起しになります。少くとも藝者に近い者ぐらゐには思つておいでになると思ひます。それも無理はございませぬ、これまでの女優――イエ未だ女優とは申さなかつた女役者時代の女の俳優の品行がさう言ふ風であつたのと、女優と名乘て世の中へ出た方の中で一人二人さう言ふ傾きのある方があつたもんですから、女優と言へば矢張從來の女役者と同じ樣な卑しい者と思ふんでしやう。然しこれは女優と言ふ者が卑しいのでなくて、女優となる女が卑しかッたんですから、女優になる女の人格が高くなつてまゐりましたならば、自然女優と言ふものも世間から敬意を拂はれる樣になるだらうと存じます。この意味に於て私どもが女優を志望いたしますのは、特別の事情がある譯でもなく、又奇拔な考へでもないと言ふことが充分辯明出來るだらうと存じます。

◎年來の願望が叶ふ

私は長野縣の生れで、兄弟が澤山ありまして其末子です。上田の高等女學校を卒業いたしましてから其の

後の方針に就て考へたんです。種々考へて見ました末女優にならうと決心いたしました。女優になるには帝國劇場の女優學校へ入るのがよからうと存じまして兩親に相談いたしますと、兩親は女優になることには異議はございませんでしたが、帝國劇場の女優學校へ入ることは不承知で如何しても許してくれませんでしただもんですから女優になるには如何いふ方針を取らうかと心配いたして居りますところへ、恰度坪内先生の文藝協會で女優が要ることになりましたから、この事を兩親に申しますと、兩親は兩手をあげて贊成してくれまして、先生の教を受けて女優になれることとなれば此上もない仕合だと悦んで承知してくれましたので私も一層勇氣が出まして早速先生の方へ御願いたしますと、先生も快く御承諾くださいましたので、漸々年



來の願が叶ひまして女優になれる樣になつたのです。

◎死を以て情操を守らむ

斯うして女優になることは出來ました私にとつて、一番の苦心と申しますのは、先生や親が私を女優にしてくださいました其の意志に反かない樣にいたしたいと思うて居ることです。前に申しました通り、女優と申します者は、人の注意を引きやすい職業でございますのと、從來の習慣上、餘り尊むべきものでなかつたのとで、一歩踏み間違ましたが最後、自分の名譽は固より先生や親の名譽にまで累を及ぼすことになりますから、夢にもさう言ふことのない樣と、これには非常に苦心をいたして居ります。然し幸ひに坪内先生の御監督の下に一生懸命に身を愼むで居りますから、先生や親の名譽を毀損いたす樣なことは斷じてないと確信いたして居ります、女優と言ふもの丶品行のよくないことは日本ばかりでなく、西洋でもさうだと申すことですから、この點は飽くまでも改良したいと存じます。私は女優としての名譽を維持する爲めには死を以て守る覺悟で居るのです。

◎ノラに扮する苦心

私の何よりも一番に苦心いたして居りますのは女優としての名譽を維持することでございますが、次に苦心をいたしますのは、自分の舞臺で演じます役を詩化し美化したいと思ふのです。作者の描た人物を理解し咀嚼し、作者の現さんとしたる藝術美を舞臺に於て現したいと思ふのです。今度演じましたノラも隨分苦心いたしました、イ丶エ苦心と申せば苦心ですが、土肥先生や中村先生の御苦心遊したのをそつくり敎へていたゞいたのですから、私の苦心いたしましたところは極僅少です。それでも少しばかり苦心いたしました點を申しあげますなれば、先づ第一にノラと言ふ女を現はすことに苦心いたしました。御承知の通りノラと申しますは親に可愛がられ、恰度人形の樣に愛されて成長し、ヘルマーの妻となつてからも亦ヘルマーに愛

されるのです。ヘルマーは人形を愛する如く、雲雀を愛する如くにノラを愛して居たのです。ノラは親にも夫にも人形として愛されて居ましたもんですから、自分も人形となつて、親なり夫なりの意を迎へて、機嫌をとるのを自分の爲すべき本分と心得て居たのです。それが一朝ヘルマーの利己的なるに驚き、自分は人形に非ず人間なりと言ふ氣がつくと同時に、これまで親や夫に人形あつかひにされたることが悔しく、遂に人形の家を出て人間にならうと言ふ人物でございますから、餘程其の心持を腹に入れて居ませぬと、ノラの人物が舞臺に現はれませぬから、これには隨分苦心をいたしました。

ランクとの關係にも亦苦心をいたしました、ランクはノラに戀して居るので、二幕目に切なる思ひをノラに語ります。この時ノラは自分は人の妻と言ふ地位から其の戀を斥けましたが、然しランクを憎い人とは思うて居ませぬ。ランクがノラを愛する如くにノラも亦ランクを愛して居ます。唯愛して居るので戀して居るのではありませぬ。ノラは夫に對しては夫婦の愛情も持て居ますが、ランクに對しては親に對する愛、兄弟に對する愛と同一の愛を持つて居るのです。唯相手が自分に戀して居る爲めにランクを愛することが人の誤解を招き易いのです。この愛と戀とを舞臺で演わけねばならぬのです。演り方が拙いとノラが覺醒して家を出るのが、ランクと不義でもして家を出る樣に見えますから、夫に對する愛と、ランクに對する愛とを如何いふ風に演わければよいかと、これには隨分腦を痛めました。試演の時は二幕目のランクがノラに戀を語るところを省きましたが、公演の時は此場を演るのですから一層苦心をいたしました。三幕目にランクがそれとなく最後の暇乞をして歸らうとする時、ノラが煙草の火をつけてやることがございますが、あすこはノラがランクのもう死ぬと言ふことも知つて居るのですし自分も亦クログスタッドより來た手紙を夫が讀んだが最後、自殺をして夫の名譽を守らうと決心して居るのですから、この世の別れに切めて煙草の火なりとつけ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てやらうと言ふ心持で煙草の火をつけるのです。然しこゝが非常に六ケ敷いのです。冷かな態度であれば別れと言ふ氣持が現はれませず、さればとて餘り熱のある態度であれば不義でもして居る樣に見えますから、こゝの呼吸には苦心をいたしました。

◎二幕目の踊

それから試演の時は二幕目を省きましたからノラは踊らなくともよかつたんですが、公演の時は二幕目を演りますので踊らなければならぬのには腦を痛めましたが、土肥先生や中村先生の御指導でどうかかうか踊れる樣になりました。尤もこれは稽古の時の踊で、ヘルマーがクログスタッドから手紙を見やうとするのを一刻でも遲らさうと思うて、踊にかこつけ郵便函を開させないのです。それですから踊ると言ふのが目的でなく郵便函を開けさせないと言ふのが目的ですから、其の心持で踊つて居るのです。眞實に踊るのは三幕目の際になつて居ます、三幕目で二階の踊を濟して降りて來ることになつて居るのですから、踊の衣裳を着ての踊は見せないので。二幕目の踊は平常の衣物のまゝで踊るのですから、踊る心持も其のつもりで踊らねばならぬので却々六ケ敷うござります。その中でも殊に苦心をいたしましたのは最後の覺醒です。この覺醒して家を出ますのに誤解を招ぎ易いのは前に申しましたランクとの關係でござりますが、この點は先づ誤解を招がぬ樣に演りきるといたしまして、次に起る問題はノラが覺醒して家を出る時の夫に對する心持です。

◎ノラが家を出るところ

ノラが家を出る時の心持は、ヘルマーに對して全然愛想を盡して、斯んな男と到底一生を共にすることが出來ぬと思うて夫を棄て出るのか、それとも夫に愛想が盡きたと言ふ譯でなく、夫のことも思ひ又子供のことも思うては居るが、尙ほそれよりも大なるものを發見して、其れが爲めに家を出たのでしやうか、この二つの中どちらであるかを研究せねばなりませぬ。成程

ノラは夫ヘルマーが病氣の時、轉地をして養生さす爲めクログスタッドから金を借りて、その際罪となることを知らずして父の名を僞署したのがクログスタッドから來た書面で露れたので、自分は自殺をして夫の名譽を毀損せまいと決心して居たものを、夫は薄情にも利己一點張で、唯々己の名譽が大切だと言うて妻を罵り、少しも妻の眞心をくみわけてくれないのですから、夫に愛想を盡して家を出た樣にも見えますが、それでは全然日本の舊劇と同し型で、少しも新しいところがないのです。作者は決してさう言ふ積で書いたのではなからうと思ひます。

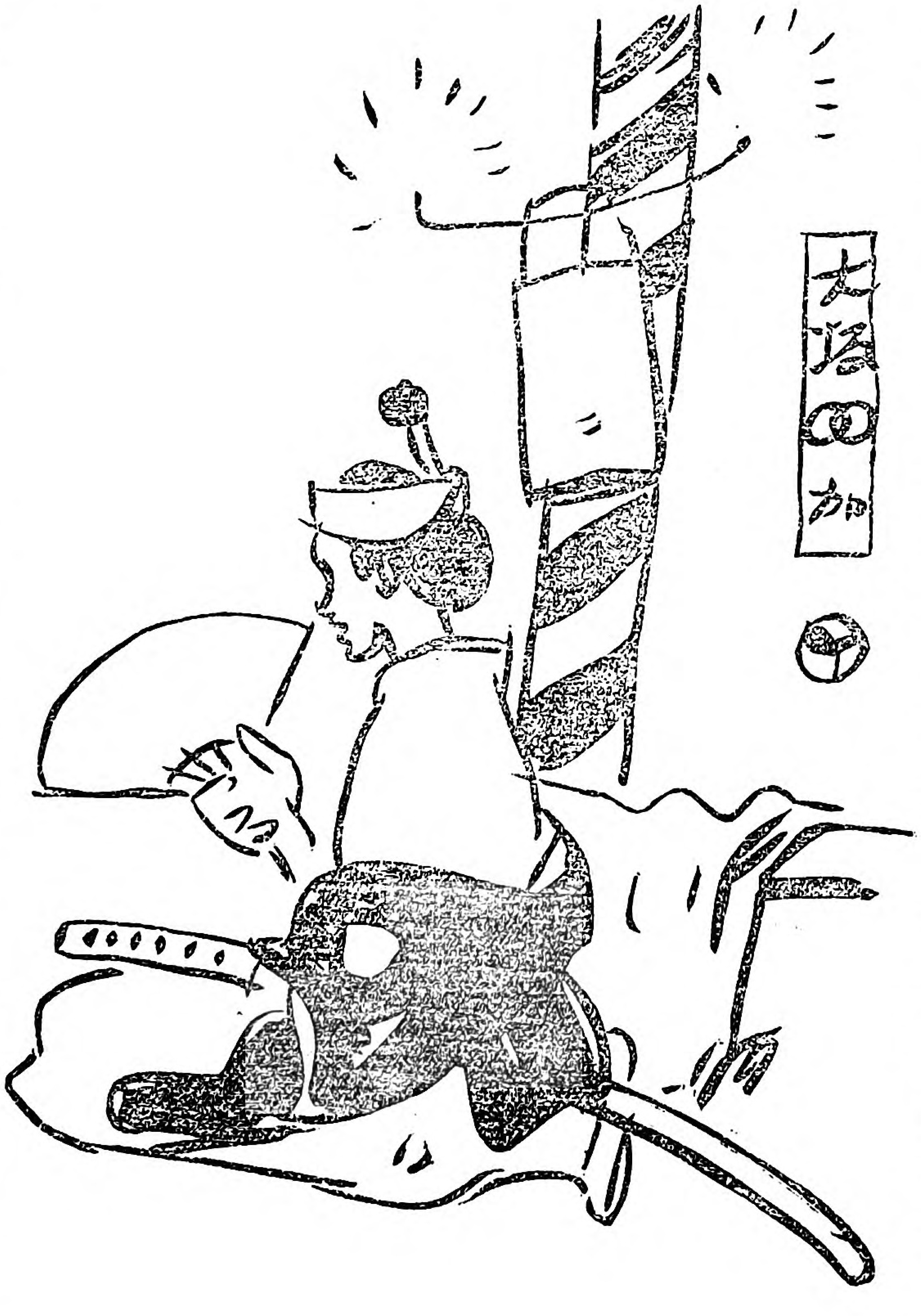
◎複雜な性格を表はす大役

ノラの家を出ますのは、夫に愛想が盡たと言ふ樣なそんな小さい問題でなく、夫のことも子供のことも思はぬではないが、自分が今まで夫に愛されて居たのは人形として愛されて居たので、人間として取扱はれて居なかつたと氣がついては、自分は人間としての修養がしてなかつたが爲めに人に人形扱ひにされて居たのであるから、人の妻たり母たる前に先づ人間とならねばならぬ。それには今夫や子供のことなぞを思うて居る場合でないと言ふ氣が起つて、さてこそ家を出たのです。ノヲが斯う言ふ心持であつてこそ其所に深みも新しみもあるのです。斯う言ふ心持で居ると言ふことを舞臺の上で現さねばならぬのですから隨分骨が折れます。それでノラが家を出る時、ヘルマーが『それではモー私のことは思出しもせぬか』と問ひますと『あなたの事や子供のことは時々思ひ出しましや



Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

う』と言うてホロリとなりますが、この一言でノラは夫に愛想を盡かして家を出るのでないと言ふことを現はさねばならぬのですからこゝの呼吸も却々苦心を致しました。一寸申して置かねばなりませぬのは、今申しました樣にノラは夫に愛想を盡して家を出たのではないのですが、自分がこれまで親や夫に人間として取扱はれないで人形として取扱はれ、そのことに氣がついて見ると今までのことが悔しくて、口惜しくて、親に對しても夫に對しても多少の不平は無論あるであらうと思ひます。然し不平があるからとて其れで夫に愛想が盡たとは申されませぬ。要するにノラと申します女は復雑な性格の女ですから、これを舞臺の上で充分に現はさうとずるには却々容易な事ではございませぬ。斯う言ふ大役を演じますのも先生の御蔭でございますから、心から先生の御恩を感謝いたして居ります。



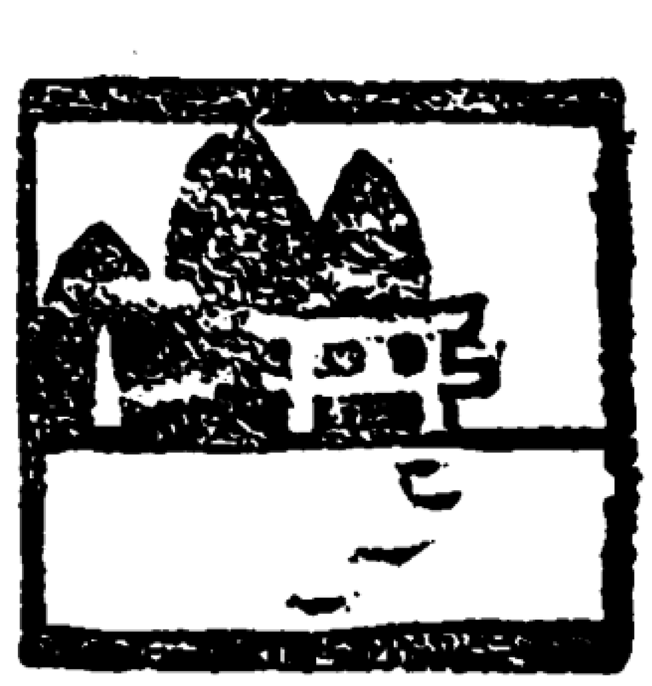
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



裾野日記（下）

佐野天聲

△藪枯といふ草の水が齒痛や切疵の妙藥だといふので此春自然生の指頭大の太く逞ましい蔓を鷄舍の日防兼帶に竹棚へ廣く這はした。名は體を現はす此草の纏繞力を、勢ひ猛に、竹棚一杯を瞬間に蔽ひ盡し、淡綠色の葉と四瓣綠色の花とは夏日に奢つて生々の氣を呵出した。威勢のいゝ大きな蔓程、水の出方が多いと聞いたから、月毎に茂る葉の厚さと肥り行く幹の太さを眺めて、私は藥液の分泌力を都合の好方に想像して氣長に時節到來を俟つた。待つ程長いものは無いといふが、春から夏、夏から秋、特に今年の樣な馬鹿熱い夏と殘暑とを挿んだ待時間は隨分長かつた。舊八月の候（今年は閏年だから一月遲い）葉の色少しく褪せ蔓の力やゝ衰へし頃、根元二三尺の處より切離し、根付の方の切口を罎に挿込みて一晝夜放置くと、藥液溢れて地をひたすと何とかいふ本には書いてある。其處で舊八月は今月、卽ち時節到來と雀躍して法の如く根元二三尺位の處から切離して、切口を罎に挿込んで夜露が入らない樣に油紙を緊く卷付け、諸事拔目なくしつらへて其まゝ一晝夜地上に置いた。結果如何と氣を揉む迄もなく、翌朝行つて見ると成程ビール罎一杯は淸澄玉の如き藥液に滿たされ、役をすました蔓はぐんなりしをれて曉の秋風に寒さうだつた。少し手に受けて飮んで見ると無味無臭、毒にも藥にもならぬ樣に見える。之が齒痛や切疵に利くとは噓の樣である。併し實驗した人の實驗談によると噓ではないさうな。現に私の家内などは二日二晩も惱んだ齒痛を此水によつ



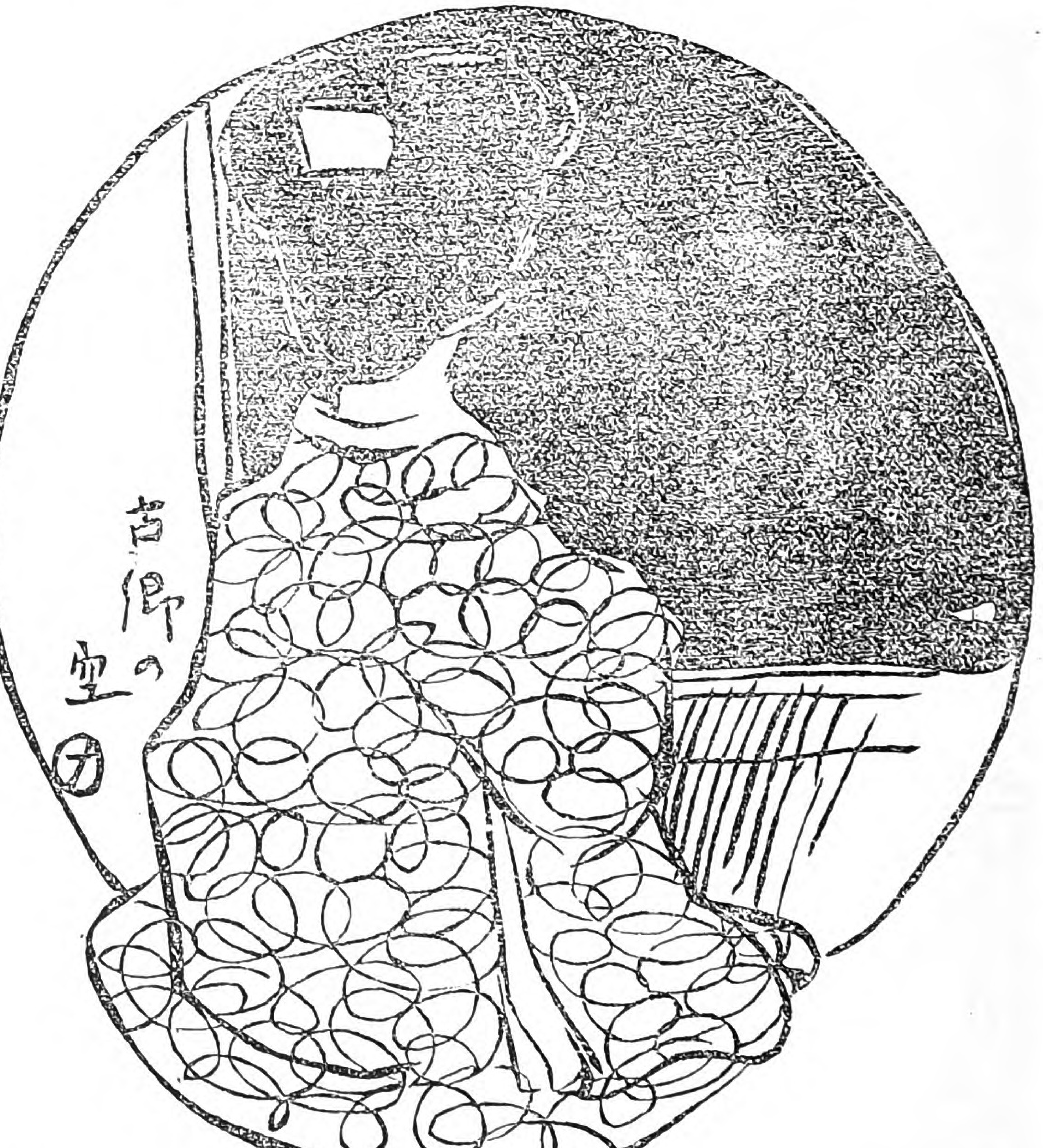
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て癒やされたと言つてゐる。或人は喘息にも利けば腫物にも利くと言つてた。和漢三才圖繪に據ると、此草は漢名を烏蘞苺といひ、五葉苺、籠草、龍葛、赤葛、五瓜龍、赤潑藤などゝ云ふ異名があつて、我邦では俗に豆太といふと書いてある、良安寺島翁は藪枯といふ通稱を御存じなかつたものと見える。本綱に曰く、烏蘞、塍塹の間に多し、其藤柔かにして稜あり、一枝一鬚凡五葉、葉長うして光に疎齒あり、面青く背淡く白蘞の葉の如し(故に烏蘞と名く)七八月苞を結び簇を成す青白色なり。花の大きさ粟の如く黄色にして四出す。實を結べば大きさ龍葵子の如し、生は青く熟れば紫なり。其根白色大きさ指の如く長さ一二尺、之を擣けば涎滑多し、氣味は酸苦寒、癰腫及虫咬を治す。根を擣いて之を傳く云々。支那人は昔から腫物に利く事を知つてゐたと見える。

△奇人といふ者は何うも前世紀の遺物らしい。私の故鄕にも昔は大分奇人があつた。富士山頂の金明水の株を獨占して、年々相應に利を得た油屋利兵衛といふ男などは、山が閉ぢると贏得た金を懐にして山を南へは下らず、必ず北か東へ降りて、日本中を金の續く限り短褐弊袴、膝栗毛に鞭うつて遊歩くといふ奇物。六尺もあらうと思はれる長軀に、不釣合な小さな頭を持つた、色の淺黑い、目の窪んだ、見掛けもひよろり、歩くにもひよろり、ひよろり〳〵とひよろ高い男で、商賣は經師屋、先代が油商をしたから通稱油利、今は故人となつて、墓木已に拱して居る。今一人同町内に春與市といふ盲按摩があつた。中年（たしか十七八の頃かと思ふ）に目がつぶれたといふから其れまでに見た事は人一倍覺えてゐる。極端な保守主義で、青年時代の江戸見物を金科玉條として、人毎に說法する所は罪の無い自慢だが、我の強い旋毛曲りの、ともすれば喧嘩腰になる惡癖を人に嫌はれて按摩業は門前雀羅を張る始末、時々妙な穿違ひをして空威張りに威張り倫敦だの巴里だのつていつたつて東京に及ぶもんですか、と、口角沫を飛ばし喋々として東京の繁昌を說く。而も彼れの所謂の東京は、傳馬町に火の見櫓のある東京

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

だ、馬場のある東京だ、日窓となまこ壁の東京だ、伊勢屋と、犬の糞の東京だ。大江戸御繪圖御治世萬々歳の東京だ。第一銀行の鯱鉾も、京濱間の陸蒸汽も、圓太郎馬車も、テレグラフも、彼れにとつて風馬手相關せざる代物だ。沒交涉の我樂多だ。敢然として起つて風雲を卷起さんとする東京對倫敦巴里優劣論に慊うした豫備智識の缺乏は大耻辱であるが、盲滅法界の彼れは恬として顧みない。遮二無二倫敦巴里の繁昌を東京以下の繁昌と斷定て得々として他に誇り、目を剝いて何うだと言ふ。ドグマチストは兎角人に好かれぬ。彼れも其一人で、赤貧洗ふが如く、陋巷に蟄伏つて晩年は數奇だつた。明治つ子は皆賢い、隨つて這樣馬鹿は殆ど稀有だ。面白味の無い役に立つ人間の增殖るかはり、旨味のある(嚙みしめると愈々旨味の出る)役に立たぬ人間は段々減つて行く。



△近所の禪寺の山門が花崗石の無扉の洋風門に變つたと云つて非難する者が大分ある。山號寺名と漆書した電球を

鐵アーチから垂下げたり、白ペンキ塗の丸太の袖垣を喰付けたりした所は全然本郷座式の書割だ。西園寺、徳大寺、甘露寺などを聯想すべく出來てゐる。住持の性格を標榜した此改築に同情する者は、同臭味の成金と、町政を切盛りする町會議員の多數と半可なお澄し屋とで、非難する者は文學好きの青年か、さもなければ時事問題に一隻眼を有する商家の若主人、隨筆學問の舊家の隱居、其様なものである。併し推しても引いてもびくともせぬ花崗石の無扉門の强身は所謂不言實行で、善惡無差別、魔佛一如、腕で來いと來た日には、楚人の一炬、阿房宮を三月の火に燒盡すか、指をくはへて引込むか、二者其一を擇ぶべし豈他あらんや。豈他あらんや。

△建設よりも破壞は面白いものである、五歳六歳の子供の遊び振りを見ると皆破壞だ。革命時代の陣呉は子供らしい男に多い。

△私は子供の時分、伊勢暦の中の鎌倉祭といふのを、頼朝のお祭だとばかり思つてゐた。少し大きくなつて其れは護良親王のお祭だと譯つた時、私の母は太平記中の同親王の事蹟を説明して呉れた。天子さまに忠義を盡した人は皆神さまに祭られるのだといふ事も其時に知つた。頼朝と鎌倉祭とが沒交渉だつた理由も其時分やつと譯つた。幼い事であつた。

△徳川時代で私の好きな人は、由比正雪と錢屋五兵衛嫌ひな奴は松平伊豆守と林羅山。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

冬の夜語

坂東太郎

●「日本の子女は、一たび死すれば一躍して祖先の列に上り、其父母祖父母によりて初めて大なる尊敬を受け、神聖なる者、若くは半神にして取扱はる。日本の一家を支配する者は生者に非ずして死者なり」と獨逸人の書に見ゆ。「祖先」になるのではない、「佛樣」になるのだ。けれど五つ六つで死んだ兄を有つてる人や、二十臺で亡くなつたお母さんをどう思つてるだらうと思うと滑稽である。足をばたく暴れかへる兄さんを負ぶして坊やはよい子だねんねしなとゆすぶりく唄ふお孃さんもあるだらうし、のの字の杖を突いた「白髮のむすめ」が、結立の島田のあでやかな「お母さん」に、早く歩くのだようと叱られてゐるのもあらう地獄の景こそ見ものなれ。「日本人は出生の日を重んせずして大とかに生年を以て數へ、同年中に生れたる者は其月日の如何を問はずこれを同年と見做す」と同じ獨逸人言ふ。これは適切な觀察だつた。十二月三十一日に生れた子は其次の一月一日にはもう二歲として數へらる馬鹿臭さは日本以外何國にもあるまい。西洋の女は年を聞かれると怒るが、日本の女は二つか三つかは年を喰つてゐる。●ドクトルFの夫人なるアメリカ女、すべて男子といふ者は動物的には必要であるが、人間としてはいらない物だと演說した。F氏は桑港裁判所へ離緣の請求をした。玉野すゞ子といふ方は、嫁して後男といふものゝ愚かさを悟らぬ人妻が有らうかと書いたが、これなども離緣ものだ。宿六がいゝ面の皮だ。

●人の生れてから死ぬまでのよはひ(年では無い、日である、生きてゐた時間の數である)を測るには、生れた時間を知る必要が有る。議員選擧の時などに點數が同じの場合には年長者を當選させることに法律は定めてあるが面白いのは先へ生れた者でも必しも年が長だとは言へぬことだ。懷胎は十月——二百七十幾日とはいふけれど、人より後で受胎しても月足らずで早く生れるのがある。(後で生れても月足らずで生るゝ子より確に早く受胎したのに年下にならねばならない)甲乙二女が同日同時刻にお產を初めても一足先きに母體を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

離れたのを兄とするなら、三日も前から生みかゝつてまだ生れぬ兒はどうするのだらう。双生兒の場合に後から來た兒はそれだけ母を戀しがつたのだからといふあはれみから兄にするのも聞えぬ理窟だ、假に、世界の主たるべき權利が、生るゝ前後によりて決せらるべき運命を有てる二人の胎兒が有るとする。陳痛が同時に初まつて、一兒は足から先生れる。一人は頭から先生れる。一兒先づ母體を離れたけれど、まだ呼吸をはじめぬうちに、後の子がうぶ聲高く放つたとする。足で踏まねば世界は歩けない、が、頭が無ければ生存は認められない。さらば皇位はいづれにか屬する。一體「人」は何時から「人」なのだとは某博士の「うたがひ」である、十年も前の記憶を辿りて書いておく。女の人にとつては茶前飯後の冗談では有るまい ●ランプの光では黄は白に見える。其實白が黄に見えるのではないか知らむ、滿月の夜、自分の手を充分延ばせるだけ延ばして、月と同じ大きさの物を持つとしたら何を持つべきかと多くの人に問ふた學者が有る。茶碗、懷中時計懷中時計の百倍、林檎、馬車の車輪等答は區々であつた、實際は大人の小指の尖端か、大豆の大きさの物で月は隱れる。賴山陽は七つ八つのころ、東から出て西へ沈む日を見て、どうしてあゝなんだらうと母に訊いたら、ぐる〳〵廻つてゐるのよと教へられて、不思議がつて泣いたさうだ、どうして土の下をむぐつて來るんだかとおどろいてゐたのは私である。天井はお蠶樣籠で出來てると信じてゐたのも事實だ、●大隈伯曰く京美人と言へば面瘦の細つそりで羅衣にも堪へぬやうなのを指すが、實はこれは京都人士の吝たれから來た粗食の爲の營養不良だと、伯は美人にモテルことを以て自許せる巨人である。●岩野泡鳴君の話にオロチヨン（樺太）の酋長が更けた嬶しを追出して可愛い奴を家へ入れやうとしたが、離緣を承知しないので、幌内川へ舟で連出してどうしても出なければかうしてやると川の中へおつぺし込んだ、無論おどかしだつた。が流れが激しかつたので妻は溺れ死んだ。酋長はあとから飛込んで救け出さうとしたが、これも溺れて死んで了つた。●葛天氏の民として傳へらるゝ者、古くは肥後の五ケ莊、阿波の祖谷、大和大臺原、飛驒の山奥など物の本にも有るが、垂井を去る北わづかに三里、伊吹山の麓に春日村あり、村民は今も尚太古の儘の姿で、男も女も四時紺麻の衣類を用ゐ、男は常にタッツケ袴を履いて鎖の凡そ二尺もある煙草入を腰に下げてゐる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此の鎖の長短は家の系圖の善惡を示すもので、ツマリ長い程系圖の好い家の者と云ふのである。女は幅三寸位の矢張紺麻の帶を締め、後でダラりと兩端を下げてをる年の老若に依つて、其長短があつて、長いもの程年が若いのは普通の若い女の袖と同樣である。帶の端には赤白紫等の色麻で小い手毬の樣なものを飾る、是亦老若に依つて數を異にしてゐる近年漸く何太郎何吉と云ふ名をつけ出したが、此所十年程前迄は何れも何太夫、何々太夫と命名してゐたものだ。帶の端の飾といふは名古屋帶の遺制なるべけれど、煙草入の鎖は奇抜だ。奪掠結婚と言へば、東北と九州の一部には『かためよめて』とて、欲しいと思ふ女を引かついで行つていや應なしに妻とする風がある生蕃の兄弟だと思へば腹も立たないが、肥後では娘の家へ忍込んで盗み出す時敷居か戸口かへ酒を徳利へ入れて立てゝおく、家人が跡を追はうとして過つて其酒を覆せば、娘はどうあつても遣らねばならぬ。隨分他をおひやらかした習慣だ。●ブツ



クメーカー伊藤銀月が先の細君竹内政女は『當世一百人』に序して曰く、『一體銀二と申す人間、うはべは至極穏和しけれど、いゝ、しよつちう妾を苦しめる程なれば、世間様から仰しやつて下さる通りの甘さ加減は少しもなし、詰らないのは妾の境界にて、其様に甘つたれても居ず、三指で恐れ畏み奉るのに、人は、何だか銀二を太く甘やかしに御覧になり、妾をわがまゝものと思召す埋らない……どうしてくく銀二が其様な人間で御座いますもんか。ちッと辛過ぎて困る位。などゝうちのお前さんの讒訴をしたところで、犬も喰べちやアくれますまい。ほんたうは、虞美人を傍に置いて上げたいけれど、妾ががんばつてゐる以上は指もさゝせないのよ、おあいにくさま』銀月が今の細君は政女の妹である。妹にだけは『おあいにくさま』が利かなんだと見える、おのろけ文學の製造に熱中せる孃さん達鑑みざるべけんや。●伯爵大木家の應接室に名妓ぽんたの油繪有り。伯日く俺はぽんたを一遍だつて見やしない、唯彼つが紙衣を着るやうになつても鹿島清兵衛を捨てずに添てゐる志をしをらしいと思ふので、かうして置くのだと、鼻の萬龍が日本一の美人は私だといふ面をしてゐるのが癪に障るとて、其頬べたを撲つたのも伯である。●これは川島といふ男に聞いたのだから保證はしない。明治卅一年の熊本の壯丁は



聾者か然らざれば耳疾者が多かつた、不思議な現象だと調べたら、十年の役に母の腹に居て盛んな砲聲に驚かされた結果だと知れた云云。それでは十年後、奉天旅順の女達は熊本以上の戊種壯丁を産むことになる。お袋の耳が潰れたといふのならわかつてるが。●自殺した流水女宮本君子の內緣の夫荒井なにがしは、常陸眞壁郡騰波之江村の生れだ背の高い好男子を以て有名である。一夏黒子のお寺に盆踊があつて、大寶村の豪農西戸某の妹も、――人中に立つて見てゐたら袖を牽かれた、誰だと聞いたら若柳の荒井だといふ。すんならと忽お目出たくなつた。ある夜もかたの如く忍び込んだところ家の手合に見つかつて、寄つて集つてぶんなぐられた。女はそのうち一人で簞笥を仕まつして、へどへとの男を連れて公に出て了つた。しかし男は荒井ではなかつた、下妻小學校の先生どころか、年廿四圓どりのうま方野良だつた感心なのは女は悔いもせずうらみもせず、月漏る掘立小屋に一所懸命、紬ひきの內職を營んでゐる●新夫婦の寢間にはよくろくろ首の出ることは本で讀むが、同じ大寶村に常さんといふ大工がある、聟入した晩から鐵砲に中つて續け玉に橫腹が痛むのだから流石におふくろが氣がついて、娘を責めるけれど落城しさうもない、表向では聟さんも何處



を風が吹くといふ顔をしてるから、終には四布ふとんを一枚敷かせて、どうするかと思つたら娘の絆裏はずつと上手で、ふとんの端をくるりと軀へ卷いて鐵砲壽司をやつてる。要心堅固の構へが旅順口以上と來てるから、婆さんも匙を投げて乃木大將を頼まうかとよつぽど思つたさうだ。さても其後、年を經ること玆に十五、白旗は二年目あたりに立つたが、子供が出來ないお袋の心配はまだ脫けんのだ◎鵙の鳴きはじめた頃だつた、秋田の町外れを素裸の肌に十の字に子を負つた女がうろ〳〵してゐた、木賃宿で剝かれたのだ夫をたづねて青森へ行く途だつた◎名古屋に、思ふように動かないといふので身でもつた嫁をいびり出した家がある、この十月廿二日、女は毒を仰いだ、長い苦悶のはてにもとの夫を呼んで貰つて其膝に枕したまゝ息絶えた。◎メチニコフの『人生觀』(白樺)にシックスに關する不調和が書いてある。男子にも不完全ながら子宮や乳房腺が有るのは兩性具有時代の痕跡を留めたものとは誰しも氣のつくことだが、處女膜は猿には無い(他の動物には無論無い)。大古、といつても有史以後卽五千年前には女子は四歲より六歲の間に於て(男子は七歲より十歲までの間に)結婚した。今の日本では十七歲以前の結婚を認めぬけれど、英國では十四歲まで許してゐる。サンスクリットの詩によれば、天癸のすでに初まれる娘を持てる親は、「地獄に投げ入れられた、もとより其娘は永却人の妻たるを許されなかつた。分娩は年少き者ほど陣痛少し、たとへば十二歲の母親にありては、十五分間を要せしのみ、されど年若き姙婦の死ぬる者は百分の三十に達す。◎讀みにくい姓といへば、東恩納。牛糞。泉二。千萬億。神神廻。耕雲。屬。三方一新。七十五分。貴家。四十原。勢理客。彭城。紅草。八道。一口。猫手。道祖元。太秦、百田。寸樂。餘田。高家。平福。敕使川、敕使河原などがある。先に擧げた一寸八分。兄上部は意味が通ずるし氣のつく節もないではないが(鎌の柄は必一寸八分だ兄にはこのかみの訓がある)猫の手のちよけいはちよつかい、勢理客は修理の客の迫つたものと思へばわかるあとは當分手がつけられぬ。一たい人の姓名を研究するのも面白いものだ。梅里、櫻庭、蓮池、月村などは祖先の風流が思はれるし五月女氏・妹背氏、新妻氏は艶福羨むに足る。專平、鍋八、茂次右衛門、鍋兵衛、平八の諸公は恐れながら野暮でいらせられる。圓助、一々君等輕妙賞すべし、公文、進士、天、相場、執

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

印、横枕の姓の奇絶なるに對して可然、縮往、虎袈裟、豆藏、他人次郎、等の名は怪絶ならずや、姓と名ハ宿縁淺からざる者に白鳥翼、桜川忠兵衛、秋田實、二階重樓あり、「中庸」の二字で萬事を濟すなどは天衣の無縫なるもの。「有働良夫」君は女子文壇の君達にモテルことと請合である。花形長之助、長は當に蝶ならざるべからず、切角の家名を傷つけずや。龜、龜太郎。龜氏を繼ぐに龜太郎の名を以てしたる凡に似て凡ならず。大熊豹虎郎、犬に吠えられたら此名を額へ書くことだ。高草木重列、四王天敷馬、江連礎磨楠、西星飛良來などの一騎當千の面々に至つては、親爺の駄洒落も是に至つて極つて、ちんの名か、三いちやんの名か、佛か、仙か、はた唐人かといひたくなる。(以上官報所見。)なほ官報の戰役當時の恤兵部獻金名簿にはおサル、おケツ、おワシ、おウンなどいふ名も見る、女のは九分假名だけに物になつてないから抜くのは止める。◎大刀根の下流、霞ケ浦浪速浦の附



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

近は天然にも人事にも詩趣に富んでゐる。僕などは細君が承知すれば家と擧げて一葉の船に托し、風月を侶として湖上に老いんと思ふまで　惚れてるのだ。鹿島洋の浪の澎湃たる銚子近くに夫婦鼻といふ處がある。そこに生れた女、美貌禍を作して、十四歳の時人にかどはされ、流れ渡りに海賊某の妻となり久しく船にあつた、男の捕へらるゝと共に十二年ぶりに村へ歸つたが家の人にも郷黨にもよい顏をされなんだので、放浪十年、心飽くまで荒める彼は、去つて復船の人となつた。桃色の帆を擧げて大刀根小刀根を上下し、逆浪に入り西浦に浮び、霞ケ浦に泊り、土浦澳に漂ひて、梶枕波にぬる、白水郎となつた。近ごろ發狂して、蘆花雪の如き利根川の岸に棹をあやつりながら、往來の船を見れば男を呼びかけて泣くと聞く。◉二人の夫を迎へたけれど、二人ながら一人宛の子を置いて逃げた、近所の子守等歌うて曰く、二度の置き去り二人の子供またも降るかや雨あられ、土佐の事だ。◉福岡市深見某、年六十八、十七歳の妾あり、一子粂吉亦二十二になる藝妓を落籍して妻にすると云ふので、それぢやおれのも細君にするとて、父子同日に結婚式を擧げた、福岡縣は全國に於て結婚數が最も多い、成程これでは多い筈だなんてアテコスリは言はぬこと、十七のお母さんに二十二の嫁御寮たゞめでたし〱。



涼み話に始まつて、冬の夜語に終る、　語れば盡きぬよしなしごとの何時迄も面白の浮世や。

雨の降る日と女

マクスオーレル

全世界を投げ出して悉皆呉れて遣るといふものがあつても、雨のふる日には女になり度くないものだ。量つても見るが良い。レースやら繡文やら綾絹やらでコテと飾り込んで、雨傘と手提袋と衣服の裾とを持つた上に、買物の包を半ダースもぶら下げた、其ぎやう〳〵しい姿を見遁してなるものかと、男はツク〴〵眺めるし――野郎犬め！　女は女で又、この錢の入らぬ見せ物をクス〳〵ニタ〳〵笑つてやらうと待ち構へて居るんだ――猫みたいな！

嗚呼、可憐にして親愛なる我が淑女諸君！諸君は、男といふものが――業を勵む男、若くは眞の紳士たる男を指すのではない。たゞ彼等自らが男と自讃して居る一種の動物のことを云ふ――この動物が、雨ふる日の終日を、倶樂部或はホテルの窓際に群踞して、街上を來往し給ふ諸君の姿を如何に批評しつゝあるかを知り給ふや？

彼等は、多分諸君が夢にも御存知ない間に實に斯の如きことを喋り合つて居る、

「おうあの綺麗な踝！ぢやあないか君」

「これは少し太つてる」

「あの美しい飾の髮を見給へ」

が然し、かゝる動物の無禮なる言動は、初めから問題外として置いて、偖て然らば、諸君の同性は諸君に對して如何なる態度を示すであらう？　諸君がそれとも氣付かず衣服の裾を少し高く取揚げて歩いて居る時、諸君の同性は深切に注意して呉れるであらうか？一天四海皆な同胞、況してやこれは我と性を同うする姉妹ではないか、との念を促されて、氣を付けて呉れる婦人が、廣い世界に果して幾人あるであらう？恐らくは、たゞの一人も――一人の半分もあることではなからう。

同情ある注意とや？　見せ物を見る氣で居るほどの者に……馬鹿々々しい……何の同情を求め得やうぞ！　同性既に然り。殘る味方と云た所で男ではないか！　諸君の心細さはさもこそである。が兎に角、これも一應吟味して見よう。

偖て、其味方といふのは、勿論、婦人尊重者、思慮ある愛人、及び善良の男子を外にしては無いのであるが、流石に是等の人々のみは、然ういふ場合には直ちに諸君に馳せ寄つて、斯う囁き度いのが山々である。

「誠に失禮ではありますが、夫人、私には妻があります、その妻が可愛いから、失禮を顧ず、かうして貴女にも御注意申し上げますので……。いゝえ、決して禮とは能く心得て居りますが、多分、多分お心付でないと見受けますので、そのお裾が……お裾が少少高く……」

けれども、嗚呼、呪ふべき虛僞の禮讓よ！　徒なる禮儀は彼等をしてさる親切を敢て爲さしめないではないか？

かくて予輩は、大方の淑女諸君に呈するに左の勸告を以てするが曰く、

雨の降る日には馬車に乘り給へ。馬車が無かつたら宅に居殘り給へ。近代の服裝を以てしては、天空朗かにして街路亦清麗なる日を期するに非ずんば、淑女は斷じて外出すべきでない。

が然し淑女諸君！　諸君は果してこの苦言を承服して呉れるであらうか？　否。〳〵。恐らくは之に對して大なる反對の聲を擧げ給ふであらう。然だ。雨天の禁足、これは到底諸君の堪へ得ない所であるかも知れない。果して然らば、予輩は更らに第二の勸告を提出する。曰く「雨天と晴天との服裝を明かに區別し給へ」と。身に餘る荷物に苦しめられなくとも、たゞ服裝の美を保たうとあせる丈けで既に諸君は雨に苦しめられて居る。あせるといふことは軈て心の破綻を意味する破綻に充ちた時、爰ぞ人爲の美あらむやだ。人爲の美―服裝輪廓の美を顧ずまいとして氣を揉めば揉むほど醜さが增して來る。但し、文明は人の美感を一層纖微細密にした、だから雨が降つても衣服はコテ〳〵と飾るべし、といふ人があるかも知れない。

淑女諸君！　雨の日の服裝を簡素ならしめ給へ。纖麗の美を晴天の衣服に發揮して而して雨天に簡素の美を發現することに努め給へ。諸君と雨とはイヴの昔からの仇敵では無かつたと記憶する。（福光東衣譯）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

峠より麓より

横瀬夜雨

十月九日

ダリアがまた倒れた。しつとりと飛石濡れて庭は秋深く、柘榴の葉が散る。

八百屋の婆さん、嫁にいぢられて家にゐられないから首を吊つて死にたいと訴へに來る。「喰べんなと言やしまいし、勝手に膳なりお櫃なり出したがいゝ」と嫁は言ふ。御亭主は無論あつちの組だ。

母の針箱に凭りかゝつて『美人毒語』を讀んで見た。長谷川天溪氏『女は機械だと思へ機械だと思へば美人になれるから言ふと皆般若のやうになつて怒るだらうが、其般若に亦愛嬌が有るものだ』

およねが納家で稻を扱いでゐる。あの音は矢つぱり藁を引つてく、音としか言ひやうが無い。默つて外を見てゐると、合羽被の郵便屋が門からはいつて來た。

若草の　みそか人さへ　持たずして　かたはむすめは　ひとり住むかな

あめつちも　かたはむすめの　わが住むを　露おき渡し　なげくころ哉

みやび男を　犬のたぐひに　かぞへけり　この哀れなる　かたはむすめは

『天地のかたは娘』とあり、十年眼を病んで猶嫁がざる原田琴子である。其妹は二人共すでに笄を加へた、一人かくれて天地の秋に遭ひては、流石に涙の流れぬことはあるまい。

『また死にはぐりました、秩父の山根に小さな骸となつて歸るかと思つたに。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

死ぬ日まで　われを欺き　おかんとす　つよきに
似たる　わが弱さかな
そのかみと　なほ異ならぬ　おもむきを　われ悲
しくて　明星に持つ
眼は眼にて泣きぬ　涙は　ぬぐはねば　額にみだ
るゝ　髪かゝげねば

三ケ島よし子。

秋に入りてより病む者何ぞ多き。さらに一通有り、『芳墨辱く拜見仕候。二女愛子結婚の儀「萬朝」にて御承知の由御祝詞被下難有御禮申上候。益江事は去八月より食慾舊に復せず漸次衰弱、今は唯臥したる儘にて、短き文にても差上度申居候へ共、何分にも食事さへ三度三度母(愚妻)にたべさせてもらひ居候有樣にて失禮致居候次第に御座候。十月七日　島元恭』

病に遇て後、强の實なるを知り、亂に處りて後、平の福なるを知る。病める者の心には色慾も無くまた名利も無い、强て生きやうとも望まねばもとより死を恐れもせぬ。わが晝を守る者母有り、わが夢を護る者も亦母なり。むかしは其乳に縋りし如く、今もその手に枕するのみ、天人の嘗むる醍醐味は知らず、匙にてすすむる少量の食物と、乾けば脣をぬらすいさゝかの水と、母によりて猶存らふる病者の命よ、自分も病める一人である。

夜、『幻影と夜曲』を見る。

十月十日

小雨。

柘榴の葉日に日に散りて、紅き實の葉に隱れてゐたのが又一つ見つかる。

鹿子百合車百合山百合、みな掘つて戸袋の下へ生けさせる。竹を添へた白のダリアが向ふ向にばかり咲いて寂しいかなわが秋。

足を毛布でくるんで貰つたので寒く無かつた。屛風も後へ立廻してくれた。『中の間か次の間へ行かないか、彼方は日が當る』と母。

昨夜夜中にランプを取りに來たら、一尺ばかり上の

布團がまくれて盜汗がぼつしやだつた。暑い筈は無いのに、ね汗はいつも出るのかと訊く。通草の籠からりんごを取つて貰ふ。

冷たい朝である。ナイフに映る空氣の色を見たゞけで齒が寒いやうな氣がした。林檎は剝かずに置いた。

『せん子さんや槇子さんの事を書いた內藤千代子さんの文を御覽なさいましたか輕いそして浮いてゐる作だけれど。

刹那の眞、繭を出た蛾、それが初めて寂しい胸から出て、そつと筑波の蔭に傳はつた時の姿を、偲んでくれと槇子樣はノートの一片にかいて下さいました。柔かいお心には、今となつて大切に世の風に觸れさせず藏つておきたかつたと言つてらつしやいます。嗚呼無言の詩人！奈佐房子』今の女は詩を書く心もちで手紙を書いてゐるのだ。



『今、平塚白百合さんが一寸お立寄下さいました。いつ見ても美しい方。白粉は濃いけれど心もち紅い貌していらつしやるからなほよかつた急ぐからつて上つてくれない。ぢやこの次でゆつくりと申したら、日曜にはいつも二人で出ますし――一人で步いたてとは御座いませんからと有仰る。一度は聞

かないふりして上げたけれど、二度も三度も言ふ、母もゐたのでえゝ旦那樣と御一しよに入らつしやいてしまひに、大笑しました。私も奥さんになつたらさう言つてやるわ。どうしても上らないので、奥からつうちやんが出て來る「平塚さん、そんなにお大事ならお連の方は電信柱へしばつておいて、そしてお上り遊ばせ」と言つたもんだから、白百合さんたうと逃げて行きました。草の戸『私も奥さんになつたら』大變な事をいふ。

この日見た新聞、各種とり交せ五十四頁。

『朝日』の鼬庵、女子教育を罵つて、『メソメソ式トゲトゲ式の二つしか無い』といひ、『節操を賣て名譽と財産を買ふ女と、親の言ひつけなら何處へでも嫁に行く女と、二つの暗流に溺れて浮かむ瀬が無い』はまだしも。

『自分が娘を教育するなら速記術を教へる傍、淨瑠璃を讀ませる。淨瑠璃は淫だといふが寺小屋の何處に淫靡な點が有る、まゝたきの何處に卑猥な節が有る』といふに至つては鬼面人を威すのみ。『不如歸』に泣き『己が罪』をえらがる女が有るからとて今どき腹がへつてもひもじうない人に同情する涙が出ようか。況んや寺小屋の前段には梅暦もはだしで逃出すくだりがあるぢやないか。速記術を授けておけばいかにも喰ひはぐるまい。序に按摩術も習はすれば一つには姑が嬉しがるし、經濟的には寒夜月を踏んで一文笛を流すもよからずや。

夜、うしろの姉さん小說借に來て、こんなところにばかり居ては氣ちがひになる、おらちへちつと遊びに來た方がいゝと言ひおいて歸る。病みて籠る者われのみならんや。

『百人の男の子に許す脣はもたざるゆゑに病みて猶生く』北村よし子。

十月十一日

『女の方がお出になりました。もう起きなすつたら』と下女が枕元でいふ、先觸れなしに朝早く來るとは失

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

敵だ。どんな女だと言へば、『やつぱりハイカラで十七八の綺麗な方、紫の風呂敷に本のやうな物を入れてゐます』仕方なしに起きる、青い空に白い雲が飛ぶ。

花はダリアしか無き庭に向いて、母屋から斜に此方の軒へかけ渡した蜘の巣を見るともなしに見る、放射線の中心點に蜘はおなじ姿勢を取て動かずに居る、蜻蛉の頭位な黒い點がその周圍に散つて絲は黄金色に見える。體は横に黄筋の交つた圓こい大きな蜘だ、

擧羽は來なくなつた、鹽辛とんぼも來なくなつた、蚊のうなりが絶ゆると共に、矢の如く夕やみの空を飛ぶやんまも來なくなつた。蜘よ、田に行け。

もう秋だ。

母が廻し戸を明けて縁側へ下りて來た、女の人は後から?と思つて椅子でと向かへると、民法の本を買に來たんだつたよ、驚いちまうね、中坪へ行けば患者が來たと思ふだらう、入(後)では大塚屋のかけ取と見なけりやいゝと笑つて言ふ。足袋を穿かしてくれた。

モチの根方に茂れる天門冬を抜かせる、蘭の中へ這込んでるといふので蘭も掘らせた。根ッ子は甘薯とおなじだね。こりや喰べられるんでせうと安夫、かじりたい顔つきをする。

北の雨落へ龍の髯を植ゑさせる。孝が八幡宮の森で發見した何とかいふ蘭の茗荷の葉に似し長き氣根を出したのが一尺ほどのへだゝりに行つて、何時の間に白い小さな花が咲いた。

宮岡よりザボン贈らる。去年ひさ子が贈つて來た時は何といふのか誰も知らず、かりん、まるめろ、ぶしかんと途徹も無く主張し合つて、ジヤボンだらうと言つた者があつたけれど『言海』も『辭林』も說明が當つてないので、四半分に割つた一つを中學校のH氏に持たせてやつたら、これはまた臺灣に産するふぢむらさきだとあつて、たうとう譯らず終ひ。當人のひさ子は濟して話さなんだ。

ひさ子と云へばこの頃はまた文學部の演藝會にソロでもやる積りで、學院の窓にばかり籠つてゐるのだらう、久しく其あをい顔を見ぬ。

『なぜ僕は白痴に生れなかつたらう。なぜ僕は狂人になれぬのだらう。神を信ぜよと説く者がある、如來の慈悲に縋れといふ人もある。勝手にしやがれ、うぬは丈夫なからだと好きな女を持つてゐるくせに。君は不具者には住まふべき世界無しと言ふ、わが心を慰めわが涙を鎮むるはたゞ君のみ。僕は切に妻をおもふ、私がてゝに居ますと言うてくれる女があつたらと思ふ。木津省五、』半身不隨、二十五年一室に籠れる友である

『私は私を捨てたいにしへ人を今も持佛に崇めて居る彼によりて愛の泉は湧いたのである、久遠永劫の法の光も見たのだ。われに辛かりしもの凡て我の愛護者也と觀じ來れば、草木國土一切みのりのかげを蒙らぬは無い。今は君よ、詩の國にかへれかし。かつて近づきし十七十九の君達は男ほしさの戯れなりしのみ。西山いをり子』

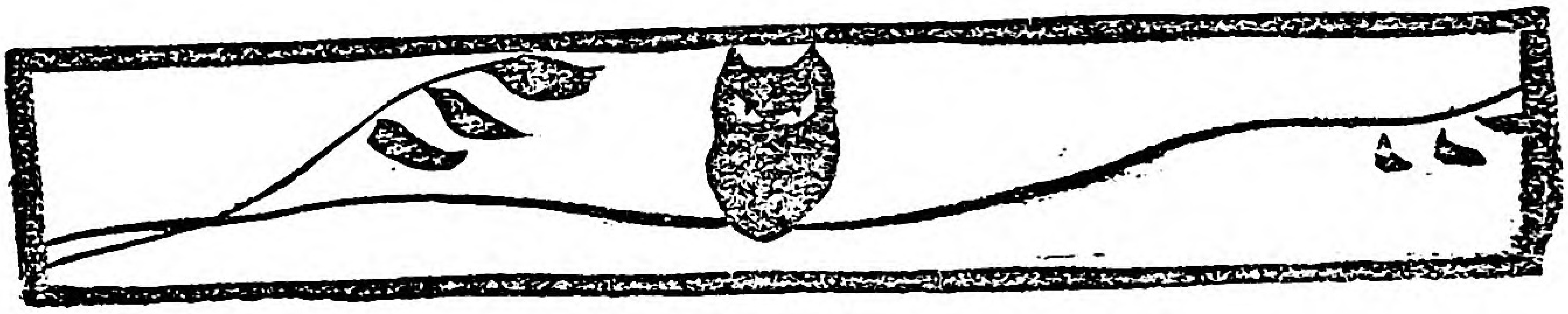
醉茗の書亦到る。

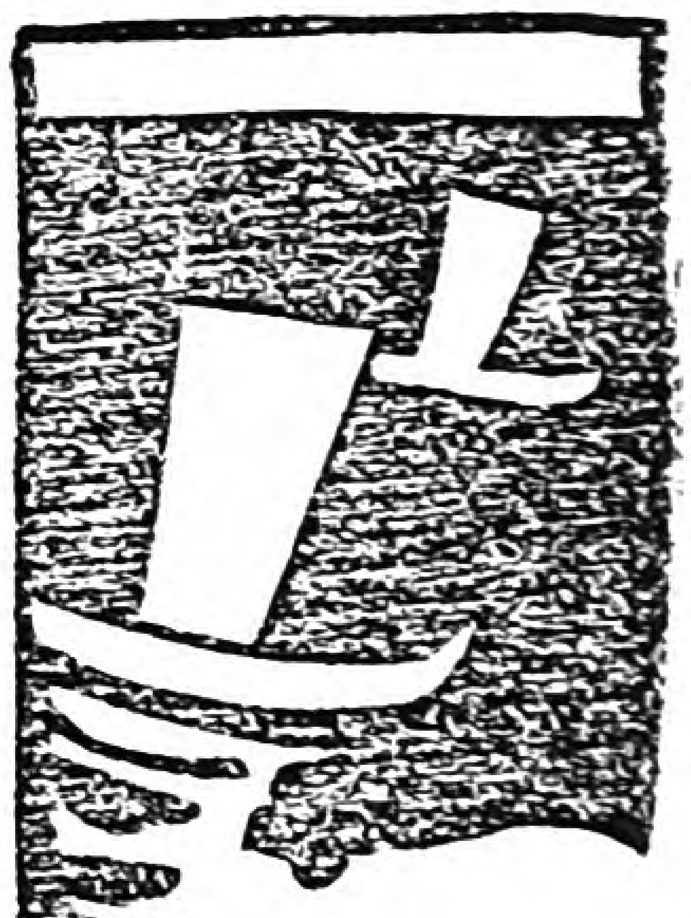
『進化論と自然科學に影響されたるわれ等の都會生活より見れば、君の生活は嚴肅にして且意義有り、われわれの頽廢したるわが儘は、君の純潔なる放恣に若かず、われは徹底したる矛盾に生き、君は無意識に矛盾を言ふ。おなじ生の壓迫ながら、わが荒涼と君の潤澤と豈ひとしからんや、君猶死すべからず、幸に健康を恢復せよ』

かつてまき子の曰へる、君は不斷の坐禪に坐せり、清けれど苦しく、しづかなれど寂しと。然り我は不斷の坐禪に在り、寂しけれど清し、誰かわが日中の靜寂を疑ふや、わが夢は湖の水の如し、動けども終に鎮まり、行けどもやがてかへる、誰かわがベツトに醜怪のかげをうかゞふや。

謝すべきかな、われ猶生く。







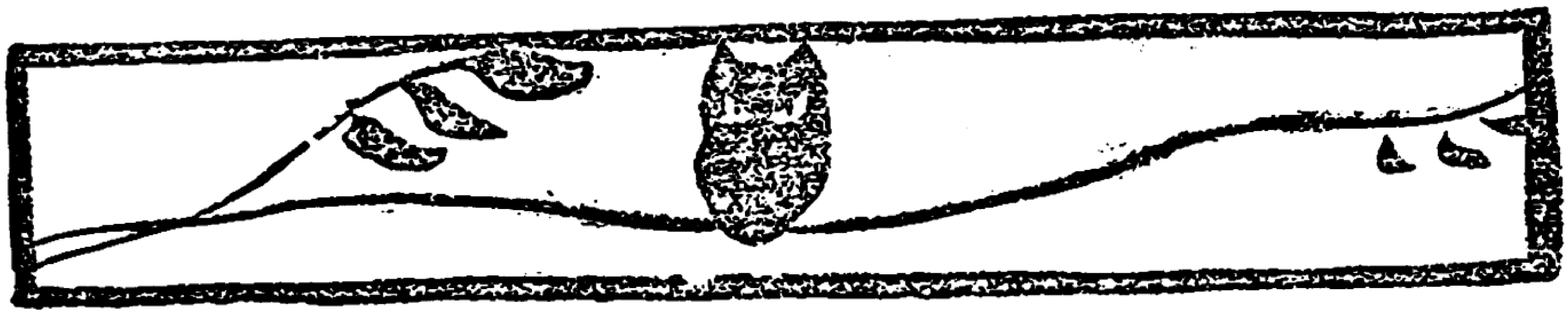
夜の女

中村吉藏



西洋のオペラハウスのオケストラの椅子に並んでゐる夜の女の印象は、鮮やかに網膜の上に燒附きてゐるやうな感がする。今も猶その中にも希臘、羅馬の古畵や、彫刻に殘つてゐるそのまゝの、雅びた風に髪を束ねて、金櫛で押へ付けたり、月桂樹を模したリボンで飾つたりして、血色を帶びた大理石のやうなクッキリシタ襟首を見せ、袖のゆたかなレースの繡模様を取つた、オリーブ色や、夾竹桃の花でも染め抜いたやうな色合の服を體にシックリ着流して、デリケートな筋肉の線の集まつた輪郭のカッキリと際立つた、中高の、表情に富んだ美々しい顔で、舞臺の上の「タンホイザー」や「ローヘングリン」の俳優の美しい肉聲に魂まで陶然と醉つてゐるやうに、眼の光が妙に熱を持つて時々輝いたり、曇つたりする、感情の潮の滿干を見せてゐるその刹那には、オケストラと舞臺と兩々に相對して活きた藝術――否寧ろ血の湧き上る、脉のはげしい、生命そのまゝの藝術が別に嚴然としてその存在を誇つてゐるやうに思はれるのである。

カフヱの夜の女は、デカタンの色と匂とがくづれかゝるやうに、眼や鼻を刺激して來る、その

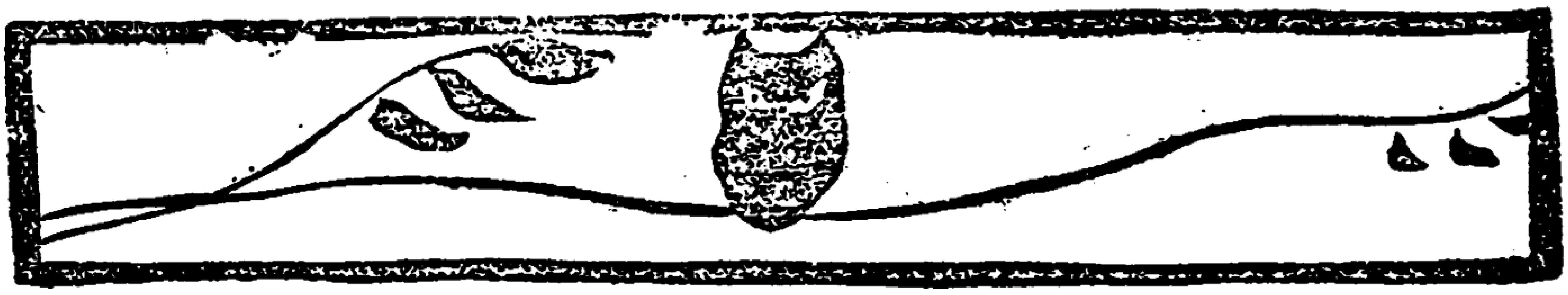


紅の濃い、畫布の一片を見るやうな厚化粧の頬の肉には、ムツとした一種の壓力を感せしむるやうな氣分が迸つてゐる、その世間を憚るに慣れ、人を魅するの魔術に練らされた、深い、暗い、底に、艶しかさと、媚と、強い力とをきらめかせてゐる瞳には、男の怨と、女の怨との影がさしたり、消えたりしてゐる、燻らす烟草の烟のムラ〳〵と立上る中に、緑の酒や琥珀色の酒の杯を重ねて、人もなげに戀歌口ずさんでは、足拍子を取るまでに、一味の熱狂な調子に乘つて來た時には、彼等は最早男性と女性とを超越して、第三性を發揮する。人間以上の形容詞の附かない代り、人間以外の、道德を越えた、世間を越えた、又社會を越えた、自然をも越えたサムシングたる事を思はしむる。彼等は生活に囚はれた結果、生活そのものゝ内容の規則に囚はれざる一のビーングたる事を身自ら證據立てるのである。

日本の夜の街をカンテラの火、瓦斯の火、電氣の火で彩るものは緣日である、その緣日の黑くなつて動いて行く人の潮の中を、お白粉で光る顔を上げて、一室の型に入つた活人形のやうな身振りで、提灯の火について泳ぎぬけるのは、座敷へ招かれて通る歌の女である。彼はやがて銀燭かがやく座敷の中へ現はれて、芝居めいた挨拶をして三絃から音樂を絞り出す。その音樂は更に金銀で彩つた扇を躍らせて舞ひの花を咲かせて來る日常默つて石の如き男子の唇すら開かせて、陽氣な旋律や、調子の亂れた響を立てさせて來る。常識の眼から見た活人形は、常識を押へ付けて浮き上つてゐる世界の中で、一番活きた魂と働きかける力とを示すのである。

夜の女は藝術である、魔力である、彼等は世界至る處の夜を美しい、神秘な、非常識な、空想的な、幻に化して行くのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



☆☆☆

吉井勇

夜の女よ。暗黒に生くる女よ。星の如くに夜にのみ輝く女よ。元祿の詩人井原西鶴をして、幾多の美しき散文詩を歌はしめたる女よ。今私は何と云つて卿等の爲めに歌つたら好いだらう——併し、私は考へてゐる間に、數る日が忽ち過ぎ去るを憂ふ、惜しき時を空しく費やすよりは、唯過去の記憶を辿つて、その中から「夜の女」の幻影を見出さうと思ふ。

幻影の第一。

何時だか分らない。何處だか分らない。私が少年時代の記憶である。私はその時分一種の好奇心に滿ちた眼で、力士や落語家や其他の皮肉な表情を持つた人々を、私の家の中に見なければならなかつた。私は彼等の洒脫な態度を眺めた。私は彼等の圓滑な言葉を聽いた。さうして、私はこの家の小公子として、幼稚な矜りを持つて彼等に親しんだ。

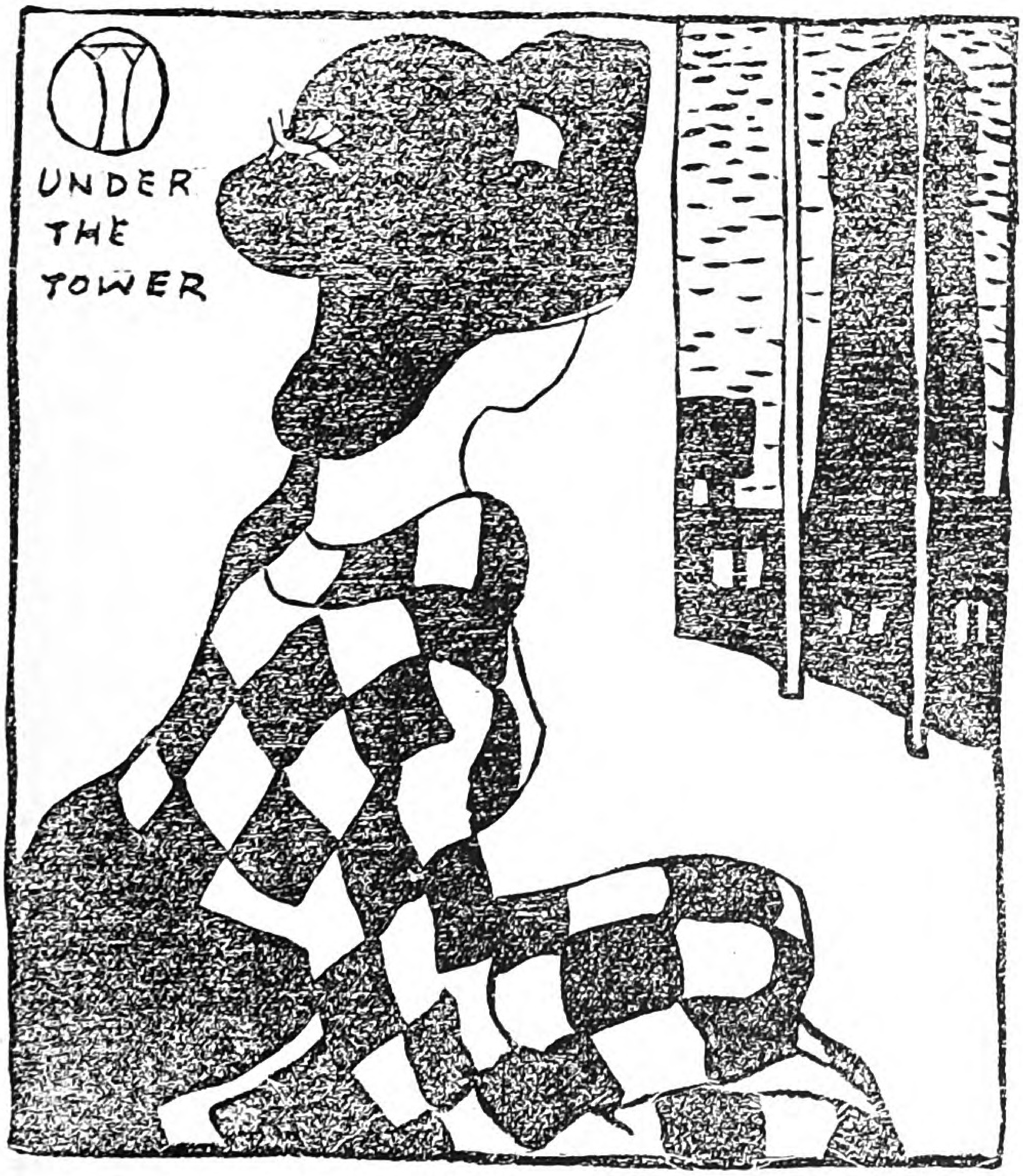
或る夜饗宴果て丶彼等が歸つた後に、「夜の女」のみが殘つてゐた。その中の一人は私の寢てゐた部屋に這入つて來て、蔽ふやうにして私に近付いた。私はその時まるで大きな白い花の中へ吸ひ込まれてゆくやうな心持がした、白粉は蘂のやうに匂つて、私は呼吸が苦しくなるのを感じた。

「甘き恐怖。」

私はそれからあの皮肉な表情を持つた人々までも怖ろしく思はれて來た。

幻影の第二。

何時だか分らない。何處だか分らない。柳の多い街であつた。石甃は夜露に濡れて、歩くのに心持の好い街であつた。夏の夜の夢は柔らかに暗の中に漂つて高い家屋の甍の上には、灯明りの映つた空が見えてゐた。微かに何處からともなく聽えて來るのは、如何やらあの懐かしい日本の樂器らしい蟲賣の翁よ。お*



*前はそんな街角に荷を置いて、何をぼんやり考へてゐるのか。

この時私と並んで歩いてゐたのは、一人の美しい「夜の女」であつた。その女は低音に何か歌つてゐたが、急に立留つて私の耳に囁いた。

「あの蟲をみんな買つて、さうしてみんな殺してしまひませうよ。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

幻影の第三。

何時だか分らない。何處だか分らない。私達は大きな門を潜つて、大きな堂の方へ歩いて往つた。私達は徐かにその石段を登つて、その扉の前に立つた。黒い扉には黒い鋲が夥しく打つてあつた「夜の女」は合掌したまゝ何時までも動かなかつた。私は廊の欄干に凭つてその祈禱の終るのを待つた。

「無智の祈禱」

私は暗の中に徐かに立つてゐる敬虔な女の姿を如何しても忘れることが出來ない。

幻影の第四。

何時だか分らない。何處だか分らない。私は今でも夢ではあるまいかと疑つてゐる。私は或る大きな家の中へ、たつた一人で這入つて往つた。長い廊下を幾度も曲つて往くと、不思議にもその角にはきつと行燈が置いてあつた。廊下は何處までも續いてゐて、終には怖しいやうになつて來た。私は急いで驅け出した。さうして或る曲り角で私は一人の「夜の女」に衝き當つた。

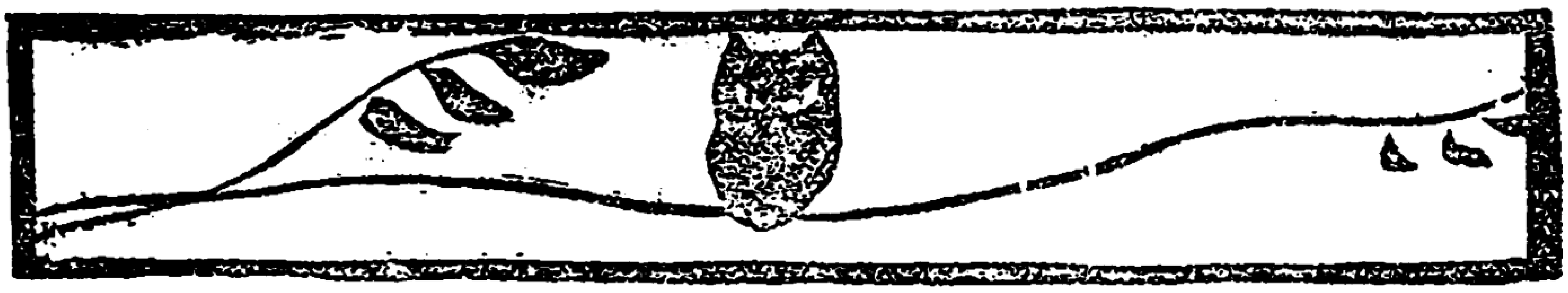
「ご免なさよ。どうも失禮。」

女は痛ましい笑ひ聲を殘して消えてしまつた。その女は死んだ妹であつた。

幻影は猶數多く續くであらう。併し、私はもうその幻影から眼を反さねばならぬ。何故なれば私はあまり現在に近い過去を語るのを好まないから。

(四四・一〇・三一、鎌倉にて)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



☆☆☆

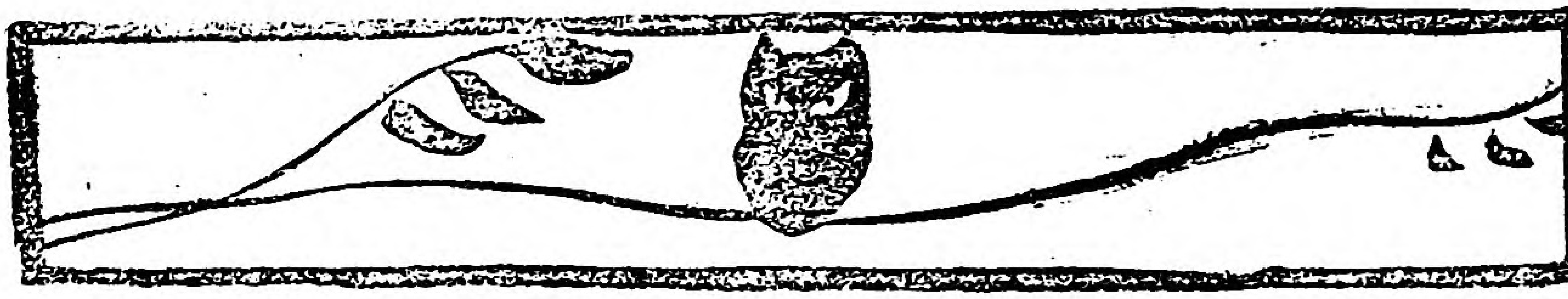
兒玉花外

ぬばたまの夜は暗いときまつてゐる。女の髪は黒いものと此もきまつてゐる、然し女の白い顔が夜になると次第に光つて來て、愈よ皮膚の美と艶を増す。

怪物は夜の闇に出る、夜の女も一種の妖怪魔物である、彼の髪は日暮れと共につやゝかに、黒い美しい瞳は光りを加へて、唇は朱の紅味をまして來る。

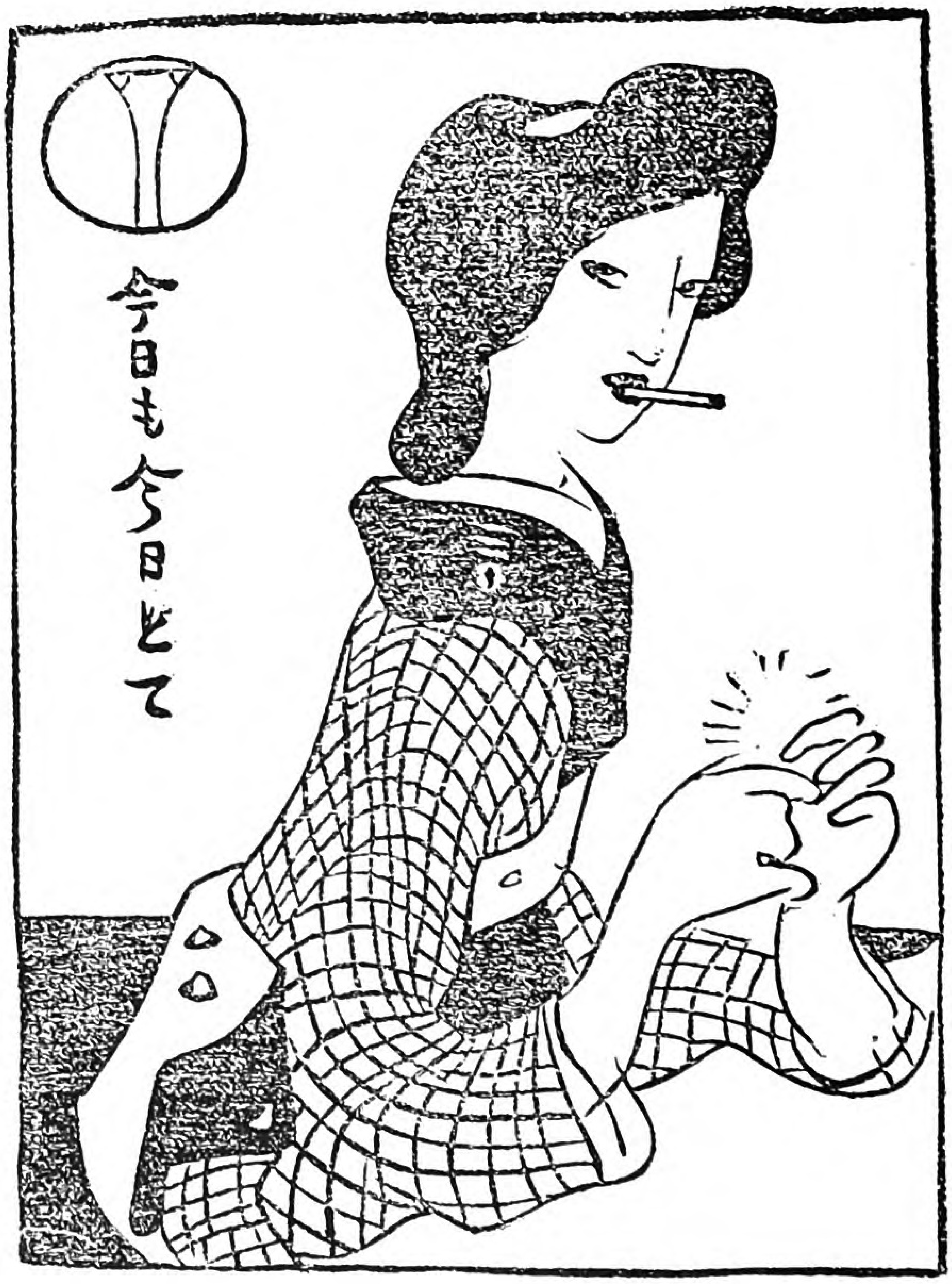
晝間一瞥にも値せぬ女が、夜分になると花の匂ひを芬々させて一寸見られる、それは化粧を爲るからで、白粉は女の七難八難をも隱せる。元來白粉がなくば天下の女の殆んどは、木地のまゝでは顔は美人？でも男子の胸を攪亂し、赤い心臟を顛覆させることは六ヶ敷い。しかし山櫻の花を旭日でぼかした如な、天性麗質の美貌が一笑したら、並大抵の男ならば動かし得やう。全く女と俳優の顔は白粉に由つて夜は美麗に成る。つまり女は夜に於て見べきものである。

夜の空に星がギラ〳〵と煌きそめる時、女の瞳は、恰ど女猫の眼球のやうに光つて來る、其の美しい光は異性をチャームする魔力を帶び、何物をか捕へやうとする。夜分は女の手は白く爪は薄紅味をさして敏活になる。秋と冬の寒い夜の流星は美の極だ、私はこの流星のやうな放膽至極な輝やかしい女の眼、燃え貫くやうな熱のある若い女の晴眸が見たい。女王クレオパトラや女詩人サッホー去つて以來、佛の女優サラベルナールは舞臺上の人として、現時に至つて凡ての女の眼の視線は衰へた、内方に向つた思惑の結果は眼の光艶を消した。あはれ女性は弱いと謂はれる

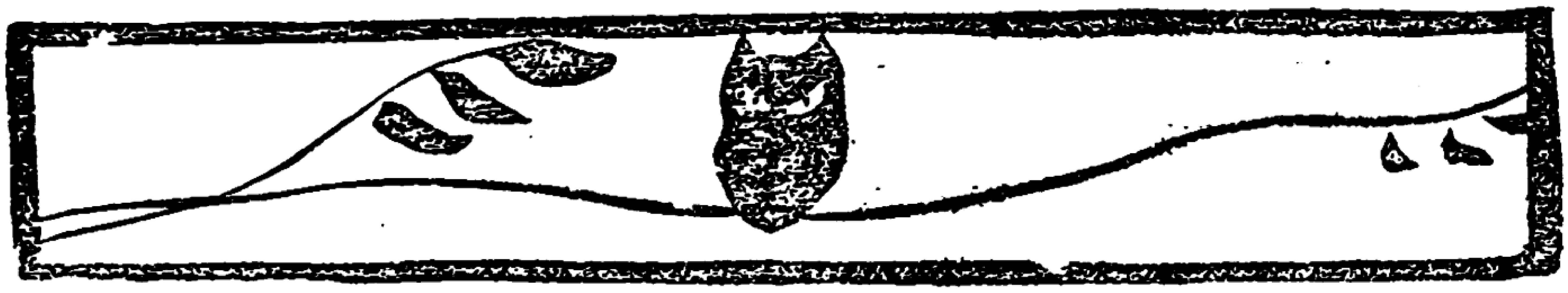


が、その內外兩面に身を悶えの熱に燒盡すまでの奮鬪的女性、自分はこれを現代の眞正の美人と呼びたい。

夜の女皮膚は、肌理も細かに灯にみえて、多少身體の肉が滑らかに成るだらう？舞踏の夜會とか劇場の夜には婦人の姿舉動はい、い、なよやかな中にもドコとなく活潑である。また夜は女の戀の情のつのる時だ、暗い夜と對照して其の熱い胸の血を驗したならば、凡そ是位世の中に純精な紅さの浄ひ血は、*



*少女の白い柔胸のほかには決して見られまい。秋の夜更けて戀に物思ふ若い女の心臟よ、これを皿に盛つたら恐らく天下の美品であらう？牛肉のビフテキに舌打つ近代人は斯うした趣味は忘れた。併し私は浮世繪式の女を懷かしむのでない、今日の新しい女性の熱い紅い心藏をいふのだ。夜と戀の赤い血！女の美しき吸引力を私はしみぐ＼と感じる。



黄がゝつた電燈の蔭の女の顏よりも、青白い瓦斯の灯で見た女の顏の方がよい、悽く白く美くしくローマンチックの匂ひを生む、賣女抔は顏に瓦斯の光が巧みに應用されて憐れに麗しい。藝者の眼の強い表情は華やかな火影でなければ効力がない。

夜の女は心も身體も、宛で柔軟かく解ける白蠟のやうである。女は、鴉啼き赤い日が出ると共に生命の火は全く滅えるといつて可からう。

☆☆☆

三津木春影

「春は來れども花咲かず、娘がむすんだ壽司からが、誰がよかろ……」と金襖の床に坐つた大阪の春子太夫がゆつくりと語りだしてから、男性的の滋味をふくんだ艶のある肉聲と、一種の躍るやうな情調をそゝる三味の音とが、しつとりと夜の光りに纏れ漂ふなかに、人形の淨瑠璃の「鮨屋」の場の人情の葛藤が次第に展開してゆく。

新しい藝術を盛るにふさはしい有樂座の舞臺の上に、古い匂ひのするかみがたのかういふ觀世物を移し演ずるといふことが珍しかつた。廻り舞臺のやうにクルリと反轉して現れる太夫の姿、黑塗りの高欄、平舞臺と二重とを區別する金紙張りの細長い襖、上下を着た人形使ひ、それを手傳ふ黒子——すべてが新奇な興味をもつて私の目を惹いた。

柔かな椅子に腰かけた私の周圍には、大勢の新橋邊の化粧の女がゐた。官覺を刺激する匂ひと表情に富んだ流れるやうな黒い瞳と、複雜な配合のいゝ色彩と、巧みな修練の結果一つの磨きあ

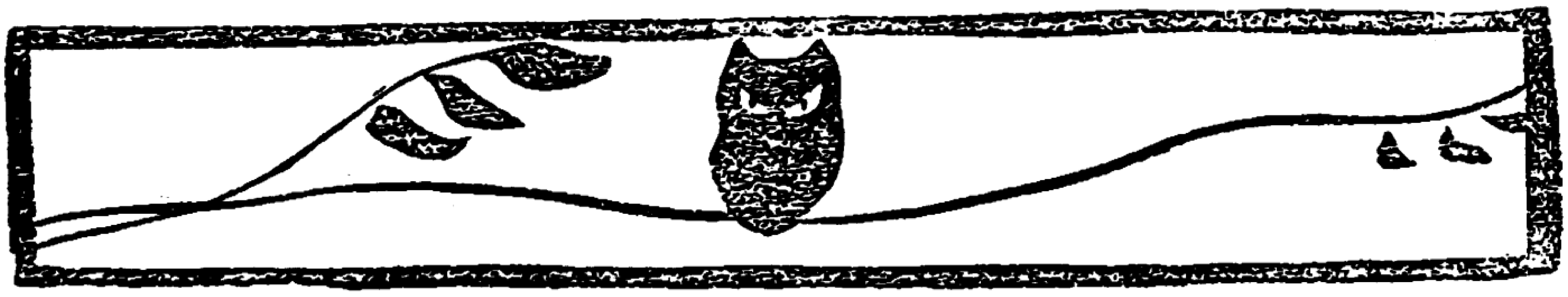
げた藝術品のやうに見させる着こなしのアート――さういふものが蒸すやうな周圍から私の五官を壓した。

初めはこの人形淨瑠璃といふ特種の劇の現す舞臺の氣分が、私の氣分としつくりあはなかつた。人形使ひが重さうに穿いて出る恐しい高い下駄や。人形よりもよほど大きい人間が、一つの人形に三四人も煩さくかゝつてゐる事や、人形が空間にブラ／＼漂つてゐる事や、＊



＊さういふ不自然なことが、私の全き氣分のその葛藤の中に投入れるのをさまたげた。……だんだん觀てゐるうちに、一種のイリユージヨンが柔かくふつくらと私の眼を包んだ。

そのイリユージヨンが、土を燒いた生氣のない人形に、劇的の呼吸と、生命と、熱とをあたへて見せた。そして私はやうやく舞臺の中に沒入する事が出來たのである。



私はこの幕前に用事があつて樂屋の廊下を通つたのを憶ひ出した。廊下や、廊下から覗かれる支度部屋には、衣裳を着た數多の人形が、ダラリと醜い首を垂れて、慘酷に吊るされてあつた。……それを、今悉く蘇へらせて、肉と血と涙に滿ちたお里とし、維盛とし、權太として動かせてゐる藝術といふもの丶力に驚かずにはゐられない。

「父もきこえず、母もきこえず……夢にも知らせて下さつたら、ア丶………」と泣きくづれるお里のさはりの所に來ると、私の直ぐ前の女は隣の女に耳よせて

「昔の女は情が深かつたわねえ！」と囁いた。

ベルレイヌの所謂「明日になつたら變換へする盟ひ」といふものを夜毎にして恥ぢない、からいふ女たち——晝間はあの樂屋に吊下つてゐる人形のやうに荒れ乾いてゐる彼等が、匂ひと、艷と、表情とをもつて光の下に照りかゞやいてゐるやうになるのは——「夜」の力だ。そこで私は、夜といふ神秘的の黒幕の中に見出した藝術と、光と、女とを見るのが好きである。

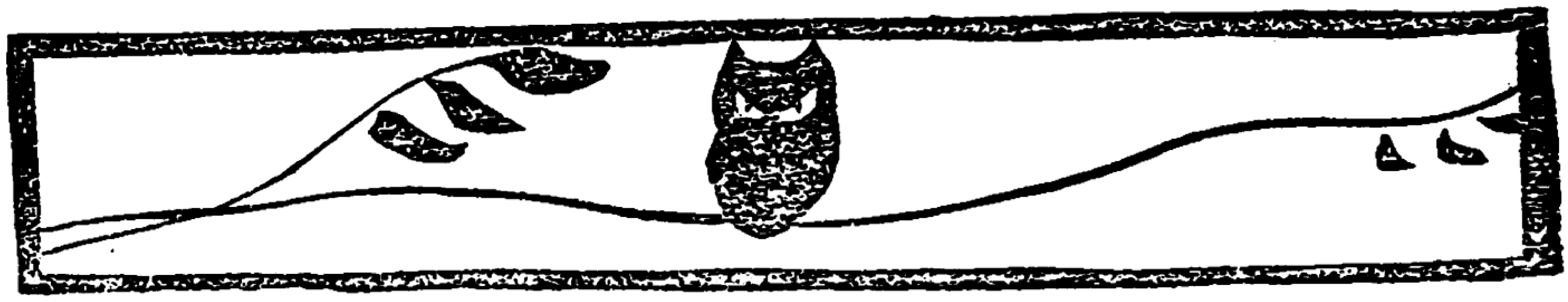
☆☆☆

川路柳虹

薄闇の光りがもう河岸の葉楊をかすれる時分、ゆた〱と靜かな河波が情人のやうな街の灯をうつして、青み浮く薄暮の懷しさを聲低く唱つてゐた。

口笛を吹き乍ら兩國の橋の袂に佇立つた彼は、肩にかけた繪の具箱を手にもちかへ乍ら、懷しい「夜」のおとづれを思つてゐたのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



「夜」――碧玉の如な、踊り子の瞳の如うな、微かな裳裾の足づれのやうな、華奢と靜かな美しさと、嬌艷な色と香に包まれた都會の「夜」はいつも處女のやうな燃た驚きに彼を導くのであつた。寶玉の如く瞬いてゐる河岸の「夜景畫」に、いつも目新しい快よさを彼に與へてゐる。黑猫の眼が動くやうに移り變る仁丹とゼムの瞬きが廉價な「金と青との節奏」をしてゐる事も此の「夜」と云ふものゝ中にあつては何等不快な感じもなく、子供のやうな心で樂しく思はせられる。彼はいつもゆくカッフエに足をむけ乍ら、先づ橋の上から見る都會の夜に醉つてゐた。

彼はこの頃カッフエの女をモデルにして窓からみるこの夜景の樂しさを畫かうと思つた。女は白粉に艷めいた顏を瓦斯の燈りに照らされて卓によつてゐる。白い卓被の哀愁と銀のフオークの絲の如うな嘆きと横向きに手を顏にさえた「おはるさん」のモルビデッザを、こゝろゆくばかし味はつてみたいと思つたのである。そしてこのたゆしいやうな甘い華かさに自らも殘つて見たいと思つたのである。題まで考へて終つた。夫れは「夜の女のMordideza」と云ふのである。

彼はこの頃無上に醉ひたかつた。華かな夜の光の下に若い火のやうな心を踊らしたかつた。舖石をトツ〳〵と靴で踏み鳴らして春のやうな溫さが流れてゐる酒場にゆくのを何とも云へぬ若い誇りと感じ出した。そして皷の如うに洩る女の笑ひ聲に、都會にゐる生活の樂しさを思つてゐた。

彼は群集の中に行くことを興じた。孤獨な沈んだ思ひから覺めて騷しい都會の夜の華かなもの音に、美しき女の幻像を浮べて舞踏する樣な心持を味はつた。

海のやうな屋根ばかりの街を見下してカッフエの窓は外に春の光りを流してゐる、彼はその室內を思ひ浮べて云ひ樣もない美しい幻像を頭の中の畫布に描き出した。

水色の壁には輕い映像が浮く、その前に夢みるやうに坐つた「Madomoiselle Oharou」を彼は靜物の如く眺め度かつた。

夜よ、夜の女の豐艷よ、彼は作畫の愉快を空想し乍ら今入口の扉を開くのであつた……

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



名流婦人の愛讀書（三）

長谷川時雨女史

新しきものはつぎ〳〵の作物に追はれて、二度くり返すなどは稀で御座いますが、古いものは、そこいらにあればつい見やうといふ氣がなくても讀みかへし、其度に新しい興も添うて來るもので御座います。殊にわたしは歴史物が好きでして取りわき「源氏物語」「大鏡」等は讀めばよむ程思ひがけない氣の毒な云ふに云はれないふし〴〵が出てまゐりまして、興深く思はれる本で御座います。

「源氏」の中では、色々と顯はれて來る女性の中で、紫の君は、時々に妬み心を顯はすのも面白く、又今の世の婦人にありそうなのは朧月夜の内侍で御座います。かゝる人になつたらばと神々しう思はれるのは、宇治の宮の大姫君。何となく氣の毒で惡くからぬは手習の君、浮舟で御座います。又明石の上は何事にも怜悧な人と思はれ、源氏の君に何時までも忘られぬ人となつて居りまする夕顔の君は、少さい可愛らしい人らしく思はれますが、それ程深く人の氣に止まる人の樣でも御座いません。

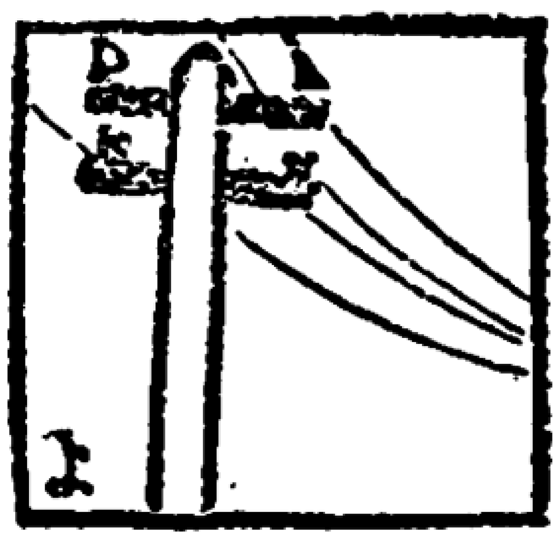
「源氏」の中でも宇治の宮だけは誰れにも打解けぬ人らしく、薄雲の女院は源氏の君とは親子といふ關係で居ながらも、殊更いとしいと思ふ心がほのめいて居りますが、それで居て惡いとも、にくいとも考へられませぬ、又大姫君が薫大將になびかぬは惡う思うて居るのではなく、心では大將を思ひながら、妹にゆづるあ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たりはよい事にしろ、わるいことにしろ同情のある女らしい書きぶりで御座います。
源氏の君に、懐かしい立派な人として出して御座いますが、源氏の君より尚なつかしい人は、女の方にあるかと思はれます。花散里なども女らしい心安くものの云へる方で、只なつかしい乳母などの樣な心持のする方で御座います。まあ下樣で申しますれば、もの云ひ附けるにも肩の張らない、取繕ふことのいらない人で御座います。六條の御息所はお氣の毒なといふ心か先に立つ方で、すべてのことに氣位が高く、自分では妬み心など少しも持たない氣で居ながら、世の中のことがとかくさう見えて、いつもいら〳〵して居た人であつたらうと思はれます。
又「大鏡」「今鏡」など繙いて特に目に付くのは、上東門院樣其他の后樣が、御自分の御妹子を次の帝に奉り、其次の帝に、又其御妹子といふ樣に、御一族が三代まで后にお立ち遊ばします例は尠う御座いませぬ。これは外戚の權威を張る上からは、他門に對しての誇で御座いませうが、母としてのお心に立ち入つて考へて見ましたら、どんなもので御座いませう。又それらの爲にながく御位に居給ふことの出來る帝も、次の御帝にお讓り遊ばさねばならぬ樣になるなど、これらのことは帝の御心にも決して御滿足では入らせられぬで御座いませう。又女御達も一代の帝に幾人となく或は左大臣家より、又は右大臣家よりと並び立てられ外面だけは綺麗にして居られても、其内輪では色々と御苦勞が多からうなどつい色々と考へられますので、古いものは一層面白う御座います。
其他讀みますものは近松物などの脚本集又は振事劇などで御座います。

讀書百遍、意自ら通ずとは古人も云つた、世の中が忙しくなつたから、同じ書を百遍も繰返して讀む人はなからう、併し、幾度讀んでも飽かないやうな書物を自己の爲に發見して、それに心醉する事の出來る人は實に愉快な世の中に活きてゐる人である。（一記者）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



女記者の地位

澤田撫松

△女記者は近頃世間から餘程注目されて來た、或者は之を羨み、或者は之を嘲笑し、或者は之を呪詛する。女記者は羨むべきものであらうか、嘲笑すべきものであらうか、呪詛すべきものであらうか。

△これ孰れも女記者の一面を見たる皮相の觀察に過ぎないのである、要するに女記者は決して羨むべきものでない、と同時に嘲笑すべきものでも又呪詛すべきものでもない。今女記者の生活狀態を世間に紹介して女記者に對する誤解を解き、併せて女記者の反省を促したいと思ふ。

△何故女記者が羨まれるかと言ふと、女記者は世間で優待される。假令それが記者としての恐持にしても、兎も角持てる、チヤホヤされる。これを見て虚榮心の強い女は記者と言ふものを非常によいものと思ひ、さてこそ羨むに至るのである。

△女記者を嘲笑する者は、女記者の無學なる點を笑ふのもある。女記者と言うてもピンからテンまであるから、一概には言はれないが、その多くが餘りに無學(記者として)なからである。女記者と言へば、社會の先覺者であるから、相當の學識を備へて居なければならぬのであるが、その割りに學問が淺薄で、思想が幼稚で、女記者で候と言ふ顔つきが馬鹿々々しく遂に嘲笑の目を以て之を見るに至るのである。

△女記者を呪詛する者の説を聞くに、女記者なんて、大きな面をして居ても、滿足な文章も書けないで唯無暗に高慢な顔をして、徒に人を輕蔑つて居る。そのく

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

せ自分は人の妾になつて居るものもあれば人の玩弄物となつて居る者もある。こんな者は女の廢物で、世の中の害物の一つであると言ふのである。

△女記者の優待るのは、眞に世間が尊敬するのでない記者として恐持に優待るのである。それを眞正に尊敬されて居ると思うて居るのは間違である、女記者の優待るのに今一つ理由があるそれは珍しいと言ふのである、女記者を以て女優の如く女辯士の如く、珍らしいものとして歡迎するのである。好奇心を以て之を迎へるのである。

△女記者の無學を罵る者があるが、これは少し酷である、新聞



村井吉兵衛氏の應接室

記者でも雜誌記者でも、凡そ記者にでもならうと言ふ人間は多く秩序的に學問をして居ない、天才的の人間が多きを占めて居る。假令秩序的に學問した者でも、今日の女子教育の機關ではさう深い學問の出來るものでない、從て女記者が如何なる問題に遭遇しても、直に之に適應すべき學問がないからとて、之を責めるのは酷と言はねばならぬ。

△殊に今日の女記者は、年齡の若いと言ふことゝ、容貌の美しいと言ふ二つの條件を具備して居なければならぬのであるから、之に向つて深い學問を要求するのは、要求する

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

方が無理である、女記者は二十歳前後の者が歡迎されるのであるから、斯る年少の婦人に向つて深い學問を要求するのは餘りに酷である。

△又女記者は高慢だと言ふがそれは、從來の女記者に適々高慢な女があつたのと、一つは女記者と言ふものが常に批評家の地位に立つて居るので、時に普通の女の如き謙遜と愛嬌を缺く場合があるので、自然誤解を招くに至つたのである。

△然し將來は知らぬこと、今までの女記者には非難すべき點のないではない。イヤ大に非難すべき點がある女記者として世に現れた最初の人、第一期生とでも言ふ人達は多く末路が悲慘である。と言ふのは節操と言ふことを、重く見て居なかつた爲めである。或者は戀愛を賣りあるいた、買手がないので遂に捨賣に安く賣つた。結果は買手に戀愛を蹂躙されて、今は孤獨哀れむべき身の上になつて居る。

△或者は自己の勢力を張らんが爲めに、その社の社長の玩弄物となり。虚名を獲んとしたのは反對に散々な不名譽を得て、再び社會に顔向けの出來ない日陰者になつて居る。

△或者は女記者としてチヤホヤされるのに乘じて、多くの異性と關係を結び、遂に狂的生涯を送る身となつて居る、又更に甚しき者に至つては天地容れざる大罪を犯して、絞首臺上の露と消えた者さへある。

△女記者の先輩とも言はれる者の殆ど總てが、斯う言ふ末路を遂げて居るから、女記者なる者が世間に誤解され、嘲笑され、呪詛されるのも强ち理由のないことでない。

△何故女記者の末路が斯くも悲慘であるか、女記者と言ふ者が何故斯るあさましい事をするか、これは大に研究すべき必要がある。

△これには種々原因もあらうが、要するに所謂第一期の女記者と言ふ人達は、女記者となつて斯う言ふ運命になつたと言ふよりも、斯る運命になるべき女が女記者になつたと言ふ方が適當であらうと思ふ。

△斯う言ふ女が女記者になつた當時は、女記者と言ふ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

者が少しも社會に認められて居ない。女記者のみでない女、職業　言ふものが殆ど認められて居なかつた。女教師や女醫でさへも珍らしいもの丶樣に思はれて居たのである。

△斯ゝ時に女記者にでもならうと言ふ女は、今時の女が女優になる位ゝ騒ぎではない、餘程思ひきつた考を持つた女でなければなれるもので無かつた。奇拔な突飛な女でなければ女記者にはなれなかつた。つまり女記者と言ふものが眞面目なものとは認められては居なかつたのである。

△女記者が眞面目なものと認められなかつた時代に女記者となつた女に、眞面目でない女の出たからとて騒ぐにも當るまい。然し時代の推移は何時までも基督教を切支丹とは言うては居ない。今日の社會では以前の如く、女記者を甚だしき珍物とはしない。完全なる敬意を拂うては居ないが、確に不眞面目なものとはして居ないことは分る。

△從て今日の女記者若くは今後の女記者を目して、昔日の女記者と同視するのは酷である。女記者の社會的地位が高まつて來ると同時に、女記者の人格も自然高まつて來ると思ふ。

△茲に於　問題となるのは女記者と言ふものは元來社會に必要なものであらうが、記者と言ふ職業は女の仕事として適當な職業であらうか、如何かと言ふことである。

△これまでの女記者と言ふものは珍物視されて居たのであるから、珍物として必要とされて居たのである。新聞社に於て女記者を雇入れるのも、一種の装飾として雇入れて居たのである、此時代に於ては装飾品たり珍物たるのであるから。有つてもよし、無くてもよしと言ふた樣な風で、無くてならぬものとはして居なかつた。

△女記者を装飾品として珍物として居た時代は、女記者の用途を知らなかつたのである。女記者自らも自己の立脚地を自覺して居なかつたのである從て此時代の女記者は、徒らにチヤホヤ言はれて身を誤る者が多か

つた。

△今日になつて見ると、女記者の用途も分明になつて來たし、女記者自らも自己の立脚地を自覺して來たから、これまでの樣にチヤホヤ言はれたからとて、うかうか身を誤る樣な者も少くなつたであらうと思ふ。

△女記者の活動すべき分野が明になつて來れば、女記者に女の職業として必ずしも不適當なものでない、然し其の職業の性質上餘程意思の堅固な女でないと終をよくすることが六ケ敷い。さなきだに誘惑の多い年少の女性が、最も誘惑の多い地位にたつのであるから、人間並の決心ではだめだ、人間以上の決心を以て節操を自ら守らねば清潔に身を持することは出來ない。

△次に女記者の文章はと言ふと、今日のところ能文の女記者は少ない。これまでの女記者の中で文章の書ける女と言へば、竹内政子（伊藤銀月の妻となり今は別れて獨身）外二三人位のもので、其他は名ばかりの記者、實際に筆を持たして記者らしい文章の書ける女は殆どない。

△敢て記者らしい文章と言ふ、全然文章が書けぬと言ふのではない。女の文章と言ふものは如何しても感情的になる。主觀的になる。ところが記者としての文章は多くの場合冷靜でなければならぬ。客觀的でなければならぬ。茲に於て女の文章は記者としての文章に適せないのである。此意味に於て記者らしい文章を書く女記者は少いと言ふのだ。

△それに女記者となる以上は、外交術に長じて居なければならぬ。現在女記者の仕事と言ふものは、書くべき材料は之を世間から取らねばならぬのであるから、それには如何しても外交が巧くなければ成功せぬのである。故に女記者たる者は外交術に長けて居なければならぬと言ふのである。

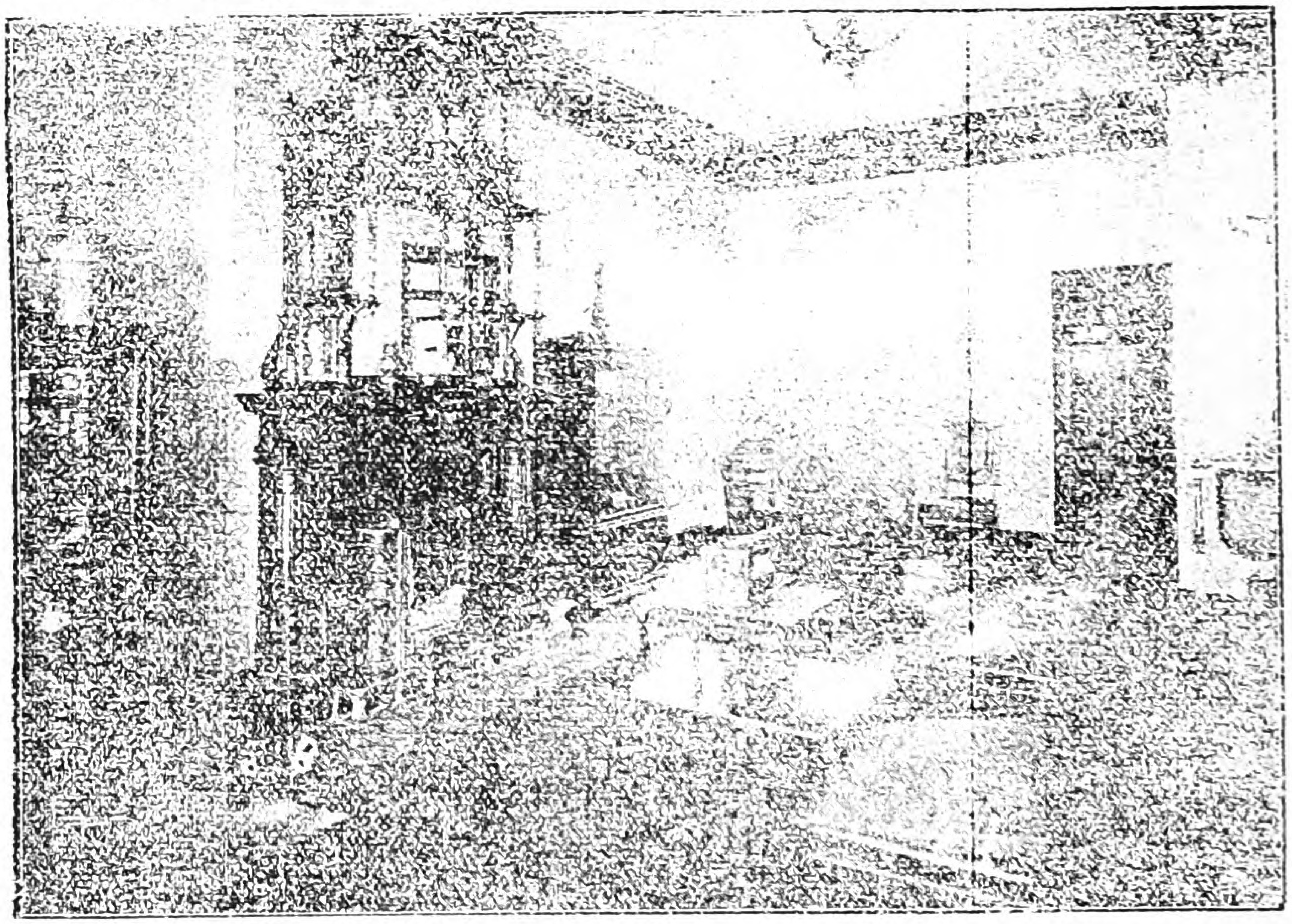
△外交上に成功せんとするには容貌、態度、服裝と言ふものが餘程關係する。容貌は總ての女の武器であるが、女記者に於て然る所以を痛切に感ずる。態度、服裝も亦同樣である。

△女記者は容貌に於て、態度に於て、人に快感を與へ

る資格があつて、そして可成の服装を有し、而かも艶麗なる筆と相當の學問を持つて居ねばならぬのである。

△これだけの資格があつたら何にも女記者にならずともよささうなものである、それも女記者と言ふものが非常に優遇されるなら兎も角も、目下の様な有様では以上の資格を具備したる者が女記者にならうと言ふには何か特別の理由がなければならぬ。

△故に、これ等の資格を全部備へた女が女記者を志望する様なことは容易にない、容貌が美しければ學問がないとか筆が健てば衣裳がないとか言



後藤勝造氏應接室

ふ様に、資格の揃はない者が多い、甚だしきに至つては資格の全部を備へないで女記者たらんとする者さへある。

△さて女記者の生活はと言ふと、今日の處なか〱門戸を張るだけの待遇は受けられぬ女醫、閨秀畫家、産婆、看護婦などよりは收入に於て劣つて居る、無論人にも依るが大體に於てさう言ふ傾向になつて居る。

△終に臨んで一言して置きたいことは、女記者と言ふものが、今日のところさう澤山需用のあるものでないから、斯う言ふ方面に志す者は前記の資格があつて、天才の女でな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ければならぬ。

△それから斯う言ふことは豫め心得て置かねばならぬ女記者は前にも言ふた通、冷靜でなければならぬから常に冷靜たるべく修養して居るのである、殊に記者生活をして居ると、人事の變調に接する機會が多い、而かも之に對して冷靜なる觀察を試みて居る爲め、自然に感情が荒んで來る。

△普通の女なれば觀て悲しみ、觀て悦び、觀て笑ふべき事柄でも、記者生活を長くした女は斯る場合にも冷靜な態度を失はないから、悲しまず、悦ばず、笑はないのである。容易に情が動かないのである。

△女記者を長くやつて居ると、斯う言ふ風に感情が荒んで、女らしいと言ふ點が全然なくなる、これは女として決して幸福な事ではなからうと思ふ。

△近頃雑誌に女記者の事をかれこれ言ふことが流行して居る様であるが、孰れも匿名の下に無責任の惡口を言ふのみである。故に私は署名して責任を明にして置く。

新刊紹介

少女パーク

瀬口白羊氏の著、曉發、ボードレース、蒔繪の櫛、玉蟲、崖下の町、おもちや箱、西比利亞の女、花畑、岐阜提灯、東海道線の諸篇を収めてある、大半は新作である、此前に出た『さくら月』の姉妹篇とも見るべく、少女の讀物としては氣品高く、何の篇にも若々しい氣分と、柔かい情緒が籠つてゐる、そして詩的なものと、教訓的なものとがある、文章は多年の經驗上、洗錬されたもので、今の少女諸君が摸範とするに恰好のものであらう、進んで止まぬ著者が心の産物として、此清新な書物を得たのは、少女諸君の爲にも欣ぶべき福音であらう（定價金四拾錢、本郷區本郷書院出版）

文話歌話

金子薫園氏の著、文章を作る心得になる話と、和歌を作る心得になる話を澤山集めてある、氏は和歌壇一方の雄鎭として多年の聲望を収めてゐる、近頃は和歌以外の散文或は批評にも其穩健なる蘊蓄を傾けてゐる、本書は其中でも文學初心者の爲に集めたものが多いやうに思ふ、別に『文章月令』と云ふものがある、評者は此種の文字に同好の趣味を持つてゐるので、尤もさきに讀んで感興を惹いた（定價金五拾錢神田表神保町大同館出版）

少女對話選

巌谷小波氏の作、新入生、ホームシツク、そら病、お留守番、仲よし、考へ物、偽幽靈の七篇を収めてある、所謂自分でやつて面白く、人が見てもおもしろい、そして其間に何ごとかを會得すると云ふ旨意に適つた對話である、少女の對話は餘り深い考や何かゞ含まれてると却つていけないが、輕妙にして、能く合點が出來、見て居る間にずん〳〵あたまへ入つてゆくものが好い、其意味に於て此等の諸作は皆實演に適すると思ふ（定價金八拾錢、神田南乗物町誠文館出版）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

盲人郷　しづか

（京都柳谷の別天地）

秋立ちて山には男郎花咲き、凋落の日の近きに、谷の姫百合憂ひ初むる頃、我が訪づれた參籠所の夕暮はきはめて寂しいものであつた、可成り嶮しい十八丁の峠路は峯と峯とのはざまを馳せ、百丈の谷の恐ろしい斷崖の上に極めて細くなり、更に山ふところを縫うて遂に麓の野に下る、そこよりは稲田と稲田にはさまつた單調な二里の道が、かすかに頽廢した向町の古驛につゞくばかり、山の人の下りて來ぬ限りは、山にどれ程の出來事があらうと、ふもとの里にすら知れ樣のない別世界、凡ての世から忘られ果てたこの山間には、二里の道を乘客ある時に限り通ふがた馬車の、淋しい何處か空虚なラッパの音すらひゞいては來ぬ、只草に鳴く虫の音、それと水の音、堂に上るは哀な多くの盲人らの專念に捧ぐる祈の聲、あゝその夕暮私は堂の横に立つてじつとその聲を聞いて居た、傷はしき物を好むと云ふにはあらねど、その悲愁の調子に魅せられて、知らず〳〵そこに立ちつくしたのである。一つに集つた多くの聲はたゞ上り行くばかり、低く靜に落つる時を知らぬ、私も又さむる時知らず聞きふける心に強い強い張りつめたある物が次第に漲る、瞼は熱く重かつた、祈れる盲人の、心には妻も親もなく子もない若きが胸にすらこのしばし戀人の影もさすまい、只大いなる自己救はれんとする大いなる自己あるばかり、多くの心はこの強い自我の觀念にはりみちて、相對するはゆたかなる慈相をもつて現じ給へる御佛のみ。この一時の強き心は何物にたとふべくもない、聲は次第に上り行くばかり、心はその聲に捕はれつゝ無意識にさ迷ひよつた赤土の斷崖の下に、雨除けも名ばかりな板屋根の蔭に奉納の黒髪がぎつしりと重なり合つてかかつて居るのを見いでた、永遠の暗がりより救はれて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

光明を得し女らの喜びに堪へで捧げた物であらう、二尺三尺冷な山の空氣をへだてゝ、その底にはつきりと讀まれる包み紙の文字は、昔めかしい御家ぶりもあり鶯堂風のうら優しいのもある、それに交りて辿々しい金針流は一そう哀をそへた、その中の一番上になつて居るまだつやくしい手に取らば香油の香ひの滴りさうなのには御禮廿二歳の女とあざやかに書き流されてあつた。根元を結へた水引の赤も金も新らしい、あゝ二十二は女ざかり、十代の女を花にたとへるならば、これはその眞赤な花にうすみどりの背景をそへた物、包み紙の下になほ長く垂れ下つた黒髮は、根元から切つたのではないかとうたがはれる、あゝ黒髮と光明と十六歳の女としたのはもう餘程古びてつやもなくかきかざして居る、五尺の黒髮は五分よりも一寸、一寸よりも二寸丈にくらぶる丈も長かれと祈る女心、落髮の一條にだに胸は騷ぐものを、悲哀の生んだ歡喜の大いさ、黒髮は惜しげもなく根元から絶ち去られた悲しい盲人の生涯にくらぶれば、容色の美などかへり見る暇はないかも知れぬ、その刹那私の目には若い女の傷ましい切髮姿がうかんだ、淋しげに見ゆれど心は喜びに耀いて居よう。ふと忍ぶ樣に夕暮の風が吹いてくると、黒髮は一すじ一すじ思ひくにさわぎだした二十二歳の女も動く、十六歳の女も動く、私は思はずぞつとして其處をはなれた、堂にはもう夕暮の勸行も終つたらしい、各々おぼえの場所の下駄をさぐる騷ぎも一しきり、やがて其處に現れた盲人達は三々五々手を引きつれて探りく石段を下りて行くと、木屋と玉屋の湯殿からすつと煙が立ち上る。

夕餉の後の祈りの時、私は法燈の影暗き堂の一隅に參籠の人々と等しく坐つて、今日開帳せられた觀世音をじつと仰いだ、あゝ千の手に千の眼を納めて立たせ給へる御姿は、年月の染ませた黒色に、尊くも古りさせて信仰淺き若い心にも只の木像とは思はれぬ、悲壯な祈りの聲は淋しい山の夜を、その哀な搖曳にふるはして、次第に高う上り行く、やがて百萬遍は操られ初めた、盲人だちの膝をめぐる珠數のひゞきに和して上る念佛の聲は、さながら潮の如くひしくと本尊をかこんで攻めよる樣である。いつしかに同化されて苦しくなつた胸を押さへつゝ、再び本尊の慈相を仰いだ時私は思はず涙ぐんだ、あゝ尊き半開の御眼は何時の昔からそのまゝなのだらうおだやかに結び給へる御唇は創造の日より今に到る迄倘とくる事なく一千の掌

に一千の眼を遠き昔より、永遠の未來に納めて、寂然と立つての黒光りする御佛は、かつて幾千幾百の掻き口說き、祈り上ぐる聲をきかれたであらう、祈る身の悲しみと、祈らるゝ身の苦しさと眉のあたりに重い惱みの雲の漂ふ樣におぼえて、私は思はず眼を伏せた、その瞬間純白の帳は下されたのであつた。

祈りが終ると、多くの法燈は次ぎ〳〵に消されて只須彌壇の一對だけが殘る、暗くなつた堂を下りて盲人たちは又夕暮の樣に手を引き連れて歸つて行く。



燈火をさゝぐる者はなけれど彼らに夜と晝との別ちはない、自づと雲を出た薄月がぼんやり道をてらして階に曳く影は長かつた、後のがぐ〳〵その影を踏んで下りる。

不自由な身を一人、參籠して暗き明暮を託しく送る五十日餘り、私達の見舞ふた人はなほいさゝかのしるしも見えぬのみかかへつてその精神は深く傷められて居るのであつた、今宵語る人ある嬉しさに、月光の流れ入る窓を背にして低い靜な、調子で話す、山に面白い歌がありますよ

と前おきして、玉屋に宿つて居る一人が作つたと云ふ歌を、小聲でかすかに歌つた。

『電氣瓦斯燈もあれど
　暗がり何としよ
私や觀音さんが拜みたい
　片目でも明けてほし
夜晝くらいね
　又洋燈に行き當りましたかね』

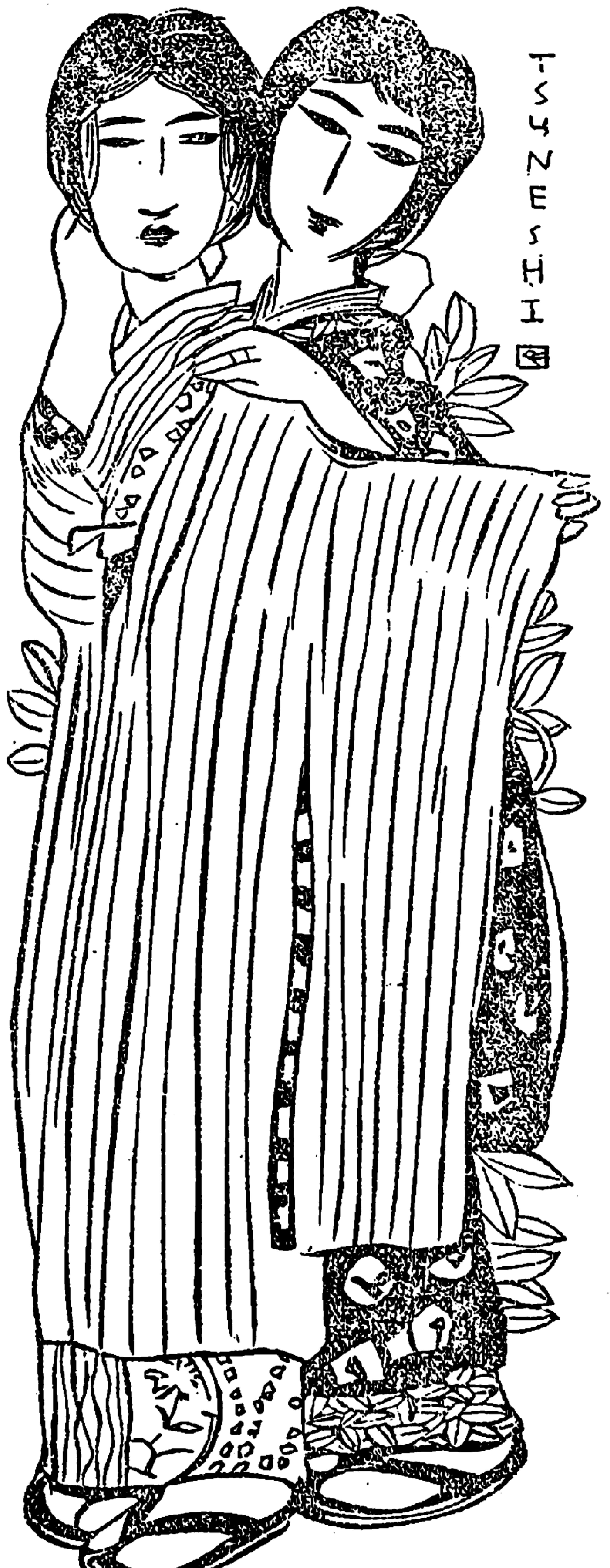
東雲の明けのかね………の節である。

折柄靜な邊りを破つて、滑らかな尺八の音が聞えて來た、この山間にこの音、參籠者ですかと聞けば、玉屋の息子だと云ふ、二軒の宿屋と、繪葉書や菓子賣る店と、洪水入れの竹筒ひさぐ店とを除いては坊の外、家と云ふ物を見ようとてもない山に來て、笛竹の音はおろか、歌と云ふ樣な物を聞かうとは思ひませんでしたと云へば、人はほゝ笑みながら。

初めの中こそ信仰の外何物もなく、晝は元より夜も更ける迄、山の底から湧き出づる刄物の樣に鋭い瀧の水に打たれて一心に祈り上ぐれ、半年立ち、一年立ち何のしるしも見えぬとなると、はりつめた一念もゆるむ、慰さめられざる悲しみは、次第に自暴に落ち入り初めて、山を下りても用なき身の、淋しい宿に身を横たへて日を送る、さすが三度の勸行にはつらなつて、正眼に復新らしい登山者や、次第に薄き光りそへて、しかし新しゆく幸運な友達と一しよに祈つても見る、しかし祈り果てゝ階を下り行く時、高い崖からつき落された樣にがつかりして、便りない足元に階の一つ一つを探りつゝ若きは思はず自棄になつて、悲しい追分の一節をながし行くもあり、昔人を惱ませた自慢の博多節を悲哀と追憶とに充ちて調子で歌ひ行くのもある。此處で歌ふ者は破れた人の中の又敗殘者ですと、語り終つて人は淋しく笑つた。

もう一つ山には歌が有りますと、又語をつぐ、坊に五十餘りの白痴の下男が居る、元は近江路のある太物問屋の番頭であつたとか、子飼ひからなり上つて十年一日の如く忠實に主家につかへて、三十にして酒の味を知らず、正直者律義者とうはさゝれて人にもあつく信用された、しかも一度誘はれて淺間しい遊所に足を踏み入れてからは、もう昔の人ではなかつた。正直な人は却つておち入り安い、彼は歩一歩極り知らぬ肉樂の巷へと落ちて行つた、奉公の身に遊里に捨つる金錢のあらう筈なく、惡いとは知りつゝつい主人

の帳じりに大きな穴を明けてしまつた。何時かは來るべき恐ろしい運命は案外早く彼をおそふた、事はあらはれたのである、或日主人の前に呼び付けられて罪をたゞされると、直ぐ一寸の隙もなく追ひ出だされて、はじめて我にかへつた彼は今更の樣に悔恨の涙にくれた、過去のしばらくの淺間しい己れをかへり見てはげしい苦痛に身を攻められる、幾度も人をもつて云ひ入れた佗言は遂にきかれなかつた、立つ



ても居てもあられぬ身となつて當もなく異郷にさ迷ひ出でた、人はもう自分を信じてはくれぬ、根が正直者の一途に思ひ攻めて、京の知己の下へさ迷ひよつた頃は、もう明らかな意識の鏡を失つて居た、哀とは思へどかうなつては救ひやうもない、知己の人々はこの山に坊の情けを賴んで、心靈のひゞき絶えたこの哀な骸ばかりの人を送つて來た、さうして彼は山の人となつたのである、朝から晩迄はゝきを握つて、はくと云ふ

よりも引き摺ると云ふ方が適切な、落葉やちりや、そんな物はかまはず、彼一流の掃除に廣い境内をうろ〳〵して日を暮す、誰が物を言ひかけても、にぶい眼を上げてじつと相手の顔を見つめるばかり、一言の答へもせぬ、折々犬などをつかまへて、何かわけの別らぬ事をくど〳〵云つて居る事があるとか。

殆無言の明暮に人もなく我もなく、過去を忘れ、現在を知らず、生くるともなき人の世の一隅になほ哀な面影をとゞめて居る、凡てみな忘却の中に葬り去られた空虚な今、不思議に彼は一つの歌をおぼえて居る。時と場所とを問はず折々だしぬけに

用もない門を二度三度

と斬りはなつた樣に歌ふ、只それだけ、その前をも歌はねば後も忘れたのであらう。

私は遣瀨ない哀愁にとらはれてじつと身動きもせずこの物語りを聞いて居た、人もやゝ語りつかれたらしい、つと立つて私は窓によつた、夜はもう餘程ふけて月影うすう水の音のみ高い、すぐ手のとゞきさうな向ひの峯は頂にならんだ一列の松のかげだけを夢の樣にあらはして跡はたゞ一樣にちゝ色の夜の帳に閉ぢられて居る、呼ばゝ聲は八方よりかへつて來やう、此處は重なる山のやゝ低地である、盲人たちはみな安らかに眠つたらしい、地上に人の聲らしいひゞきは絶えた木屋と玉屋の樹の間〳〵の窓の灯は淡く染めて、さながらそこに盲人らの淋しい夢を見る樣である、晝間あれ程高潮なひゞきを發した人々は極めてしづかに寢てしまつた、夢は戀しい故郷にも行かう、花やかな大都の方へもあこがれやう、暗き人のいとせめて安らかに物を見る夜の長かれと私はそゞろ心に祈つた。

我が立つ窓は高い崖の上である、下には柳の絲が更くる夜をあざやかに流れる、私はそこに立つたまゝ夜の明くるのを待ちたいと思つた。

昔から柳谷の名をきく毎に、自分には極めて緣遠い處の樣に思はれた、その人なくして再び行き得る處ではない。山の深き水の色、それよりも私の胸に忘れ難き感銘をとゞめたのは、そこにわびしく擴げられたさま〴〵な人生である。

あのけはしい峠を一念なればこそ上り行く盲人のやがて喜びか悲しみか、その何れかを抱いて下る時はあらう、しかし彼の白痴の下男は永遠に下りては來まい彼はもう上つた路をすら忘れ果てたであらう。

山の追懷は餘りに傷ましい物であつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

邂逅



小笠原貞

私は机の上に包を投げ出すと其儘そこに坐つて終つた、久らくじつとして居る内に、胸の動悸も鎮まつて身體が落つくと知らず〳〵輕い笑が頬に上つて來る。
と、今九段あたりを電車にゆられながら、私の事を思ひ浮べて居る男の姿が頭の中に浮んで來た。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

偶然！　私が日比谷で電車の來るのをボンヤリと待つて居ると、
「やへ子さん！」
耳もとから呼ばれると輕く肩をつゝかれた、振り返つて見ると私は思はず、
「マア」
と聲が出た、それは久らく逢はなかつた人なので。男はジッと私の顔を珍らしさうに眺めて、
「どちらに？」
「今、歸る所ですの、貴方は」
「僕、僕も歸りですが……」
とお互に顔を見合すと譯もなく笑つた。
男は小さな本包を抱へて、呂の無地鐵か何かの羽織を着て小ざつぱりした風をして居た、小一年逢はなかつた男の姿を私は懷かしい氣がしてまじ〳〵と眺めた
「貴女は牛込ですね、僕は本郷だが……」
と落ちつかぬ目をして電車の軋つて來るのを眺めて居たが、

「久らくでしたね！」

となつかしさうに改めて私の顔をしげ〲と眺めた

「エ、隨分御目にかゝりませんでしたわね、いつか一度は御宅にも上つて見やうとは存じてましたのですけれど」

と私は電車の人のたまりからさける樣に、後ずさりをしながら男に近よつた。

「僕も一度貴女の方へ行つて見樣と思つてたのですが……今日は好い所で逢ひましたね」

二人は知らず〱人込から離れて電車からは反對の方に歩き出した。

「日比谷でも少し歩いて見ませんか、久しぶりで」

「エ、、宜うございますが、ほんとに久しぶりでしたわね」

二人は、ちやうど役所のひける時分なので同じ樣な洋服姿の勤め人の、せわしさうに通つてゆく公園の小路を緩くり歩いて行つた。

公園の景色は、もうすつかり秋の思ひが滿ちて來た、一と塊の緑葉の花壇には、刺戟の強い西洋の草花が盛んに咲き並んで居る。葉鷄頭は西日をうけて眞紅に燃えてゐる、樫や樅の木にはオルトラの影が一層深くなつた。私は始終男により添つて歩いた。

久らく思ひ浮びもしなかつた男の姿を、珍らしい樣な氣がするので、私はちよい〱盜見をした見た、そして以前とあまり樣子の變つて居ぬ後姿を見ると、つひ彼の時の事などが思ひ出される、私は今の男の胸の中を割つて見ぬいてやり度い樣な氣がした。で、

「奥樣はお變りでございませんか」

私は不意にかう云つて男の顔をそつと見た。

「エ、相變らず……」

と男は一寸どぎまぎして、間の惡るさうに云つたが其で何氣ない風を裝つて美しく夕もやの立ちそめた遠くの木立を眺めた。

二人は花壇の中を靜かにあちこちと歩いて居る内にいつか小砂利の敷きつめた路に出た。其所は音樂堂の前であつた、四角な小さな立札があつて、音樂の日取りが記るされてある、二人は立止まつて、

「五、六、十、十一、第一日曜、第三日曜、午後三時半より五時迄……」

とから讀んで見た、そして私は

「貴方、近頃此所に入らつしやいまして？」

と聞いた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「いゝえ、僕はもう近頃は忙しくつていつ來た儘だか」
「あら、さうですの、私ね、もう先大野さんと御一所に參つて見ましたの」
「エ、大野と一所に！さうですか」

と云つたが、男は一寸だしぬかれた様な不快さうな顔をした、好い氣持はしないらしかつた。

二人はまた萩の澤山群になつて咲いて居る植込の中に入つて行つた、夕日は二人の半身を黄色く明く照らして、手に持つたコバルトの洋傘が、輕い色に顔に映つた。フト私は、「松井さ



んね、彼の方は其後どうなさいましたでせう」と胸に浮んで來た男の事をきいて見た。
「松井ですか、さア僕も久しく消息をきゝませんが、何んでも横濱の物産會社か何かに入つてるさうです、彼の男の事だから惡い事はないでせう、どうせ僕等とは違ふんだから」

私は褄先を見つめながら歩いて居る内に、此男が足繁く私の家に來る時分、同じ様に來て居た美しい顔をしたハイカラな松井さんの顔が胸に浮んで來た。皆が惡口許り云つて罵つて居るけれど

私はあの美しい顔を見たゞけでも、憎む心は起らなかつた。憎めない許りでなく、私はいつもあの涼しい目に引つけられて居た、こんな卑しい男と思ひながらも一緒に歩いたり話しをしたりするのが、ほんたうに嬉れしかつた。今かうして歩いて居る男よりは、松井さんの方がどんなに好きだつたらう。

「大野は此頃貴女の家に行きますか」

男の聲に、松井さんの白い顏は消えて終つた——男は索る樣な目つきをして、私を見て居た。

「いゝえ、此頃はあまり入らしやいませんわ」

「久しぶりですね、かうして二人で歩くのは」

男は感慨に堪へない樣な調子に云つて、考へ込んだ

私は默つて居ると、

「貴女は過去の事なんか思ふ事がありますか」

「私、過去の事なんぞ思つた事はありません」

と私は男に迫られた樣な氣がしたので、打はらう樣に強く云ひはなつた、しばらく二人は默つて終つた、

私は二人の間に言葉が絶えると急に心がいら立つて來る樣に思はれた、お互に默し合つて居る時の方が、二人の心ははげしくものを云ひ合つて居る樣な氣がして胸が浪立つを覺えた、男と歩いて居る快い感じよりも、暗默の心の對話が恐しい樣で、何となく男から逃れて終ひ度い樣な氣がして、たまらなくなつた。でも何處か朴直な男らしい肉聲をきいて居る間は、さすがに心は平穩であつた。

「さう云へば金澤ね、彼は貴女も知つてませう」

「エ、知つて居りますとも」

「彼奴がね、此頃は濱町邊りに夢中になつて通つてるんですとさ」

「マア彼の方が……あんな野暮な方でしたのに」

「先達一寸訪ねて見ましたがね、やはり居ませんでした、マアザーがひどく心配してましてね」

「それはさうでせうね、お母樣は御氣の毒ですわね、でも若い方ですもの、仕方がありませんわね」

「此間も二人連名で葉書なんかよこすんですよ、侮辱してるじやありませんか」

男は笑ひながらこんな事を云つた。

「まア」

私も笑つた、そして傍の柔かな葉の濃んだ尖が、ポツチリ白んで來たコスモスをソツと眺めた。

「もうコスモスが咲くんですわね」と云つたが、男は一寸目を上げたゞけで、別に返事もしなかつた、そし

て何か考へて居る風であつたが、
「貴女はいつ見ても若い人ですね」
と男は情の深い目色をして私の顔をジッと見た、私の心を促す様に見えた。
「いやですよ、そんなに冷やかしては」
私はわざと男の目から避ける様にして男の言葉を茶化して云つた。
「貴女の様な美しい人は幸福です」
「男は眞面目な沈んだ聲で云つて、深い吐息をした。
其を聽くと私までが何となく情けない、やる瀬ない氣持がして來て默つてコスモスを眺めた、そしてわけもなく胸の動悸許りが烈しく打つて來た。
少し行くと小路は終になつて、ちやうど內幸町の入口の所に出た、私はそてから駈け出し度い程に思つた。



「では……」
と不意に男の傍から離れた。
「如何したんです」
男はひどく驚いた樣な顏をして目を見張つた。
「如何もしやしないんですけど、もう遲いんですもの」
「だつて未だ明るいじやありませんか、じやア彼方の入口まで戾りませんか、その方が電車の都合もいゝでせうし」
男は如何にもして引止めたい樣な風をした。
「だつて……同じ事ですわ」
「僕の家に一所に行きません、エ、歸りは送つて上げますから、エやへ子さん」
男は早口に云つて、また私の傍に近よつた。
「有難う、まア今日はこれで御別にいたしませう」
男は餘義なげに默つてつッ立つて居る。

「ね、今度上りますわ、きつとよ、其時まで御一所に步きませう」

私は媚る樣に男をジッと見上げた、そして

「貴方こそ入らつしやいよ、お待ちしてますよ……では左樣なら、奧樣に宜しく」

と男の返事を待たずに、おひかぶせる樣に私は云つた。

「さうですか、じやア左樣なら、御母さんに宜しく……

……其内に御目にかゝりませうね、きつと！」

男は念を押す樣に云つた。

「エヽ、近い内に上りますわ、左樣なら」

男は未練らしく、ジッと私を眺めて居る、私は小走りに駈出したが男が後からいつまでも執念く見送つて居る樣な氣がしたので、振り返りもしず來合した電車に急いで入つて終つた。

私は電車から下りた後も、何となく男があとの電車でゝもおひかけて來る樣な氣がされて、セッセと息をはづませて、家に歸つて來た、そして机の前にベッタリ坐つてホッと安心した。其でも未だ暫くの間は男の聲が耳について居た。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

今日しきりになつかしさうにした男は今どんな心で居るのだらう、別れる時もし人目が無かつたら、私を抱き止めたかも知れない。

私だつても何となく縋り度い樣な氣持がしたのだけれど、考へて見ると、やはり二人は是きり近よらない方が好い樣な氣がする。

長い月日の隔つた彼の時の前後の事などは、もう忘れて終つたけれど、たゞ美しい柔らかな手觸りの思出が、ちやうど霧を透して見る人影の樣に淡く白く私の胸に殘つて居る。

二人の感情が高調にはりつめられて、二ツの心が溶け合つて夢に迷つた樣なキス。女の長い睫毛の樣な草がサラ／＼顏の近くに光つて居た。澄み渡つた青空に初夏の淡紅色の雲がしきりに南へ流れて居た。

私はしまつておいた人形を取り出して、ソッと抱いて見る樣なつかしい氣持で、過去の二人の姿を眺めた。だが私は今また同じ事をくり返さうとは思はぬ、たゞあの美しい思出許りはいつまでも亡ぼさず若々しいやさしい姿のまゝ胸の中に殘して置き度い、そして永久に二人だけの間の所有として眺めたい。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

山より山(つゞき)

平塚白百合

△下山

午後五時――いよ〱下山、山頂より一歩下らんとして覺えず嚴粛に襟を正した。烈風はなほ吹きやまぬ、然れど音もなく暮れゆく下界の靜けさ、遙か、遙か下界の方に、チラ〱と個々の灯火が見える、御殿場の街であらう。

おもむろに一歩をめぐらせば内院穴の白雪はかくれた、遂に七合五勺についた、宿主は夜行ときいて强ひてとめた、けれど私は輿にのつてゐた。

引とむる袖はらつて砂走りにかゝれば、もう無人の境である。かへり見れど室は見えず、くれのこる夕ばえの色は、茫として夢のやうなあかるみを漂はせてゐる。サク〱とやわらかな沙に膝を埋める音!

山頂のあかるみもいつかとぢられて、星多き初秋の夜を、跳るやうに私の足はとめどなく砂をはしつた。

三合で提灯を買ふ。道しるべとした捨草鞋も少なくなつて深林に迷ふときいたので。――提灯はうりものではないが、貸さぬので買ふことにした。

小さい提灯には紫色の富士と、紅い菊が畫がいてある。おぼつかない提灯の光は一行の足元を僅にてらし、くらい闇夜に木立ちが高い。

大野原に下りついたころは風のこゑもなく、山は靜かに、柩の中に眠つてゐるやうである。狂亂の後の水底のやうである。S様は解剖學の話しを初めた。それが信仰論にうつり、文學に移り、いつか足拍子に合せて歌がうたはれた。

麓には蟲がしきりになきしきつてゐる。花の香がやわらかき唇のふるふやうにふれる。

にぶい灯のつらなつた御殿場についたのは午前の二時。ふもとは雨があつたと見えて道がぬかつてゐた。S様とK様は三時の夜行で西行する。昨日逢つて今日分れて、短かい間であつたけれど。

△アメリカ村の棒杭

御殿場の宿の夢は僅うと〱する間にやぶられた。

朝出の馬のいなゝきがする。人聲がする。宿の戸を押して西望すれど浮雲いたづらに多くして富士の姿は見えなかつた。

勘定書をとつて初めて所有金をしらべてみた。あますは僅に五圓なにがし。

箱根登攀は斷念しやうか、かうも思つたけれど元より無錢旅行のつもりであつたのだ。斷行しませうと私は云ふ。九時茶代を置かないので逃げるやうに出た。そうして双眼鏡とスクールバツクをのこす外一まとめにして郵便局にたのんだ。こゝで十八錢とられる。

身がるになつたので、線路を横切つて、稻の葉の青い香の中を心ゆくかぎりかぎながら行く。

八月の朝の日は華々しく張つて浮雲も散り、箱根翠黛の山嶽は、青一碧の初秋空ににほはしく裾をたゝんで、不規律なふもとの松林が黒斑をにじませてゐる。

右うばこ道、左アメリカ村、かうした棒杭が松林の三角辻に立てゐる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

右にとつて、やゝほてり出した田舎道を行く。夫は宿をあはてゝ出たので足袋を忘れてしまつた。二三軒物うり屋をたづねて漸々、破れたハダシ足袋を得た。蔵でみのついた赤毛のせは目に落ち付のない氣狂ひしやすいものだつたので恐ろしかつた。

一丁も行くとにぎやかに洋人の一家族が秋草をたわゝに抱へて山の方からアメリカ村へとさゞめきながら歸つて行く。

林をはづれると夏草の丈のびた箱根の裾野は、ちがやが肩をぬく高さに、銀のやうな花はハラ〳〵と亂水を打つてをのゝいてゐる。

低音く水草のうたふ小屋の表に、色さめた女の湯まきがゆらめいてゐる。松林中にかゞやきある銀光は小さき東山湖である。

行程六里の處女峠は梯のやうによするものをふせぎ止めて、帶程の道は度々の雨に流されて川底のやう、水流も替つてゐた。

ちがや原が秋草をまじへた輕い傾斜になつて行くと、直射する日光は雜草しかない山路にいきれるやうに熱氣をふく。汗はしと〳〵とにじみ出る。

輕快に馬を馭した若き男が五人、緑波のやうな麓野をわけてのぼつてくる。雪白の服にゆらめく茅がやの銀のひらめき。それは宮の下へ越す學習院の殿原達であつた。

△ノートに押花

それがちがやの中を靜かにのぼつてゆく。

私はよき傳手を得たと思つた。道が二方あるひは三方に分れるとき、必ず蹄の跡に注目して心やすく無人境のやうな山をのぼつた。さうして花のいろ〳〵を押した。百合はあまり大きいので端口がはみ出してゐる。右手の神山から左の山へ新道工事の人足が七八人切石をたゝいてゐる。

森とした山中にこの音から遠ざかると谷川の水の響がかよつてくる。石底の透き通つた水は岩に蹊した身に涼しいけれど、思つた程の涼味をあぢはへない、水には一種のくせがあつた。

よほど高くなつたと思つた時見下すと、ふもとの東山湖は藍壺のやうに緑一色の中にぬけて、つらなる富士の裾野の小屋や松原や、鮮明な空氣にハツキリと、白壁の家があざやかだ。

富岳はたなびく白雲の中に嶺を收めて見えぬ。

神山の頂をくもらしてゐた雲がとけ初めて忽ちのうちに煙のやうに霧がとぶ。またゝく間に眼界はとぢられてしまつた。けれど日は霧の中を黄色にほとばしつて、たえず霧は動く。私はのがれてのぼりつゞけた。

頂上についた時、霧はやつぱり山肌に境界線を引いて下方は白煙のやうに茫として、動かなかつた。

そのうちに霧はあとじさりを初めた。紫の花、黄の花、赤い花、ポツポツと霧に引のこされた花の面は露がきらめきわたつて濡れてゐる。

△處女峠の展望

はつきりと霧はれつくした裾野の展望は、武藏平原に住こふものゝ思ひ及ばぬ大きいものである。そして清淨な境である。

花野につゞく富岳山麓の全景は、私の瞳に不滅の印象を殘した。閃々とひらめきわたるちがやの銀の花、つゞいて緑の若やぐ色は稻田だ。松林や、里や、村や。

私は瞳をだん〳〵上げて紫黒色の富士山頂をきはめやうとたどつた。兩肩にコバルトのあかるい初秋の空をのこす外は前面悉くが富士の山容である。さうしてあふむいてあふいだ山頂は私の見きゝしたそれの及びもつかぬ高さであつた。私は峠の絶頂に立つたことを忘れてしまひさう

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

だ。相對して見ればあまりに富岳は偉大きい。あまりに高い。登攀のたやすくなかつたのも思ひ出でられる。

昨日の今頃は山頂にのぼり得て、私は湧きいづる心の微動にほゝゑみを禁じ得なかつたときであらう。あく事なく見入つた。山道には私の心の足形がある、不朽に――。

頂上の僅かな平地には古びた茶店があつた。ビールとラムネとサイダーのペーパーが煤びて、棚にギツシリ並ばつた瓶に、庇からさし込む光りが淋しさうに光つてゐた。

乾いた咽喉をサイダーさうるほさうかと思つたけれど淋しいふところを思つてあきらめた。

道の兩側には木苺が白い花を開いて澤山赤い實をもつてゐる。私は爪切つて喰べた。

△山　籠

もたれ合つたやうな箱根連山のとりまいた底のちがやを分けて役者らしい男と、髮のふさやかな女とが、山かごにゆられて、ゆさ〱とのぼつて來た。私は底の方へと下つた。

山の陰になつたせいか日はトツプリくれて行くけれど家は一軒もない漸々仙石村に入つて姥子道を訪ねた。

敎へられて蘆の湖尻りの早川の橋上に馬方は導いて、これからの道は肩をぬく程のやぶである、一二度通つたものでも山道はおぼつかない。かう云つてズン〱左手に行つてしまふ。日はもう落ち方になつた。六里の道に私の足はいたみ出してゐる。けれど默して再びもどつてきくと牧場をまはる道があるといふ。けれどこれから四里、人家もなく道は幾すぢにもなつて混亂してゐるといふ。私は泣きたくなつた。それに中食を拔いてゐる。

宮の下道とかいた村役場の立札をたよりに廢驛のがうンとした大きな家並を下ると、果物店に色好いものが並んでゐる。姥子湯を斷念して宮の下へ下るのだ。

道をたづねて雜貨店に立つと、歸省した若人をつれて其家の父子が仙石湯に行くといふ。私達は懷中を氣づかひながら半里ときいたそこへ話しながら竹藪を切りひらいた道を行くけれど、谷川の音が竹藪や雜草の危險を包んでゐる中になつてゐる。湯場らしいものは見えぬ。私は五十あまりの人にたづねた。

もう半里は來た筈ですが。

半里はもう來ましたなー、もう半里、仙石から湯場近らくな一里でさあ。

半里ときいて進まぬ足を力づけて來たものを、私は勞れが一時に出てしまつた。行くべきであらうか、かへるべきであらうかどちらにしても山中の竹藪道である。私の足はあせつても動かなくなつた。もう日は落ちてしまつてゐる。

夫は背負ふかときかれる。私は頭をふつて夫の腕にすがりながら金剛杖を僅に力にした。けれどそれも一丁とつゞかぬ。いなむ私を背にして五十路の人は日和下駄でさつさと山路を行く、動かぬ身はどうする事も出來なかつた。さうして人のなさけの背に心ぐるしいながら十四五年ぶりで負はれて行つた。

△仙石の湯場

川ぞひらしい道は次第に下つた。山の色も黑くしか見えぬ。そこに只一軒の宿は見出されたのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

山中の一つ家、それは昔榮えた湯場の跡らしい。川鳴りの音と、湯のしたゝる音と、柱がゆがんでゐるせいか襖の間を猫がぬけ通つてくる。それでも室は二三十あらう、廊下もくぼんで木の色はビンロウ樹のやうだ、村へも里へも小一里をへだてた湯にも七八の人は宿つてゐた。こゝには箱根の湯場らしいかげも見えない。七時半に夕食をして、人心地になつた、私は壁にすがり戸に倚り湯殿に下りた。天井はやぶれて、それでも湯槽は廣かつた。ハリ窓の外には草木のざわめく音が水勢のやうに湯殿をかこんで、角ランプの灯がくらい。私はぬるい方へのび〳〵とは入つた。硫黄の香はうつすらと鼻をつく。男湯には私を背負つた人が酒屋をたくみに語つてゐる。

床についたころ五十路の人はまた闇夜を一里仙石にかへると云つて、無理を通さず一日保養せよと云つて出て行つた。竹原はさぞ風がさわいでゐる事だらう。

◎いよ〳〵無錢

痛む足を抱へるやうにしてねたがいつか心よくね入つてしまつた。戸ざさぬ室にはもう朝の光りが障子に一面躍つてゐる。私はしづかに床の上にすわつた。ふくら脛が非常に重く、いたい。

私は一日此處に休養したい。かう思つたけれど宮の下まで出なければ電報も打てない。金がないのだ。

勘定すると東京迄の汽車賃や電車賃を引いて、七十錢しか餘裕がなかつた。

七十錢では箱根山中、此處でも一人の中食がやつとであらう、思ひ切つて茶代に加へて出してしまつた。

もう無一物といつてもよい。今日も中食を拔かねばならぬ。さうして箱根の街を四里湯元迄下るのだ。

木賀、塔の澤、宮の下、せまい谷間に開かれた温泉街の華奢な空氣を後に見て、ずん〳〵山を下つた。

秋の花を束ねて持つ馬上の西洋婦人も見た、瀧の水も呑んだ。

いつか名刺入の懷中鏡を落してゐた。

國府津から汽車に乘つた。

神奈川からは電車。

かうして品海の波を見、東京についたのは四時〇分。

ほこりくさい都の中にふたゝび電車にのつた。

ふと袖を引かれて見ると賃金が五厘不足だといふ。

乾いた沙を捲いてくる風がすさまじいけれど、やむなく電車を下りた私は初めて土を見て歩いた。道には五厘の銅貨一つ落ちてゐぬ。私はこんなに痛切に金錢の尊さを感じた事はない。

ほこりを立てながら水まき車は水をこぼしてゆく。

つかれた足でトボ〳〵と高輪の街を歩いた。

金剛杖と、くたれた袴と、わらぢばきと、都會に容れられぬ異裝は人目を引いたらしい。

知人を訪ねに彷徨する私達の背から、塵埃をあびせて、夕日が紅くよわい光りを投げてゐる。

――をはり――

市街の繪葉書を贈られたる諸孃に

嘗て私が希望した全國の市、町、村、市街の繪葉書を贈られたる諸孃に申上ます、何うも澤山御寄贈下さいまして有りがたう、早速お返事の繪葉書を出す筈が、忙中大いに延滯して相濟みません後れ序に新年まで待つて頂きまして、お返しに私の年賀狀、それは特に面白い（と云ふと自慢になりますから內々で）ものを差上ます、御禮かた〴〵一寸お斷りをして置きます

十二月　河井醉茗

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『娘時代』の批評

譽田順子

其一

△本鄕の兄、（前島ゆり子）

何處までも女らしい、柔い、情が、ふと〻細く全篇に流れてゐる、讀み初めたら中途で措く事のできない、何かしら、懷かしい樣な心持を誘ひ出される、それに、私は此方の創作する、態度が好きだ、あはてない落ちついた、眞似ない、何處までも自分の力で徐々と進んで行かれる着々と功を收めてゆく忠實な、弄ばない態度が好きである。一寸讀むと、何とも無い樣に書き流してある樣に思はれるが、實によく、部分、部分に氣の利いた、實際に觀眞實の感（女の）が、しつくり羨しい程、氣持好く出てゐる。「お久米さん什麼したんでせうネ……。」取次で待ちあぐんだお芳が、臺所へ來て話して居る中に、ふと、車夫の聲を聞いて驅け出た處など一寸好いと思つた、それからあのお久米がお世辭を並べてるとこなど、私は實に嬉しかつた。顏は出しては居ないが、武兄さんも健二をも想はずには居られないぢや無いか。殊に母の心など。此人にもう少し强い氣分を？と云ふのは間違つてるかしら、然し自分は、もう少し强くつこんでほしい物がある樣な氣がする、女らしいとは云へ、量の震動の足りない處がある樣に愚考するのである。

△お奈津（さかえ）

お奈津と云ふ女の空氣が、無意識の中の努力と云ふ樣な樣をして可成鋭く（此鋭いと云ふのは濕ひを持つた鋭さだ）出てゐる、質屋の店でスパ〳〵煙草のんでる處など好い、終りをホツとして投げた樣に思はれるがどうかしら、此方の筆は、かうした物を書くのに合つてるらしい、輕く淺い。

△伯母（鐡子）

なか〳〵面白い好い處を押へてゐるが、妙な、きゆうつくな態度を取つたものだ、もつと大きく自然本位の態度で描いたらきつと、一、二等より、ずつと深く、大きい立派な見榮のする、强い物ができたに相違ないと思ふ、私は此人の筆には、いつも痛い骨子がある樣で好きだ、しんがあるのだ、益々努力せられたい。鋭く突貫して頂きたい。

△海水浴場の女（ちづ子）　藝術品としてみるには餘りに淺い、品が無い、初舞臺もさうである、樂に讀めば面白い達者な筆だ。

△最後の日（月見草）　キビ〳〵した筆だ、然し、自分の理想的人物を描いてみせたのに過ぎぬらしい。頭の中の小說だ。以上創作

△夢二式の眼　千代子樣でせう？とすると、どうやら奥樣に成り樣が早い樣にも思ふが、違ないらしい、こんな奥樣を持つた人は幸だ少くとも。懷疑派に囚はれてらしたのは、滑稽だ、氣まぐれた、到底此方は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

そんな深刻な氣分の人ぢや無い、永へに華かにお在せ、祝福する。

△薄明(港の女)　此方覆面女、と云ふ方と違ふかしら、詩人だ、詩人の筆だ、誇張した詩人の筆だ。

△火影(若杉資子)　ピリ、ピリ、と強く恐しい骨がとんがつてる樣だ若い女の思想家と云ふもの、こゝらあたりがをちなんだらうか。之が此方の事業なのか、此方きつと、また、また、突き進むのだらう、悟るだらう、何處まで行くのか、一生行つても行場は詰まらないに違ひない、暗い、重い露西亞邊りへ去るかも知れぬ。圓くをさまつては居られない人だ。内生活と周圍(足)との調和を最も強く感ずる人だ。

△白き手の謀叛者(望月野はら)　若い女の斷面した神經の、落ちついた血の色!?

　K樣、又貴女に筆とりました――、あれ以下に自分の心は引かれた、何かしら此人と語つた後のしみ〴〵とした軟い疲れと、云ふ樣な懷かしい氣分を覺えた、さうして幾度か繰り返し讀んだのである、個性が一層強烈に(鋭く)なつたら、人の云ふ、悲劇が、演出――表はるゝであらう然しいつ迄ジッとしてゐらつしやるでせうか兇惡な時は進んで參ります否、貴女はそれを待つておゐでゞせうか、お起ちになるのは其時と仰言る!?

△大阪より(やへ子)　此方は餘程落ちついてゐる、悟つてゐらつしやる。(淋しさが追つかけるやうだけれどうちへはまだ橋を二つ渡らねばならぬ)私も、かう云つた、房子さん、鈴木房子さんを思ひ出した、たしかうつしゐも出てらした事があつたつけ。もう奥樣かも知れない。

△破れたる友情(初鹿野道子)　健筆、此方は溫い美しい空氣に包まれて、何の足らはぬ思も持たずスク〳〵とすこやかに人となられた、美しい品高き君である。私は讀み終つて、あの健かな文字を追うて情を追うて行つて、かう思ふたゞけであつた、私には何の興味とか何とか云ふものはありやう筈が無いのだ、然したゞ、私は此方を尊敬する、謹んで。

△若きやすらひ(ひさくら)　美子樣である、勝つ、敗けるは第二として、果してよくお鬪ひ遊ばすか!?私は此方にそれだけの力があるとは、どうも思はれない。

△月の出るまで(かほね)　なだらかに書けてゐる、丁度あの、夜霧の淡い河面を何の音もせず赤い灯の流れてゆく樣な、淡い優しい悲しみと、愛とを殘して――。

△面白い月日△十六になつた娘心△生きた人形△親族壓制　かうした物は、いづれ劣らぬ、いや、品は變らぬ桃、ぼたん、とでも云ふ樣なものだ、私の樣に色の黃黑い眉をしかめた氣の利かぬ女はとてもお傍に寄付けさうもないが、それだけ私には、其輕口や表情や媚態や、がいたづらに燥がしくあつかましくつて耐まらぬ、筆と云ふもの、矢張り若い時の比較的張合のある、名譽心の伴ふたおもちやですかねえ!?。いや、いや、まあ永へに華かに在せ、平凡な華かさに生きられる、甘へられる人程幸福な人はありませんからね、氣にする必要はありませんよ

△現實から離れたい(ふさ子)　うすつぺらな形式的教育者のお前に謹んで捧呈する!是非一讀を乞ふ。

△讀過たゞ絕望の鈍痛に止つてゐるだけでは、物足りぬ、と痛切に思ふた、まだ〳〵門出はこれからと云ふのでせう。其夜、自分は、二時三時四時、遂に眠られなかつた、幽かに興奮した神經は、可成空想を走らしてゐた。胸に手を置いてジッと見詰めた天井は、決して、決して闇くは無かつた、其中に、ぢゝ其中に、あの、重く沈んだ、深い力のひそんだ望月樣の、お瞳がジッと、沈んでゐた。今も思うてゐる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其二

加藤白光女

本郷の兄。　第一は器用に書けてゐる。餘情を含んで、しつとりとした味はある。併し小刻みで全體からみると、何となしに見榮がしない。一人稱の場合はこれでもよいが、三人稱となると、もう器用ばかりでは昔けない。部分〳〵の描寫は巧い、殊に終りの方にいつて、敍景と人物の調和がよくとれてゐて、少しの隙もない。まづやはり第一位であらう猶言つておきたいことは、背景の兄なる人物がやゝ不明瞭であるといふことで、又お久米といふ女などはことさら出す必要も大してあるまいと思ふ、それだけの暇に、この事件の背景をふつくりと表して欲しかつた要するに、小主觀にとらはれないことゝ、荒い筆をつかふことゝを心掛けて貰ひたい。器用な人は、とかく小刀細工で大きいところに目が屆かない、せゝこましくなるものである。私はこの作者の未來を待つ。

お奈津。　これも、すら〳〵と書いてある。そしてあくぬけがしてゐる。才の人らしい。一讀して、周圍の空氣といふものが出てゐないのに心附く。しかし、主人公のお奈津の心持ちは先づ含かれる。おぼろげながら覗ふことの出來る背景から推して、普通の女のまねの出來ないやうな「七つ屋へいつた時落しいだけのお金を出さなかつたら、居坐つて仕舞はなければ無爲さうすりや向ふで根負仕て出すから」といつた母親の言葉を思ひ出して、銀煙管を出して煙草をのむ、といふあたりがよく描けてあると思つた。別に新しいところもない。

伯母　筆は誰れより彼より達者だ。しかし如何かすると書きつ放しのところがある。そこら邊のお孃さんには皆けさうもない心持で洗ひざらした人間の金錢慾といふものがよく出てゐる。作者は大膽にと、心掛けてゐるらしいが、然し其れを表はす經路が不自然だと思ふ。怜悧者のお澤さんといつておいて、そのお澤が「私達の代になりますと、叔母さんに失禮ですけれどお詫りのお小使位はさし上げますよ」といふやうな、そんな簡單なものではあるまいと思ふ。

海水浴場の女。　前の伯母に筆致は似通つてゐる。かうした空氣の中にあつて、だん〴〵墮落して行く女の心持ちは相當に出てゐるけれど離れてものをみることが缺けてゐるので、深くつゝ込んだ所がない。

最後の日。　新しいやうにとは工夫してあるが、着想は古い。五六年前の短篇はよくかういふものをかいたけれど、もうこんな時代は過ぎた少くとも今の女は、こんな幼稚な復讎はしないと思ふ。

初舞臺　女優としての三枝子の心持ちがあまり、單純すぎる。素人芝居の初舞臺といつたやうで、新しい時代の女、藝術家といつた樣なところがない。もつと〳〵深い何物かを識者の前に展げなければならない筈である。と一言に貶して了へばそれ迄だが、しかし女優といふものを幾らなり表さうとした手際には感服する。

批評はしましても、さてなか〳〵書けないものです。「批評家は作家より一歩下である」と晶子先生の御言葉を思ひ出して苦笑しました

次は和歌にうつります。

秋に歌へる。

第一。終りの「青きもの透き通りたる呼吸を吐く凉しきころに月草の咲く」をよいと思ふ。八月のもよいとは思ふが餘り堅くなりすぎて、何となく情味がない。五首とも左樣いふ感じがする、智の勝た人であらう。

第二。これは自身のだから不完全なりにしておくが、「吾が胸の古家一つ一つづゝ毀ちゆく見ゆ夢なりしかな」の第五句は、かう直して下すつたので、元より原作は拙いとは思つたけれど、これでもどうも……。

第三。「秋來れば涙おほきをよろこびぬ悲しきなかに足らへる心」をとる。よいと思ふは第四番目の方だが上の句が何となしに調つてゐない。
第四。「柳みな物思ひぬ初秋の舟多き河うす明りして」が私はよいと思ふ。第一のなが月はは着想が新しくあるけれど、俳句の調子を脱してゐない。
第五。「ひとりねの枕つめたし加茂川の水の上より秋風たてば」が調つてゐる。いとつよきの方が、なだらかな調子ではあるけれど、着想が女としては好ましくない。
第六。「望月の大杯に美酒うけて醉ひ死ぬもよし戀さめぬ中」がまづ上の部であらう。しかし美酒といふ熟語と第五句の終りの中が何だか舌にさはる。
第七。からうじて「そのゝきて君を見んには我あまり弱かりしかな邪氣ありしかな」の一首。一體に散文調子だと思つた。
壹に歌へる。
第一。調子の上から「うるしの香まだ新しき枕して若き我身のゆくする思ふ」がよい。どれも調うてゐる。
第二。處女の誇りを歌ふたもの。言葉の使ひ方は拙くとも「十萬の世界に渡る春風ともわが肌よりうこきそめけん」が好ましい。
第三。この方には感じた。どれもく巧なうたひぶり「靜やかに心の上にあらはれて消えざりし秋とまたなれるかな」三ケ島樣と、原田樣とを併せたやう。
第四。「あやまちて母の言葉にさからひぬかつて一日はものうときしき。」
第五。秋となり思はれてある身はさみし山萩の夜をきりぐ〳〵すなく」水莊ではないけれど吉井勇氏を思ひ出した。
第六。「車前草の花つゝましやかに炎天に汗ばみ咲きぬ泣かまほしけれ」を取る。
第七。「海に似て霧の流ふ夜の都會うるむ灯をみて愁ひて歩む」を私はよいと思ふ。

歌は批評ではなくて、自分の好きなのを選んだにすぎません。なほ野に歌へる以下を略したことを御わびして置きます。終りに臨み、おこがましいことですが、讀んでゆく中何となく耳ざはりな熟してゐない言葉があります、やはり技巧も顧みて頂きたいものです、文法等も。

其三　月草女

(白き手の謀叛者)

しつとりと胸に浸み入る樣な作、此文を得て私はほんたうに嬉しかつた。娘時代と云ふ名のせいか何だか愛憐の樣な物許り多くて同じ名でも這麼に荒び切つた私の胸には何の響も與へて呉れるものが無かつたから

(火影)

矢張り此方のは何處か飛び離れて居る。筆がねれて居る許りでなくキビ〳〵して氣持がいゝ。一種の反抗心焦々した心持も頌かれた。

(見合の前)

可愛いゝ作以前の千代子樣式の甘つたるい何の穢れもない若い女の柔かい心持がソツクリと出て居る。

(現實から放れたい)

時代教育を受けた都育ちの娘の心は左も有らうと思つた、放縱な心よい作。

(たゝかいの跡)

何と云ふ強さであらう、「私は生きる、冷たい人となつて勝果ふせて見る」心の叫び、之が凡てを代表して居る。這麼強い君は醒めても進む道は廣からう。多くの群れか

ら飛び離れた現代の女、私は自分の弱さを笑はずには居られなかつた。獨りぼつちと云ふ感念は私と同じ樣でも、直ぐ涙の跡から反抗心がもちあげて來る、其處が違ふ、あゝ強き女は一面から見れば幸福である。

(面白い月日)

達者な筆付だと思つた。

(月の出るまで)

しんみりとした作、秋の雨の樣に寂しい乍らも讀んで居る間は苦しさも悲しさも忘れて、只、遣瀬ない懐しみが心の底に油然と浸み込むだのでした。

「逃げたくはなくつて?」「エヽ、何處へ」のあたり堪らなく好い。

(破れたる友情)

此方の作風は一風違つて居ると思つた。センチメンタルな英語澤山な近頃には珍らしい、美しい友情、全く人を戀ふのは幸ひだけれども、人に戀はれ樣とする悶えが其處に來るらしい。

(荒きやすらひ)

此方には誌友會で御目にかゝつたが何だか淋しさうな方だつた。清い童貞の誇りを持ち乍ら何時とは無しに姿——心!の移ろひ行く遣瀬なき其中にも嬉々しい御心はほの見えて可愛いゝ方だと思ふ。

(薄明)

強く胸に響く作、若い女の飽際、十九とは君は未だ若い、大聲に泣ける涙がおありの中如何か泣ける丈泣いて欲しい、枯れる樣に成つては駄目だから。

(生きた人形)

之が異變の叫びで有つたとすれば同情される、少くも以前は私も那麼だつたから。

(あらしの夜)

心強い作、讀み乍ら怖しさに顫へる樣だつた。

(夢二式の眼)

此方も以前から見るとずつと違つて來た、ほんたうに奥樣に、おなりなのか知ら、あの甘い所が拔けて來たのは嬉しい、お筆は例に依て達者。

(義太夫をきく夜)

折には遣瀬のも好い、すら〱と流れた中に自づと顯はれる悲哀がある。

「小説」では

(本郷の兄)

例に依て、なだらかな筆付、母を待て居る娘の焦々した心持や、母親の暗い心持なぞも細かによく出て居る。要するに矢張り女でなくちや書けない作。

(おなつ)

何となく筆に落付が無い、質屋の遣りもわざとらしいと思つた。

(伯母)

私の一番感じたのは此作である。矢張り書き馴れた人丈あつて調子もすら〱と行つて居るし筋も通つて氣持が好い、叔父の性格などは殊によく出て居る。

(海水浴場の女)

隨分思ひ切つた事が書いてある。私なぞにはとても及びも付かない作

(初舞臺)

女優と云ふ者の内部はこんなだらうか、嘗てがはづれた樣な心持も受取れた、此頃の小説は踊とか此種の作が大部を占めて居る樣だ。

終に自分の等は斯う並べて見ると讀む男氣もない、餘り下らないのに

は呆れさせられる、

妄評多謝、

其四　　梨花

たゝかひの跡。隨分我の强い方ですわね、でも私はかういふ人が好きですの、冷たい人！私もやつぱり冷たい人と云はれてますのよ。

現實から離れたい。淸女のキビ〳〵しい性格がしたはれるゝ仰つしやる、道理で御自身も、キビ〳〵した文章をお書き遊ばしますわね。

火事と地震と男の手紙。讀んで見ても、何の感じも起りません、只食べる事しか何も知らないいやしん坊ですわ。

面白い月日。秀さんぢやないかしら、それにしちや少し變な所もあるけれどやつぱり秀さんに違ひないわ、ほんたうにお幸ね、おみくじは何が當るでせう、法科？さぞお樂しみ！

見合の前。別に感じも御座いませんでした。

十六になつた娘心。可愛らしい事を云つていらつしやる、と申しますとおばあさんのやうですけれど、これでもそんなぢや御座いませんのよホヽヽ、押繪がふさはしう御座いますこと。

雜草の花、懷かしい田舍の生活を思ひました。

出水、有樣が目に見えるやうです、昨年の夏の恐ろしかつた事を思ひ出してゾツとしました。

本鄕の兄、いつもながら優槊子樣には感服致します弱味を持つた母の心も哀れに、お芳の心もよく表れてると思ひます、よく有りさうな事實であるだけに、感じも深う御座います。

む奈岸、始めの内には何事にも平氣らしい、づう〳〵しいやうなお奈岸が、七屋へは入る時の氣持はやつぱりこんなものかしらと思ひました

伯母、お澤が一人で踊つてるやうです、そして間もなく、幾萬の財産が、お澤のものになつて、お澤の實家の人達が入り込む樣が見えるやうです。

海水浴場の女、お筆は確に勝れていらつしやいませうけれど、私には只嫌らしいと思つたばかりです。

最後の日、私は久子がいたはしい、最後の日に於て久子の勝利になつたとしても、かうして元に返つた二人の仲は、決して圓滿に行くものではないと思ひます。久子はいつそ、一人で遠く離れたらよかつたにと、人事ながら腹が立つて堪りません。

初舞臺、品性を重んずるといふ女優の裏面が思はれます、之も事實らしう御座います。

大阪より、やつぱり不平不滿は持つていらつしやりながら、其れを他に思ひ返して、眞面目に眞面目にと歩るいていらつしやる、やゝ子樣がなつかしい、自ら好んで犧牲になりたいと仰つしやる裏面には、深い悲哀が思はれます。

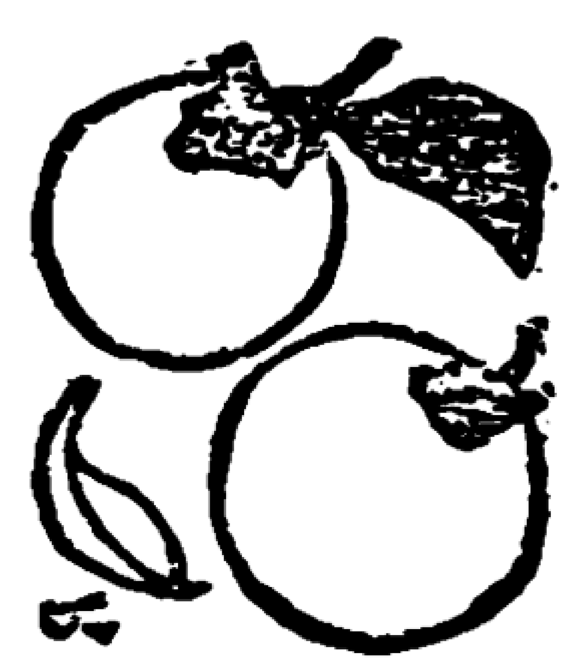
火影、若杉樣のであるだけに、印象が深く御座います、「强烈な愛火に胸を燃やして居るやうでは妻といふ機械的な義務的なお役がつとまらぬ」嫌ですわね、ほんたうに。

健康診斷、御姉妹の間に少しの溫味も見えないので嫌な氣持ちがしました、九ツのお妹さんが、下駄を揃へて上げたり、道を進つて氣の毒さうな顏をして、汗を流していらつしやる樣がお可愛さうで堪りません。

薄明、一度讀んだばかりではよく意味が解らない、二度三度讀む內に云ひ知れぬ淋しさを感じます。

▲此外四五篇採らるべきものがありましたが、紙面の都合で以上四篇しか載らなかつたのは殘念です、磐田（天）加藤（地）月草（人）の三女を入賞とします。（記者）

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



小説選評と感想

葉舟生

△今月から、この選評をする欄を少し廣げて、毎月の新聞雜誌で讀んだ創作の中で、諸君に尊敬と注意とを持つて讀んで貰ひ、それを大切な相談相手にして貰ひ度いと思ふものを書いて置く事とする。これは一つは諸君の智識、趣味の爲め。理解の爲めに、自分は誠實な心持を以つてこれを仕度いと思ふのである。諸君もなるべく、自分の推奬したものを求めて精讀されんことを希望する。それで、此處には十月の分から始める事とする。

△藝術をやらうとする人は、先づ第一に、趣味の進む事、これを一番大切と思はねばならぬ。藝術をやると言ふ事は決して、人形作りが、人形の作り方を習ふのと同樣に思つてはならぬ。或る人の生活が、種々な力に依つて進歩した、その人に依つて作られるものであると言ふ事を忘れてはならぬ。「人間」を立派に理解する智識が無ければ、いゝ小說は書けぬ。そして、この「理解」と言ふ事は單純に槪念で、斯う言ふものだ、あゝ言ふものだと言ふだけでは駄目である。吾々の心靈が敎へる洞察がなければならぬ。

△諸君は自ら養はねばならぬ。たゞ無智で(現代の敎育の如きは、人間を低能にするものである)ある儘の生活に甘んじてはならぬ。しかも、たゞ何にも思考せぬ、その感情をたのみにして書かれた作品のやうなるのでは、到底値のあるものは出來ぬと思はれねばならぬ。

△斯う言ふ事から轉じて、吾々は單に小說を作る人だから、小說をしか讀まぬと言ふやうな、馬鹿氣た考へを持つ人の無い事を祈る。諸君は凡てのものを味はうとする勇氣を持つて居られん事を希望する。詩も、紀行も、議論も、短いスケッチも、否、これ等の文學のものに限られずに外の藝術に向つて、科學に向つて、生きた自然に向つて、少しでも眞實に、的確に、多量に味はつて行かうとする精進の力のあらんことを希望する。

△十月の雜誌で面白いと思つた作は森鷗外氏の「百物語」(中央公論所載)であつた。この短篇の中に書かれて居る「飾磨屋」と言ふ人、夫婦の表情には、恐ろしい陰慘な影がついて見えた。恐らく今月の中に發表された小說の中で、一番感じの銳く響く作であると思はれる。

△次に面白いと思つたのは、窪田空穗氏の「防人等の歌へる歌」と言ふ「萬葉」の評釋である。これにはその原作を詠んだ人々に對する聯想に依りて、思ひがけないヒントをあたへられる、そこが面白く感じられたのである。

△近頃の書籍で面白く思つたのは、北原白秋氏の詩集「思ひ出」であるこれについての評判は、世間で高いから止す。次には近代文藝叢書と言ふ春陽堂から出る叢書である。收められて居るものが、必ずしもいゝ作では無いが、新しい藝壇の作品を一人づゝ集めて出して行くと言ふのであるから、この叢書を集めて行けば大體の人々の作風にも通じる事が出來ると思ふ。斯う言ふ叢書はしかし、立派な批評眼を持つて居る人に依つて監督されて、各作家の代表的の作品が集められて行つたらば、更らに有効に目的が達せられるだらうに、この叢書は必ずしもさうで無いのが、缺點である。兎に角、これは便利な叢書の一つである事を思ふ。

△それと、讀賣で此頃二三回公にされる高村光太郎氏の批評も、注目す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

べきものである。

△死んでゆく子（信濃、世良田優子）叙情の文と見ていゝ位の作、スケッチのやうなものだが、この人の感情を偽らぬ、罪の無い處があるので、いゝ心持がして讀んだ。

△あゝ吾が妹（丹波、蕣谷美夢）殆んど批評の標準以下のものだ初めての作と言ふ事を言つて來られたが、それは選者の心に何の割引きをもなさせる口實にはなりません。この人に限らず、斯う言ふ事を書いて來る人は、僕にはあまり未練がましくつて、却つて不快な感情が起る。それよりも、精進する心を忘れないで、書かれたらば、僕も熱心に讀みませう。又、それより外に進む道は無いんだから。それから近代の作を讀む事、眞實に向つて考へる事……

△その人（東京、古那夢）粗雜だが、前よりずつと進んで來た。

△家出（富山、奥渕好子）或る型にはまつた作である。達者だが、いけない。

△留守（東京、佐藤懿子）キチンと書けて居る。だが、局所毎に誇張して調子を付けて居るのが目にさわる。

△赤き三日月（金澤、据野燕）ズル〳〵と、無雜作に書いてある。

△師走（東京、貞枝）これは少し亂雜だ。この人の筆には、東京に育つた人でなければ見られない、面白味があるが、も少し、底に落ち付いて考へる事を養はねば生きて來ぬ。

△木枯（廣島、末摘花）上つすべりのした才筆である。

△不具（横濱、月々さ女）も少し、順序を付けて、正確に描寫する事。描寫する事柄を分派に、選擇し得るやうな心を養ふ事。この人には、よし自分の斯う言ふ事が非常に、廻りクドイ事であるとしても、よく考へて貰ひ度い。この作者はよく歩めば立派に伸びる人だらうと思はれるからである。

△いさくさ（千葉、村山咲子）前半はよく描いてあると思つた。後半になつて男を描く處があまり馬鹿々々しいので恐縮した。

△流產（横濱、都鳥）靜かに、行きとゞいて書かれた小品と見ていゝたゞ妙に「淫猥な巷」だとか「無意味な歡樂だ」とか言つてしまつてあるのがよく無いと思つたが、とにかく、よく書かれた作だ。

△低氣壓（京都、英久子）も少し、進んだ心になつてほしい。この作の善惡を一々言ふよりも、さう言つた方がはるかに近道だ。

△秋（伏見、わくらば）この作も、意外にいゝ處がひそんで居る。も少し、明晰に見えるやうになつたら、もつとよからう。

△夜（東京、冷女）この作は書き馴れた相當にいゝものだ。だが、幾度も見た事のある感じがされる。

△貸間（若狹、英子）若い女の故なく刺戟される情緒がよく書いてある。

△放浪の人（あぢさゐ女）背景の描寫が足らぬ。それに情緒が枯れて居るやうだ。

△その翌日（下谷、さすらひ）新意が無い作だ。

△墓參の後（土佐、磐田順子）力が無い。細々と書いてはあるが底を貫いた力が無い。

十二月號選評

△クラス會にて（信濃、保栗子）非常に面白い話を聞いた。手法は一作毎に熟して來る。自分はもつとブロークンな作でもいゝから、血のたれるやうなものを書かれ度いと思ふ。この人は可成、未來に望のある人の一人だと思ふと、小さくキョウに固まつてしまはぬやうに自分でも心掛けられ度いと思ふ。この作などは、その話が面白いが、生きた自

然を書くと言ふ上からは、不足である。

△暗き運命(東京、さか江)　上手になつた。しつかりと書けるやうになつた。だが、根柢の考へが、まだ幼稚で、センチメンタルだから、再考した時に、この作の値の少い事を思はされる。自分の希望するのは正直になつて考へられん事である。

△姉(横濱、しづな)　久しぶりで、この人の作を見た。例のやうに荒いが、達者で行きとゞいた作だ。たゞ自分にも、一歩洞察してほしいと思つた。

△老(土佐、容田順子)　行きとゞいた作だ、この人のはぢみな中に、だん〳〵いゝ處が出て來る。

△犬(東京、べにざら)　斯う言ふ懐を書くと言ふのは面白い事だ。それにしては、この作はあまり、平坦すぎると思つた。つまり、この作をした人の目が深い處を見得ぬ故である。

△伯父(備中、春子)　習慣的な手紙である。

△お茶代(朝鮮、山本初枝)　前と同じく、習慣的な作。

△お神樂(東京、貞枝)　東京の或る家庭の匂ひが嬉しかつた。筆も快活で、氣がきいて、輕く伸びて居た。斯う言ふ描寫も――底に何があるのでは無いが、面白い處がある。

△お葉ちやん(東京、春川花舟)　輕すぎる。

△伴の女(東京、古那夢)　また、作者の胸に映る印象が亂雜だ。女の人には多くこの亂雜な處がある。

△四つ道の家(伯耆、新田文子)　この人の作は如何も枯れたものゝやうだ。

△嵐の日(若狹、里子)　背景をも少し忠實に書くとよかつたと思ふ老人の描寫がゝなり忠實であつた。

△お花(近江、山田わかば)　この作の批評を書くのは自分にとつて苦しい。根柢になつて居る作者の目を、自分でも少し教育するより外は無いと思はれるからだ。

△在米の兄(東京、かずみ)　古いがしんみりと書けて居た。自然に感情の起るに從つて書かれて居る。

△心と心(東京、冷女)　あまり伸びすぎて居る。つまり氣樂な心持をその儘に書いてあるからだ。

△「その夜」と「蝙蝠」(東京、智代子)　この人のは今回は二篇入つて居た。「蝙蝠」は餘り拙いから評をせぬ。「その夜」の方はともかく正直に寫生をしてある點がいゝ。

△裁縫(熊本、埋れ木)　上手に書いてある。が、例の通りにたゞ事になつて居るので失望させられた。

△放された小鳥(横濱、月くさ)　手法は進んで來た。だが、大切な處を書かずにある。その上に淺薄な哲學が出て來たりしていやな作になつた。

△外出日(秋田、咲代)　この頃、この小說壇がだん〳〵正直な寫生をするやうに成つたのが非常に進歩した事と思ふ。この作も、寫生した――感情を――部分は面白い。

△歸る道(大分、原田孫子)　巧みに書いてある。

自分は今回の撰をした後に、少し疲勞を覺えた。それはこの投書の全體が如何も、狹い感情の範圍の中にばかりある故だと思ふ。

少しづゝでも、各自の周圍を新しく理解して見られん事を希望する。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

化粧問答

化粧研究會
婦人修容會 顧問 藤波芙蓉

○ニヤケ男君外六名の男性御質問者へ　白色劑又は目立たぬ化粧の仕方その他種々の御質問を蒙りましたが、成程女子文壇の御愛讀者とある以上、誰方にも御答すべきは至當のことかも知れません。けれども御婦人にこそ化粧は必要なれ、有髯堂々の男性諸君に其用なしと認め、折角ですが御答申さぬことに致しましたから、左樣御承知願ひます。

問　（一）鼻の頭に毛穴樣の眞黑いニキビが絕えず出來て鼠色になります。又頰や額にニキビの出來た痕の黑くなつたのが澤山あります。どうしたら取れますか。（二）、厚化粧すれば早く皺がよると申しますが眞實でせうか。（三）、白粉やけせぬ使法。右三題、どうぞ御敎示願ひます。（名無草子）

答　（一）杜松子酒を每朝御つけなさい。（二）化粧の厚薄は皺に關係しません、これに使用するおしろいの原料と、化粧の仕方によつて、早く皺も寄れば又寄つた皺も延すことが出來るのです。（三）コールドクリームをよく皮膚に擦込み、これを拭き取つた上におしろい下クリームを御塗りになれば、白粉やけは致しません。

問　（一）淫身香の代價と發賣所を、（二）ホクロを取る方法を、（三）黑毛の硬きを柔かにする藥を、（四）、ニキビの妙劑を、右御敎願ひます（信州ＨＫ子）

答　（一）賣品にはありません御自製なさるのです。（二）、發煙硝酸をヨシの先につけ、それをホクロの上に滴しなさい。（三）文壇社の用達部から私の調製した美髮劑を御求になつて、それでクセモミなさいまし。（四）發生原因を調べた上でないとシカとした適劑は申されませんが、普通はイヒチオール十匁、レゾルチン三匁酒精三十匁の合劑をよしと致します。

問　（一）ニキビの療法として蜜陀僧を人乳で煉つたものがよいとの御敎を受けましたが人の乳の代りに牛乳か山羊の乳ではいけますまいか。（二）ニキビは食物に關係がありますでせうか、魚獸の肉類を食べると出來ると云ふのは本當でせうか。（三）ニキビの出來て居るのにホーサン石鹼を使つても差支ありますまいか（赤坂かをる）

答　（一）山羊の乳を代用になさい。（二）無論他に大原因ありますけれど脂肪性の食物は仰る通り發生原因の一つです。（三）別に取立て〻害ありと申す程のこともありません。

問　（一）上等の白粉でも每度長くつけて居ると段々と白粉やけがして色黑くなると申す人と、上等の白粉なら久しくつけ續くれば却つて色白く美麗になると云ふ人とありますが、何れが眞實でせうか。（二）又玉子の白味のみで顏を磨いて洗ひますと題々しく肌點が細かになると申す人もありますが、實際でございませうか（紅顏女）

答　（一）兩說共に根據の薄弱な議論です、要はその所謂上等の白粉なるものゝ原料如何により、同時にお化粧の仕方如何によつて分れるのです。（二）効否は其人の皮膚の質によつて違ひます、人によつてはそれが爲めに皮膚が剝けることすらあるのですから。

問　聲を出すにヅボートといふ藥がよいと申しますが眞實でせうか（紀伊の少女）

答　聲曲家の多くが之れを使つて居りますからよいかも知れません。

問　（一）塗身香といふ色を白くする藥は服み藥でございますか、それとも皮膚につけるのでございますか。（二）餘り六ケしくない短時間で出來る化粧で一日外出しても決して動かない仕方を、（三）黑い頸の化粧法を（都ばつれのしま子）

答　（一）皮膚に擦込むものです。（二）及び（三）は精しく拙著新式化粧法（曾て博文館から發行してあります）並に合せ鏡（近々實業之日本社から發行する筈になつて居ります）に述べて置きましたから、それを御參考下さいまし。

問　（一）瘦せる法として御敎によりますと二十日間に三度牛肉を食すとのことですから一週間に一度の割になりますが、その間何も食べ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ないでも弱りませんでせうか　(二)切毛を伸す法はございませんものでせうか、先生御調劑の美髮劑は切毛に功はありませんか(岡山、吉備の子)

答　(一)二十日間に三度食すとは申さん答に覺えて居ります。二十日が間、日に三度白湯で煮た牛肉のみを御食べなさいと申したのです(二)その原因を調べた上でなければ正確な適劑を御示しする譯に參りません。拙製美髮劑は切毛には何の功もありません。

問　(一)鼻頭に脂肪が澤山に出まして、いくら念入りに化粧しましても直ぐギラ〳〵と剝落ちて了ひます、それに小鼻の凹みの處が紫紅色になつて白粉がうまくつきません、如何したらよいでせうか。(二)薄化粧した後で頰に小皺がよります、これを直す方法を御示下さいまし(三)レモン油を顏へつけても差支ないものでございませうか(金澤、おかめの面)

答　(一)Bナフトル五分、樟腦五匁、酒精一百匁を合せたものを時々鼻の先と凹部とに御つけなさい。(二)薄化粧した後で小皺が寄る？さてドンな譯でせうね、私には見當がつきませんが、一體貴女は如何な化粧をなさつて居らつしやるのか、素顏の時には小皺がないのですかどうも御答に困りましたな。(三)差支ありません、併し餘程薄めて御使ひにならんと却つて皮膚をあらしますから御注意なさい。

問　生際を濃くする藥品を求めたいのですが、それを調合して賣つて呉れる家を御教へ下さいませ(佐倉、三千子)

答　毛生藥は澤山廣告にも見えて居りますが果して有効か否か、私には解りません、從つて之れを調へて呉れる處と申すのも、まだ聞及んで居りません。御希望によりて私が調へて差上げませう。

問　地方の小間物屋で賣つて居りますもので色を白く肌理をこまかに衛生上良い石鹼は何んでございませうか(茨城、十八女)

答　地方はおろか都會にも、御望みのやうな石鹼は、まだ聞及んで居りません、比較的御望みに近い良品は、私の實驗上、キセロル〇〇〇印石鹼だと存じます。併し御地方で賣つて居るかどうか、三越、丸善ならあります、一個五十八錢の筈です。

問　幼い時はクセのなかつた髮ですが十六七の頃から段々とチヾみ髮となり、今では兩鬢から後の方まで、上つらだけシヤゴマ毛のやうにピン〳〵な髮になりました、どうしたら直りますでせうか(靜子)

答　それには大なる一つの原因あることゝ存じます、精しくは直接私の許へ御尋ねになれば申上げませう、兎に角文壇社の用達部に仰つて私の調製した美髮劑を御使ひなさつて御覽なさい。

問　二三年前より小鼻の兩側に黑いニキビ樣のものが澤山出來まして石鹼などで洗ひましたり色々と手當をして見ますけれど、今以て直りません、近頃出來ましたハリフロアクリームを夜分やすみます前に塗つて翌朝石鹼で洗ひ落すと直ると聞きました故、早速二三回やつて見ましたが少しも効目ありません、尙つゞけて使用しましたら長い間には取れますでせうか、どうぞ療法を御教へ下さいませ(上毛、野の花)

答　ハリフロアの効果は疑問ですが、如何なる良劑でも二三回位で効目の見ゆるものはありません、化粧美化の實驗には必ず、忍耐と不惑と規矩との觀念あるを要します、でもなければ、どんなものを御つかひになつても駄目です杜松實精三十匁、薔薇油一匁、橙花水二十匁を合したものを御つけなさい。

問　幼少の折りは頭髮非常に澤山でありましたのを十四五歲の頃から追々拔け初めまして十九歲の今日は僅かに以前の三分の一程しかなくなりました、それに今は拔毛が止まぬのです。何卒これを止め且つ生やす方劑を御教示下さいまし(北越の拔毛女)

答　先づ毛の拔けるのを止めなさるがよいそれには其原因を調べた上、適劑を定むべきが順當ですけれど、タンノブロミン五匁、抱水クロラール五匁、酒精及び蒸餾水各一百匁の合劑を頭皮に御つけなさつて御覽なさい。

問　(一)自己劑としての過酸化水素水は過酸化バリームに硫酸を注加して製すとございましたが、私の處で方劑さへ書けば直ぐ調へることが出來ますから其分量を御教示願ひます。(二)眉毛を濃くする法を御教へ下さい、猶害にならず、目立たない眉墨には何が一番よろしうございませうか。(三)頭の毛を黑く致したいのですが、どうしたらよいでせうか(大阪の若き女)

答　(一)濾過でよいのです、過酸化バリウムに硫酸を注加する譯は過酸化バリウムを分解さする爲めでこれを化學方定式で示しますと

$$Ba_2O + H_2SO_4 = BaSO_4 + H_2O$$

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

卽ち過酸化バリウムに硫酸を加へますと、過酸化バリウムは分解して、其バリウムは硫酸と加合して硫酸バリウムとなり、其分解されたものが過酸化水素となるのです。この場合、硫酸バリウムは白色粉狀となつて沈澱しますから、これを傾斜し濾過して、過酸化水素だけ分け取りなさい、但し過酸化水素は熱によつて直ぐと分解しますから、これを取る時には外部から氷か水で冷やして置かんといけません、殊に酸類卽ち硫酸が過酸化バリウムを分解する際には非常な熱を發するせのですから、若しこの時に注意せんと折角分解し得た過酸化水素は其熱のために分解して了ふことになります、で分解の際は分解器（ビーガーを代用としてもよいでせう）の周圍を出來るたけ冷にして、それを攪拌しながら徐かに兩者を混合さするやうになさい。

(二)サリチル酸八分、芫菁丁幾及びタンノプロミン各一匁、安息香酸豚脂三十匁を合して眉毛の根に輕く擦込みなさい、眉墨には青桐の小枝を黑燒にしたもので御引きになれば無害にして且つ少しも目立ちません。(三)文壇社の用達部から私の調製した美髮劑を御求めになつて御つけなさつて御覽なさい。

問　(一)今度先生の御發明遊ばしました美髮劑は私共にもわけて頂けますさうで、こんな嬉しいことは御座いません。その美髮劑はまつ毛や眉毛につけましてもようございませうか。(二)私は十六歲の秋からニキビが出來まして石鹼で洗ひぬいた結果、十九歲の今日、治つたことは治りましたが、疵がきたなくて元通り綺麗な顏になれません、生來色白で肌理も細かいのでしたが、殊に鼻のあたりにソバカス樣のものが殘りまして生れもつかぬ見にくい顏と變じました、キセロール化粧品を用ひて居ましたら直りますでせうか。(三)オードトワレットとビネーグルとは性質効能同じことでせうか、何れが私に適しますでせうか。(四)この化粧品で洗面しました時にはヌカや石鹼の必要はないのでせうか。(五)洗面の時に微溫湯に硼酸末を少々交ぜて用ゆればよいさうですが、その分量は水一升に小さる盛に山盛り一杯位で如何でございませう、どうぞ御敎へ願ひます（大阪、夕顏女）

答　(一)差支はありませんけれど、美髮劑の本領はクセを直すといふ點にありますので、毛の色艷をよくするのは其副作用に過ぎないのですから、まつ毛やまゆ毛に御つけになつては差しての効果は見られまいかと存じます。(二)それには一つの原因があることゝ考へられます、是非元の樣な美人になりたい御望みなら、直接私の許に御尋ねなさい、よく其原因を調べて見ました上で精しく御答申しませう、キセロル化粧品をお使ひになるのは無論わるいことではありませんけれど、それだけでは充分な効果を得らるゝかドウか解りません。(三)兩劑異質です若し濕脂性で御ありなさつたらビネーグルの方になさつたら宜いかと思ひます。(四)ヌカで洗つた後に右のビネーグルなりオードトワレットなりで御洗顏なさればよいでせう、これで洗面した後にヌカや石鹼を使ふ必要はありません。(五)オードトワレットなりビネーグルなりを御使ひになれば、別に硼酸など御用ひになることはいりません、若し御使ひになるとしても、御示しの分量位で充分です、多過ぎては皮膚を荒すことになります。

問　寒さに向ふと手があれますので、ベルツ水位では中々直りません、グリセリンもつけて見ましたがベタ〳〵するので心地惡うございます何かベタつかぬもので、よいお藥はないでせうか（名古屋の女）

答　ベタつかないもの？　隨分お氣隨な御注文ですね、ではコールドクリームをよく擦込むか今度文壇社の用達部から御わけすることになつた美髮劑を手におつけになつて、それをよく拭き取つた上に、アントラゲール十匁、ベンツイン五匁、酒精五十匁の合劑をおつけになつて御覽なさい。猶禿髮生毛のことに就いての御尋ねがありましたが、どうしても其原因をよく調べた上でないと、確的な方劑を申上ぐる譯に參りませんから、若しナンなら直接私の方へ御尋ね下さいまし。

問　私は髮が縮れて居りますので、只の一度でもよいから人樣のやうに島田に結つて見たいと思つて居りますけれど、今までよいといふ毛髮劑は數を盡して、中には莫大な料金を支つてまで求めて使つて見ましたけれど、一つも用に立つたものはありませんでした、今度先生が御發明なさつた美髮劑はクセ毛にだけよくてチヾレ毛には駄目だとのこと、併し二時間位は直るとの仰せ故、せめては二時間でも素直な毛にして見たいと存じまして、早速御社の方から御わけして頂いてつけゝ見ました所が、二時間位と仰しやいますのに約五時間程滿足になつて居りました、この後は是非これを御わけして頂いてつけるつもりでは居りますけれど、成りますことなら、これでクセの直りますやうにチヾレも直る新劑を御調へ願ひたう存じますが、どうしてもチヾレ毛は直すことは出來ないものでございませうか（府下、多摩女）

答　チヾレ毛を直さうといふことに就いては私も多年乏らぬ腦力と實驗とを盡して居りますが、殘念にもまた正確のものを見出すことは出來ずに居ります、けれども目下試驗中のもの一つだけ出來上りました、いづれ實驗して有効でありましたら、無論皆樣方のために御報もし又調製しても差上ることを辭しません、只果して成功するや否や、自分ながら不安の最中です

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

美髪劑

小瓶參拾錢。中瓶五拾錢。大瓶壹圓。送費各瓶市内四錢地方八錢滿韓臺灣州錢郵券代用一割增し

婦人の頭髪は、婦人に取りて何よりも大切です。此美髪劑は十有三種悉く人體皮膚並に毛髪の攝養となる純植物性のものより成り、どんな**クセ**の多い毛でも之を使用すると根本的になほります。

譬へ**クセ**毛の人でなくとも、毛がやはらか過ぎて、**ハエギワ**が藤のやうに下つたり、**ビン**も、**タボ**も、下り易い毛髪でも、之を防ぐことが出來ます。又毛髪が硬くて自由の利かない人でも、此の美髪劑を用ひておけばすなほな好い毛髪となります。加ふるに毛髪の色澤を美しくすることは驚くべき程で之を常用すれば漆の如くつや〱となることは保證致します。毛髪に限らず此美髪劑が如何に皮膚を美しくするかは、試みに**アレ**性の人が少計り手さきにでも塗抹すれば、直に皮膚滑澤となり其効果は顯著に分ります。

只、天性**チヂレ**毛の人は、此美髪劑を用ひて二時間位は其の**チヂレ**毛を直すことが出來ますが、根本的に直すことは出來ないのです、前に述べた**クセ**毛なら何んな困つた**クセ**毛でも直ります。

此美髪劑は「女子文壇」の化粧問答顧問として皆様も御承知の　藤波芙蓉先生が多年研究の結果。實地經驗の上創製されたる最新の美髪劑であります。論より證據速に御試用あつて其苦痛を忘れ給へ。

◎注意――此美髪劑は冗費を省くため他の化粧品の如く粧飾せず極めて實用向にせり

申込所　東京市京橋區大鋸町十二番地（電話京橋六〇七番）（振替口座東京第壹七貳九番）女子文壇社代理部

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

◉興味と實益に富みたる日本一の理想的少女教育雜誌◉

新年號より大刷新

少

第四卷第壹號（通巻第貳拾九號）

○皆様！樂しいお正月が來ました。『少女』はどんな美しい裝ひを凝らして皆様のお目に懸るでせう。それをみんな言つて了つては、皆様の折角のお樂みが無くなりますから、委しくは申しませんが、ソッと一部分だけお知らせしませう。先づ第一に

『少女』獨特の新年極彩色の繪附錄（石版十數度刷 竪一尺三寸 横九寸）

◉一 新裳 太田三郎先生筆

が附きます。これは太田畫伯が最も精神を注がれた傑作を、石版極彩色密刷にしたもので、畫中の少女が端正の姿、淸美の趣は、抑も何人の悌にか似たる。其美、其麗、到底有觸れた雙六などとは同一の比でありません。其他

愛馬（原色版密刷泰西名畫）

新しい心の袋 與謝野晶子氏

新年を利用すべし 佐々木邦氏

等、現代名家の筆に成る教訓小說は、年と共に新たなる善事を奬め、

本誌評判の少女小說

海賊の寶 磯萍水氏作

一月元旦發行豫告

女

は、後編に入つて倍々面白く、勇ましき少女エレナの大膽なる冒險旅行は、讀み行く者の心を雄々しく奮ひ起たせます。海賀變哲氏作の**罪のない少女喜劇**、沼田笠峰氏の**少女訓**、記者白羊の**英語繪解**も、亦皆樣の必ず見逃してはならぬものです。

其上又、**東都著名の女學校の校長先生**方は、いづれも新年號より**特に本誌愛讀者の爲に、有益なる訓話**をして下さいますし、**大學の博士方**も時々其專門學の**面白い研究**を聞かせて下さる事に成りましたから、新年號から、我が『少女』は、ますます他に類のない、優し味のある、**爲になる、善い雜誌**となりました。外の雜誌を見ないまでも、『少女』を見なければ、到底善い少女には成れません。

畫は相變らず**萬代恒志、竹久夢二、武田壽、渡邊與平**(いろは順)諸先生が、相變らず美しいのを澤山書いて下さることは、申すまでもありませんが、其外新年號には、特に擔當畫家が苦心の摸寫に係る**面白い畫**を揭げます。それは〱面白いものですが、暫く**秘密**にして置きます。

どうか皆樣、『少女』が新年號から、倍々爲になる善い雜誌になつたことを、**お父樣**にも**お母樣**にも、**學校の先生**にも話して、新年號が出たら急いで早く買つて下さい。

定價(從前の通)
一冊金拾錢送料壹錢
半年分送共 金六拾參錢
一年分前金壹圓貳拾錢

發行所 東京市京橋區大鋸町(電話京橋六〇七番) **女子文壇社**(振替口座東京第壹七貳九番)

少年少女達への歳末年始によい贈品

東京市京橋區大鋸町十一
振替東京壹七貳九
女子文壇社出版

どこの本屋でも取次販賣して居ます

佐々木邦先生著

▲初版八月下旬發賣忽ち好評賣切の處再版十一月中旬出來發賣▼

滑稽奇談珍本

二人やんちやん

全一冊

▼中判美装 武田壽氏石版彩色畫 木版色刷挿畫六葉入

定價金參拾五錢 送料金六錢

目次 二人やんちやん。あまのじやく。仙ポコ。お猿さん。昔と今

大人にも、小供にも面白い書物です。世の中に出ると、到る處評判になつて、何處の家庭でも争ふて購求され。近頃の好著として、持て囃されて居ります。幸に左に掲げたる新聞雜誌の評判記を御覧下さい。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

二人やんちゃん

◎新聞、雜誌の評判記拔萃◎

◎『少女世界』これは趣味ある少女小説です。太郎さんと花子さんといふ兄妹が、好きな叔父さんと一しよに、思ひ切つて無邪氣なことをする、その面白いことの數々が、輕い筆でさながらに描き出されてありますので、讀みゆく中に笑はずにはおられません。それからあまのじやく、お猿さん、仙ポコ、昔と今の四篇もまた面白い讀みものといふを憚りません。これを少女諸子にすゝむ。

◎『東京日々新聞』二人やんちやん初め、あまのぢやく、お猿さん、仙ポコ、昔と今の五篇を收む、惡戯小僧にはお馴染多き著者の筆なれば面白いこと請合ひ中には子供に解る樣な諷刺や教訓を含むだ話も交つて居る。

◎『少女の友』これは、滑稽小説に有名な佐々木先生が、子供の滑稽な有樣を書かれた少女小説です。集むるところ、二人やんちやんの外、あまのじやく、お猿さん、仙ポコ、昔と今の四篇、をかしいおもしろい本です

◎『やまと新聞』二人やんちやんあまのぢやく、お猿さん、仙ポコ、昔と今の五篇を收む太郎と花子とのやんちやん愈々出でゝ愈々甚だしく而も一點の邪氣を存せざる流石に子供の神子たるを思はしむる少年少女の讀物として極めて面白きのみならず藥になればとて毒になる氣遣ひ無し。

◎『中學世界』曾て惡戯小僧の日記を譯して大好評を得たるはこの著者なりとす。少年少女の天眞爛熳たる自然性を見てと明敏、これを筆に移してまた無邪氣なる精彩あり、斯くの如きは、實に著者の獨壇なるべし。「二人やんちやん」以下數篇皆な面白し。

◎『都新聞』二人やんちやんいたづら小僧で子供衆に御馴染の佐々木邦氏の作である、滑稽の裡に諷刺あり面白味の間に教訓を籠めてあるよい本。

◎『婦人の友』太郎さんと花ちやんとはなか〳〵やんちやんで、十日ばかりお留守居をして居た叔父さんは隨分困りました。此の十日間の出來事を面白く輕妙に書いたもの。

◎『中央新聞』いたづら小僧日記を出してより此著者の名は頓に坊ちやん嬢ちやんの間に知られたり、此の書はあの樣なおもしろい得意な文章にて書きまし少女小説、二人やんちやん、あまのじやく、お猿さん、仙ポコ、昔と今の五篇を蒐めたるものにて既に御馴染の坊ちやん嬢ちやんもあらんが初秋の讀物としてはこよなきおもしろきものなり

◎『少年雜誌』これは美くしい少女小説であります。目次は二人やんちやん、あまのじやく、お猿さん、仙ポコ、昔と今とみんなで五つありますがどれも〳〵面白くて〳〵溜らない御本です

◎『帝國新聞』二人やんちやんの外あまのじやく、お猿さん、仙ポコ、昔と今、等雜誌「少女」に掲載したもの。斯う纏めてみると一氣に讀むことも出來れば、忙しき人も亦樂むを得可し。僕は試みに「あまのじやく」を讀みたるが、德記保存の上よりも、著者に謝すべきもののあるを覺えたり。文は輕快平明。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

◀ 諸嬢及び奥様の良參考書 ▶

本書の内容

【裁縫】◎普通の着物も縫へないやうでは嫁にも行かれぬ（松並紫花）◎裁縫と機轉（吹雪野）◎何より好きな裁縫（田舎女）【音樂】◎生田流と山田流の區別（櫻井銈子）【育兒】◎仲子の育て方（笹の露）◎子供本位の教育家の家庭（美智子）◎子供を白痴にした若き母の罪（島の女）【學校】◎新に寄宿舍に入らんとする友人に注意する書（華たみ）◎往復三里の學校通ひ（文香子）【衛生】◎處女の衛生と旅行の衛生（むらさき）◎看病の心得（N女）◎化粧法問はず語り（鈴音）【園藝】◎櫻草の栽培（牧野理學士）◎無邪氣で珍しい家庭公園（新田文子）◎養鷄（むらさき）【運動】◎何時でも出來る室外運動（中川女子高等師範學校長）【圖畫】◎郊外寫生の話（岡野學習院女學部教授）【詩歌】◎萬葉集の佳作（澤村文學士）◎詩を作る呼吸（金田代志子）【作文】◎文章の今昔（河井醉茗）◎何うすれば文章が上手になるか（撫子）【出產】◎二つの生命（碧志緒）◎始めてお產をする方へ（若き母）◎三度のお產にて得し私の經驗（みどり）【職業】◎女子就職の領分（海軍少將中村靜嘉）◎仕事の苦痛（白山伏）【化粧】◎顏の美しくなる食物（北原十三男）【料理】◎お芋の料理と御飯焚き（さつき）◎壽所の一週間（笹舟）【家政】◎家庭心得其をりく（嵐野菜女）◎日に一錢づゝの貯金（北利子）◎商家の店と奥（はる子）◎吾家の室内に掲げて置く各種の表（紅梅女）◎家庭の秀才となりたい（春野胡蝶）◎時間の屑を利用せよ（みきよ子）◎母のをしへ（佐分華影）◎母の留守（はまらし）◎肉體の痛み心の傷み（山鵆）◎家庭の心おぼへ（野の花）◎感心な奥様（内海千鳥子）

▲對話女髮結所の朝（うす雪）外數篇 ▲和歌數百首 ▲ノート（東京、英語、文學、滑稽）

婦人ノート

全二百餘頁美裝
定價金貳拾錢
送料壹錢五厘

發行所 東京市京橋大鋸町 女子文壇社（振替東京壹七[illegible]九）
賣捌 全國雜誌書店

◀文字に現れたる娘時代の表情▶

女子文壇 増刊

娘時代

十月十日發行
二百頁美装
執筆者寫眞入
定價廿錢
郵税壹錢五厘

—(小說六篇)—
◉本郷の兄……前島優梨子
◉お奈津……さかえ
◉伯母……加藤箏子
◉海水浴場の女……千鶴子
◉最後の日……月草
◉初舞臺……若葉

◉あらしの夜……神近市子
◉夢二式の眼……初雁
◉火影……若杉濱子
◉義太夫を聽く夜……珠野すゞ子
◉破れたる友情……初鹿野道子
◉月の出るまで……かうほね
◉現實から離れたい……ふさ子
◉薄明……港の女

◉白き手の謀叛者……望月野薔薇
◉たゝかひの跡……小宅てふ子
◉若きやすらひ……ひざくら
◉男の手紙……梨花
◉面白い月日……胡蝶
◉生きた人形……波の花
◉十六の娘心……藤田きく
◉誘惑に勝つ……しうん子
◉娘時代の純潔無邪氣なる日記……拾三篇
◉生氣潑溂たる女の和歌……數百首
◉課題 わが故郷……わが親友……わが手文庫……(散文)

發行所 東京市京橋大鋸町 女子文壇社
【振替東京壹七貳九番】 賣捌全國各書店

横瀬夜雨先生著（目下印刷中）

新年發賣

夜雨集

凡そ勝れた文學は「生」そのまゝに物を觀る時に産れるものだと云ふ、してみると著者夜雨の如く、在るがまゝの現實に生きて、諦めもせず、悟りもせず、憤るものは憤り、怨むものは怨み、泣くにも泣かれず、笑ふにも笑はれぬ悶々の情を、破れ甕より迸る泉のやうに滾々と文字に表はすことの出來るものは、最も好い藝術家に生れた一人であらう。而かも夜雨の所有してゐる「生活」は、普通の人の所有してゐる「生活」と全く異つた暗い、淋しい、痛ましい、呪はれた生活である。一に身體の自由を奪はれ、歡樂を奪はれ、戀愛を奪はれ、在る處は只文字のみ。今や『夜雨集』成らんとして、一日も早く其書を手にしたいと思ふ者は、誰よりも、彼よりも、先づ夜雨其人であらう。

四六版紙數約三百餘頁
總クロース天金美製本
定價金八拾錢　送料六錢

出版元　東京市京橋區大鋸町　女子文壇社（振替口座壹七貳九）　賣捌　東京堂、至誠堂、北隆館、東海堂、大阪盛文館外各店

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



創作

小説

水野葉舟選



○流産（遺）

都鳥

鉛を削つた如な日光が乾ききつた甃へカン〱照りつける。花崗岩で疊んだ橋の雲母が眼を射る如に燃える。雨揚句の馬道街道は轍の軋りと、下駄でどろ〱に捏ね上げられて、稍もすると泥沫が上がる。

お富美は伏目勝に默々として歩いた。濘泥の水面からぶゆが一團になつて渦を巻く、そして臭い一種獨特な匂ひが漂つて來る、ごちや〱と詰めきつた二階建と平家が凸凹に不規律に發達して居る。

淫猥な巷――色魔の巣――呪はれた町――とお富美は何んとなく忌な感じがした。お富美は東京へ着くと何か蟠りが湧いて來て、それが不斷刺戟する樣に思はれる、それを努めて平氣に裝つて歩いた。漸く姉の家へ達いたのは午前の十時頃だつた。

「珍らしいねえ、よく來て下れた、勞足れたらう、早く上つて休息んだ方がいゝよ、」氣早な義兄さんが一番早く迎へて與れた。お富美は取敢ず一通の挨拶をした。

義兄さんの家は酒屋なのだ、酒樽がずらりと並んで泡盛の瓶が隅の方に蹲まつてる。始めは奥の方が眞暗

であつたが、段々眼が馴れると、判然と色々な物が浮んで來る、「富うちやんよく來てお呉だねえ、まあお上り上——ほんとにねえ、よく來てお呉れだつたねえ」——と姉がそこらを片附けて布團を敷いた、「あ——では御免を蒙つて上るわ、」義兄さんが物珍しさうに帶の工合や肩の邊を眺めてる、「お母さんやなんか近頃快いの——」「はあ——」とお富美は輕く受けた、須臾はまとまらない、くだらない談話に移つた。「隨分な鼓だてとねえ」とお富美は話の合間に囁いた、「商賣が商業だし大きい瀞を控へて居るから——蒸し暑い晩なんか、つく〴〵飽々してしまふ事があるんだもの」と姉は團扇を事更にはた〳〵とあふる。前髮の根から汗が一滴流れたのを、眞つ白なハンケチで額から頬へ圓形に撫でる。

次々に湧く問答を無雜作に話して居る中に義兄さんは、つまらない冗談を「ハヽヽヽ」と極立つて哄笑つて、それをきつかけに席を立つた、姉と差向ひになると言ひ合した樣に沈默した。「姉さん」とお富美は突然呼んだ、「姉さんは未だ身體が良くない樣ね」「まだはつきりしなく〳〵つて、くさ〳〵してしまふわ」と吻とため息をついた。

「始めねえ、あのお手紙がついた時には、お母樣の驚き樣たらないの、お父樣は左程ではない如ですけれど心配してね、直ぐにも專門の醫者に診察て貰ふ方がいいの、湯治に行けのつて騷いだんだけれど、お父樣が後の祭だからつて、何にしろゆつくり氣長に養生した方が好いつて言つたもんだから、それなりになつたの」「——何如して妾はこんなに身體が弱いんだらうね、流産れたつて言はれた時には、何んだか氣が遠くなつてしまつたのよ」二人の會話は段々滅入つて來る、店で「ハヽヽヽ」と哄笑する、新らしい酢の匂が鼻に透る。「矢つ張り冷え性なからよ」と姉は附け加へた。「今でもお藥を呑んでるの？」とお富美は顏を上げた、「毎日御飯前に頂くんだけれど、はか〴〵敷いかなくつてねえ」とそれから一寸言葉が杜絕れた。義兄さんが又來て賑やかな話しを始めたので姉の寂しい笑い聲も聞えた、やがてお膳が据つてお富美は馳走になつた。

其の中に日が暮れる。夜に入つてから界隈の賑かは非常なものだ、「無意味な歡樂」とお富美は思つた、流れ込む遊野郎のさんざめき、脂粉に裝つた女の艶話、近く活動寫眞の樂隊が手に取る如に聞える。お富美は久し振りで姉と食を共にする事となつた。

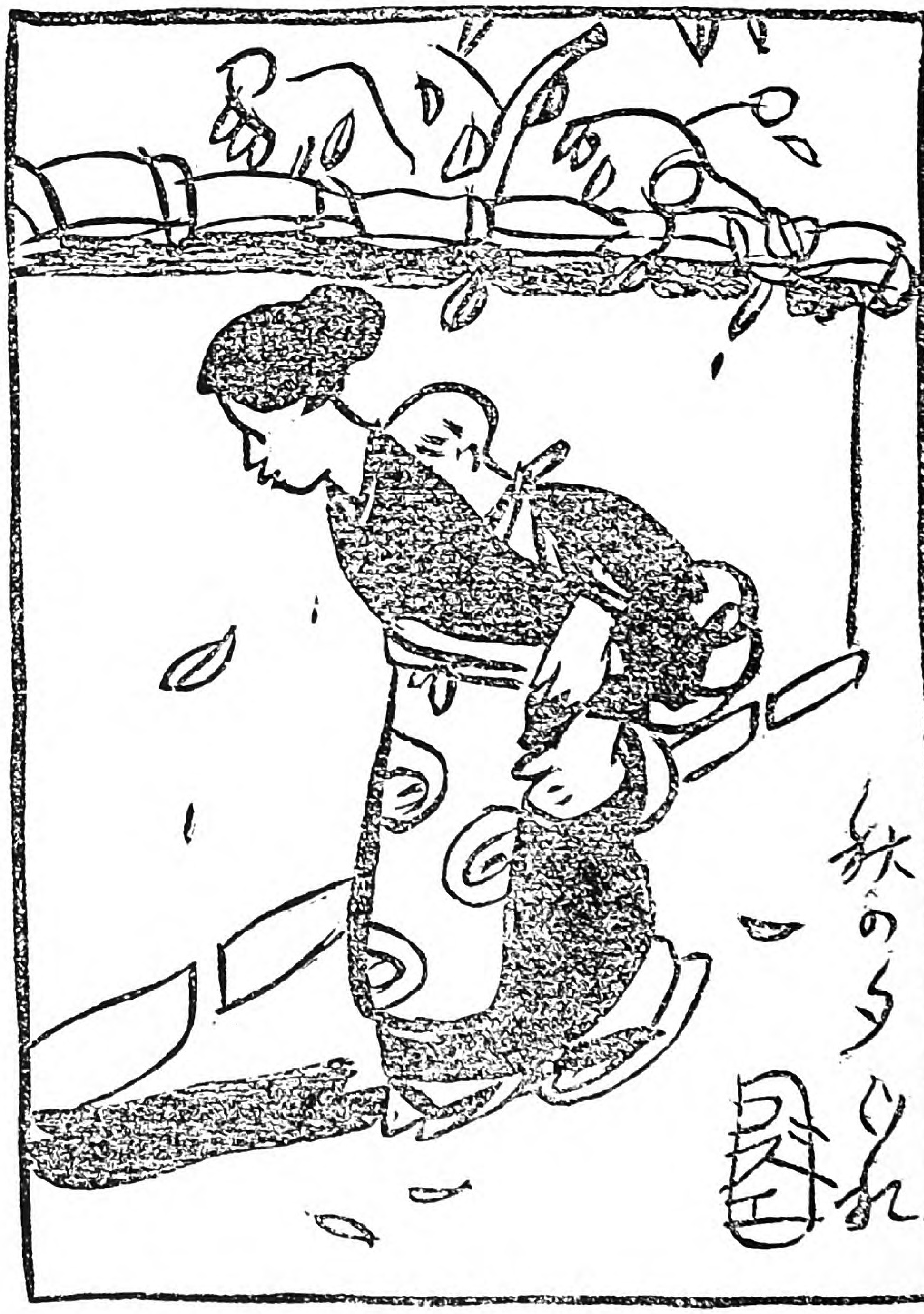
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

身體を二人寄せると二人共昔の事が懐しく、想が古く古くへと繰られて、念が昂ぶる、加ふるに暑いので寢つかれぬ、「富うちやんは仕合だね、親の膝元で我儘をし放題で羨敷い、妾なんか早く「家」を作つたもんだからそれ丈餘計な苦勞がある、富うちやんも今の中が春なんだよ」と妙に年寄り染みた事を言ふ、姉はこれ程考への狹い人ではなかつたけれど、お產以來急に打つて變つた如「姉さんそんなに愚痴を言ふ者ぢやあないわ、今に身體が快くなれば、きつと面白い事が起きて來るわ」と慰め顏。姉は時々小聲で何か言つてる如だけれど聞き取れにくい、そして戰慄く色が浮いてる。

蚊帳の外で蚊の唸るのが微だ夜が更くるに連れて、町の喧噪が激しくなつて行く。

姉妹は疲れて寢入つてしまつた。

艶々しいふつくりしたお富美の顏と、頤の瘦せ細つた姉の顏とが青く光る蚊帳の中に並んでる。



（天賞）　秋の夕暮　長野縣　秋丘こずゑ

○死んでゆく子（八）

信濃　世良田優子

「此ミヨーガの箱でよいであしようか、もし小さければ林檎の箱も有りやすが」「まあ何もかも有難たう御あす、此で澤山ですにさ、眞實に〳〵色々御世話樣になるばつかりで始終〳〵……」

時子の家構をへだてた向ふの垣根の外に三軒續きの長屋が有る、東の隅が車引、中がラオスゲ、西の隅が紙屑買とこの三家で有る今日は何日に無く此長屋中が騷々しいので何事が起つたかと時子は秋雨の窓を開けて向ふを見た白萩の茂みの隙から透かして垣根ごしに樣子を見ると何でも紙屑屋で何か起つたらしい暗い六疊限りの一室に目カチの車引のかみさんや頭のテカテカはげたラオスゲの翁さん（今日は雨降りで家に居るのだらう）や其他言葉を卑しく使ふ人達がガヤ〳〵しきりと何かさゝやき合つて居るのが見ゆるそしてたまたまこんな事が聞える、「眞實に可愛想な事しやしたな」「さうでであしたいナほんとにくな」「こんなに小さくなつちやつたにさ」美い顔だつたがこの儘大きくなればお前さんも一もうけ出來ると云ふものだつたのに」「此子は生れた時から弱かつたでであすよどうしんに仕方ねい」投げる樣に云うて居るのは紙屑屋のおかみ「彼が良かろー此がよかろーつて人樣が色々おつしやつて下さるけれどさうも成ねいでナ終には何やいやだ〳〵つて食ねいからかまはず打捨つて置きやした」なんて悲し想もなく平氣でいうて居る云はゞ死を待つて居た樣なものだ。

時子は茫然こんな會話に耳を貸して居たがあゝさては彼子も死んだのかと可愛想でたまらない常花ちやん花ちやんも近處で呼んで居た子歳は八つだと何時か聞いた時答へたつけ成程顔付は好つた眼毛の長い眼の大きい子だつた、けれど貧に育つたせいかヒヨロ長い肉付の惡い子供に稀れな青い顔をして居つた誰が見ても營養不良と知れる、此一年程學校へも行かずに家にぶらぶらして居つた、十日計り前だつた、煤けた窓から淋しい小さい顔を出して蒼く〳〵澄んでゐる空をその眞黒い眼でぢつと蜻蛉の飛んでゐるのを見てゐた。

其眼其顔いかにも寂しかつた何物かを見入る樣な、今考へれば死の前だつたんだもの寂しく見えたのも無理はないと時子は思つた、そして折々時子は新らしい詩の言葉をその子によつて見出した、ちやんとノート

てある、其時空を見つめたのは無心だつたのだろ、それとも何か遠く引き入る様な物の怪でも眼に映りやしなかつたろーか？それを母なりに語げる言葉を幼くて見出さなかつたのだろーか？などゝ時子はいろ〳〵に其子の事を想へた、其瞳は時子の心から離れなかつた

てのミヨーガの箱少し小さいけれどかうして足を屈ませればよい、かうして置きやしよう」ああもう入れられたのかしらミヨーガの箱に可愛想に時子はハラ〳〵泣いた、トン〳〵とくぎをうつ音が寂しい空氣を破つて時子の胸に響くとそのまゝ机の上に時子はうつぶして泣いた、あゝ可愛想だ——貧にたふるゝ者の最後は實に〳〵悲慘なものだ、かうした者が世に多い事だろーと思つて同情に泣いた食してさえゆけば捨てゝ置いても育つ者を可愛想に——時子は又涙の目を上げて想へた、もし此子が育つたとしたらその運命はどうだろーと。

人をチヤームする眼、——眞白い首筋——水々しい島田——左褄——こんな姿が目に寫



（地賞）讀書　本郷こたに

つた、あゝ矢張り育つたからとて人に奪られて渦巻の中に身を落す悲しい運命を有するのだ——何處迄も涙のページをくりかへさなければならない子だと思つた「わしが夕方お寺へかついでゆきやせう雨が止むといいだがさ——」「あんたがお出でやすかい」「お父さんにかつがれてゆけば一番よいや」とはラオスゲの爺さん

……………。

「お線香でも立てゝやる位で何もお葬式も出來やせんでさ——貧乏は見じめな者だナ——」こんな哀れな話しを聞いて時子は又泣いた、あゝでは爺の肩にかつがれて見送りの人もなくこの淋しい秋雨の夕永久人の世と離れる冷たい墓にゆくのだろーか、あゝ父の肩にかつがれて小さい箱は秋雨の中をゆく——吾子を葬る爲めに掘る姿——薄暗い雨の夕暮の墓場——こんな事止め度なく時子は想へた——あゝもしも育つたとて自らも泣き又若々しい人妻をも泣かする運命を有つ子だものいつそ〳〵罪も知らない貧に置かれて貧の何物も知らない欲も知らない清い〳〵汚れぬ幼心のうちに他人の手をからず父の肩から——手から穴にゆく方遙か遙か幸だろーとも思つた「じやあー行つてくる」「もうおいでやすかい——薄暗い低い軒下に黒く人の影が動いて居る、あゝ生活する力のない者が妻をとつたり子を生む——その子は悲慘に終る——あゝ罪だ罪だ——ほんとに——と時子は口の中で叫んだ、雨はまだ止まない——。

○放浪の人（八）

あぢさゐ

夕方だつた。花代が講習から戻つて來たのは……。此間の暴雨で宿の表の門が三尺計りも下つた。その歩き難いのをやつと表口まで上つてほつと一息……。花代の駒下駄の音が聞えると、

「まあ！お早うでざりました」と莞爾迎へて呉れる筈の小母さんが、とんと見えない少し拍子抜けがして、其處等見廻しながら辨當の空を上り口へ置いて、フト見ると、見なれぬ繻子張の大きな蝙蝠傘と、黒い風呂敷へ包んだ煤けた行李。中から古い淨瑠璃本がはみ出してゐる。花代は

「ハヽア義太夫だな」

と思つた。部屋へ入つて袴を解き汗ばんだ着物を、ネルの單衣と着更へて出て來た時、水屋の方でコトリと音がした、秋の日は薄暗い水屋に暮れて、小母さんの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

姿は見えない。花代は手早くラムプを燈して水屋の方へ行つた。パッとさす明りに始めて、氣附いたと見えて、小母樣は洗つた鍋を提げて出て來た。

「まあ！お早うござりましたね」

花代はラムプの光りに脊いて立つ水屋の外の人影を見た。小母樣も一寸其方を見た。

「小父樣は？」

「あの一寸津和野まで灸を下して貰ひに行きましたがの、事に依れば泊るかも知れないので……。太夫樣も來て呉れてはあるけれど……」

あの堅い小父樣が津和野まで行つたしきで泊る物かと思つた花代は小母樣が言外の意味を悟つた。小母樣は竈へ火を點じた。花代は戻りに買つた毛絲で編物をし始めた。小父樣はまだ戻らない。外の人影は暫く彼方此方歩いて居たがやがて這入つて來た。花代の目がチラと其方に注ぐと彼男は丁寧にお辭儀した。小母樣と話をするかと待つて居たが何にも言はぬ。

「をばさん、今朝はわたし遲かつて先生等に後れたのよ。」

「さうかのし。」

「わたし等來月の初旬に講習員一同で××校を參觀に行くのよ」

「へエーそれは〳〵……」

「四日がけ程で……。ねえをばさん、袷ぢや寒い位になるわね」

「さうですとも、霜月に入りますとね」

こんな話が花代と小母樣の間に繰返されたが彼男は矢張り默つて居る。

「えらい濟まんがのし。一寸水車屋へ行つて來る間淋しいでせうけれど我慢して下されや」

花代はこの淋しい家に、氣心知れぬ渡り者も來て居るし、嫌だつたけれど、仕方がないので。

「エ、いゝとも。晩いのに御苦勞です事ね」

と平氣で言つた。花代は編棒を動かして居る。

彼男は暗い土間で冷たく立つて折々下駄の齒を鳴らす音がする計り。沈默は又續いた。

花代は折々彼男の方を偸見た。薄汚ない浴衣と蚊絣の單衣を重ねて細い兵兒帶をしめて居る、四十位の赫ら顏であるが細作りな、見る影も無い裡に何處か藝人の香の失せぬと云つた樣な。――義太夫好きの小父樣を便りに來たのだらう。若し戻らなかつたら……。

「田舍廻りの義太夫なんて、體の好い乞食だ」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と小母樣が言つたのを思ふと、何となく哀になつた。何とか云つて遣らう。その放浪の人に——と思つたが如何しても言ふべき言葉を見出さなかつた。沈默は矢張り續いて行く。一分！二分！五分！。ぐわらり障子が明いた。

「ヘイ今で……」小父樣だ。

「オヤお歸り！……」

「お歸りだつずか！」花代の聲と同時に彼男は皺枯れた聲で叫んだ喜びの色は顏に溢れた。

彼男は始めて上つて來た。

「エライ暴雨だしたなア」

「さあもし、どうです義太夫の方は？」

「あきまへん、此の不景氣ぢや藝事は何でも駄目だつす」

話の中に小母樣が戻つた。夕飯が濟むと、直ぐに小父樣が好きな三味線が持出されて彼男が阿波の鳴門を語つた花代はせつせと編物しながら聞いた。流石黑人だけあつて、小父樣が得意になつて語るよりは上手いと思つた。

注意　本月の小說及び前月の小說の批評は共に本欄の終の方にあり

○貸間（八）

若狹英子

「內へお泊めしてもいゝんですけと、あまり手狹であの方にもお氣の毒ですし內でも困るんですから、お家ぢや丁度お空きですしそれにお綺麗だし、ね、をばさんおいてあげて下さいな、いつまでも、とは云はないんですからいゝ家さへ見つかればすぐそこをお借りになるんですから」河井のをばさんが又昨日と同じ樣な事を云つてたのみに來た。

おつねは煙管に煙草をつめながらにつこりともしないで「お氣の毒ですけどね、常は空いてゝもひよつとお客のあつた時に困るんですから、それに此娘も歸つて來てる事ですし何時どんな方がいらつしやるか知れないものですから」と、素氣なく斷つて終つた。をば樣も「さうでも御座いませうけど—」と困つた樣子、お柳は氣の毒でもあり、又その中野とかゞどんな人かも見たく、それにそんな人でも一つ家に居るとこの寂しい家の中にいくらかにぎやかになるかも知れないと思つて「一月や二月なら、母樣、おいてお上げなさいな」と云はふとしたがふと胸に浮んだ事があつて默つ

てしまつた。そしてそれを打ち消す樣に編物の手を忙がしく動かした「ねお柳お斷りしたがいいだらう」とおつねはコンコンと煙管をはたきながらこちらを向いたがお柳は顏も上げず手を動かしながら「えゝ」と、心にもない返事をしてしまつた。そして取り返しのつかぬ事をした樣な氣がしてならなかつた。「おいてあげて下さるといゝんだけど―」とをばさんは獨り言の樣にいつて「ね、お柳樣、あの方お晝はそんなにいらつしやらないんですからお友達がいらした時でも遠慮なくお話しでも何でもそこでなすたつていゝんですからおいて上て下さいな」よく太つた膝のあたりをなせながら、いふ「ええ、私はいいんですけど、どうですの母樣、あんなにおつしやるんですから、」思はず云つてしまつてとんなにまた母がいふだらうかと、とく〳〵しながら、心持耳



（入選）髮洗ひ　福井市　岸本てつ子

のあたりを赤めて母の顔を見た。「をばさん、どうぞ」と河井のをばさんも少し辭づいていふ。

「私もお置きしたいは山々なんですけど、何分女二人でそれに先樣もお若いし此娘も年頃なものですから、又人の口がうるさくてねえ、あなたにはお氣の毒ですけど」とお柳の横顔をチラと見て薄い唇のあたりに笑を湛へながら煙管を指の先でまはしてゐる。お柳は、「あら、あんなこと」と恨む樣に言つてうつむいた。そして「おいてあげたら」などゝ言はなければよかつたと悔いた。をばさんもまあ！といつた風をして「あらをばさんあの中野さんてそんな方ぢやありませんのお年こそまだお若いけど澤山な人を使つてやつて行かなければならないんですから世間の若い方と違つてそれやしつかりしていらつしやるんですよ」と一生懸命に言解をしたがそれでもおつねは中々きかない、「そりやさうでせうけどもね」と嘲ける樣に言つてをばさんを見て、「世間てものはやかましいものですからねえ」、お柳は悲しくなつた。毛絲を見つめて居る目には涙さへためて居た。尤も此夏長田とかいふ職人――お柳が京都の叔母の家にゐた時分始終こゝを出入したといふ――を置かうといつたとき「男の方つて一人でもいくら氣輕な方でも億劫ですからおよしなさいな」とおきたさうな母を止めたお柳が「置いて上げては」などゝいふのは矛盾した話なのだけどそれにしてもこんなに自分の身をおやぶまれてゐる事がお柳には情なく思はれてならなかつた。

そして母にはねつけられた中野が氣の毒で又そんな人と一日でも一つの家に居て一寸話でもして見たい樣な氣もした。

「それでは家の者は茶の間にでも居て座敷に居てもらうことにしませう」と着物のしわをのばして立つて歸つて行く。お柳は止めたかつたそして色々中野の噂が聞きたかつた、けれどもそれも思つただけであつた。手紙でも書きたい樣な氣もしたが見も知らぬ人にそんな突飛なことも出來なかつた。

○暗き運命（つゞき）

牛込　さかえ

殘りの水を、もうくいしばつて了つた口へ注ぎこんで背中を撫でながら、「辻さん……つじ……さん……」と先生と原田は耳に口寄せて、かはる〴〵よびいけて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ゐる。
外の生徒達は、ことゝも音立てずに見て居た。
暫くしてから聲が耳に入てか、水がのどをこえてか「ウ、ン」とひくゝ、うなる樣な聲が貞子の口からもれた。
「あ氣が付きましたか、辻さん」と先生はなほも親切に介抱して居た。
貞子は又「ウー」とひくゝうなつて、頭を持上げてあたりをぢつと見廻して、亦ぐつたり打伏した。
ぢつと見て居た生徒達は、「あゝら」と最ううき足になつて居る者も有た。
「あつ靜かに靜かに」と先生は手もて皆んなをせいして席に付かした。
貞子は未だ正體も無く打ち伏して居た。

貞子は春野が「あつ」と叫んで、「辻さんが辻さんが」と云た聲がかすかに耳に殘た切りで、氣が遠く成てしまつた。幾程かたつてから、ふと氣が付いて邊りを見廻すと、先生と、級長の原田とが、コップを持た儘、心配想に前後に立て居た。然して多くの生徒の瞳は一樣に貞子に注がれて居た。
「あゝ又だな」と貞子は直思つた。
「あゝ情無とシミ〳〵思ふと、亦頭がズキ〳〵痛んで來た。
「氣が付きましたか、辻さん」と先生はホッとした樣に云て、「貴女たいへんだつたのよ、まあよかつた」と原田は始めて安心して云た。
「御心配掛けまして」と貞子はやつと其れだけ言た。
「たしかですか、其んなら彼方らで靜にお休みなさいと先生に親切に云はれて、貞子は向へ行くべく立上つたが、足元が定まらず、ヒヨロ〳〵と危なさ想に見えたので原田は氣を利かして、つとかたを借さうとしたのを貞子は「いゝえ」とことわつて、二人に手を引かれて、敎室から一番近い、作法室の隅に白の毛布を敷て横に成た。
其の次の時間が終んでから、先生と原田の二人が一緒に貞子をたづねて來て、病氣は如何、ときいた。貞子は「最う大丈夫ですから」と禮を云た。
「其れぢや俥を、さう云てやりますから今からお宅へ歸つて靜におやすみなさい……ね」と先生は云た。
「えゝですけど……最も大丈夫ですから」とオロ〳〵聲に成て「其れに今日は父もをりませんから」と貞子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は其れと無く母の冷かなのを、先生にもらした。
「さう」と貞子の家庭の有樣をよく知ている先生は別に何んとも云はなかつた。
「ぢや暫くしてから氣分がよく成たら又出ていらつしやいね」と云て二人は出ていつた。
貞子はぢつと二人の後を見送て、自分の運命を思ふと又してもハラ〳〵と涙がほゝを傳ふのだつた（をはり）

○いさくさ

千葉　村上咲子

おもひ出したやうに時々硝子戸がなつてゐる。そとには風があるのか。
『それから貴郎は今月の俸給は一厘もうちへは、持つていらつしやいませんのね？』
半ば笑ひを含んだ春子が眼は、いぶかしさうに龍夫を見たが、心の中を見すかされるのを怖れるやうにすぐ眼を落して、極めておちついた風に見せてゐる。
『フム、それがどうしたかい、今月は旅費だけでやつてゆくんだよ』
龍夫の顔も、サッと替つたが、急いでとりなほしてやつとこれだけに云ふた。
いつになく寂しい室である。たゞ電燈計りが柔かく二人をてらしてゐた。
『まあ』と云つて、春子は包みきれぬをかしさを出すが如くに笑ひながら、
『ほゝゝゝそれがどうした？つて、私からお訊ねすることですわ、そして何十圓ものお金をどうなすつて？とつて來ないつて、噓ばつかりお仰るわ！』
『全くだよ、藝者屋へやつてしまつた、まだあるんだぞ、お前の來ないうちのが……』
と云つてはゝゝゝと大きく笑つたけれど如何にも寂しい聲であつた。
硝子戸はガタン〳〵とやつぱり音たてゝ鳴つてゐる
今迄包みつゝんだ春子が眉の間には、この時憂愁の色があらはれた、けれど口許にはやはり笑を湛へて、
『うそばつかり有仰るわねえ』
小さく云つて暗い方に身をねぢ向けた。
今はもう込み上げてくる、悲しさと口惜しさに、涙がホロ〳〵と流れてくる。默つて齒をくひしばつて、堪えたけれど、水臭い！隔てられる！と思ふと情けなくて殘念で、どうしてもじつとしてはゐられぬ。こんな苦勞してまで、隔てられてまで！……思ふとたまら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なく涙にむせんだ。
『そんなに憤らなくてもいゝぢやないか！』と龍夫は春子の肩のあたりに手をかけた。
『だつて、だつて、貴郎は嘘ばつかり有仰るんですもの私はこれほどの苦勞してまで、苦痛を忍んでまで夫婦にゐるのに、そんなに隔てられては口惜しいんですもの、水臭いんですもの……』
明に向いた春子の顔は涙にぬれて蒼白く物凄く見えてゐた。
『何もうそは云はないよ、それぢや小川の宅でも訊うて見るがいゝさ——』
『いや〳〵私、そんなことが何うしてきかれますか』



ひるすぎ　北海道　蒲原照子

『いやならどうでも勝手にしろ……苦勞、苦勞、こんな苦勞するのがもう嫌になつたと云ふのか』
『こんな苦勞ぢやないんですの、心の、このように辛い心の苦しみでございます。それを貴郎にそんなに隔てられては、やるせがないんですもの——』
『心の苦しみ！お前一人だと思つてゐるのか』
『これほどの苦勞も誰のためにしてるんだい？親に、親に背いてまで！如何に可愛い妻だつて、親にはかへられないつ』
はじめからさめ〴〵と泣いてゐた春子は、この一言に涙が止まつて、其場にあつた紙切を、ぐちや〳〵に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

引き裂いて、あらぬ暗い方に投げつけた春子の面は强かつた。

そしてわなく／＼と顫ふ唇をぎつと嚙みしめて、前櫛と後櫛の落ちて散らばつてゐるのを、拾ひとつてそのまゝ又なげ出した。

『ぢやあ、どうも濟みません、すみませんから別れませう、どうせ一生夫婦にをるおつもりぢやないんでせうから、それで隔てもせられませう、いつ、いつ親を捨てよつて云ひましたの、もう私もふつゝりイヤ氣がさしました。』

神經の高ぶつてゐる春子の聲は强かつた。

『それでお前は今更別れてどうするかい、今になつて別れる必要はないぢやないか、別れてどこへ行くんだ家へは歸れなからうが？』

『でもあなたにお氣の毒ですもの』とこゑを曇らせて『別れたら死んで了ひます、私の活きてるうちは、貴郞も御苦勞が絶えませんし、私も辛うでざいますから死んで、しんでしまひます――』

龍夫のひざへすがつて泣いて伏した。

『私があんなことを云ひ出したのが惡かつたんです、堪忍して下さいねえ、そして御機嫌なほして下さいまし』

小さい涙聲は龍夫の膝に伏したまゝに、悲しさうにきこえてゐる。

『親に背いた罪が怖しいから、せめては、せめては妻に隱してまでも、お前に嘘吐いてまでも、金でも送つてやらうと思つてゐる私の氣も知らずに、心も苦痛も知らないで、責めて／＼憤り立てると云ふの間違つてる、問ひ詰めなくてもわかりきつてるものを――』

龍夫がこゑも、もう淋しかつた。

『それならそれと、はじめから有仰つてさへ了へば、何の云ひこともないんですのに、隔てたりなんかするからよ』

『己は又、お前が氣持わるがるかと思つて！』

『さう？けれど隔てられた方が餘程いやですわ』

大風の吹いて行たあとのやうである。

硝子戸は矢張り音立て鳴つてゐる。

○不　具

横濱　月くさ女

世話好の栗田と云ふ男が來て、三四時間も話込んだ末、母に何事かく／＼と繰返し／＼々々賴み乍ら歸つ

て行つた。お節や外の小さな兄妹達は、「又誰か屹度連れて來るんだよ」と云ひ合つたが、其夕方、晩餐に家内中集つて、テーブルを圍んだ時、父はお節の方を向ひて

「節、明日からお節の友だちが増えるぞ」と云つた。

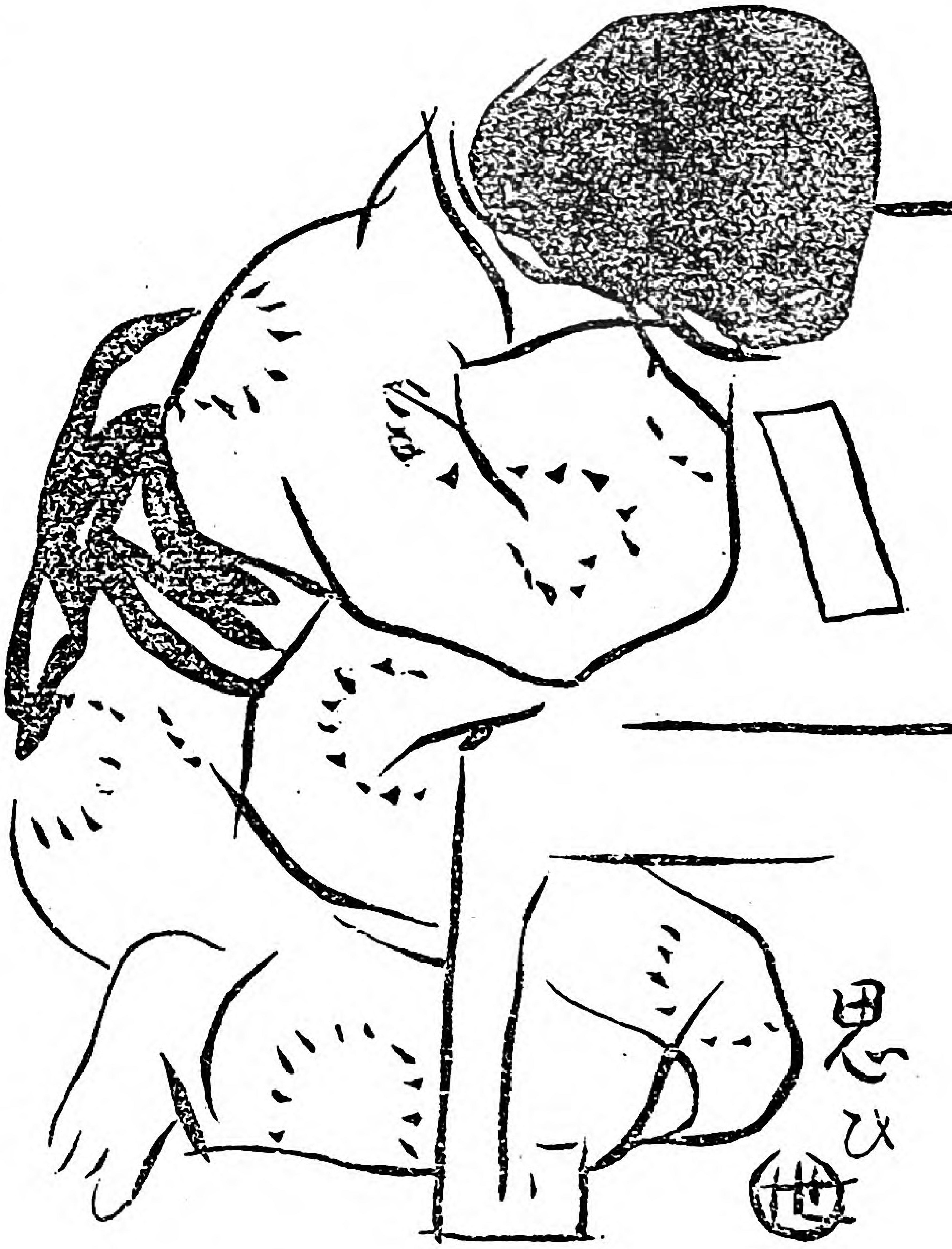
「エ、姉樣のお友達?」と二番目の弟が不思議相に問返すと、母親が之も笑ひ乍ら、

「なアに啞の娘だとさ、皆仲よくして遣なくちや不可ません」と優しく云て聞せたので、皆默てコックリした。

各々床に入つてからも其事を云出して大きい妹が、「ネエ、姉樣啞つて者は意地惡だつてねえ」すると末の弟が、「屹度僕達は辛められるよ」と悲し相に面を見合た。

「大丈夫だよ、此方で優しくさへすりや誰だつて優和しくするわね」口から斯う云ひ乍らも心の中では矢張り人傳へに聞いた事等を思出して、不安で成らなかつたのである。

翌朝の十時頃、栗田は一人の若い女を連れて來た。髮にさした大きなバラ、派出な矢絣の銘仙に緞茶の袴、ハイカラな鴇色の肩掛も年には派出過て調和を保つて居ない。お節は何となく欺かれた樣な氣がした。之が眞實の



思ひ　赤坂　高城幾子

唖だらうか、今迄に見た唖等がもつと〳〵地味な無骨な風をして居たのに思ひ比べて、勝手が違つた樣に思つた。

でもよく氣を付けて見ると、眼の異樣に光るのと、口の開き方が尋常では無かつた。栗田が話す間も時々振返つて手眞似をしたり、掌に書いたりして見せた雖動かう共せずに俯いて涙ぐんで居た。

「姉さん、姉さん、泣いてるよ」斯う弟に注意されて見た時はレースの雑然ついた半巾を面に當てゝシクシク啼泣して居た。その可憐しさには皆泣いた。殊にお節は、青春の若い身空で思ふ事も云へず、聞きたい事も聞えない其辛さを人事ならず思ひ遣つて自分の胸が狹まる樣な氣がした。可哀想だねえ、如何して慰めたものか知ら、母親が心配想に聞くと、栗田は暗然としたが、

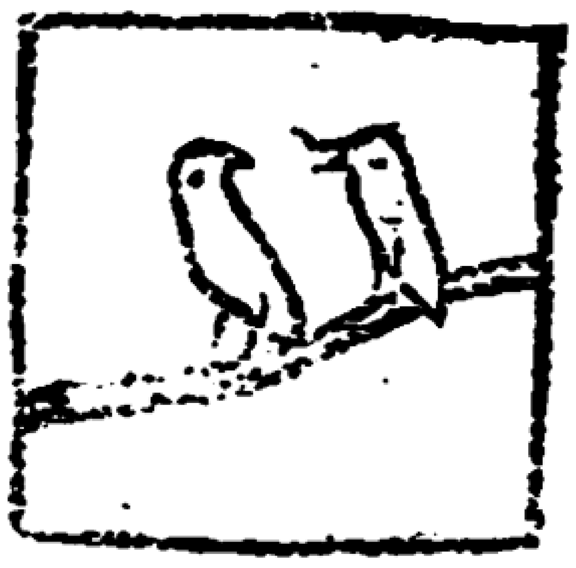
「否、二三日は斯かも知れませんが、慣れると直よく成りますよ、何しろ盲唖學校を卒業して居ますから言葉に不自由は有りませぬ」と容易氣に云置いて歸つた

其から暫らくの間は泣て許り居るので皆手を拱ねて傍觀て居るより外に仕方が無かつた。弟達は面白がつてわい〳〵騒いではいつも母親から叱られた。氣輕な辰やが隣の奥樣が嫉妬になつた風をして見せたので、遂々「ハヽヽ」と聲を出して笑つた。其から少し落付いて來たので小さな妹はよく耳許に口を壓付けて「國子さん……」と怒鳴つたりした。

這麼時でも母親とお節の外は決して傍に寄らうとも爲無い、殊にお節には何事も打明ける風に見えた。何か話をして居ると、直ぐ自分の惡口を云て居るんぢや無いかと目を光らせる、菓子等でも一番多いのを取る物を遣ると何時迄も傍に屈着いて居る、十九と云ふ年で居乍ら全然十二三の子供より發達しては居なかつた誰が好きと、掌に書くと「貴女と叔母さんあと皆きらひ」定つて斯う書く。終には面白がつて「國公の馬鹿やアヽ」等と大きな聲で云た。素振を見て自分の事だなと直氣附く、全く感は人並よりも强かつた。そして直、自分の室に入つてシク〳〵泣いて居た。

國子が來てから何となく重い空氣が家中に漲つた。母親は同情の念が溢れる爲に始終沈み切て居るし、父親も酒の時等は、

「おい、如何かしないか、既彼女の面をみる度、己は堪らん」等と云出した。お節にしても彼女の面をさへ見れば胸が痛んだり頭を壓付けられる樣な氣がした。



散文

編輯局選

○月夜（天）

麹町　ふさ子

サラ／＼と繰る幾尺かの巻紙さはやかな筆跡は美しかつた、十六夜の月の白う射して室には行燈もついてなかつた。

藤の花の繪表紙の詩集、それを枕にねころんで居た二人の着物は白つぽく、何もさゝない髪は亂れて表紙の上にこぼれて居た。

私は手紙を讀んで聞かせた、聞いて居るのか居ないのか友は默つて應へなかつた。

月は築山の松ヶ枝をはなれて更に早く空を歩く、蒼白く池水の輝くのが見え、花壇の鳳仙花カンナアは只黒くかげを落して色彩もはつきりしなかつた。

長ゝ間沈默はつゞく、私の胸の底の方は溢れるやうな血の騷ぎが止まぬ。あるものを求める強烈な願ひとそれを虚はる一面の努力と――そしてからうじて冷やかな去りげない態度を保つて居た。

「夜が更ける――」

と、ふと云つて見た。

「更けたつていゝ、こんな晩があるもんぢやない」

罵しるやうに友は呟いて

「貴女もどうかしていらつしやる、恐らくこんな事は――私を除いた他の人の前でされる筈のものぢやない、あなたの生涯を通じてさう毎々來られる夜ぢやない、月を美くしいと見る事も今のあなたぢや出來ないでせう、私はあなたに醒めよと強ひない、只醒めねばならぬ時のいつか來ることを恐れるばかり」

左樣云て私を覗なかつた、只じつと月を仰いで心持長い息をもらした。

「默つて居て下さいね、只だ無言で聞いてゝ下さい、怒じとやかく云はれると却つて餘計な反抗心が起つて――涙が出て來ますもの、何でもいゝんだから――ね」

文がらを胸に懷いたまゝあふむけになつて天井を眺めた、ほの暗い四邊、月の光は室にあるすべてを物凄い色に見せた、一りんざしの赤いダリアも只くろく大きかつた。

沈默、それをつゞけて居る事にも私の心は苦しかつた、堪へ得ぬ迄に長かつた。

「つけませう灯を」

うなづかうともしてくれない、それを構はずマッチ

をとるのが弱い私にはされなかつた。

「一晩丈かうしていらしやいと云ふのに、そんなこと位が出來ないの」

　友の眼はかゞやいた、そして月は――きれいだつた疲れたからだのやるせないつらさ、石のやうに固くなつて月の沈むまで更かして居た、二十の夏逝く夜のこと。

張りつめた感じを持つてゐる、題材も技巧も共に好し（醉茗）

●誤字●　困しかつたは苦しかつた●堪え得ぬは堪へ得ぬ。

暗い寂しい自分の心のすみどに人を誘ひ入れんとする強い魅力がある、讀んで了つて、わけもなくハラ〳〵と冷たい涙が落ちた（白羊）

○路傍の窓（地）

米澤　すゞしう

晴れても曇つても雨の日にも機を織るには開けぬてとのない北向きの窓の外は街道で、こゝからとる明りの加減は朝も晝も白く平らである。

　午後になつて後の高窓に日が射してくると、いまゝで木綿のやうに、光澤もなかつた機の面は俄に眩しいほど光つて白茶の勝つた細い縞目がちら〳〵して織りにくい、街道ををり〳〵秣を滿載した荷馬車が通つてゆく、ちかいところの低い山野に生い伸びた草の乾いた高い香りは窓の内まではいつてきて、泌みるやうに胸を撲つてゆく。

　どん〳〵、からり、どん〳〵、からりと袴地を織る重い筬音は通る人の耳にもとまるだらうか。八月のはじめであつた。これから、かゝるといふ野岩越線の測量にきた技師はこゝの窓下の日蔭なところによつて、何か圖をひいてゐたのが、東の方の窓に廻つてきて、「手織ですね、――袴地ですか、それは」などゝいつて、おもしろいものでもあるやうに見ていつたこともあつた。

　からり、からり、からり、と黒い一筋の絲を曳いて、走る梭は輕いけれど筬の重たさいつもおなじなこんなものを織るのは倦きてしまつた。始終柄のかはる派手な紫矢飛白でも織つてみたくてならない。着たくなるかもしれないが、どんなにか心がなぐさめられるだらうに、私は何故はじめからこんなものを織るべく習つたらう。

　からりと右手から通した梭を左手に受けて、私は空を見た。このごろは高く冷やかに晴れ渡つてゐるけれど、私はいつも機を織るせわしさに囚れてゐる氣持でのび〳〵と眸を放してやることはなかつたが、泌々とした眼付はせずにをられない。赤蜻蛉が水中に浮遊する仔魚のさまして、空ひく〳〵飛びかうてゐる。電線にもいくつもとまつてゐる。

　ばた〳〵〳〵と、高貴綾を織る輕い筬音が向ひ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の二階からひゞく。私は自分の機拍子をすてゝ離れてきいてみたいと思つた。

いつか月の清い晩、唐茄子を高く吊つたのはこの君ぢやなかつたか知らん。越後の木村うた子さんとよく似た性格らしい、事實女だとどれだけ頼もしいか知れぬのだけれど、こんな平板な、奥さんだか下女だか分らない文章ではしやうがない(X)

此人は初手より文章はうまいがXの云ふ通り性が分らぬ、併し此文章は實に水際立つて巧いものだ(SM)

●●●●●●●●

誤字　泌々といふ眼付は何の事か分らぬ、泌泌としたとなほしたがそれでもをかしい、

○秋晴（人）

前橋　みづ枝

高い紫の大空に、白いちぎれ雲が早く〳〵走る樣に西の方へとんで行く、さうだ丁度美しいはづかしがりの少女が、多くの人前を通るん……急しく飛んでいく。



秋晴　本郷　山村こと子

竿にかけた眞白な敷布や、赤い派手な友禪の夜着に暖い秋の太陽がまぶしい程反射して、松葉ぼたんのさいた、飛石のあたりは、陽炎が燃えさう。

私より、五六寸も高い兄樣を、抱へる樣にして、漸々すもゝの下まで來た、「おうすもゝの花が咲いてゐるね、」白い淋しい花が、返り咲きした梢を仰いで、珍らしさうにかうおつしやつた、「みづ枝、僕は此水で、一つ顔を洗つて見るから、後から押へてゐておくれ、」「え……大丈夫？」「あゝ大丈夫だとも」笑ひながら、せゝらぎの側にしやがんだ、兄樣の後から、確かと、白い兵

兒帶の結び目を摑まへた、「あゝこれでさつぱりしたよ」やせこけた頰を撫でゝ上向いて、大きな深呼吸した兄樣の姿、一月前とは變り果てた樣子だけれど、私はうれしくつて、自然に涙が出て、笑ひ泣きをして終つた。

兄樣は默つて紫蘇の實を摘んでゐる、私も摘んだ、あゝけふから又、明るい家になれるのだ、と思ふと押へる事の出來ない喜が、からだ中に漲る、

初茸はいかゞ――初茸は――、白い手拭被つて、脚袢はいたお婆さんが、脊中へ籠を脊おつた姿を見ると何といふ事なしに買ひたくなつて、「母樣買ひませう」と、木戸の所へ出て呼んで見た、

平たい籠に、靑い草を敷いてあふむけに並べられた小さい、大きい茸、――褐色の、まだしつとりとした土の着いた根から、懷しい香が漂つて、去年の赤城山を、おもはずにはゐられなかつた、「お婆さんこれは何處で採つたの」「赤城の奧でがんす」「今年は遂々いけなかつたなあ」兄樣も懷しさうにおつしやつた、お婆さんのいつた後、紫蘇の實と初茸をなかにして、三人は緣側へ腰掛けて、日光を一つぱいに浴びながら、晴れ〳〵した、お話を、いつまでもつゞけて居た。

これだけは本當の兄さんのやうな氣がする、さつぱりしていゝの、淸いのとほめることだけは控へておく、兄貴でなかつた時はばかを見るからね（四）

如何にも秋晴のやうだ、普通の女も少くもこれ位には書けるといゝ（SM）

誤字　燃へは燃え。

何の投稿にも誤字のないことはないと云ふ證據を示す爲め、諸君の作、恐く誤字を擧げた、假名使ひの誤りはまたしも恕すべしだが、漢字の誤謬の多いのは困る、今回のはたゞ諸君の反省を乞ふ爲め一人二三語を擧げたに過ぎない、又誤字脫字の外に字體の亂雜なのも困るが、此れは筆蹟を出すわけにもゆかぬから見逃して置く、けれども此れも合せて改めて頂きたい（一記者）

○めざめどき

本鄕　磯村はる子

綠の林は、やうやくに明るい輝きをひろでらして、重いまぶたに痛い快さを與へる、じい〳〵と蟲の音……

…………

「土」――あゝ、この土よ。

醒めをのゝける綠の夢、ふく〳〵して雨上りの路についた草鞋の跡を、お化けの足跡だと敎へられて、おばけこわいと泣いた七八つ頃、左目の吉爺にバアとおどかされて、せつせと駈込んだ石鹼屋の家。廣い乾場にパチ〳〵と菫の實がはねる、紫雞頭づゝしりたれた小屋のまへに色黑のきついよつちやんの友禪被布をうらやましいとみた、洗ひざらしの盲縞の赤帶した子を人はおとなしと褒めてくれる。散れる花を絲に貫いて衿に飾りし幾年は實に幸であつたと思ふ。紅は土にひるがへり、若葉は眼ざめし我むねよ、あゝ如何に、母

と子との……我等が上のみならねど、實にいたましき戰なりしよ。

黝づんだ紫の雲ははねをさめて、林の上の透明な空に、とび〳〵にかたまり合つて、背をみせて、金色の日を浴びてゐる、

かゞやかしき自然なるかな。

とこしへに、かざゝん花の色あせずば、處女てふ名にも榮あれど女なる名に背いて、こと更に純潔をほこる年たけし人の心情よ、君君をあざむけるにあらずして何ぞ、ねがはくば君よ、みこゝろを靜めて、徐かに人生の歸趣を思はせたまへ、私は僞はることはきらひである、私は眞面目なる心持で新しき家庭に入るのである。

白きとりよ、にび色雲かいくゞれ、上にぞ、上にぞ我等が生くる住家はあらう、よしそれが、はかなき夢に終つても構はぬ、未來は一個の大なる謎、吾等ふたり全力をつくして、奮闘しつゝ、價値ある生を送らんことを誓ふのである。

血のやうにかゞやく葉げい頭の神のひらめき………我、「我」をはづかしむるな。はなやげる寂しさに胸はいたむ……………

うらがなしこの束の間
の安らひに
かゞやける紅
かゞやける金
夕ぐれは、美男
かづらの垣により
君をしのばん
町なるきみを
み心にあふれし
水のしづくする
日をおよび折る
身をあはれめど



冬　着　　　金澤市　　中田なべ

あなたは好い意味に於て處女時代を葬り、好い意味に於て人妻となつた、今後の發展は、平凡と平凡ならざるとの二つの途を考へて行けば間違ひはない（醉茗）

●誤字　おのゝくはをのゝく、楷書をつゞけ書きにせぬこと、假名を正しく書くこと。

私は處女時代に於ける此人の文よりも、人妻になつてからの文の方

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が興味のあるふつくりした氣分に道附けられるやうに思ふ、全力だとか奮闘だとか空虛な抽象的の文字を羅列することを止めて、靜に修養しつゝ進んでいつたらば、或は未だ他の發見し得ない新境地を開拓することが出來るかも知れない（白羊）

○柔らかい雨の降る日

水口鈴蘭

絨の目からでももれて來るのであらう？、柔らかい細い雨が靜かに蟲鳴く庭に降つてゐる。秋には餘りふさはしくない雨だが、斯う何かしら淋しい、遣瀨ない如うな感じのする此の頃の私には、若草の上に音もなく降り注ぐ春雨のやうな、今日の雨が大變嬉しく、冷え切つた身體を何かで溫めて貰ふやうな氣がする。午後になつても風は出ず、雨は朝と同じ調子に降つてゐる、私は直ぐ近くの〇〇學校の溫室を見に行つた、案內の先生の入口を開けやうとなさるのを、辭して、雨に濡れたグラスでしに、とりどりの美しい花を懷かしい思ひに眺めた、透明なグラスも雨がたまつては、流れ流れしてゐるから少てし茫としてゐる、併かしそれが又なく良いやうに思へる。情緒を逆らねば止まないと云つた樣な、眞紅なゼラニアムや晩咲の紫羅蘭が西の方に、にぎはしく咲いて居る、ベコニヤが長い花柄をつけて、物思ふ若い人のやうに力なく、そして美しう、うなだれて咲いてゐる、それでゐて何だか觸はれば痛さうな刺のある葉を持つてゐるのが可笑しい、同意の有る人を見るやうだ。東の方に臺灣に出來ると云ふ胡蝶蘭が大きい長い葉を、伸ばしてゐるけど花がついてゐないので淋しい、小さな名も知らぬ紫のが、房のやうになつて咲いてゐる香すみれが優さしく咲いてはゐるけど矢張り秋の故か溫室も淋しい、花物でない木や何かは隆々と勢よく、吾等が國は常世に春だ、と、がほに技葉を伸ばして、グラスに枝の先端をつきかけてゐる、周圍が周圍だけに憎らしい如うでもある、斯んな事を思ひつゝ溫室を見て終つた、秋になれば屹度私が思ひ出すセルビヤの眞さかりのを數本貰つて歸つて來たホッと息を吹きかけると、ふつとゆらぐのが私の考へてゐる事を克く解釋してくれるやうで非常に嬉しい雨は相も變らず柔らかく降つてゐる。

上手にはなつたが、溫室を見たといふ事がこの人にどういふ關係があるのだらう、ちつとも個性が出てゐない。（X）
關係の無いことを書くのも文章道の一には相違ないが、個性が無いといふ事は卽文章に生命の無い事で、新聞の記事とはちがふからね●Xの言を誤解してはいけませんよ（凹）
●誤字　常代は常世●
柔らかな感觸を持つてゐる、烈しく人に迫るやうな熱い情緒はないが、何處かにホンノリとした微溫が通うてゐるこんな事で固まつて了つては困るが、此人の將來は多少の豫期すべきものがあるだらう。（WHIT）

○疲れし後に

神戸市　みづはしら

白日のほこりにまみれた足のゆるみ、もがけばもがく程、鈍くなつて行く自分の體よ。狹い額下げて、喘ぎ喘ぎ、猶着飾つた動物の群に噛り附いて居る此の心よいつまで此の愚さが把持されて行くのだらう　何が故に此の愚さ、此の果敢なさを絶たうとはしないだらう　いいえ、もつとく以前に絶つては居なかつたのだ。「私だけはこんな者に見られては悲しうあります」。と一言たりとも辯解する餘裕あらば、潔よく纏へる布を脱しないのだ。「仕方がない、私もこんな群に這入つたのだもの、何んと言はれたつて仕方がない。」と諦の心のさても淋しいことよ。彈丸と降り注ぐ嘲罵の的に動きも得ず、身を置く不甲斐なさ、誰れか此の果敢なさを見出してくれう。嗟。だけど、だけど、同情されるのはまたなくつらい、彼の女の一生は悲慘であつた、と言はれるのが苦しい。



井戸端　　下谷　井上ゑと

冷たくてあれ、凡てのものに我もまた餘り自我本意でしたからと、罵る人あらば、わが病む枕邊に來つて罵れ、寧ろ喜んで的たらん。

實に過去の夢は現在の苦痛である。

重い足を動かして、あたへられたるタイムを過せば命の糧は得らるゝけど、其苦るしみを切り貫けて、ホッと吐息漏すと、そこにはまた新らしい自己と言ふ、苦い者が、靜かに待ち設けて居る。私は此の第一歩の者の處理を投げ捨てゝ置いて、先づパンの糧は泣かねばならぬ恐ろしい境遇を持つて居る。此の恐ろしい境遇の下に、苛々しい狂氣じみた、其癖表面に平凡を裝ふ醜い不透明な私の個性が、哀れに平伏して、勝利を得やう、得やうと絕えずあせつて居るけど、私の天地は狹かつた、思ひ迫り、思ひ疲れて微かに湧く淡い泪それすら既に私の慰藉ではない。

遁れたい、遁れたい、凡てに於て遁れて仕舞つたなら、或はそこに永遠の慰めを求め得たかも知れぬ。狂ひ疲れた形骸一つを、峨々とした氷山に橫たへて仕舞つたなら、冷たい冷たい滴りに、私は私を知り得たかも知らぬ。赤裸々の私?、私はまだ存じません。

私をこしらへてくれた造物主すら、それはまだ知らないのでしやうけれど―それを私は悲しく思ひます。人を人と思つて縋らんとしたSすら、社會を思はざる狂者」と申しました。誤れど、甘んじて受けましやう。社會が、德儀が、私の耳に響く樣だつたら、義理や人情にからされてゞも、もつと〳〵狹い天地に安々として、生きやうものを。自刃させる果てに、猶こんな文字で綴へ樣とする暗い天地と、暗い足元と、いづくまでも〳〵暗はつゞく……………。

目に立つて進みました、此　位審ければ大いに心强い――が、此思想はあなたの個性として認めかねます、類型の澤山ある思想ですもの、此れはこれとして更につきつめた境地から一步退いて世の中を考へてごらんなさい(醉者)

誤字　至方は仕方。狂氣地味たは狂氣じみた。

もう少し大きく目を開いて貰ひたい、外に言ふことはありません(白羊)

○水音

本鄕　平塚白百合

宵の灯はかゞやかしく窓をもれはじめた、カーテンを透して。一旦とざしかけた花も再び鸚愕の面影をうかべて、卓上に、バルコンに、濃艶な香りを漂はせる川ぞひの溫泉街はくまなく灯がついたのだ。

くらく靜かな眠に沈もうとしてゐる箱根連山の上には眞珠のような星がまたゝいて。赤くなやましげに連なつた宮の下堂。島く迂回した一條の火の流れる。鼻先きを白い馬にたづなゆるめた外人が一瞥をあたへて過

ぎた。

やはらかくまつはる衣づれとスリッパーの音と、ドアーあけなはなした私の部室の前をお安は洋人の小脇に抱擁されて、しら〳〵とほゝゑみながら通つてゆく

明日の事はあす考へるさ、かうなげやりに、今日といふ日を華やかに笑つてくらす其の口元に、憂愁の小さき皺は既に織られてゐる。私は窓下に幽かになく虫の音の中にこんな事を考へても見た。

玉突場には人かげがいくつか亂れて、玉のすれ合ふ音がなつかしい。

早川の水音はよほど高くなつて、月の光りをくだく瀬の白さが六岩をめぐつては結ばる、

上手はおだやかに夜の中に沈んで、下手の街は飾窓からさす光りが逍遥の人達を浮き出させてゐる、一商店の前に私はけば〳〵しい歌麿類似の畵を一ぱい掛けた店を見出した、何となくはづかしくなつた。隣つた陶器商會の品物も、俗惡な。たうてい日本の物として世界に披瀝されるものではない。こんな色彩のあくどい趣味のない陶器の並ばつた中に、大庇にした女がお白粉の上光りした顔をつき出して、物色するやうないやしい目して爪先迄見下した。

のがれるやうに上手に、川岸に立つたとき、御用邸の黒い森の中から赤い灯がやはらかに光つてゐた。

私は横に流れた人の影に無言のまゝ、川音をきゝながら歩いた。

「た」が多すぎる。たの多いのは斷定が多いのである。佇徊なく幽玄が無い。お茶漬さら〳〵、急いで咽み下して了ふからうまいんだか拙いんだかわからしない。この頃女子文壇の作家はどん栗の背比べになつた、と酔客が嘆いてゐた、山田邦子内藤千代子をはじめとし盛名次第に衰へて手腕また落下す見じめさつたら無い（ＳＳＳ）

誤字　披瀝は披瀝。

夫れ風の強く吹くや駁を鳴らし、洞を響かし、水を激し、火を燃し西山方百里の石をして東海に轉落せしむ、然も其勢の衰ふるや、一塵毫　微をすら揚ぐることを得ず是れ力の自然也。人力豈一張と一弛とを免れんや、況んやミセス、リリー、巾幗の身を以て遠く函嶺富嶽ノ天險を踏破し、其疲勞未だ癒えざるをや、予れ今心に仁を懷ふ、尤も函根にはモット面白い題材が熔岩と一緒に澤山轉がつて居た樣に思ふけれど（ボッチヤン）

○川　柳

正札をこれはいくらと無筆言ひ
幽靈はみな俗名であらはれる
山出しの下女は眞綿とつかみあい
其當座火吹竹にも紅がつき
口上にしたがひ嫁は動くなり
説教も聞きたし嫁も誹りたし
けふぎりの屋根や柳を解いていに
居候ドンが鳴つたと獨り言
知れてゐるものを數へる泉岳寺
叱られる度にむすこの年が知れ
買にやる子へ絹絲を五六寸
二人ぬは女房の傘を貸してやり
胸ぐらとたぶさを分る兩となり



白羽箭

仰臥の人

▲「破笛」と題して、佐藤露子といふ人から金田よし子を罵詈してあべこべに夜雨の人格を疑ふ旨を書いて來た。

宛字を書き假名遣ひをやるのはひとり金田ばかりでない、金田を疑ふならばなぜ直接本人を詰らないか、郵便は三錢で行く、重くても六錢だとある。辭者はいつも三才に採るが、もしよし子の言ふが如く沒書にするのが憎む證だとすれば、いかさま辭者は君を愛する人かも知れないと言つたのは、人格露出、許すべからざる言だとある。露子といふは無論女ではない。可愛相に蒼氣天地に跼蹐する亞流と見えて、立心扁に盃の字を書いてあやしと訓ませたり、モチロンをモンメロンと書いたりしてゐる。

金田の芳子、代志子、香雲子といふ女は、二年前から夜雨が賴まれて直接詩文の添削をしてやつた所謂敎へ子の一人であるが、安價の告白が流行する文壇だけあつて夜雨は所謂「先生」であつたのだ。お斷つておくが添削をそしたれ潤筆料でメシを喰ふ男ではないから、一文だつて束修も月謝も取つてはゐない。貧家の娘で、工女で、厄介者だといふ理由から寫眞すらおくらうとはしなかつた。

詩はまことに上手になつた。去年以來沈滯を極むる詩壇に在つてひとり水際立つた働きぶりを示した、伊東のなぎさの女、淺草の露木あき子のやうに、初めから女ではないと見透かされるやうな下手なまねはしなかつた。夜雨に睨まれさへしなかつたら其權威は長く續いたらう、惜いかな、其作に散文は拙劣を極めてくだらない上に、あの宛字である、あのかなである。

神戸といふ二字をカウベと訓むことは、モンメロンの露子も知つてるだらう、けれど神戸にはカウベの外、カムベ、ガウド、カムド、カミド、ジンコともよむ。芳子はそれをコドと訓ませて平氣でゐる種類の人だ、露子はスバルの連中がつかりの造つた羅馬字をつかふのを例にあげて、二十に足らぬよし子さんに無理はないと辯じてゐる、冗談を言つてはいけない、佐藤露子をスケフチツヤツポイコと訓んでもい〻のとはちがふ。

常陸から大阪府下和泉國までは手紙が三錢で行くと、御親切オカタチケ。大阪には八代八重子がゐる。梅田の梅花女學校には自分等の姉もゐる、二人のどちらかに逢つて明りを立てるよう度々言つたけれどよし子は應じなかつた。自分は精神的に其文學的生命を奪ふをいたみつ〻も、其誌友と交るや甚おどれるものありと聞きて、公然證明を求めぬわけにはいかなかつたのだ。其次の月彼の兄と稱するあやしい男は大阪へ來た言ふまでもあるまいが、八代にも姉にも逢ひはしない。

自分は金田よし子といふ女性の存在を否定せぬ、けれど其詩は必自作ではないと斷言するを憚からぬ。

でなければ、なぜ手紙と原稿とは本文と署名と異つた筆蹟で書いて來るか、なぜ村木桂子の變名を用ゐて四谷にゐるか、なぜ青山に大鋸町に辭者を訪はぬか。ヒトの事ではない、自分の名譽に關する一大事である。小刀細工は止めて、早く自明の手段を取れと忠告したけれど、今以て避けかくれてゐるのだ。自分はこの佐藤といふ人が住所をかくしてゐるのをさへ奇怪と思ふ。露子さんとやら、辭者は貴君を愛する人かといつたのがなぜ夜雨の陋劣を示すといふのか、說明して御覽なさい、アニ夫れ叱らんやオト〻これふくれんやの「豈」とは少しちがふぜ。それが分らぬ位の頭なら、われ〳〵の文章に口を出す權利は無いよ。

紅葉が言つてをつた「江戸子は氣が強いといふが、また女湯に飛込でかき廻した者は無い、綠にさ〻れるからなあ」君はまさか芳子のくゞつ廻しではあるまい。（蘇生法師）

▲眼看二西丞之荊棘一俯矜二白刄一、身當二北邙之孤兎一尙惜二黃金一跖に曰く猛獸は伏し易く人心は降し難し、谿壑は滿ち易く人心は滿ち難しと、信なる哉。新婚夢陰きしうして、喃々猶足らず、中篇の音を他にもらして得得たるやからよ、君等何ぞみづから恥ぢざる。かへり見よ金風すでに野

に來れり。

「貧なる妻の眉はつねにひそめり」嫁してのちはじめて男性の機微に通ずるものは悲しむべきかな。アルプスの一の峰は人の足いまだ到らず、處女のはたへはアルプスの雪の如し、皎々皓々、誰か得てこれをけがさんや。われは未うまれざるわが妻を愛す。

鈴木春子さんが磯村春子さんになつた。つぎて結婚する者は誰ぞ。（誰だい君の癖になんて）

▲女豪沼倉復子曰く、御自分の事は殿方と有仰て人の亭主を宿六なんて隨分だわ。けれど人妻の君だちはあんな甘たるい物を書いて宿六に見られても極りが惡くないんでせうかと、ましその君言はずや、旦那樣の事を投書の材料にする奥さまはヒドイよ。

▲森田草平かつて「花守日記」を評して、天下無遠慮の文を書くのも夏目先生と夜雨の二人しか無い、どつちも百姓の親方で關東兵エだつたせいだらう」それは何うか知らないが、初戀のおのろけを細君から聞かされて、う、う、さうかい、藝術だつたんだね」と褒める程の君子で無いことはタシカだ。

▲内藤千代子さんも大きな目して、伊藤が伊藤がと恐ろしいのを見せて下さるやうになつたが、それでなくてさへ鴛の眞似鶯の遊中はふざけたいのだ、來年が思ひやられる。江戸子の早川花子たんかを切つて曰くシト、生娘ばかりだと思つてるんだわ。

▲一人にて御飯炊から雜巾がけまで致居候。ランプ掃除と水汲と廊下ふきとが良人の役に候。少しも細君らしき心地致さず「奥さん」と呼ばれて「あゝさうだつけ」と思ひ出すほどに候。これから戸締して女中探しに參り候。雨ふり居候。「はま子」廊下を拭かされては若殿も弱るだらうが、あの華奢な手で米がとげるだらうか（ひやかす代りに同情して見ると心配は有るものだ）戸締して出る時傘は二つだつたらうか（惡る口はこんなもの）

▲度々離縁?の悲みを書いてやたらに人を泣かした土佐のはざくらは、覆水盆にかへつて、めでたくも富山から千葉へ新婚?旅行を試みて。草の門が緋のてがらを賭つた時また唯の一度も丸髷に結つたことが無いと泣いた君、今ごろは大一番であらう。

▲虎の門の女學館の生徒が習字用として、わざ〳〵拵へさせた封筒と卷紙が有る。空海や行成の筆蹟をうす色に摺つた物で優雅極る。醉茗それを賭るとて「僕の字で書いては卷紙が活く」とある、正直のところ醉茗のてゞ書かれては卷紙は泣く方なのだ。が今の女選であの紙に對して恥かしからぬ者何人有らう。Gペンで紫インクで、カブレたりナブレたりする世の中だから、結構悲觀もしないのだらうけれど。

▲「落伍者がこの頃多くなつた。本を讀まないせいだ」と醉茗いふ。今のところ誌友間に多くの引力を持つてゐるのは板倉はま子であらう。低級の人に對しては内藤千代子が渇仰の焦點に立つてゐる。鳥取の女學校に學藝會の有つた時、女子文壇での好きな人、嫌ひな人を投票できめたら最好かれたのは太田きし子。最きらはれたのは名をいふに忍びざる人であつた。新陳代謝は免れぬ世だけれど、今井邦子長谷我菊子の有せしアトラックションはすでは過去の物だ。女子高等師範の入學試驗問題を擧げて喜志子菊子の二人に質問した時、易かつたのか難かつたのか、二人共答へなかつた。おなじ時紫封家がわからなんだのは邦子さんだつた。盛名の名の長くないのも無理はない。

▲もう甘言苦諫の言ひじまひである、再にくまれ口を利くこと恐らくあるまい忍んで聞いて下さい。醉茗は凡てに放任主義で、忘レッポウで、新婚十九年のお年よりだけに清濁併せ呑む大きな所が有る。白羊は甘い辛いの間を歩いて時々はお坊ちやんにもなる。自分には二人の眞似は出來ない惡口を言へばおこられ、皮肉を言へばすねられる、アイロニーが飲みこめないで怒つて自殺しようとした人さへ有つた……（でも醉茗は何と思つてか、最初より自分を制肘せず、たゞの一度も迷惑だとすら言つたことがなかつた）かつて自分は或人に本を讀ませる積りで目ぼしい物をやつたが、醉茗は生きた本を讀む方がいゝと敎へたので、其人はたちに人に接し世に交りて、あひま〳〵に本を讀まうとしたらしい、けれど疲勞の結果おほかたは眠つて過して、今もなほ三年前の如く文法語格を知らない。筆蹟も依然として「落第點」を墨守してゐる。今になってなぜ落伍すると叱るのは無理ではあるまいか。

▲幸福なる閨秀作家よ。卿等は容色の衰ふると與に才華亦散り初むるを知らずや力めよや。（石楠葉既ちつくして、雲高き朝）

詩

河井醉茗選

○秋（天）

秋の香

齋賀琴子

秋の香の
ゆるやかに流れ
銀木犀の花咲けば——
追懐のやるせなき
その匂ひ………
ふるさとの
あまき小春日
無花果の葉でし
幽かなる光
湯上りにふと仰ぎ

かにかくに明るきおもひ
やはらかき掌
つめたうなれば
あゝ秋の香の胸に染む……

飴うりの笛

夕暮に
飴屋の笛のいたましさ
しみ〴〵と
いとけなき日の返り來て——
ふるさとの
夕陽その時よあかゝりし
桃色の
かざせし花の房長く
御祭りの
かへりの野路よ乳母の背に
さめて聞きにし
飴うりの笛——

孃ちやんよい子とらの兒や
おめざに一つ買うてくれ
あンかい旗もありまする
あれあの海に消えて行く
御日さんのよにきれいぢやぞ
孃ちやん一つどうぢやいな
お情ぢやぞや買うてくれ
さすらひの
旅のひとゝきゆく秋の
哀愁ぞ——
充ちたりし
なつかしや
小旗いだきて飴うりの
遠ざかる
唄の韻にあこがれし……

詩色鮮明、拭ふが如し。
「秋の香」の方が獨創の力があつて好い、忘れ難い詩だ「飴賣の笛」は類型の多い作だが、此は此れとして好く出來た、尤も此情緒は上田敏氏の「ちやるめら」には充實されてある、作者はそれからヒントを得たのではなからうか。（評）

○葩（地）　湯島　望月麗子

夢に見し秋
紅猪口の黄なる青
みに輝きて、
宵の月はほのかに
もにほひ出でぬ。
白きコスモスの葩
の微かな吐息は、
暗より來る冷風と
悲しく縺れて……
　やるせないて
の夢でゝち。
頭垂れ　コスモス
のみどり葉の、
青い幽かな明るみ
に、
―小鳥の和毛
の軟かいつ
かれに―

黄なる花粉は、
絶間なく〱ふりそゝぐ、―



桃割れの女　京都市　山田靜子

―走馬燈の眩惑の如く。―
白い葩は間なくうちふるひ、
どこかで………
銀色の蟲の吐息
が嘆く。―

十月の太陽

白き十月の太陽
よ、
暗緑色の常磐
木の葉かげに、
汝が微笑は寂び
たり。
ほしいまゝに延
びたる細き光線
は、
疎林の薄きうる
ほひを射し徹し
て、
見よ、裸木の白

ゑ肌に暖かく接吻す。

あゝ十月の太陽は、
硬ばれるときは木の葉かげより、
滅び行く森の靜寂を見守れり。
黄なる疎林の奥の朝——森の素足の
冷たさ——
濕りたる土はなつかしくにほひ、
そよろと舞ひ落ちし落葉の片頰は、
弱き光線に微動す。——
あゝ十月の太陽は、
こゝろよき秋の終の呼吸をなす。

『夢に見し秋』は綺麗な細工物のやうで生きた血の通ひが薄い。それに比べて『十月の太陽』は遙に彈力が强い。此詩なら世の中に見せても決して恥かしくない。あなたの散文を見て詩の出來さうな方だとは思つてゐる。詩も散文もお作りなさい、何れにしても今あなたは美しい雲に乘らんとしてゐるのです、裸體になつて花の中に埋まるやうな心持でお歌ひなさい、幻惑も來れ、暗示も來れ、聲も——、夜も——。（評）

○林の呼吸 （入）

豊後　吉田夕草子

寂寥になれた夜の林が
青い息をついてゐる
息をつくそのたびに
しめつぽい
生ぬくい、
重たい、そして暗い風が
冷えきつた私の頰をめぐる
何かしらなつかしい夜の林が
青い呼吸をついてゐる。
ほつれ毛かゝる耳元に
甘い戀をさゝやく樣に——
事々をかなしがる
若き心を慰める樣に——
林が呼吸をついてゐる——

復雜な顏

どてと定めて言はれゝばしないけれ
と………
只どことなしに
復雜な顏。
美人ではあるけれど——

失戀色の青い——青黒い——
鼻の頭にしわ寄せて
笑ふその表情の嫌らしさ——
闇の墓場で電光にでもあつた樣な——
嫌味ある
凄味ある………

どてと言つてさゝれはしないけれど
動いてゐる復雜な顏。

二篇とも態度の眞面目な點で採る、『林の呼吸』は自然を觀ることが荒くて、如何にもほんたうでないやうでいかぬ。『復雜な顏』は散文詩だ、散文詩でも、斯う說明して了つては興味も何もない、複雜な顏そのまゝが表はれて來なければ詩でない、これでは散文に少しも調子がついたゞけで、詩としては何の價値もない、口語詩に誤られたものだ。（評）

寄貨、峯月、吉田の三女を此月の詩壇に得たのは、從來沈滯がちであつた詩壇を革新する第一聲のやうに思ふ、年改まらんとして詩壇の形勢動く、新進の諸賢に待つところが多い。

○蟲の音外一篇

四谷　金田代志子

蟲の音

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

窓の下に
しのびやかに鳴く蟲の音。
其さびしさの流れよる。
病院の窓のガラス
の冷たさ
淡く靜かに顫へる
心……。

聲は微かに、淋し
く亂れて
柔かい月光の中に
漂ひ
其の濕つたさびし
い響は
我が胸内に泌々と
痛ましくも悲愁の
官能をふるはせる

窓の下にて
忍び泣き忍び泣く蟲の聲、
深い寂寥と悲哀のひゞきは
沈默をつゞけて居る月光に交つて
音もなく病女の髮の毛の間に流れ入
る。

かくて其の束の間〳〵にも
病女の生の光はうすれて
「死」に近よると思うては
悲しい涙が痛ましく胸にあふれ



行き過ぎし人　岩手　黃川田かよ

やるせない心は、只病女の苦しげな
淋しい吐息のみを見る。

窓の下に
忍びやかに鳴く
蟲の聲
沈默の月の冷た
さと
若い病女の重々
しい吐息と
悲しくも悲しき
病院の蟲の鳴く
夜

月光

月の光は清く冷
たく甘く柔かく
悲しく流れてゐる。
彼方、日本橋の街の灯はイルミネー
ションの如く美しく輝く
其の上を月光は華かに歩む、

左手の窓よりは若い病女はにごつた
瞳みて
其の光りを青白い光を、悲しくも眺
めて居る。
（斯くて其の病女の髮の毛の間に流
れ入る、窓の下に鳴く蟲の音の冷
たい響……）

二篇とも、のんびりとして氣持が好い、兎に角模倣時代は脱けたらしいのに、何故個性がもつと明かに表はれて來ないだらう。（評）

○夜の亂れ

淺草　佐藤　艶子

玻璃器のやうな眼に映る不思議さは
なやましい瓦斯マントルのやうな月
と
消しても消しても
それでも又來るあのいやらしい顏
あれ〳〵あの黄色な雲の間から
笛の音の流れる行向から
胸のバルコニーの中から
矢張り白い露かいな
こんなに肌の冷えるのは
夜がもてくるいたづらか
いやな男のキスの名殘りか
カラ〳〵と笑ひくづれる顏に
かき亂さるゝ夜のヒポコンドリア
何事も思ふことのない夜
可愛い女を待つ夜のやうに
眠られぬ夜はつらいもの
風鈴はさびしい響をこぼすけれど
何事も思ふ事のない重くるしさ
蚊帳のあをさと
瓦斯の光りとのコーラス
いたましい幻（イリユージヨン）のくづれた跡のや
うに
四肢をなげ出して
何事も思ふことのない時
路傍にいてふバカボンドの心よ

此も亦若き日の歡樂だらう。（評）

○夕雲

鹿兒島　こ と り

我が儘氣まゝに空を飛ぶ夕雲よ！
秋風は今お前を送つて行く、
靜に寄せてくる夕汐と共に、
軒に點けらるゝ灯と共に、
街に這入つてくる黄昏と共に、
何處までも……何處までも。
雨を孕んでゐる夕雲よ！
汝の氣は憂ひに滿ちた私の胸を嫉にそゝる、
更け行く秋の夜の淋しさのやうに、
薄暗い灯のやうに、
暗がりに鳴く蟲の聲のやうに、
汝が去るまでは……去るまでは、

此外うつせみ、翡翠の聲、杉山かし、そのえ、西島枝折、淺草、筑紫艶子等の作は佳作であつた



和歌

與謝野晶子選

○（天）　和歌山縣　都田操

大神に代り與へんいと若き美しきよきまろき心を

○（地）　三重縣　小宮綠子

曉の童を乘せてこし馬の白つばさとも見ゆる富士かな

○（人）　宇都宮　松井綠子

かなしかる秋の夕日の泌む草にまじりて泣きぬ人おもふわれ

佳作

○　横濱　岩橋かをる

よしあしを人のこゝろにしたかひてほどこすをうるおそろしきわれ

○　金澤　正枝

蜜蜂のあき箱あまた積みかさねさびしく思ふ日の秋の雨

○　本郷　平塚白百合

しみ〴〵と木犀の香にひたるとき君が文つく死なば死ぬべし

○　愛知縣　青木かのふ

ほろ〳〵とこほろぎの聲天地のさびしさあつめ鳴けば悲しき

○　磐城　齋藤すみれ子

うつくしき胡蝶の一つ舞ひ出でぬ春の夜に見るわが夢のごと

○　松前城下　美耶子

戀しての後のうれひは唯事に笑みつる日よりたふとしと知る

○　長崎　三根ちさ

友禪に針はこばせて思ふこと戀のやうなり夢のやうなり

○　松前　川原華子

秋の夜に咒文となふる主や誰草に住むなる法師こほろぎ

○ 信濃　世良田優子

秋の氣か少女になりし妹がもの悲しけれ頰の白さなど

○ 淺草　佐藤艶子

あはれなる旅商人の群に入りゆくへも知らず人はなりにき

○ 金澤　森きよ子

わが肩に來てなくすいちよともし火をしたひて來るやさしきすいちよ

○ 岡山　梢の星

秋の朝教會堂の屋根に居る眞白き鳥のてゝちよきかな

○ 伊豆　西島枝折

菫草と聞きしが故に青草の曼珠沙華をばめぐる人われ

○ 越後　清子

木犀の花をば閨にまきちらしかゝる香の夢見んとする

○ 信濃　工藤楓葉子

我家は青葉若葉のその奥に城のやうにも立てる初夏

○ 弘前　山崎千代子

僞りの涙たゑひて僞りの笑顏にゑひてわれを惜まず

○ 靜岡縣　律子

こひしけれ山あひの街鳥の巢の如く人住む農人の街

○ 弘前　梅枝

石の如裝ひてわれ下に泣く冷たしといふ人もあるべし

○ 京橋　竹下もと

かなしみはかの大寺の鐘の音と頂白くなりゆく山と

○ 岐阜　咲子

わがきのふ思ひ捨てたることなども秋の夕ははたなげかるゝ

○ 千葉　伊東さく子

海の波泣き叫びつゝ悲しげに足もとにきぬ秋のたそがれ

○ 根室　齋藤ふじ

島少女船のなかにて聲高に男と語る秋の夕ぐれ

○ 上毛　秋の水

美くしき白露を我れ手にうけて秋の神とも身を思ふかな

○ 京都　野菊

千鳥鳴く聲に目ざめて遠方の人思ふ子を知るらめや君

○ 岐阜縣　八千代子

よりそひてうちはの繪など見せながら暮れゆく海のかたはらに居ぬ

○ 茨城縣　環花女

いと小さき菊の蕾の一つをばわがたましひと思ふさびしさ

○ 德島縣　萬紅

秋となり水なつかしくやせゆきぬ三十路の姉の面かげのごと

○ 大阪　露子

胸もゆる三輪の酒屋の子ならねど求女に似たる君をもとむる

○ 大分縣　萩の雫

ふる里のかはたれ時を鈴蟲の淋しと鳴けば白菊の落つ

○ 秋田　愛子

秋の風强くな吹きそ若き子のものを思へる心の上に

○ 信濃　二葉子

君が胸は今うつろなり何ものかもとめて魂や走りゆきけむ

○ 大阪　春草

日の赤き西の國べにと漂浪はゞ別れし緣に逢ふをうべきか

○ 千葉　村山さき子

日の照れば淋しき白も紫も美くしく見ゆ秋の野の路

○ 山口縣　しづえ

いつとなく山里の秋更けゆきぬ桐の落葉に村雨ぞふる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○　愛知縣　青木かのふ
故郷の秋ぞかなしきまつ蟲のこゑぞかなしきわれぞかなしき

○　松本市　矢口貞子
色も香もなき哀れなる我身をば戀すると云ふくるほしき君

○　深川　春川花舟
紅葉ちる山のほとりに笛吹けばいにしへ人の戀のこゝちす

○　野尻正子
いさゝかのことにふれても涙するをとめ心をあしく思ふや

○　岡山市　桃の村女
路のべの小さき花にも涙しぬ若き心の衰ふるらし

○　下谷　島貞子
のちの日はいかゞあるべき二十二のわが顧る日のうらさびし

○　大和　栗山龍子
父上のまさましかばと母上の云ひ給ふこと多くなりゆく

○　島根縣　藤田豐子
冬の月枯れし木立をもの思ふこの少女子を冷やかに見る

○　須磨　保子
門草の白き花摘みかすかなる秋のあはれを胸に覺えぬ

○　德島縣　みやこどり
落葉する初冬の野路今日も又墓おとづるゝわれ誰知る

○　佐渡　わくらば子
若き日のおち行く方を見送りてこの身はなりぬうき人妻に

○　讃岐　園子
夕ぐれを淡き悲しみおぼえつゝ散る花を見る少女子われは

○　磯村はる子
わが姉とものいはぬ日の三日ありとさかしらことをもかける日記かな

○　府下　荒井春子
秋の野のいなご追ひ行く靑き蟲目に淋しけれ一人歩めば

○　岡山縣　野崎よしの
霜やけに赤き指にて蜜柑むく末の弟らうたき弟

○　土佐　北村美佐夫
わが立てる影薄黒く岩にさす夕月夜こそめでたかりけれ

○　名古屋　梶間しか子
野路かへる父と兄とに馬ひきてむかへまつりぬ秋のふるさと

○　名古屋　瀧本逸子
家近き小川の水の音ふけてかりがね啼けば涙くまるゝ

○　能登　丈子
見て云はず逢はねば悶ゆ少女子の戀の心はわりなかりけれ

○　本郷　山田芳子
朝風の冷たかりとて母君の袷をたまふ朝のこほろぎ

○　姫路　靜子
いつの世も女は弱し秋草の花さく窓に歌のみを讀む

○　麹町　夢子
かなしみぬ僞はる妾をたのしむと笑みて語るは何の謎ぞも

○　北海道　平田露香
毒の針かくすも知らで男をばたのむ少女にならはじなわれ

○　土佐　㘴田順子
こほろぎの鳴く音をめでて夕つゆにぬれたる野路をしづかにも行く

○　堺市　鈴木きよ
秋風の夜もひるも來てわれ泣かす家と書くかなたゞありのまゝ

○　長崎市　永井圭子
君おもひ歩めばをかし菊におく露の匂へるあかつきの道

○　しのぶ
秋雨の降りて淋しき今宵など人まつ人はをかしからまし

○　山形縣　大平かをる子
しめやかにふりくる夜半の秋雨は涙の如し戀ならねども

○　水戸　さゆり
冷たさの石にも似たる君をして物や思ふと問はしめしかな

○　兵庫縣　山本華子
天地にすてられてよりおほけなく歌よむ人とならんとすなり

○　仙臺　橋本志久子
さめやすき人の心をなげく時花を眺めぬこのたぐひかと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○　信濃　三村利惠子

人呪ふ若き女の唇に潤もなしほこるよしなし

○　南千住　白妙

をかしけれ藤を染めたる舞衣かけたる部屋の春のたそがれ

○　福井縣　土屋智惠子

物思ふかなしき人と身はなりぬ庭の小萩のおとろふるころ

○　下野　木本蘭子

君と云ふ又なき人のかたはらに坐してあれ共涙ながるゝ

○　秋田市　咲代

亡き母を戀しと云ひて涙する人によく似るコスモスの花

○　近江　しがよ

秋の色君の瞳の秋の色われも淋しきこの秋の色

○　ばら香

われの打つ鼓をきゝて春の夜の西の都に月めでし君

○　呉市　山本哲子

隙間洩る冷き閨の風さへもおん心かとうたがはれつゝ

○　日高　白百合

君笑まず語らぬ宵の白菊は死に似る色と思ひけるかな

○　周防　美女子

男子とは若き女の血をすゝる獸と思ひ神とも思ひ

○　栃木縣　高松たへ子

捕はれてまことしやかに事とりぬもとよりわれも人と思はず

○　宮城　長谷川紫葉

あな冷た霜おく谷の丸木橋渡らんとするわれを見る星

○　枯尾花

故知らぬ悲しさ胸にせまり來て涙する日を秋と云ふらん

○　甲府　波瀾子

ほのかにも心を染むる少女子に似て咲く花の多き頃かな

○　小石川　秋雨

いとあつき別れの一夜の涙おつ崩れし壁にこほろぎなけば

○　越後　月影の朝顔

夕ぐれの空に心の奪はれし少女の瞳星にまされり

○　沼津　村瀬繁子

かにかくに寸を舞ひ行き尺を飛び身をはなるゝをよろこぶ心

○　岡山市　柿園白花

秋の夜は多くかたらず筆とりて歌のみを書く人こそしりぬ

○　北海道　田山淸子

磯の浪よせてはかへす磯の浪我が戀に似ておちつかぬ浪

○　越後　星野かへで

色褪せし百日紅の花片も蝶をとゞめぬわれなは戀す

○　神奈川縣　はな子

朝霧のやゝうすれゆくわが村にくたかけ鳴きてよき日ののぼる

○　大阪　好子

わが姉は三十路に近くいませども天津少女のごと淸らなる

○　朝鮮　あき子

果てしなく思ひみだれてさまよひぬ薄暗き夜の海のなぎさを

○　大津市　篠村しげ

幼くて花火せし夜を思ひつゝコスモスを見るかはたれ時に

○　大分縣　古屋露花子

久方の月さしきたる藤のやにこほろぎを聞き君想ふ時

○　大分縣　紫香

痛みある胸を抱きて立つ庭に音なく落ちぬうるはしの紅葉

○　美作　芙蓉

青白き月の光がわが瞳さすがごとくにかなしみの湧く

○　伊豫　菊池芳子

白萩におく露うけて文書きぬ秋は更けねど戀はまさると

○　大阪　村田操子

少女子はわが生いたちし里おもひ菊の香に涙するかな

○　神戸市　綠髮子

若き日に愁ひの面をかくせとて五尺の髮はあたへられしか

○　近江　植村霞子

うすれゆく月見て人を忍びけりうらはかなさよかゝるすさびも

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○ 金澤 俊子
咲き匂ふまがきの菊の氣高さをふさへるものとかざすわれかな
○ 美音子
冬の宵火桶に倚りて灰に書く字などもをかし人思ふため
○ 伊豆 渡邊やす
葉一つ落つるを見てゝ我が胸の鳴るを覺ゆる君を見しより
○ 靜岡縣 蓉賀
たまさかに針手にすれば皆さびて衣も縫はれずわが戀に似る
○ 山梨縣 瀧谷とみ
踊の神のつどひきたりて唄ふごと庭の小笹に秋の風吹く
○ 淡島 楳原夕美子
何ごともわれにはうれし戀の歌やうやく多くなれるこの頃
○ 白ぎく
わが胸の血はいかばかり冷えつらん秋來しこそのなげかるゝかな
○ 茨城 田村紫色
何とかの御佛まつる堂近き尾花にねむる白き蝶哉
○ 失名
遠方のいとかすかなる笛の聲かゝはりもなきわれ泣かしむる
○ 中澁谷 佐藤蓉美惠
わが二十胸に手をあて何となく物を思へば涙流れぬ
○ 新錢鶴 菅幸子
琴おきて窓押しやれば秋の月我があをじろき面を照しぬ
○ 小林春枝
夏の森つよきひかりと青いろと醉にいたし白き雲浮く
○ 山城 木の花
美くしき人をわが見ぬかなしさに似るものならぬ草に霜おく
○ 備前 さつき雨
あさましく秋の日暮るゝ講堂に亡骸を指し博士の語る
○ 鹿島 しこぐさ
いつはりの涙と知れどわがまへに夜もひるもなく君にくからず
○ 若狭 長谷川英

鏡をば見るにうみたる夕ぐれは戸によりてわれ笛を吹くかな
○ 埼玉縣 大淵米子
ましろなる琺瑯盤に滲み入る日のいたましさ秋のかなしさ
○ 福井 北明星
夢の中かすかに吐息もらしつゝ夕照早めし岩にありつる
○ わかば
木犀のあまき薫にひたされて居れば和みぬ戀の心も
○ その元
醉臨めの心寂しさ想へるを君知らずげに接吻をする
○ 神田區 石田美子
ふと我れにかへりて見れば美くしき夢なりしかな片戀のゆめ
○ 北海道 游姫
汝が父は海をこのみしますらをと祖母の語るを笑みながら聞く
○ 宮城 龍子
なき兄と河原走りしふるさとを思へば笑みとなみだの浮ぶ
○ 本郷區 中村えい子
歌をしりおん名をしりてひたぶるに逢はまじとするこれや戀なる
○ 知多 みどり葉
桃の木の花返り咲く今日昨日われにも歌のなる今日昨日
○ 伊勢 中橋さゝ子
古さとの幼子遊ぶ青き田のほとりにゆかむ風に身を借り
○ 深川 花子
夕暮の窓すれ〳〵に桐ちりぬ黃色に光る水藥の瓶
○ 北海道 蒲原照子
白馬に横に腰かけ唄などをうたへる娘戀のあじとか
○ 神奈川縣 しうん子
初戀を秘めて死にたるいにしへの少女のたまは秋の夜になく
○ 土佐 はぎ子
灰色の今日此頃の空の如あれよと云ふや戀いさかるや
○ 京都市 島本久惠
秋風は駿馬あたりの夕暮に我がまつゞく山笛を吹く

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○ 備中　小見山春子
しみ〴〵と雨降る夜の灯の下にあはれなること最あまた書く
○ 信濃　長谷川未女子
生と死のいづれの道を汝は行くいづれもよしや戀をうべくば
○ 下野　高木たき子
さや〳〵と秋風吹けば紫の袷着たりしふるさとの家
○ 長崎　富貴子
野に出でゝしやみせん草を摘みし日のをさなき歌をふと思ひいづ
○ 岡山市　立岡房之
灰色の館の上の一つ星もののけの目と見る人やたれ
○ 深川　花野芳香
なつかしき奈良の都に旅居して五重の塔に降る雨を見る
○ 靜岡　高尾
靑白き月光うけて森に立つ秋の少女のしろかねの笛
○ 土佐　鐘山春水
蟋蟀は君ます野にも鳴くものとしたしき心もてわれはきく
○ 備前　佐久間みどり
秋の夜の野末に人を思ひなくすゞ蟲はよしはゞからず鳴く
○ 矢名
稻妻は雲につるぎをとぐ神のあるとおそれぬ十年の昔
○ 札幌　俟野幽香呈
手なふれそ毒草なりと戀を云ふ敎へのもとにかにかくもある
○ 京橋　あららき子
蟋蟀のうら悲しくもなく宵は戀せぬ人も枕のぬれぬ
○ 下澁谷　稻の遊巳子
ゆく春の人をのせたる汽車すぐる足柄山の星月夜かな
○ 大阪　杉山かし
桃色と銀と朽葉と靑色にわが悲しみは波立ちてあり
○ 東京　蔦の葉
ゆく秋のたそがれ曇る西の空黃泉いと近きこゝちするかな
○ 麻布　うつせみ
歩みよるこの悲しみも君故ぞ去るよろこびもまた君故ぞ
○ 前橋　みづ枝
桐の木に昔ほりたる君とわが名を見るたびに心ときめく
○ 橫濱　うきくさ
さとゐるゝさまのめでたさ晩秋の時雨にあへる庭のもみぢ葉
○ 橫濱市　葵奈子
何欲しき心なるらむことさらに君住む家の近き街行く
○ 美作　水田邦子
黃菊咲く籬によりて亡き姉の面かげ胸にゑがける少女
○ 姫路　磯菜
たまさかにうらむも君は心にもかけ給はざりかひなしやわれ
○ 京都　ほづ枝
この十日戀の心もくちねとぞトタンの屋根に音をする雨
○ 橫濱　若葉
朝露にもすそぬらしつ野路行けば少女ににたる白萩の咲く
○ 岩手　清子
義家が馬の蹄の跡といふ月の輪潟に赤蜻蛉飛ぶ
○ 岩手　露草
かの君の二なくも戀しひた戀し消息などは餘りかゝねど
○ 淡島　藤井操
あさましき男の戀のそれに似て我が黒髮をおとす秋風
○ 翠子
何時となく色うつりゆく紫陽花の花にも似たる男とぞしる
○ 秋田縣　佐々木園子
病む母の肩なでまいれもの語り讀み申せよとをしへ居る蟲
○ 神戸市　紅い花
皿にあるバナナの色と秋の日の相似てあるが悲しかりけり
○ 名古屋　波の花
何故に我は泣くらむこの涙この頃あつし人や戀しき
○ 橫濱　京子
思ふこと得云はで死にし女あり桔梗と咲きぬ初秋の日に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○ 神戸市 森たんぽゝ
をはりとはなる日も知らぬ戀なれば十年住めども初戀に似る
○ 大阪 田野靜子
君が住む北の國より來し風に吹かれてあれば秋もをかしき
○ 淡路 内海千鳥子
咲きのこる白朝顔のふるへおぬかゝる時分はすさまじきかな
○ 山口縣 郷亰美那子
美くしき戀の館を望みつゝ夢の境に今日もあるかな
○ 大阪 田野しかる
雪の朝藁火を聚めて傍に倚る女美し京近き道
○ 信州 百瀬流葉
湯の宿の水色さめし旗今日もさびしくなびく煙のうちに
○ 京都府 竹村楨子
夕ぐれの暗ききざはし上るとき秋の深さのなつかしかりき
○ 群馬縣 小澤竹子
思はじと思へど思ふあくどさをこの頃日記にかきそめぬわれ
○ 足利町 名無草
しろかねと金の色して少女子の前にひろこる秋のさびしみ
○ 下總 山和野その
自らが人に云ひ得ぬこの心地されどひむれば早く死ぬべし
○ 常陽 磯部芳香
人の身の戀を笑ひし我ながら云ふよしもなきはかなごとする
○ 岡山市 石井幸子
青白く月照る窓に身をなげてうす情人うらむ身となる
○ 鹿兒島市 姉川梅子
夜更けし街の灯かげの薄暗き三十路に近き人のこゝちす
○ 下澁谷 楨ふぢ子
まろねして品さだめする秋の夜の長きこそいとめでたかりけれ
○ 横濱市 金井清子
秋の日をそがひにうけて物縫へる母の白髮うらさびしけれ
○ 淺草 藤井若菜子
なつかしきひづめの音よ川ひとつあなたに君の馬遊ぶらし
○ 大分縣 田原秀
秋の來て髮のおつると云へるまに鶴見の山に初雪のふる
○ 信濃 百瀬若子
ふるびたる靴をぬぐごとすつるごとかしこく人は吾れをはなれぬ
○ 熊本 しらはぎ
また人に寄らじと思ふ我に似るさびしきいろの女郎花かな
○ 城南 小島美雪
沙漠にて森を見出し如くにもめでたく仰ぐ初秋の空
○ 千葉 石川恒代
悲しさを打ちけさんとて蜩蟬のなく聲ならし胸にしむかな
○ 伊豫 軒の雫
淋しさにそと窓押せば女郎花わが手にふれぬなつかしきかな
○ 千葉縣 櫻井田鶴
雨戸くる素足つめたし明け方の廊下に思ふ秋の悲しみ
○ 神戸市 雪の女
云ふことももどかしきかな白日の夏の心になれる少女子
○ 和泉 里の女
思はじと思ひながらも猶思ふ心うとまし心なつかし
○ 山形 すゝき子
御やしろの木々の梢に鳴く鳥をかしかりけりあけぼのゝ秋
○ 和歌山 宇田すが
いそのかみ古代の人の面かげのわが目にうかぶ桐の花かな
○ 岡山市 富山千登勢
縫かふる度に縫こむ袖などもうら淋しけれやうやく老ゆと
○ 近江 操子
燒くもおし丈にあまれる君が文衣に裁ちてわれかづかまし
○ 豐後 夕草子
秋雨は病む子が君を思ひ泣くわりなさに似て弱くふるかな
○ 翡翠の髮
夜もひるも細き雨降る日となりてさみしく君を思ふ此の頃

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



散　文（其二）

編輯局選

○暗い町

深川　春川花舟

私は何の氣もなく、ふいと外へ出たもう八時過ぎで家には燈火が明るく光つて居る。橋を渡つて行くと、もう家々は大店であるから皆んな、大戸がしまつて淋しいと言つたらまるで都とは思れない。おきましては何圓何錢なりと大きな聲がふいと聞える。

パチ〳〵とそろばんの音やかましく、材木屋の人々が帳合せをして居る、家の前は明るいけれども材木の積んで有る所は實にくらい、十間ばかりくらい所を通ると、三四間明るい所へ出る、家々には飼犬がゐるので人が通ると、ワン〳〵とほへる、淋しいくらい所で犬にはへられる程薄氣味の惡いものはない、私大きらひ、シッ〳〵と手でおつて早足に通り過る。

後の方から、ピイとアンマの笛が聞える「うおー」と犬の遠吠も聞えるので淋しさが深い。○○商店の洋館から、ピアノの音とコーラスが樂しさうに聞ゆる、それが此の淋しい、くらい、眞黑な町にひゞくので、何だか、斯う獄に聞える、此んな町の中にはやつぱりアンマの笛が趣味が有ると思ひながら通り過ると、耳元でピイーと、ハツトと思つて振返りマアーと見ればまだ年若い女アンマ、これも暗い歴史でも有るかの樣に私は一種の情、哀悲の涙が胸にせまつて來て、ハラ〳〵と頬に流る。電氣にふれたやうに、女アンマの後から私は尾行でもする樣について行つたはつと思つて見れば家近くの橋の上、女アンマは橋を下りて左へまがつた無意識にアンマの行く方を眺めてゐた、ピイ——哀れな笛の音は遠く〳〵消えた。

姉さん……ふいに呼ばれて、びつくりして、飛のいたら醉ひどれ男が電車通りへ行くにはどういくのだナー、まあ、何んと言ふ失禮な聞きやうだと、心で思つたけど醉つぱらひと思つてがまんして橋から左へ行くんです「ウン有がてへナーホー姉さん素敵に色が白いや、第一ハイカラだ、から氣に入つたハ、、、」

失敬なッ、隨分輕蔑した言ひ方だわ、憤慨せずに居られないわ、ツンとしてドン〳〵橋を下りて右へまがつてしまつた、そして歩きながら家を出てから有りし事を思浮べて一人て笑つてしまつた。時は家の前へきていた蝶と夜風が一陣あはて〻門の中へとびこんでしまつた。桐の葉がカサ〳〵と音して三葉四葉散つた。外はくらい、女アンマはどこを歩いて居るだらう、醉どれ男は橋の上に立つて居るか知らと思ひながら家の中へ入つたら母樣と兄樣等の笑聲が手にとるやうに聞えた。私はすぐと皆んなの居る所へとんでいつたけれども、何んにも笑ひたくなかつた。

醉どれに憤慨したのはよかつた、下町の姉さん面目躍如(X)

誤字。一趣は一種、先敬は失敬

○秋　冷

金澤　紅　子

寒い〳〵と母などは羽織をもちだした。緣側へ出た隅つこの方に蝙蝠が一つ、忘れられたやうに、塵を浴びてある。

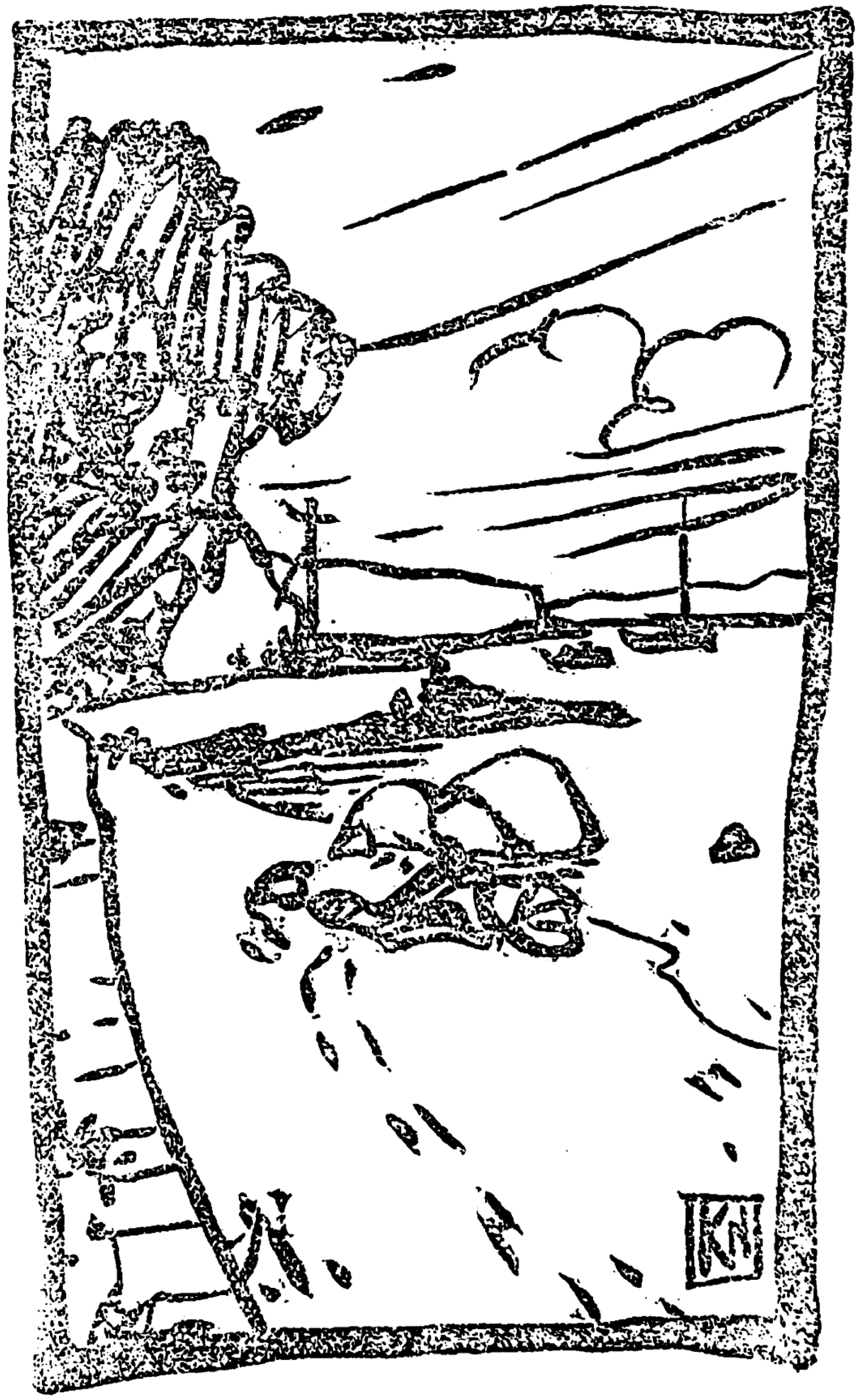
スイヨリした秋のひのふり注ぐ中にちつと瞬むで、目をすゑると、チラリホラリ砂塵のおよぐのが見える夏は上の窓からさし込む强い光線に、胸のわるい塵埃のうづまいてるのを見るのだ、太陽の熱がグツと落ちひで庭には秋が來てゐる、柿が色づいた、栗もイガの下が大分むつくりして來た、南天と山茶花が對ひあつて同じやうに實をそめかけて居る…………

母様の白髪をぬく、私が母さまの頭をいぢりだしたのは何歳位からだつたか覺えてないが、その頃から白髪ぬくことはしたと思ふ。

單衣のかさね着を袷に更へる、

土塀のきはのあの毒草の花が、うすがれて來たやうだ、庭へ下りて行つて見ると丁度お代りに數多の蕾を上げて、二三寸にのびそろつて居る。花が咲いてるかと思つて居ればいつの間にかムクムクと生えた節のやうな蕾に代つて居る、と思へば又ケロリと洗つたやうにすつかり葉をなくしてイボイボの根元ばかりを見せて居る、そして時が來るといやに複雜な、わざと態によそほつたやうな花を盛に、憎い程盛に咲かせる。毒草だといふことで私はまだ一度もさはつてみないが、時々この庭の隅へ來てみて、その烈しい怪力で强い世渡りをして居るのを、睨と見て居ることがある。

頭の上に柿がある、お隣のお祖母さん見てやしないかと思ひ、思ひコッソリやつてると、五六枚も葉をつけて小枝ごとバザーンとおちたので、ハッとしたが、序にもう二つもとつて、片手にひきつかむで、わざと何氣ないふうでうちへはいつた。



海岸　　山口縣　　瑞畑かの

柿をぬすむなんておてんさんだねむらさきに一つ、くちなしに一つとお配りなさい、でないといつけられます(X)

●●誤字。目をすえるすはゑる。

○秋の一時

晝草

風の音にぞ驚かれぬる、で既に冷氣を覺えた肩へ袷羽織を引掛けた、

昨日も、今日も、一昨日も日くせになつたか、空は灰色の雲低くたれて、日光は僅に、薄れた雲の合間から弱々しいシルバー色を投げて居る、惱ましい頭を仰へて硝子越しに向ふの山影を眺めると、紅葉には未だ早い、山は依然として暗綠色の愁はしな沈默をつゞけて居る、名も知らぬ小鳥が頓狂な聲を立てゝ、時々思ひ出した樣にさへづるのが、靜な四邊の大氣に吸ひ込まれて、之ぱつかりは秋の樣な氣もする。

「馬は肥えたりマレンゴー」不圖恁麼事を口荒んだ淚がこぼれる程痛切に秋を思はせる此句、花らんまんの春のうたげ、夢の樣に金扇うらめとし、綾羅の秋空にもつるゝ折、吾を忘れ、人をも思はぬ刹那にも、不圖此句を思ひ起すと忽ち、紺碧の空遠き万木蕭々の秋の景が目に浮んで、私の身體は思はずも固くなるのである、其れには深く纏つた悲しい淋しい思ひ出もあるけれど!、ちつと目を伏せて冥想にふけると、秋は私の最好な時だ、落葉さゝやきにも意味がこもる、水の流れも默示を與へる、遠いむかしの日には、張りつめた十三すじ。琴の緒を一つ〳〵に裁ち切る樣な、切ない、苦しい悶えもあつた、今其れを再び思ひ返へして見たいとて、肉體に盛られた熱い血潮はゆらがうともせぬものを、冷たい淚さへ流れぬものを、さながら死火山の樣な靜寂な胸の底、冷血動物と罵つた人を思うて、不圖微笑んだ、事に臨んであまりに落ち付きすぎた私の官能は最早若さを失つて行くのではなからうか?喜怒色に現さず、的な嚴格なホームに人となつた私は、自ら自己を愛するにも苦諂に失する程嚴なのをも恬つては居るのだけれど!。

滄浪三水淸合可以濯吾纓、滄浪三水濁合可以濯吾足と歌ふた人があると云ふ、お〻滄浪の水、水は濁つて居るものを、若い誇りの黑髮を、熱い血潮を、私は什うして濯よう、洗ふ事は出來ないのだ。斷じて、反抗し、矛盾し、退いて自己を守らうとすれば、あゝ今此苦痛。

もう末だなと思ひながら、露に重たいダリアを剪んで九谷燒の花瓶にさした、誰れを待つでもない、表面から見たら誠に此上もない靜な安らかなライフ、萬人が萬人擧つてお幸福者と云ふけれども、あゝ他人の花は永久に紅なるものよ!、昨夜狂氣した夢を見た、意味を解してくれる人があるだらうか、廣いと云ふ世界に、

Kが來た、僕ン所へ手紙來ませんでしたか」?、「いゝえ」、「今日あたり來る筈なんだけれど」、「ホ、、鬼角待つてる所からは來ないものですのね」、いやお察し申します」「あらッ」、何をお察し申して下さつたのやら、心の中で苦笑ひした、何處かで杭を打込む樣な音が斷絕してひゞいて來る、靜なまでも、惱ましい空の色!。

何ものかを捉へやうとして捉へ得ないもどかしさに始終惱んでゐる人、遠からず他動的に一轉機は來るだらうが、それより今の內充實した方が好い、空虛な叫びだとは云はぬが、根柢の深くないのを危ぶむ(SM)

●誤字。頓驚は頓狂。目を默してと云ふ語はない、目を伏せて。或は目を冥つて。

近頃はどうも上つ面ばかり綺麗な文句を列べた、感興のない、熱のない文が多くて困るもつと突けば血の出るやうな新らしいのを誰か書かないかなア(H)

○月見草

荷音

澁谷から乘つた玉川電車を終點で降りた時は未だ初夏の夕陽が高かつた。

廣々とした河原のまんなかを淸いく〳〵水が流れて居た。桑の束を積んだ荷車と一しよに渡し舟にも乘つて見た。あくまでもすき通つた水!

舟べりに寄つて水底の小石をつく〴〵と眺めた。

河上に夕燒雲が寫つてキラ〳〵と光る。

二タ子の渡しを向に渡つて大きな佗額のふせてある岡の上に立つた時何處の寺からか夕べの鐘の音が響いて來た。

フト傍に黃色い花を見出した、之れが月見草と云ふ花だと友に敎へられて始めて知つた。

「月見草にもたぐへつべき婦人」とは誰れの事と友は云つた、けれども私は知らなかつた。「不如歸の始まりの一節よ」と云つて浪子さんの御話を聞かされた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

友は不如帰を廿四回精讀したと云ふ程すなほな人なのだ。月見草の一輪を手にして、最早燈火の付いて居る電車に乗つた、電車は中々發車しない。車内は友と二人きりだつた。

好小品（評者）

●●誤字。桒把と云ふ字があるか知ら、桒の束。

○秋の風

芝　鈴木壽子

サア殺せ……殺せ」と言ふは聲はお讀みになる方が御覽になる程驚くものではないのです。それは隣りの腕白息子が、蛇を見出してさわぐ聲で。續いて起るどよめきでも知れます。地を打つ棒の音がやむと棒切れを持つた儘、仁王の様に突立て、半殺しになつてる蛇を見つめてると、手下とも言ふ様な二三人の子供は、此のよわつた蛇が尻尾を振るのを見て居ます、秋の風は庭の眞赤なダリヤをなめてコスモスを一とゆすりゆすつて何處ともなしに行つてしまうとはら〱と木の葉が散る桐の葉も一枚、蛇は苦しい中にも逃げやう〱とあせつて居る事はよく誰れにも知れます。子供はそれを逃がさない様にして苦しみ悶えるのを見て喜こんで見て居ます、やがて動かなくなると、子供はつまらなさうにばら〱と向ふへ行つてしまひました、秋の風は遠慮なく何處へでも來るのです、私は世の中の人からむしろ此の蛇よりつらい殘酷な虐待を受けて居るのだと蛇のむくろを見て思ひました、父が居たなら母が居たならと二度目の母は自分には少しも同情して下さらないので私しは何時も薄れ行く暮色の空を眺めては死んだ父母の面影を夢想するばかりで、私の履歴は私の世界を縮めて世の人を敵の様に見て、横へ横へと行くより外は何もありませんでした、私は何歳の年を聞ても淋しい感じは脱しません秋の日和の様に淋しい、すさんだ心は。いばらの中に横へ〱と育つたばらの様に見た處はきれいでも心にはとげのとれた事はありません、私の目はうたぐり深い底光りする目で人に對しました、まるで蛇の様な蝮蛇の様な、自分は此の蛇の様に苦しんで死ぬのを世の人が喜んで見はしないかと、思ふとぞつとして夢中で家へ驅け込みました、家ではまゝ母の口小言が私の室へ聞えます秋は淋しい……私の心



ヴェールの行方　京都市　岸田富美子

のやうに

露くなとのお断りがあつたから猶かなかつたけれど、ずゐ分気もちが悪い、其くせ蛇はさう云ふ方ではない。(秋の人)
誤字。私しは私。無ちゆうは夢中。

○午後より

大和　河崎八重

どこまで圓く柔らかくふくやかな紫の空だらう、山も川も森も岡も其間のすべての少さいものでさへ、物の隔離と云ふものを忘れたかのやうに、重なつて大きく近くボーと浮いた様だ。水色の冷い風がその一つ動かさないでサラ〳〵と流れて居る、前にははてしもない廣野街道がうねうねと灰色に横たはつて百舌鳥が寂しう啼いて居る。

お昼飯に皆様歸つた後の靜けさ、常夜燈にもたれた細長いやせた姿を赤い帶ともすれば大きい瞳を被ひさうな長い睫毛、顔色の勝れない陰気な弱々しい自分の姿を眺めた時、こんな神秘な靜さと狂暴な自然に只一人抱かれて居るのが恐ろしくなつた。

何んだかレオナルドヴヰンチの名畫ラジョコンドの寫眞をみた時の様な氣持する、みる人毎の心を掻亂せしめた彼女の謎の様な笑、神秘な狂暴な凄い背景、一人でこゝにゐるのが耐らなく淋しくなつて逃げる様に暗いしげりを出た。「あんた何してはつたの、嫌に録呆つてはりましたつてな」I様の様な氣樂な人間てありやしない、月に二度ぐらひ大阪へいつて來て、角の芝居はどうたとか、帝國があゝたとか芝居の話より他に何を話したつてだめだ。I様いつにない「八重さん、あんた若杉様と内藤さん、どつち好きだつか?」「無論若杉様がすきよ、かんで見ればみる程味があるんだもの、私表面だけの文大きらいよ」「千代子さんしか肩がこらんでよろしおますやらがな」結局千代子さん派が八名、は子様派が二人賦が立つて仕方ないから中立の人に頼んで大きい裁板をさげてもらつて皆様にお尻をむけて裁縫する。三時頃まで一言もこつちから云ふてやらなかつたら、とう〳〵皆様こりたとみえて話かけに來たから氣持

よかつた。

祭り前で忙がしいから祭しまふまで休んで呉れて師匠さんがおつしやつたから渋りに行た、嬉しかつた、歸る途中お茶の先生の處へよる「此間からなで來ませんでしたの」眞先に豫想通一本やられる弟が風引いてふせつて居りましたから」弟ににじりつけてやつたから先生「昨夕正司さんに坂で出逢ひましたよ」頭もなにもグワアンとしてしまつた、今日はどうした事か笑つて〳〵茶をのむのに五口にもなつたつうちやんのお手前の時、足袋の間から可愛らしい小指さんが、のぞいてゐる、隣のS様私の足をつめる、只さえ可笑しいのに辛棒していたらのどが痛い。あんまり笑つたものだから歸りにつうちやんおこつて物云はない。畑田の繁子さんのおうちから尾花をたくさんに持つて來て呉れた、花があつたらしかたもない明日よ又行かなくちや、だけど尾花の生けたのが一番好きだ。

尾花の活けたのが好きだとは、少々此お孃さんの性格と矛盾する、念の爲に伺ひますが尾花は無論薄でせうね(U)

娘時代の文章と此文章と照合してみるに、八重さんは少々わがまゝらしい、おなほしなさい、わがまゝをなほすと、八重さんは田舎に珍しい新時代の婦人の一人になれます(S)

誤字。結極は結局。百鳥は百舌鳥。夕べは昨夕。

○月光

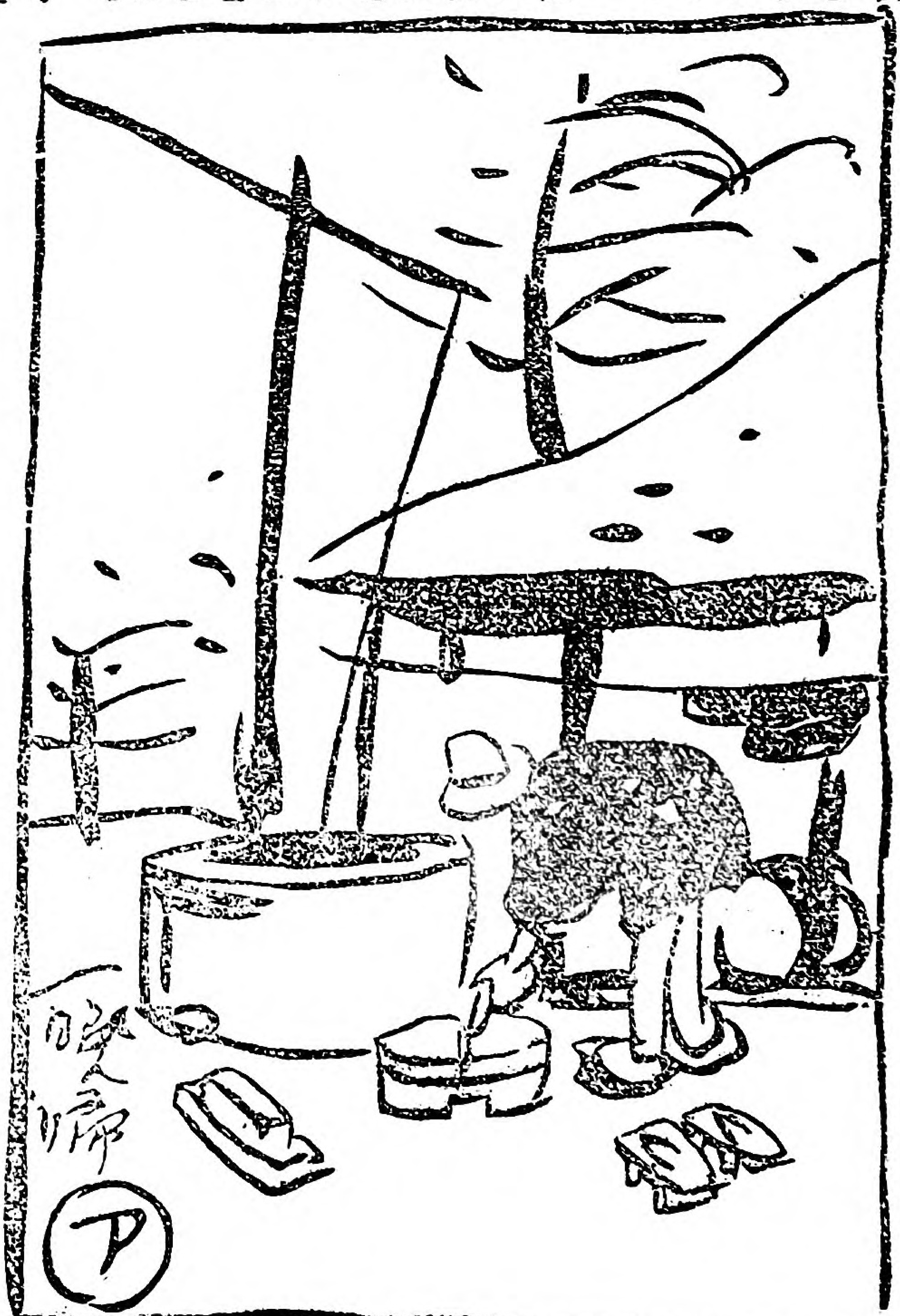
湖京　芳香

涼しい月にさそはれて、無意識に小さな畑のぐるりを歩いて見た。昔は友仙にしたいと思つた石竹の青々とした葉も紅の花も、白い地に只黒くはつきりと影をうつして時々吹くそよ風に靜かに動く。實に可愛いゝ影で有る。自分の造つた竿の影にチヨチ〳〵となく聲の細い蟲の音を聞いて居ると、一種云ひ得ぬ悲哀を覺える。更に忘れむとした過去の追憶は、再び私を迷はしめやうとする。されど吾が確固たる決心の前には、遂に魔のさゝやきも勝つ事は出來ないのである。

際涯ない人生の廣野?、幾つかの道を前にひかえつゝ迷つた事があつた。まご〳〵と迷ふた子は何時の間にか人の「とりこ」とせられて居た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

私も弱い女の一人で有つたのだ。
きうくつな、苦しい口惜しい思ひも、わづかの間であつたけれど、遁れたい遁れたい、悶々としてもがきにもがいて、ふと、醒めて見れば意外？、母によりて私の行くべき道は造られてあつた。眞に私の行くべき道であつたのだ。嬉しい――實に私は今迄迷つて居たのだ――。
　豁然として我に返れば、若い新らしい血潮は體中に漲り渡り、弱く止め度なかりし涙の何時か乾き、悶々として疲れたる身も心も何時か奮いて、無限の希望に物はをどり、新らしい生命に眸を輝かして一散に走らうとした。
　あせつては不可い、あせつて怪我をする。――と母は云ふ。
　痛い胸をおさえて私は母に感謝するのである。
　仰げばもう月は空の眞中に高く清らかに冴えて、天も地も人の心も清く、吾が熱したる頃に、涼風靜かに吹きて芋の葉に宿れる露がほた〱と葉から葉へ地に落ちる。
　あゝ今宵、いづくも同じ秋の今宵。激しに激し身も心も疲れたる、痛ましき土佐なる君は。如何にこの月をお眺めなさるだらうか。



晩歸　　芝區　後藤眼あさ子

　吾が戀人は東の都に、痛ましき君は北の空に……。
　蒼くすんだ東北の空に。燦として光る、一つの星がある目ばたきもせで眺めて居ると、赤になり青になりキラ〱と光る。美しい星。おなつかしい。（十月二日）
　謂ふ所の戀人は長曾我部菊子、土佐の君は梶原鶴子。しかし此人がもう失戀？したには驚いた。十六だつたがなあ。（四）
　○○誤字。綠々は青々。おどりはをどり。

○貨車衝突　　白妙

時計が午前十時を打つた刹那、脱線だアーと俄然叫び聲が起つた構内

に巡廻して居た驛夫、レールを修繕して居た工夫まで皆一樣に驅出した、貨物列車四拾壹輛づゝいて見る間に機關車は、前の機關車に下りの勢でどう、ど、どんと強く當つた。六車程横樣に轉覆してめり、めり、と破壞した、踏切はしめ切り、場所柄とて馬車や人力、荷車等忽ちあふれる計り溜つた。見物がてら橋をがた／＼登つて行くので陸橋の上も往來は出來ぬ、巡査は手を振つて制して居た。私は父と番頭の後から、玉さんや妹と見に行つた、上役驛長勤務の人々は、茫然とシャブル持つて顏色青ざめて立つ機關手は負傷はないかなど、しきりにとひ乱して居た。石材二車、松丸太二車、小麥貨車三車、乘りかゝりて破壞した慘狀。實に目も當てられない空前の出來事、恐らく私が物心ついてからのひどい脱線だらう。工夫の力で踏切は開けた、潮の押寄せる如く我先に爭つて行く、皆其方に目をそゝぐ、幸ひ家の荷は無事であつたので共々安心する、運送店のはんてん着た人が、貨車のまはりを往來きして居る、間もなく機關の過ちと知れた、赤いカンテラ燈して工夫の跫聲が夜の寂寞を破つて、二時近くまで聞えた、あれが客車であつたらばと其れから其と空想にふけつて眠れなかつた、明方の構内は紫や赤の電燈が疲れ切つた樣に淡い光をはなつて居た、昨日の慘狀は跡もなく、黑き白き煙りをはいて、どう、どうと汽車の入り來る軌道に思へば日々過ちの少なき物よと今更ながら走り行く列車を見送つた。

描寫するのには好い材料である、正直に書いてあるが、如何にも稚い、細かく深く物を見ることが出來ぬ、勉めたまへ（ＳＭ）

誤字。巡過は巡廻。修全は修繕。留つたは溜つた、難務は勤務。莊然は茫然。機關師は機關手。慘場は慘狀。それから今後文章には必ず句頭を切つて下さい。

○おちば

紀伊　宇田菅子

何んだか輕蔑された樣な、自分から好んで頼みよつて謝絶された樣な心地——わづか數ケ月でやめてしまうやうな雑誌と知つたら。えゝくやしい、

私は、私に、女子文壇へ投書する、これから、また發行されて居るものと信じて送つた原稿——

そんな事はもう考へたくない、考へまい。

これから私は女子文壇へ投書する、（かずさんのはがき見てすぐ）

天才とは別に種があるのじやないでせうか、凡人の發憤切至したものが天才だとは人を奬勵鼓舞するの方便として良い言でせうが、眞理とは思ひません

たしかに人間に天賦の差等があつて天才と云ふものは別に種はある。發憤切磋しても凡人は終に天才たる事は出來ないでせう、世の天才にして、凡人に見えたのは只磨ぬ玉であつたまでゝ、素が石ならば、たとへみがいた所で玉となるはずはない、むろん磨かないのよりは上手であらうとも、

こんなこと思をふと折角の決心もぐら／＼して筆がにぶる、

けれども私は、自己が自己を冷笑したつてよい、私はどこまでも筆をはこばう、いつまでも持たう。

人と同じやうなことはなるべくかきたくない、他人と同じ流れにも居たくない、

云つても現在の私にはどうとも出來ない、未來？、鬼が大口開いて笑つて居る。

何んでもよい、行けるまで行け——（ある時）

次の瞬間——只一瞬のまにきたるべき人の運命を豫知することが出來ない、只弄されて、笑ひ、泣き、恨み、怒り、もだえるのだ

不覺をとるな——刹那の跡には只天にのみ知られた秘密が潜んでゐる

まどの鴨脚樹はパラ／＼と散る、（ある日）

今日は芳枝さんはお嫁さんに行くのださうだ、

山家の金滿家の息子さんに、

學校であまり友を代へたり心が變つたりするので七面鳥だの、紫陽花だのと仇名された芳枝さんは、

薄命に泣くのぶ子さんから手紙くる
　たのしいやら、苦しいのやら、自慢やらぐちやら文面すこぶる不得要領、

櫻のかへり咲き三つ四つ、
造化の神さまも不得要領だ、（今日）

「よし枝さんがヤマカの息子に嫁ぐ」これはいゝ事を聞いたぞ。いや待て金満家とある、ソレヂヤおれの事ではない。（ムスコ）

これは餘韻漂渺たる辭也矣、醉茗さんも莞爾として手を拍つたらう（オヤヂ）

文章も不得要領だと云ひたいが先づやめて置かう、序に云ふがムスコとオヤヂの批評は更に不得要領だ、尤も評者には要領を得てゐるが、讀者には要領を得ない、一つだけ要領を得る爲に言つて置くが、ヤマカとは横瀬家の屋號だ（オトウサン）

誤字。憤發は發憤。それとも盃發のつもりか、鴨脚は鴨脚樹。

○秋の夜と二十の女

茨城　かつらのはな

　露の玉をやどした、綠葉の上に優しい光りを投げて居つた月が、いつの間にか、斯う年のいつた女の化粧を思はせるやうな凄味を帶びて來た吁秋が來たのだ、頻りに蟲が啼く、私の荒んだ心に此の上物を思はせやうとて。そして私のいくつの秋なんだらう、ちよと首をかしげた時、又一しきり蟲がすだいた、今度は手洗鉢のそばの葉陰の茂みの邊りで、二十……二十なんだわね、此間二十の春を迎へるのを、十代が逝くと狂氣のやうになつて惜んだり悲しんだりした、其れが最う秋になつた、此の秋が去つて、冬が逝つて春が來れば二十一になる、當然だ、何も不思議はないぢやないかと云はれゝばそれ迄だけれど、も眼を閉ぢると、又年の瀬に立つて「二十てふはえなき朶のわれなれとなは逝く年の惜しまるしかな」と叫んで居る三月後の自分の姿が浮んで來る、泣くのぢやないけど、何となし心の底から淋しさが込み上げて來て、涙がこぼれる。

　私はついぞ口に出して愚痴をこぼした事のない女であるから、人は皆暢氣だと云つて居る、心で泣いて顏で笑つて居ると云ふ矢張り境遇の作つた習慣なんだらう、小學校時代には、先生から憐れなお話なんか聞かされて、友は皆うつむいてすゝり泣の聲が室外に洩れる時でも、平然として算術の說明を聞くときのやうに先生のお顏を見詰めながらお話を聞いて居つた私であるのに、どうして斯んなになつたらう、これでも矢張弱い女の一人なのかしら、ことわり知らぬ涙を惜し氣もなく流すやうな、女なんかに何故生れて來たんだらう、つく〴〵辭職したくなつた。



島田

愛知縣　青木かの子

　姉様のお供してお湯に行く、鶴の湯と書いたくゝりの暖子を開けると、薄暗いランプの光りが、異様な香氣、脫いだ衣服を入れる戸棚、湯槽、扨は其等のものゝ中に動めいて居る幾人かの體を、おぼろげに照して居る、東京の湯屋の樣に、白粉や石鹼等の入交つた懷しい香は、田舍では嗅ぎ度くもかぐことが出來ない。

　幾年か湯氣に蒸され、油煙にいぶされた、湯屋規定と新しい天龍上人御緣日と書いたビラとの對照が、異樣な感じを與へる、然し其ビラも一月程前のであつた。

　痩せた三十を越えた姉は、私の脊中を洗ひながら其の丸々した腕を押へて、肉附の好い私を羨しがつた二十の私はそれよりも、まだ乳房の固

い十二三の少女の時代が羨しかつた、下げ髪をお湯に入る時だけリボンをとつて、額にくひつく樣にピンで止めた其頃が懷かしかつた。血の氣の薄い顔のうつる鏡を一寸振り返つて手拭下げて外へ出る、湯屋の內儀さんは番臺の上に延び上つて、高い四角な窓から外を眺めて居た表を盛りの家々の軒先を照らして居るのを見た。燃えて行く。

町ながら田舍の夜は淋しい、店の明るいのは「酒屋」「藥屋」「小間物屋」「吳服屋」位なもの、或る小さな古着屋の前に出た、洗ひ晒しの單衣や薄汚れた袷などどちらもなく掛け並はた中央に、紋縮メリンスの半幅帶がかけてあつて、其前にランプが吊してあつた、一寸の事だけど色彩の調和と云ふことに意を用ゐた丈け、店全體が幾分か明るく見られるやうな氣がする。

裏通りへ入ると或る家の窓りが、勝手元の無想慾を洩れてチラ〳〵する、按摩が商賣用の笛で聞が好い節を吹きわけて通る、かつて都に居つた頃、道を行く通りすがりにわざと聲を高めて、幾度か私等の眉をひそめさせた俗謡もいつの間にか影をかくして、今はこんな片田舍の按摩の笛に名殘りを止めて居る、あはれ逝く夏と共に捨てられる秋の扇のそれにも似たる流行歌の運命よ、あゝ〳〵彼れも矢張秋の聲だなあと私はつぶやいた。

ゆとりのある文章だ（S）

誤字。對象は、對照。無變慾は夢想慾。

○秋日和

金澤　加藤俊子

見渡す限り秋空一碧、一點の曇りもなくさながら、藍を流したやう、時々風がそよと吹くあつぱれの、秋景色うらゝかな日光が、新建の土藏の白壁にさして、まばゆい程、空高うかゝげし鳥籠に、鶫が樂しさうに、囀つてゐる濃き紅色のおしろいの花には美しいあげ羽の蝶が、たはむれあそぶ。氣は浮々として櫻でも咲きそうに思はれる、けれど風もないのに黃色くなつた梳やすもゝの葉がはら〳〵と、落ちたり、そよ吹く風に、色あせたる秋海棠の花がほろ〳〵と、散つたりするのを見ると、さすがにさすがに、淋しさが湧く、小春日和とはよく云つたもの。

今日から此邊一たいの、氏神樣のお祭禮なので、今朝は未だ暗いうちから、神樂のひゞき、大皷の音、若い人々は七五三を張るやら、樱のだしをたてるやら、町內は中々の賑ひ、宅では明日お客樣をするといふので臺所は非常に忙しさう、乳母やも杉も大働き、お客樣といつたとて大した方もないけれど、從姉や伯母さん達ばかりでも五六人はあるのですから。

私は表のお部屋へ花盆もち出して今花屋から持つて來た、みづ木を活け出す、少し强くためやうとするとその珊瑚のやうな實がこぼれる、私ははら〳〵しながらもやう〳〵活け終へた、立つたり、坐つたりして眺めたがどうやら、可なりの恰好になつて見える、ほつと一息胸なで下ろす、戶外では今し、汽車がついたのか、さわがしいほど、人力車が通る、鈴音勇ましくゴム輪も走る、私は折角、後片づけをしてゐると、がつたり梶棒を下す音、おやと思つて硝子越しに見ると大好な、山田の伯母樣、大きな支那かばんを車夫に持たせて、ゴム輪から降りかけて入らつしやる私は殊外の嬉しさに、姫御前のあられもない、驅けたてゝ、お玄關へ

「姫ごぜのあられもない」作者すでにみづから評せり、（X）

誤字。秋海堂は秋海棠。

○私の願

德島　うつせみ

K樣お手紙拜見して私はどんなにか泣きましたでせう、ほんとうに、不運な二人の境遇は、なんでこんなによく似てゐるのでしようか。幼にして兩親を失はれた貴孃は世の中では最大不幸で被在ると、私はいつも貴孃の御心に滿腔の。同情を捧げつゝも、またそれだけでは、なんだかたりない思ひが致します。まして互に。姉!! 妹!! と誓つた中ですもの。

K樣からくらぶればまだ私には、母があるだけ幸福ですネ。けれど今の我身は他家の厄介となつて居ます。

其姿に親のあるのは、はたして幸福でしようか。勿體なうは厶いますが。いつそ〳〵。父の見捨た位の子なら母もなぜ姿を見捨てゝはくれま

せなんだのでしよう。すまぬとは知りつゝも。つひ〳〵毎にすげなくあたります世を呪ひ。人を恨み自己をみづからさげすみ。
或一部の人等のみ、やさしい戀しいと思ふ樣になつたのも、皆病氣ゆゑとおゆるし下さい。
一の親のため一人子として。犠牲とならなければ。不幸とは知りつゝも。少女十九の淋しい胸には。たえず〳〵尼となりとうムいます。一日に二三服の苦き藥を飮まなければ。生のつゞかれない弱い此身。かうして人の、厄介となつてゐるのが、私には、わづらはしくて〳〵てなりません。籠の小鳥の如き身も。一度は廣い世に思ひのまゝ。翼をひろげて見たいとも思ますが。
それは自分勝手の空想に過ぎなかつたのです。すでに我身をさとつた時は。周圍の壓迫。現在の境遇。それ等の影にはどこまでも。孫女と云ふ名が付纒ふのですあゝ父のない子はいかに不自由はないとも、やつぱり日陰の花………。
尼となりたい。ゆるして下さいと云つた處で。人はゆるしません。「あれは一時の熱狂から覺れば冷たきオールドミス」とも罵倒しましようが。かまひません。
どうしても。現實から逃れたい。今の世に。誰が弱者を愍みましよう?。多くの强者は道のかたへに横たはる弱者の骸を見返りもせず。蹂み越てまでも。はげしき生存競爭に吾先に勝利を得んとて。はせ行くではありませんか。才あり財ある人はいざ知らず。
財もなき。才もなき身には。どうして此荒波の世を渡りましよう。これで渡るにはあまりに弱き我身ではムいませんか?。
本誌九月號の德富先生の事を色々書かれた終りに、校長夫人の令妹が失戀のあまり瓦町の天主敎會に尼となつたと云ふ事が書かれてあつた。其後。其天主敎會を見る度に私の感情は以前とは違つてきた。何がな世の中があさましくて。無情の感に打たるゝ事も幾度――かくて令孃はつひに歸らぬ旅に行かれたとか。當時いかばかり人々の同情を寄たであらう?。まして美人とあるからには。私には當時尼となるをゆるされた其家庭が羨しい。一人子は多く。靜寂的生涯を送るとか……?。親の無い子は孤も同じだ。姉!!兄!!と呼ぶ人はあつもてそれは血をわけた人ではない。
靜寂的生涯を送るには。元來私の性とあまりに一致してゐるのである。それは少しも疑を容れずして。
もしや私には生來尼として。靜寂的生涯ゞ送るがため生れて來のではあるまいか。
尼にならうなどゝは飛んでもない心得違ひを云つたものだ、心に苦勞があつても、身體が樂だからそんな考が起るのだ(M)
誤字。生在競爭は生存競爭、射は財。

○花つみのする夏の夢

根室　ふ　ぢ　た

女學世界で、中原の鹿を得て有名になつた内藤千代子の作です。いや萩香さんの作です。
私はこの人よりは、二つ年下の今年十七の少女です。そして、千代さんの作は、二三年前から拜見してゐます。初めは、その甘さに、醉はされてゐました。
靑春の血の高鳴り!さうした感じはこの人の作から、味はれる氣分です。而し、その人は印象である作を致しません。私はこの人の文學上の歩みを眺めてゐたものです。
果然!!!所謂内藤式の型にはまつてゐたとを發見しました。今度の作を拜見しても、悲哀の半面を、無理にかしさうとする努力の跡が讀まれました。
處女の誇それを以つて、果敢ない心を飾つてしまひました。いや全く埋めてしまひました。そして、心を僞つたことばかり並べてゐます。それが、私には嫌な氣がされました。
この人は器用な人です。才走つた人です。而し大した作は出來ません。じつと落ちついてゐるには、あまりにお轉婆過ぎてゐますもの……。
「私は十七」は眉唾物なれど(内藤さんも十九ではムいません)千代子さんの文章に對しては沙上の偶語を聞くことしばくです。(四)

地方色別 誌友評論（三）

一記者

△京阪地方（つゞき）

◎大阪には永代美知代が暫く居たけれど今は居ない、今は加藤朝鳥の夫人みどり子が居る、みどり子、もとは高仲菊子と云つて『女子文壇』最初の懐中時計占領者であつた、勿論小説がうまかつたのである、菊子は信州の人、大阪には縁もゆかりもないが、良人に附いて行つたのだ、大阪を見ること他人の如きものあるは無理もないが、其土地に同情が出來てくれば新しい發見もあらう、筆の立つ人だけに何とか心持を引立てゝ欲しいものだ。

◎和泉は大阪府下である、堺と云ふ舊い街もある、晶子や酔茗の生れた土地だが、文藝熱は一部の間に止まつて、自覺した男も女もない、二三の投書家はゐるが未だほんの路傍の小草のやうなもので、誰の眼にもつかぬ。

◎然るに堺の街を南に距ること約十里、和歌山街道が將に紀州路に入らうとする山の此方に男里と云ふ小さな村があつて、其處に金田代志子と云ふ女があつた、二三年前から詩を出してゐるが、詩は好いとして此代志子には問題がある。

◎問題とは奈何、代志子は男であるか、女であるかと云ふことが初めの問題だつた、けれど代志子は確に女であると分つた、次で起る問題は奈何、代志子の名で發表する詩が代志子の作であるか、何うか、之が後の問題で、且現下の問題だ。

◎代志子は今東京に來てゐる、國許の男里には金田秀太郎といふ男子が居る、此男子も詩を作る、代志子の兄だといふ。

◎從つて其人の詩を見るに、女の香がしない、何んなに性を隱しても、女の作には女の香がある、代志子の作に限つて女の香がないと云ふのは大いなる奇蹟であると云はねばならぬ。

◎『女子文壇』の暗劍殺、蘇生法師に睨まれたる代志子は、しどろもどろの態度である、助太刀に現れた佐藤某も亦無慘なる返り討にあつた、本號に出てゐる白羽箭を見れば分る。

◎吾人の好奇心は屢金田代志子の爲に動かされたが、兄が妹の犧牲となつて、作物の身代りまでしてやると云ふことになると、吾人は其處まで深く干渉して行く權利と餘裕とを持たぬ。兎に角代志子と名乘つて來る

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

以上、藝術本位の詩壇の選評者は、深き詮索は好まぬから女性の作として紙上に受附けるより外仕方がないのだらう。

◎攝津の池田、伊丹邊は今こそ電車も通じ、人も多く住んで大阪との交通が繁くなつたが、以前は淋しい町であつた、其頃池田の町に寺部君子と云ふ投稿家が居た、新しい讀者は其名すら御存知なからう、優しい弱弱しい文章を書いた人だが、黃鶴一度去つて又還らず、終に行方は雲井の遠に消去つた。

◎筆が西へ向いた序に神戸に就いて書かう、神戸には足立春子と云ふ人がゐる、熱心なる投稿家だが未だ文章が圓熟せぬ、頭腦は新しいやうだが、只新しいことに憧憬ると云ふだけで、深い覺悟は表れて居らぬ。

◎田中港の女は恐らく關西誌友の一重鎭であらう、落葉子として、かなり永い間詩を作つてゐる、惜しいことにはいつ迄も同じ處に停滯して、一足飛の離れ業が出來ない。

◎初め詩を作りかけた頃の方が元氣があつた、此頃では少し迷つてゐる形がある、詩は分るらしいが、技巧が分らないのだらう、此は單り港の女だけの罪ではない、今の若い詩を作る人が大方然うだ。

◎彼女が自覺した怜悧な婦人であると云ふ證據は、其散文に於て示されてゐる、覆面女、又は港の女の名の下に書いてゐる文章は、斷片ではあるが、思索的のものである。彼女自らは其有する處の熱を冷却しやうと努めてゐる、時代に反抗する若い女の、善い處も、惡い處も彼女には見えてゐる。

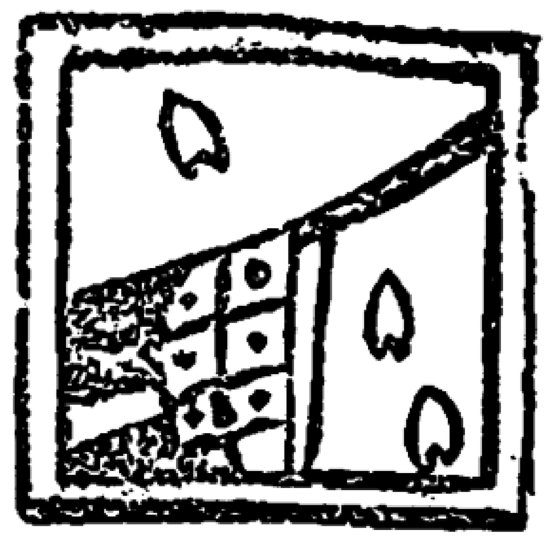
◎文章にも個性は著しいから、如何に匿名を用ゐても直ぐ看破することが出來る、併し詩に停滯してゐる如く、文章にも停滯することはなからうかと氣遣はれる、彼女のやうな一本調子の思想を抱いて、何事にも其感じの動いた儘を書かうとするものは、必ず停滯の時期が來る。

◎一つの文章の中に於ても遲疑低徊の痕が見える、ずつと一つの方向に進んで行くと云ふ態度ではない、進んだり、退いたりして物を言つてゐる、一句一言引離してみると閃くやうな光があるが、全體として跡に物を殘さない、殘してもそれは極めて稀薄な類型的のものである、先づ少くも囚はれたる思想から脫出せねばならぬ。

◎港の女の外に笹舟あり、詩を作るがまだ顯れない、

◎淡路にも二三の投稿家がある、加藤菊子が最も達筆である、島守女とも云ふ、近くは紀念百號に『早く身の治りをつけたい』と云ふのがあつた、果して身の治りがついたか、それ以來餘り書きにならぬ、文章の上で見ると、蒲柳の質らしい、併し筆はたつ方で數年來かなり多數の作があつた。

◎次は京都と大和



俳句

内藤鳴雪選

○（天）朝寒の富士を見てなく駿馬かな　澁谷　横谷孝子

○（地）笑はざる人笑ひたり秋祭　久留米　橋本かめの

○（人）髪結ひて背高き影や小春の日　前橋　みづ枝

佳作

天晴れて地晴れて夏の暑さかな　信濃　百瀬若子

秋の雲只蓬々と走りけり　深川　花子

あの鏡この鏡みて泣く秋や　伊豫　軒の栗

静かさに鳴子も引かぬ夕かな　群馬　冷花

一日の歌屑も掃く紅葉かな　越後　藤原泣黒子

秋の朝露散る庭の掃除かな　近江　志がよ

人住まぬ島に灯の見ゆ秋の湊　下関市　木本園子

曙や火串流るゝ谷の水　日高　白百合

芭蕉葉の破るゝ音や秋の風　周防　美女子

蓬莱の客とも見ゆれ春の舟　沼津　村瀬繁子

無花果の葉蔭に啼きぬ秋の蟲　廣島　しこぐさ

雲切れてパッとさしたり秋の月　碩井　明の星

雛僧の鐘つかんとすれば紅葉散る　北見　夢衣子

骨髓にしむ淋しさや秋の風　宮城　馥子

村すゞめ鳴子になれて風光る　本郷　中村えい子

餓鬼飯を犬にやりけり秋の風　知多　みどり葉

思ふまじ言ふまじ君は秋の空　本郷　城本美知子

淋しさは猫に泣かるゝ夜明哉　千葉縣　五木田たね子

明月や松より落つる夜の露　同　伊藤よし子

明月や馬に鞭うち朋来る　同　白木きく子

戀ならで人も戀しや秋の暮　同　五木田とめ子

戀人をまつ灯は消えて明の鐘　同　伊藤みつ子

秋風やそば畑に見る蝶一ッ　同　山路たか子

秋雨や小ぐらき庭の白菊　神奈川縣　しうん子

空つるべ曳き上げられて秋のくれ　土佐　はぎ子

菊開きや吾愛讀の山家集　備中　小見山春子

只一騎走せ行く人に時雨けり　岡山市　柿園花子

打ち拂ふ袖も甲斐なき吹雪かな　上毛　荒井よし子

つばき咲く町の垣根や冬の月　群馬縣　新井つま子

風なぎて宵から高し冬の月　上毛　冷花子

野に遊ぶ牛の群や秋日和　千住　白妙

秋の日の縁までさして消えにけり　横濱市　金井きよ子

漕ぎ止めて月ながめ居る二人哉　下澁谷　槇ふぢ子

山門の太き柱や冬の蠅　備前　近藤須賀子

曼珠沙華咲くや野がひの牛睨子　美作　白菊

朝寒やニコライ堂の鐘の音　神田　かをる

振袖や菊の宴の厚化粧　水戸　さゆり

紅すてゝ今年哀しき落葉かな　熊本　しらはぎ

よき人の蟲きく窓に月のさす　城南　小島美雪

港去る船に打つ波寒きかな　秋田縣　雁本光子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

石ころにつまづく旅の暑さかな	神戸市	雪の女
夜は白く香魚はねとぶや紀伊の川	和歌山	宇田菅
落葉して月の小窓に吹き込みぬ	山形	すき子
秋日和牛引く人の顔くろし	近江	操子
照る我が影一つ秋の月	渡島	宗原美津子
縫さめて小窓によりぬ秋の雨	愛知縣	中村白百合
前髪のほつれ毛吹くや秋の風	信濃	丸山榮枝子
小鍋に源氏の君の朝餉哉	宇都宮	松井玉子
見る限りたゞ初雪の景色かな	島根縣	藤田鹽子
山里にともしび淡し秋の暮	信濃	工藤楓葉子
魚住まぬ古き小池や月の影	豊橋市	浪崎照子
草籠に細り行くなり秋螢	蠣殻町	小林政子
繊衣かさねて寒し秋の暮	松本市	矢口貞子
落葉せる野邊の夕日や小鳥飛ぶ	岡山市	梢の星
冬の夜に琵琶抱き行く男かな	深川	春川花舟
鹿鳴くや月下に立てる僧一人	岡山市	桃の村女
明月に君とよみけり懸想文	大和	栗山龍子
一人住む墓守の女や萩の花	須磨	保子
人知れず悲しむ人や蟲の聲	秋田縣	小島あるは
秋風に松も淋しき枯野かな		むらさき
朝涼や砂地にのこる鵆の痕	淡路	片割月
名月に雁も啼くらし芒原	名古屋市	瀧本逸子
束髪を解いて涼しや今朝の月	能登	みゆき子
味噌をする厨の音や今朝の秋	茨城縣	花岡千代子
名月の埠頭に立てる美人かな	鹿児島市	姉川梅子
舟止めて雁の聲聞く夜寒かな	茨城	凹田朝花
初雁を數ふる秋の日和かな	横濱市	石川八重
水盥やいとゞくみ出す秋の朝	堺市	鈴木喜代
垣こしに語る二人や秋日和	京橋	あらひき子
朝寒の早や起きて居る隣哉	下澁谷	小原あい
穂芒や野鍛冶が家の施餓鬼棚	横濱市	三橋美都子
辻堂のいたづら書や秋暮るゝ	備前	佐久間りん子
香焚けば小窓に音す時雨かな	東京	葛の葉
古寺の御佛寂し秋の雨	神奈川縣	はな子
目覺むれば木枯し募る北の窓	朝鮮	あき子
やま寺やひとり宿りて朧月	大阪市	夷谷善枝
天狗風吹きて紅葉の時雨かな	金澤	俊子
關跡や尾花が下にいとゞ啼く	甲斐	長谷川こう
梢一荷擔ぎ過ふ森や霧深し	神奈川縣	中島都鳥
庭を掃く小僧小さし秋の風	根室港	齋藤ふじ
妹の飼ひし蝶々の塚に野分かな	大阪	吉田女郎花
軒下へ牛しかり込む時雨かな	岐阜縣	八千代子
夕映や芙蓉やせたる小柴垣	茨城縣	深花女
白菊に一本まじる野菊哉	長崎市	永井圭子
落葉かく村の少女の脛白し	渡島	楝原夕美子
行く秋の峠に立つや松一木	本郷區	山村こと子
君が艦は筑紫に在りて秋の雨	新舞鶴	菅幸子
歌の師の千鳥なく夜を召されけり	山城	木の花
稻の穂に神輿の渡る日和かな	淺草	藤井若菜女
月冴みて讀經の聲の倘高し	大阪	蘇草
佛飯に鼠の足の跡も見し	日本橋	小林政子
朝寒や觀音堂の灯かな	横濱市	晉堅千鳥子
明月や早きもみぢの葉蔭より	美作	水田邦子
百舌鳴いて化粧の水のやゝ寒き	姫路	磯菜
老の身の留守して居れば眼白なく	伊賀	中村こま子
風や壁に音するつるし柿	横濱	京子
月代や松籟絶えて峰の寺	淡路	内海千鳥子
白菊の倘香に立ちて古戰場	大阪	田野しか子
月影の更けゆく窓の胡弓哉	伏見	阪芳子
菊一枝霜白き朝を手折りけり	土佐	綏山春水
夕暮や枯野を急ぐ旅行僧	長崎	富貴子
小女郎の艶姿淋し今朝の秋	岡山市	立岡房之

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



初作

編輯局選

○萌黄の絲（天）

岡山市　野百合

萌黄の絲を縢針の子のやうな太い大きな針に思ひつ切り長く通して、二重にしてスー〳〵と拔くと指が青く染る。尺取蟲のやうに親指と中指とで間を取りながら、グツと刺しては裏から拔き出し、又刺し又拔して次から次へと結んでゆく。新らしい蒲團の藍の香が鼻をついて氣持が好い。

あッ痛つ、針がまあ手にこゝーこんな太い針ですもの痛い、痛い、ああ痛いわ。グー〳〵と親指の先を押すと鮮紅色の美しい血が、玉のやうになつて出る、丁度ルビーのやうだと思ひながら、出る限り押出して見た。

蒲團を綴ぢるのは私大嫌だわ、緩すぎたり、かたすぎたり、歪んだり、縱結になつたり、其上手まで刺したりするんですもの。あゝ暑い、今日は汗が泌出るやうだ、嫌な事をして居ると尚のこと。

針を投出して半分程綴ぢた蒲團の上へ轉ぶと、ぐつたりとなる。遊絲緩く縺れ合ふ窓越に仰げば深碧の空は高い。折々思ひ出したやうに吹く風も頬にぬるく、ふはりと柔さうに所々に浮いて居る白雲も秋だと思はせる。此所は場末であるから淋しい程靜だ。人の足音一つもしない。晝だのに。ふと靜な空氣を傳うて樂隊の音が聞えた。

……………………

目にながむれば彩雲の
ゆきては開く繪巻物

……………………

手にとる酒は美酒の
若き愁をたゝふめり

……………………

小聲に歌うて居た私は知らぬ間に……私の心は知らぬ間に眠つて居た起きて早く仕事をしなきやいけないよ、と一つの心は叫んだが、一つの心はそれに逆うて起さなかつた。又うつとりとして居ると、誰か此所へ來る氣色、はつと驚いて飛起ざま、又萌黄の絲を手に取つた。

初めての作が此れだけ出來れば心强い、永遠に此作の出來た時の心持を把持して文章を作つたなら屹度えらくなります（評）

○都を去る時（人）

近江　しがよ

夜の電車はたえまなく走る。

電燈のまばゆい光は、常とは變つて私のあたまの中を色々にかけまはつて。新橋――、幾度かかう思つては人眼を忍んで、街の夜光に閃めく商店のかず〳〵に涙ぐむのであつた。

居眠りしてゐた樣に叔父は突然あたりを見まはして、又腕組みをした。音は俄に止んだ。電車は止つてゐるのである。

二人も人の中に交つて靜かに下る。名殘り惜しい電車も後に見つゝ驛中にまぎれ入る。まつ直に見限りなき廣い中に人はぞろ〳〵動いて居る。丁度人知らぬ花園へでも來た樣である。白い服着た人も所々に立つてゐる。其新橋驛は、私は一種――、それかあらぬか見る少女等の姿に張りがない樣に見える。

赤い切符はどきん〳〵と切つて渡された。「急行ですよ米原で乘りかへなさい。」叔父は毎にない優しく敎へてくれた。待合室の片隅にて腰下すかつと電燈の輝やきに、人々の顔半面は皆白く見える。優しい歎息が時々聞える。此人等も都下りであらうに。

汽車の響き、やるせなき周圍の足音――、私は其性急な空氣のどよめき

が、今暫しだと思ふと堪へられなく懐かしい、この一秒時の長さを心寂しく嬉しいのである。

急行の時が來た。私等もプラットホームに出る。

叔父は入場券を買つて來てあれこれと空いた室を探してくれた。話す中に早や汽車はたう／＼動いた。さらば都よ、叔父様――。私は叫んだ。叔父は二三歩程ついて來た。

只立つたまゝ、其眞黒な後姿を想ひ續けてゐる中に、今は無限のはて迄續いてゐると思ふ様な暗の野に、時々蟲の聲の亂れて聞ゆるのみ。

周圍よりも自分の感じが能く表はれてゐるつまらぬ作ではない(評)

○名づけ（入）

夕美枝

『房やが赤ん坊を產んだよ、』と朝飯の時誰かゞ言つて知つた事をもう忘れてゐた。五人目ぢやあるし、私の心にはなれ限つた出來事なので何の驚きも悦びもなかつた故だつたらう。

『どんな名でも宜う御座んすらあ、五人目ですけえなあ、お頼う申しますら』房やは出來て七日目の赤ん坊を抱へて頭から被つた白布の下から產毛が薄く生えた、赤い赤ん坊の顏をのぞきつゝいふ。鼻の低いきたない赤ん坊だなぞと思ひつゝ顏から眼を放した。

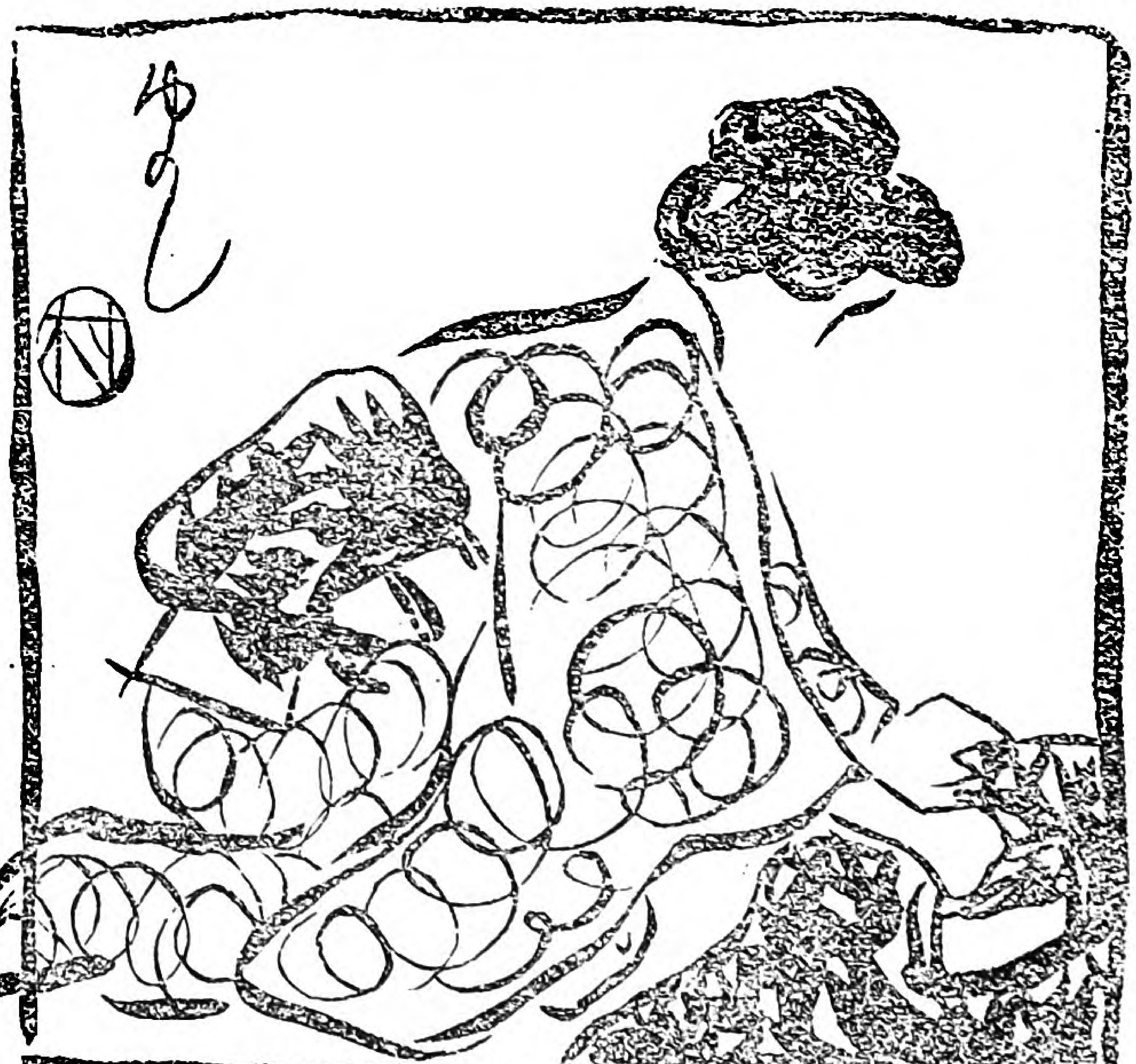
『だつて、私が名づけたのはみんな死んぢまうもの由貴だつて数だつて』

『そりや、時の運ですら、旦那ア集金にお出掛なりいやしも姆はんになあ、ホヽヽ』

『困つたねえ。』房やは泣き出しもしないのに、乳先きが鞘形に黒くなつた乳房を出して赤ん坊の口にくゝませた。乳房は叩けば大鼓のやうな音がしさうに、だぶ／＼と脹り限つて青筋が二ツ三ツ現れてゐた。赤ん坊は餓えた人が食物にありついた時のやう、ぎく／＼と音をたて、吸つた。吸つて／＼吸ひつく／＼した時分には乳房は半ば萎びて居た。ポタンとあけた厚い赤ん坊の唇には、繪の具のホワイト色をといたやうな汁がたまつてゐた。私は机の前に坐つて巻紙に、久代、末野、お冬、などゝありふれた名を書いて見た、けれど何だか赤ん坊に適しないやうで棒を引いてしまふ。正枝、朝子、小枝、などゝもかいて見る。

小枝！どうかかうかふさはしくはないかと思つた小說にでもありさうな名！小枝と大きく書いた紙切れを房やに渡すと嬉しさうに禮を言つて行つた。

好い名を貰つて欣んだでせう(評)



ゆのし　芝村木荻子

○葬られた花

枯尾花

私はね、去年の秋に初めて咲いて本當に蟲に蝕はれた花で御ざいます月夜にも暗夜にもどれ程蟲になぐさめられたかしれません、淋しい霊も、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

悲しい夜も、苦しい日も私は蟲の爲に少しも悲しみませんでした、淋しいとも思ひませんでした。ですから他の花は枯れても他の蟲は死にましても私と彼の蟲とばかりは、霜の中に又雪の中に温く暮して居ましたけれど自然は許しません!!!私はあはれにも蟲を殘して枯れました!!あゝなんと無情な世なのでせう!?私はいつまでも咲いて居りたう御ざいましたのに、蟲の爲めならざるまでも……せめて枯れる日の前に心行くまで語りたう思ひのまゝに泣きたう御座いました、あゝ無情な世はそれさへも許しませんでした、花のかなしみはどんなでせうか愛する蟲よ!慕ばれる蟲を殘して枯れた花の悲しみは?!!蟲は其後どうなつたでせう他の花を慕つて鳴いたでせうか。他の花の露で生きたでせうか、私は枯れましても自然の報とあきらめる外は御ざいません、唯蟲の事が氣になつてどうしても忘れる事が出來ません、きつと蟲は此の世に居りませんでせう、いつも私に申しました。

あなたが枯れたら、私は一日も生きてゐないと、ですから死んだ事はたしかです、すみません、私の爲に蟲まで殺してはどうしませう、あゝもう私は再び咲きません、咲いて他の蟲を鳴かす事は出來ません、けれど、もし彼の蟲も再び生きるなら其時は私よろこんで咲きませう、が、こんな事は夢にも見られません、蟲が再び生きない事はたしかです、たとへ生きましても、私の花を慕ひません、一度も枯れないで永久に咲く花をしたつて鳴きませう、あゝ羨しい此花!!!なぜ私は此花になつて咲かなかつたでせう?此世が恨めしい!とこしへに枯れない花!!!凋ばぬ花!此花は何でせう!?!

細かく書いてある、思想の淺薄と幼稚は別として、これだけ細かく心を使ふ人は他日好い文章の書ける日が來るでせう(評)

○ひとりごと

高知　津野千枝子

あら美枝さん、何です、土佐の田舍に終すつこんでばかり居る人はいつ迄も文明人の仲間入はできないつてホヽヽ、有難う、よく御言葉のはしに土佐の田舍だの、汽車もない山國だのってよくおいぢめなさるが、よもやホワイトのエプロンに眞紅のリボン結ひ土佐の鏡川で目高をすいた七年昔はお忘れにはなりますまい、美枝さん貴孃の故郷は土佐をのぞいて何處にあるの?

貴孃お怒りなすつてホヽヽ、どうせ未開人の云ふ事怒らないで聞て頂戴汽車がないくておつしやるけれど、それより一歩文明程度の高い電車が、東西十里南北一里半を通つていますわ、だから汽船から上陸すれば高知市迄は電車で……、入海三里の浦戸灣内は、おるが如く巡行船は絶えまなく通つています。

古城をその儘公園の大高坂の木間もるゝアーク燈も、文明の利器自働電話も遠く前から生れてゐますよ、オホヽヽ、田舍くつていぢめたものでもありますまい。

自稱女詩人の奈美さんですか、えゝとこゝに園崎夫人となられましたよ。ハス君?帝大文科の御出身だつて奈美枝さんにはもつたいない程美くしい方、眉目秀麗の好男子、此間もネあの御自慢の漆黒のお髭をピンとカイゼル式にひねり上げ、シガーくゆらしながらゴム輪の車で縣會議員選擧所へかけつけていらつしてよ、あら敗けをしみですつて、いゝえほんとに奈美さんにやすぎた方ですよ、どうせお金の世の中、餘程人格の高い人ならいざ知らず、普通一般の人は金力にはチャームされますからネーオホヽヽ

土佐のお國自慢は宜いが、金力にチャームされるやうでは困りますね、まさかそれも自慢のうちではありますまい(評)

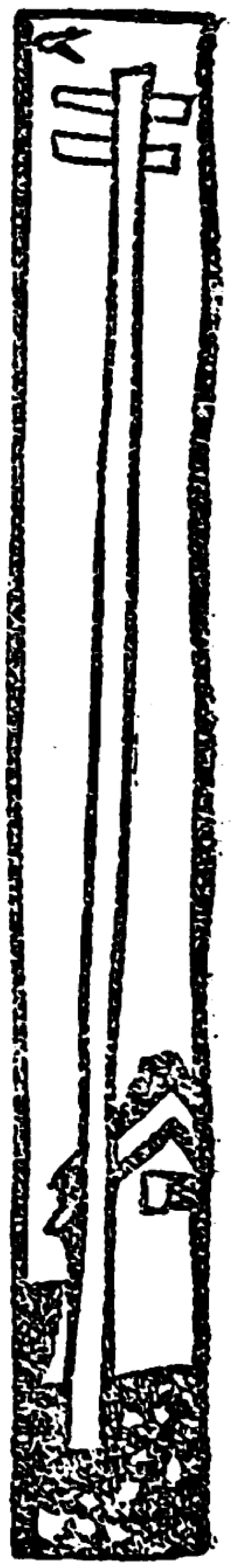
○十月の日記

しらはぎ

×日、暗い暗い、恐ろしい暗い晩だ。向ふの白壁さへよくはわからない。見上ぐる北の空も一面の暗黒、天地寂たる中にたゞ蟲が鳴いてゐる。哀蟲が……哀しげな聲をあげて絕叫してゐる。鳴け鳴け、蟲よ、幸なる蟲よ、ゆめ短かき生涯を恨むな、心のまゝに歌ひ叫び安らかに逝く汝の生涯は誠に幸福なものではないか。

燈火の下に又日記を開いた、瞭我半生の哀史——(下略)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



女子文壇岡山誌友會の記

幹事

待ちに待つてゐた誌友會は、いよく十月二十九日、岡山後樂園竹の間で開かれた、中秋の空はいと心地よく晴れ渡りて、女子文壇岡山誌友會々場、と大書した模造紙の貼つてあるのも、何となくうれしかつた、

開會の時は愈々迫つた、來賓の方々は九分おそろひになつたが、誌友の皆樣は僅七八名に過ぎぬ。

時は用捨なく過ぎて行く、幹事一同互に顔見合せて、吐息ついたも幾度であつたか。

かくて定刻を過ぎる事二時間、何時まで待つてもゐられないから、申込人數の半にも違しないが、遂に思ひきつて午後二時開會を報じた。

開會の辭、立岡房之、立つて述べた、次に、某文學士の新らしい女に就て談された、幹事の一人桃のむら女、やむを得ぬ用事の爲出席出來なかつたので祝辭を寄越されたのを、大山茂子朗讀した、杉原七面氏及び赤尾寅吉氏の文學談が有る筈であつたが、當日機かの差し支への爲、出席されなかつたのは、返すくも殘念であつた、直ぐ餘興にうつる、筑前琵琶、夜の鶴、大北旭水氏彈奏休憩三十分、庭前に於いて紀念の撮影す、箏曲、山田流、小督、水野夫人、立岡房之、長唄、しづはた。吉田母堂、河田夫人。

時に五時半、暮色蒼然として座に迫つたので二三餘興を殘した、村井君子、閉會の辭を述べ、福引にうつる、靜かにあつた會場の俄かに笑聲に充ちた中を、各自歸宅された。

終に、小見山樣はじめ、御來會下さいました、皆樣方先日は失禮致しました、わざく御遠方をよくこそ、………厚く御禮申上ます、何分無經驗の者許では御座いますし、

順序も何やらドギマギと、不行届の罪は幾重にも御詫び致します、どうぞ之におこり遊ばさず、第二回開催の節も、是非共御出席下さいます樣、今より御願ひ致して置きます。

出席者芳名、戸川とら子・小見山春子、富山千登勢、片山光子、近藤貞江、小見山仲・安田初女、立岡鐵野・水野夫人、

幹事、村井君子・大山茂子、立岡房之、

別記（其一）

立岡房之

申込人員は三十三名、之では隨分盛會だとよろこんで居た甲斐もなう、當日には僅に來賓幹事共に十八名に過ぎぬ。

川口氏の談、新らしき女は斷片的ではあつた、面白く聞いた、大北先生の琵琶、夜の鶴は悲壯の曲!!さすがに涙をもよはした人さへあつた、吾嬬等は當地では珍らしいから、是非に……との事で、止むを得ず承諾はしたものゝ場所なれぬ、自分は夢の中にひいてしまつて、氣が付いた時は汗びつしより……只、水野夫人の美しい聲が耳の底に殘つてゐる許り、餘興の内で最も期待された、しづはた、一同感に入つて聞くさすが、杵屋六左衛門の高弟とうなづかれた、寫眞撮影の時誰かゞ「皆樣、紀念のお寫眞ですよ、他所行きの顔をなすつてね……」と云つたので、一同プツと吹き出してしまつた。

後で聞けば會場を覗いて、何故か歸つた方が四五人あつたとか、會に不忠實な方達と今更ながら驚いた。

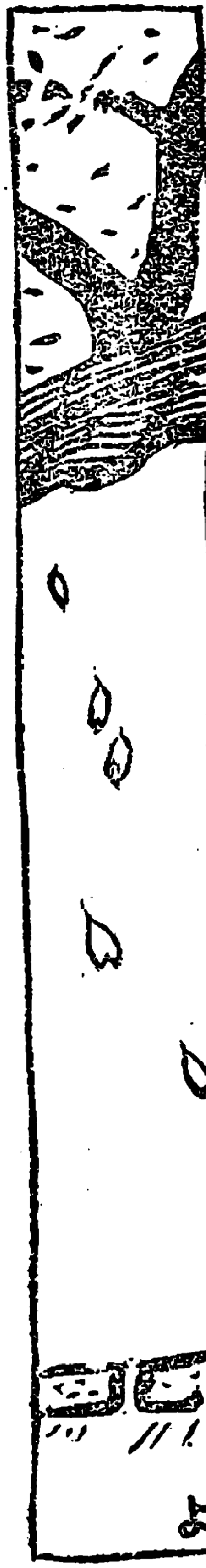
別記（其二）

はる子

時は十月二十九日、後樂園竹の間で開かれた誌友會の末席を汚した一人である、幸昨日に變る菊日和、心持良い午後の日光を受けて鶴見橋を公園へ差し掛つた時は、十五六に若返した、夢心地であつた。

園内の雜沓を避けて少し奥まりたる竹の間は若い婦人が集まつて女子文壇を愛し友情を温めるには恰好な室であつた。

此日幹事の御服裝を申さうなら、お召しのお袷せかるく召して厚板のおみ帶と云ふ揃ひも揃ふた、三幅對お髮の結び方を申さうなら、大山樣の高島田、立岡、村井樣のローマ、日々の御練磨で黒々したお髮、輪廓のと・のふた御面、やさしい表情を遊ばして右に左に輕くお働き遊ばす、お三人のお身體、私は何とも云へずおなつかしくて堪らない……



讀友くらぶ

書籍交換

○近江大津市松屋町八八
　山田たづ子

▲皆樣の中に本誌十月號及增刊娘時代御所持の方は私の三田文學文章世界背籍などゝ御交換下さいもし御思召のある方はおハガキで御一報下されば當方から御送りいたしてもよろしうございます。

○越後國蒲原郡乙村
　井上貞子

▲※の玉の作で、あの有名な「歸行かずの詩全部を御存じの御方は御座いませんでせうかそれから坪内先生のロミオトジエリエツトと沙翁全集のオセロとを交換して下さる方はありませんかどなたでもよろしう御座いますから。

○備前兒島郡八濱町歐見七百七十六番地
　近藤須賀子

▲持つてる書物。「己が罪」「やどり木」「春」「乳姉妹」「美文の初步」「文學入門」「文章講義錄」其他雜誌種々あります。

▲讀みたい書物「金色夜叉」「夏子後姿」「コブシ」「新體詩作法」

○豐橋市神明町大池銀次郎方
　三四子

▲皆樣私は左の本が讀みたいのですが貸して下さるかゆづつて下さる方はないでせうか、女子文壇六巻十二號と四十二年五月のと、六月のと其頭發兌になつた定期增刊と右の內一冊でもよろしうございますから御都合が出來ましたなら一應お知らせ下さいませ。

○京都府南桑田郡曾我部村
　並河龍子

▲お姉樣方にお願ひ致します、皆樣の中でおよみあきのやどり木お持ち合せの方が御ざいましたら何卒暫くおかし下さいませんか些少ながら御禮はきつと致しますからなるべくはお近い方が結構です。

○宇都宮市今泉町松井方
　東あさ子

▲讀みたい書物。「牧水の歌集路上」「同別離」「哀果の歌集往復の路」「同なきわらひ」「白秋の詩集思ひ出」「星湖集」「少女の戀」「夢二畫集」

▲持つてる書物。「新詩辭典」「短歌作法」「收穫」「相聞」「詩說」「萬葉集」「一握の砂」「寸鐵短歌集」「山上湖上」「疲れ」等です皆さん右の書物と交換を願ひますハガキ一報あれ。

○滋賀縣大津市松本三三三
　佐々木夕美香

▲此の度本誌の愛讀者となりました何卒御交際を願ひますそれから進行曲粹（第一集）〜手風琴獨修とをバイオリン教科書と交換を願ひ申します

又樂曲に關する書籍なれば如何程にても交換致しますからお知らせ下さいませ。

○大阪市西區川岸町天神境內
　岸田ひさ子

▲諸姉樣の中でヴワイオリンと下に記する本全部とかへて下さる方はありませんかもし御志も御座りましたら御一報下さいませ「巴里」（新）「心ノ影」（中古）「女子ノ作文」（中古）「新片町より」（新）

○山梨縣甲府市柳町
　松浦はな子

▲私始めて投書いたします、誠に申かねましたが皆樣のうちに八月の文章世界を御持ちの方がありましたら、どーぞお送り下さいまし、つまらないものですけれど御禮はきつと致しますぞ

れから御手紙もどーぞ。

○　千葉縣長生郡水上村大庭

伊東さく子

▲求める分「女學世界増刊 迷信に囚はれた婦人」「琵琶歌上」「ハムレット」其外何れにても宜ろし

持てる分「落く手紙」「都會の婦人」「地方の婦人」「今の婦人」紀念百號其外右の書物換讀なり御貸しなり致します御望の方はゑはがきを添へて御申込下さい他に不用の書物もあります。

○　本郷根津八重垣町五十二

堀　タカ子

▲諸嬢樣姿の手許に、それから ルーズベルト集、肉彈歸雁のあし、小僧の學校金色夜叉の不要本あります、御望みの方には御交換致します終りに姿は一御隣りの上野樣から叔つて先々月から愛讀致して居ります御交際を願ひます。

○　茨城縣稻敷郡源清田村古河林

松本一三子

▲持つてゐる書物「不如歸」「血に泣く不如歸」「良人の自白」「二人令孃」「肉彈」「寄生木」「金色夜叉」「文藝倶樂部」「秀才文壇」等。

▲讀みたき書物「思出の記」「婦人世界」「青鞜」「金色夜叉終編」「都會の婦人」「地方の婦人」。右換讀いたしたうございます但し事情がありますから男子の方は御斷り申します。

○　滋賀縣大津市橋本町

小西愛子

▲皆樣の中で「ヘツダガブラア」の譯本をお持ちの方は御座いませんか、もし御座いましたら御讓受したいと思ひます。

御譲り下さる事が出來ませんでしたら五六日拜借させて頂いても結構で御座います、お持ちの方は何卒下名まで、其上で御相談申上げます。

○　福岡縣遠賀郡底井野村下大隈

小南フデ方

鈴　子

▲皆樣姿は此の淋しい遠賀川に住む貧困娘で御座ひますが貧しいた爲好きな物を買ふ事が出來ませんが、皆樣方の中に新文章娘時代を御持ちの方は餘り過ぎた禮も出來ませんが何うぞ御惠み下さいませ。

○　徳島縣名東郡上鮎喰町

吉田一郎樣方

伊澤照子

▲皆樣の中に、都會の婦人、若き婦人、新文章、落く手紙、嫁に行く人、其他女學世界、古い本誌等御不用の方は御ゆづり下さい繪はがき文藝くらぶ新小說等できつと御禮致します、

個人消息

○　大阪市道西頓堀通二

小泉貞子

▲大阪杉山千代子樣　先日はお尋ね下さいまして有難う存じます、仰せの如く樂しかつた神戸の遊樂、あの時の樣はまだ眼の前にちらついて居りますのに早三年も經ぎたのでございますねおなつかしうございますわ、一度、吸樣と御一所にお遊びにおこし下さいませお待ち申してをりますよ。

○　千葉にて

重　子

▲芳子樣度々お手紙有がたう存じました。先日又お手紙とお葉書、ふるさとから廻送してくれました。御親切なるお言葉、うれしう只涙で拜見致しました、私は方々をさすらうてをりますの、波荒い南の島の吾故里は私にはあまりに無情い所でした。私は悲しうて も漂泊ひのまゝに了りませう。放浪に任した旅の身には、寂しさが、追ひかけく迫ります、けれど筆も持ちませぬ、ペンも握りませぬ、悲しうなつて泣うとは思ひませぬ故御安心下さいませ。こちらへ來た時に葉書でもと思つたけれどお家のことを思うてやめました。お手紙は國へお出し下さいまし、お體御大切に――

○　久慈郡太田

桂の華

▲田村波津子樣　娘時代で御寫眞拜見しておなつかしくて堪りません、御存じの皆も御座いませんが、私は、西茨城第一高小で貴女より二級下でした福子と申す、者で御座います、其當時桂町に住んで居りました。今春笠間へ參りまして柳田さんや信樣から、お噂承りました、私も誌友の一人、何卒よろしくお願ひ申します、

○　横濱市北仲通二、村田屋内

紫　花

▲皆樣の中で過ぐるころ迄本郷區元町二ノ六五佐藤樣方から裁縫女學校へ通つてゐられた山田芳子樣の現住所御存知の方は御知せ下さい、御禮には横濱の市街の繪葉書をさし上ます。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○　上毛新田郡木崎町赤堀　小澤竹子

お懐かしき、神戸の、浦上百合香樣よ、先日本誌の昨年九一月號をお送り致しましたのは、私でご座いますよ、お返禮などは入りません故、不束者ですけれども、どうぞ此の後は、趣味ある、お交際の程を、永しへにお願ひ致します。

○　澁谷の里　坂口きく子

▲青山の里KIMIKO樣つてどなたですか住居姓名くはしく知らせて下さいな私困つてゐるのよ宮崎矢須子樣レターたしかに千里眼！うまくあたつた樣なあたらない樣な。

○　横須賀　きぬた

▲北の都の俟野幽香里樣おなつかしうございます私はあなたと同じ學校に居つてものでございます、下のクラスでした今ゐれば四年でございますのどうぞ御交際を御願ひ致します。

○　新潟南蒲原郡井戸場村の　御存じより

▲東京青山の草の家春樹樣久しくお手紙下さいませんのねおうらみ申して居ますよ、私手紙差上げたいのですけど貴女樣の御都合如何かとひかへて居ますの何卒以前の如く親密に御交際願ひます。

○　大阪市　小川敏子

▲柴田の加藤きん子樣其後御無沙汰のみ致して居ります御變りは御座いませんか？八尾の松田樣天長節に御招き下さいまして有難御座います あの寺山町へ御居るのいやなら天王寺公園の武德殿自宅へ入らつしやいませ待つて居りますから岡山實科の靜香樣肩よりプラチナを掛け遊ばした御寫眞ありがたう御禮申します!!!誌友の諸孃よ時候柄御身御大切に遊ばせ。

○　岡山縣赤磐郡小野田村　神崎蓉子

▲岡山市の富山千登勢樣　貴孃は若や　御津郡の御出生では御座いませんか、もしさうでしたら私をおぼえて入らつしやるでせう幼い時赤懸の里で共樂しう遊んでゐましたが。岡山にいらつしやるとはきいてゐましたが御住所がよくわかりませんでして貴孃のお住所をきいて何時か一度お目にかゝり度いと母も度々申してゐますもし赤懸の方がおなつかしう御座いますれば一度御住所をお知らせ下さい。

○　稻敷郡　吉田李都子

▲土浦下高津の栗山正子樣私を御忘れ遊ばして？貴女内西町の酒井へ御通ひ遊ばしましたワネ・只今も御出なさいますか。御手紙下さいましな、住所は、本町の太田つる子樣に御聞き遊ばせな誌上へは書けませんから……

○　備中淺口郡鴨方中町　筒井藥店内　野菊子

▲大阪の皆々樣に御願ひいたします、三十八年頃東區第四高等小學校にて、一年級女子部乙組をお受持になつておらつした渡邊みさを先生の今の御住所を御存じの方は御面倒ながら下名の所まで御知らせ下さいましな伏しておねがひいたします。

交際

○　K Ota. Capay, Yolo, Co, Cal, U,S,A

▲米國より　私はアメリカに居るふつゝか者でございます、どうぞ御交際をして下さい、私の方からはお望みにより美しきアメリカの繪はがきを送りますわ。

○　本郷區西須賀町一三　戸山清藏樣方　水野禮子

▲おしごと　皆樣、私は家のまづしいため人樣のおしごとを致して牛苦勞をして居ります、本郷邊におすまひになる方の内におしごとがございましたら御かし下さいませんでせうか、なくつて困つて居りますから御かし下さいまし。

○　臺灣銅鑼灣驛小林方　春子

▲遠き國より　懷しき姉樣方どうぞおハガキにても御交際下さいませ私は父も母も無くまして兄弟とても御座いません今はかうして故國はなれた土地へ來て叔父樣の厄介に成つて居ります悲しい身で御座いますどうぞ哀れと思召して無學の女で御座います。

○　郎の小女

▲夢二に憧がるゝ　十月號でなつかしい夢二

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さんの畫の批評誠に嬉しく拜見いたしましたわ中でも鈴蘭樣の眼と壁ゝ門は取りわけ妾と同感なのです外の方樣ばあまり前途に付いて望みをお持ちなさつたのに鈴蘭樣はまだ〳〵ながいながい未來があると仰しやつたのですもの妾は夢二さんの畫いろ〳〵の雜誌から見えなくなる樣になれば妾の生命の終る時なのでせう。

○東京芝區愛宕山下　佐藤妙香

▲仙臺の人　私はね又廣瀨河畔の人となります仙臺のみな樣誌友會をひらきませう私もおよばずながら力をつくす考へですわ、ではみな樣レター頂戴よ。

○日本橋區檜物町二十六　荒井方　秋元茂登子

▲淋しき天地　木々の梢も葉は地に落ちて昨今は誠に淋しうなりました、記者樣及び皆樣には御變りは御座いませんか御伺ひ致します、此度皆樣より御情厚き御玉章給はり誠に有難う御ざいます私は兩親なく姉妹なく一日として樂しき事はなく悲しい空想に更けつて居ります者何卒妹として永久に御交りを願ひます然し男子の方は絕對的に御斷り致します。

○東京市牛込區簞笥町　區役所前伊藤金太郎方　宇津井紅子

▲秋　誌友の諸姉上樣よ私は秋を懷かしく思ふ。靜に流るゝ雲を仰いで見ると靜寂の大自然の俄かに迫るを覺ゆるではありませんかあゝ寂びしい哀れな秋ではありませんか秋は幸なくも兩親に先立れてより早や四星霜秋は過去を追想する今は獨り靜かな學やの寂しさに泣つゝ此の誌に慰藉せられて居ります同境遇の姉樣方よ、繪葉書や玉章の交際を永久に願ひます福岡の諸姉樣振るツて御投稿せられん事願ひます。

○鳥取縣八頭郡國英村大字山手　小林英子

△注意▽

新年號に掲載する誌友くらぶ原稿は本月十二日を以て締切ります、誌友諸孃間の誌上年賀は成るべく一纒めにして眼につくやう揭げますから皆樣此際盛んに多數の寄稿を望みます、原稿はハガキでも、他の原稿と同封でも御隨意です。

▲全國の愛讀者　諸子よ不束田舍者ではありますが御交際して下さい其から娘時代口繪の內江森美子樣が戀しいわ何卒御住所を知らして頂戴

○日本橋區通油町十三番地　西川ゆり子

▲初めて　私はずつと前から本誌を無二の友として愛讀して居りますがこの度始めて投書らたしました。たつた母と二人限りのたよりない私故皆樣御たより下さいませ。きつと御返事さし上げます。皆樣御身御大切に。

○大阪市東區石町二丁目　杉谷ふみ子

▲御玉章　私は初めて誌友くらぶに顏出ししました不束者ですが御交際をねがひますそして御玉章の交換もねがひますきつと御返事さし上げますから……。

○山口縣熊毛郡田布施村　御織戶一六〇　藤井しらつゆ

▲永遠に　誌友皆々樣に私は語る友もなく寂しき片田舍に本誌を友として日を送る不束者でございますが御敎導下さる御方がありましたら何卒御手紙や繪葉書で御知らせ下さい私も屹度かならずとも御返事致しますから一時的よりは永久に御願致します誌友の御方の內には一時的にて永遠に二三の友を

○奈良市下三條町八番地小竹方　みどり子

▲蘇近く　人のあゆみも何となく早き心地せられて今年も師走となりました誌友の皆々樣御厚情なる御交りに接しうれしく感謝致して居りますよ何卒御情ぶかき諸姉よ御見捨てなく御まじはり下さいな……御美るはしき皆々樣のうつくしきレターの御交換を願ひます。

○靜岡縣沼津町川原　山縣梅園

▲詩的な方　皆樣しばらく御變りもなくて？私改めて御願したいのはしんみりした煩悶勝なそして詩的な方と御交際願ひたいのよ、もし、あつたら御交り下さいな。

○大阪　櫻井枝葉女

▲みどり樣の御作を讀みて　本誌十一月號のみどり樣のお作、私の見る女、悲しう存じます。私は人樣のお書きになりました事を、おれやこれと、口嘴を入る程のものてはございませんが、あゝ極端にお書きになりましたお作を拜見しましてはどうしても默しては居られないんですものほんとに悲しうございます。あのお文を御覽なさいました東京の方々樣はまーほんとにどう思召するやらさぞ〳〵御冷笑遊ばす事でございませう。私から申します我が身は大阪に生れましたのでもなんでもございません、けれどもやはり五六年も此地に親めば、さう餘り惡くは云はれたうございません。なるほど御尤と首かれる點もございましたが、まー。此れ程にひどいと思はずには居られない所も、幾所かございました。私は人樣がどうおしやつても、あのお文を見ては、誠に堪へられない程、悲しくなつてまゐります。

○東京麴町區飯田町三丁目　二十六番地於島方　あらゝき子

▲御詫び　御手紙下さつた諸姉上樣方御返事差上げませんで誠に濟ません、妾は久しく奈良の方に遊んで居りましてつい二三日前歸つた斗り、それ故御返事差上げる暇も御座いませんから此の欄にて御詫旁々御禮申上ます。妾は都合上前記の所に引移りましたから以後御見捨なく御交際を願ます。

○本鄕區湯島三組町十九番地　植松美佐男方　植松巴子

▲人妻なれど　散り落ちた梧桐の葉から悲しい冬は立ちそめました。なつかしい皆樣、私も投書家の一人となりました。どうぞお閑の時にはお出懸ください。良人もすこし位は文藝を語りますから。

○大阪　田野靜子

▲御挨拶　紅葉のながめ早すぎて霜枯のわびしき今日此頃御社内御一同御變りもあらせられず日々御勉强成され候哉はるかに御案じ申居候何となく御地の空のみ戀しうて都望の念やるかたなくわづかに每月本誌の到着のみ待ちこがれ候折から拶する本誌いかに此身を慰めくれるかは況んや嬉しく存じ候締切にもさしつまり御邪魔樣ながら時候御見舞かたぐ〳〵みだれし筆の跡御察し遊ばせ。

○名古屋市東區車道東町六十番地　出原匡子

▲御交際　妾も先月より淸い本誌の愛讀者になりました不束な者ですけれど御交際下さい尙お同情探い皆樣レター御惠み下さいなきつとお返事致しますわ。

○下野國田沼町多田ヴヰナス會内　翠月マートル

▲野より　一昨年の暮から私達一族並に親しいお友達等二十數名の人々でヴヰナス會を設けて樂しいまどゐを作つて居ます、皆樣高尙な美しい御手紙（總て和文佛文日本文の内）の御交際を御願ひたします。海外の御方も

○山口縣阿武郡萩町八丁　松尾靜香

▲山口縣　にて和歌俳句に名ある郷良英那子樣及び萩の愛讀者諸姉樣御さしつかへなくば御住所御洩らし下さいまして御交際下さいませんか年改まると共に私も新しい友が得たいので御座います

○はつゆき

▲皆樣にお願ひ　私共は地方の愛讀者で御ざいます、そして花のちまたをふむ事の出來ない者で御ざいます、東京の方はおしやはせでございますわネ、何かの會合の時にはすぐ先生方に來て戴いたりなんか遊ばして、ですけれどく私共はまるで盲のやうな、えゝ全くの盲で御ざいます、いつも〳〵懷しいお聲はきゝ乍ら終生お姿を拜する事が出來ませぬ。先生、何卒此の盲を憐と思召て、新年號には是非、河井先生始め諸先生のお姿をおのせ遊ばして下さいまし、ね皆樣、地方の方はみんな御同感で御ざいませうね、お江戸の方もどうぞ私共に味方して、先生方にお願ひ遊ばして下さい、どうぞお願ひで御ざいます、名もない私がこんな事申すのは失禮では御ざいますが、お言葉にあまへまして…どうぞあしからず、そしておきゝ屆けを願ひたう御ざいます。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

雜報

歳の暮

早くも明治四十四年は今一個月を餘すのみで、暮れてゆく、暮れて行く年は惜んでも。悲んでも暮れて行く、吾等は努めなければならぬ。

文藝の爲めには、本年は沈滯の歳であつた、小説と云はず詩歌と云はず、凡て創作は振はなかつた、併し今まで忠實に作つてゐた人は、本年に於ても矢張忠實なる文藝の作家であつた。

本年は文壇よりも、劇壇に活氣があつた。新しい劇場が出來、新しい俳優が出來、新しい脚本が出來、新しい演劇が出來た。此は特に記憶して置いて可いことであらう。

清國の自覺は世界的の大問題であらう。戰爭は容易に終りさうもない。

▲前月中旬、九州の野に大演習が行はれた、大元帥陛下の行幸があつた、大演習は例年の事ではあるが其土地が變るだけに、其地の人々に取つては大なる感化を與へるものであらう。

▲文部省展覽會の最優等者は、西洋畫南薰造氏（瓦燒き）小杉未醒氏（水郷）青山熊治氏（金佛）。日本畫、木島櫻谷氏（若葉の山）尾竹竹坡氏（水）であつた、一般の觀覽者は去年より多くなつた等やうに思つた、批評も盛んになつたやうだ。

▲北原白秋の編輯する新しい雜誌『ザンボア』は第一號が出た、新しい藝術の香の高い雜誌だ。

▲川上音二郎が大阪に於て病死した、劇壇の一事業家は亡くなつたけれど、劇そのものは追々進歩して來た、川上の功や決して沒すべきものでない。

▲御歌長高崎正風氏病む、病中、歌つて曰く、君が代を千代に八千代とくりかへすいきづかひよくなりにける哉

▲神田仲猿樂町の女子商業學校は、創立滿三年に達したるを以て十月二十九日、盛んなる紀念式を擧行して、朝野の名士を招待した。

▲横濱の吉田橋が開通された。

▲越後柏崎に大火があつた。

▲文藝協會の公演はいよ〳〵十一月下旬、帝國劇場で開かれた、ノラは婦人間の話柄ともなり男子間の問題ともなる面白い劇だ。

豫告 新年號の精彩

◎新年には紙數三百頁、例號の二倍の大雜誌を發行いたします、只紙數が多いと云ふだけではなく、多い紙數の中に含まれたる記事の善いことゝ、興味のあることゝが最も本誌の誇りとするところです、今内容の細目は一々豫告いたしませんが、本誌平生の努力を更に一層新年號の爲に熱誠を注いで編輯いたします。兎に角本誌は讀物が生命ですから、大家の作と云はず、誌友の作と云はず、出來合の作は退け、眞に讀みごたへのするものを掲載致します（なほ次の廣告を御覽下さい）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

編輯通信

來年度の本誌

來年度の本誌は増刊を廢する代りに、年四回（新年號とも）例號二倍大の雜誌を發行することになりました、つまり増刊と定期號を一冊に合せて出すのと同じやうな方針で編輯しますから、増刊が無くなつても、投稿家の雄飛する舞臺は少しも狹くならないのです、寧ろ一昇晴の舞臺に上るわけです（因に云ふ、此際前金拂込者は、前金額だ少くなりましたから能く御覽置き下さい。

『夜雨集』の出版

横瀨夜雨氏が天下を縱橫に獨步する夜雨一家の文章を集め、瀟洒清新なる表裝を施し、新年早々本社より出版いたします、御希望の方が澤山あるやうですから前以て御披露いたして置きます。

▲賞品の禮狀を下さいました美濃部、望月、佐藤、佐分、加藤（爲子）、竹村、宮本、佐久間、早川、古那夢、松井、前島、藤村、佐和田、河崎、三島、田村、秋月、加藤（箏子）、八代の諸孃に、右御丁寧に鳴謝します。

▲前號本欄『別れし人へ』の「野ばら」は望月野薔薇さんではありません、問違ふといけませんから一寸お答して置きます。

▲岡山誌友會の記事は別項にありますが、寫眞は新年號に掲出します。

○女子文壇定期號投稿規定

▲投稿は凡て女子に限る▲原稿には必ず『女子文壇投稿』の文字を書き添へること▲原稿は凡て女子文壇社宛（未納税は斷じて受付ず）に送ること▲小說と、詩は振假名をつけること▲小說は二十四字詰八十行以內、散文は三十行乃至五十行、初作は三十行以內▲各種類每に一人一篇限りとす、和歌、俳句も一人一章限りとす▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、半紙、原稿紙、罫紙に限る▲別に本欄の原稿を募る長さは二十四字詰二百行內外とし總振假名をつけること▲圖畫は毛筆畫にて薄き日本紙に認め大さは二寸に三寸一人一枚限。

◎投稿は每月十五日到着を以て嚴に締切る

○女子文壇投稿各種懸賞定額

▲小說と散文は、天賞金參圓、地賞金壹圓五拾錢、人賞金七拾錢を呈す▲『詩』は天賞金貳圓、地賞金七拾錢、人賞金四拾錢▲『和歌』『俳句』『圖畫』『初作』は、天賞金壹圓、地賞金五拾錢、人賞金參拾錢を呈す▲『本欄』は金五圓以下壹圓以上正金にて呈す（但し二頁以內の短きものは此限りにあらず）▲賞品發送は作物發表の翌月以後とす定額金壹圓以上の創作當選者には價格相當の物品を贈呈し、金壹圓以下は圖書切符にて贈呈す。

▼女子文壇定價早見表（四十五年度より改定いたします）

冊數	定價前金	郵税	合計
一冊（一月分）	拾五錢	壹錢五厘	拾六錢五厘
三冊（三月分）	四十三錢五厘	四錢五厘	四拾八錢
六冊（半年分）	八拾四錢	九錢	九拾參錢
十二冊（壹年分）	一圓六十六錢	拾八錢	壹圓七十四錢

定期及増刊號とも	定價前金	郵税	合計
増刊一冊	貳拾錢	壹錢五厘	貳拾一錢五厘
半年分（八冊）	一圓二十三錢	拾貳錢	壹圓三十四錢
壹年分（十六冊）	二圓二十八錢	貳拾四錢	貳圓五拾二錢

申込注意

注文は總て前金のこと。振替貯金にて拂込の時は必ず右誌代金の外に登記料金壹錢増しのこと　用紙は最寄郵便局にて無料にて呉れます。郵便爲替は中橋和泉町局宛のこと。郵券代用は必ず壹割増のこと（收入印紙謝絕）。最寄書店にて品切の時は直接發行元へ御注文を乞ふ

▼廣告掲載料

申込期限　發行前月十五日

等級	料金
壹等	一頁參拾圓
貳等	一頁貳拾五圓
參等	一頁貳拾參圓
半頁	十三圓（半頁廿四字三十二行）
一行	四拾錢（一行五號字二十四字詰）

取扱所　博報堂。電報通信社。弘報堂。文明廣告社

明治四十四年十一月二十五日印刷納本
明治四十四年十二月一日七年第拾五號發行

不許複製

編輯兼發行人　野口竹次郎
印刷人　松本魁
印刷所　東京國文社

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　女子文壇社
電話京橋六〇七番
振替貯金口座壹七貳九番

特約販賣　東京堂、北隆館、上田屋、至誠堂
東海堂、良明堂、大阪盛文館外

本誌の價値は讀んで後に知り給へ

女子文壇

毎に進歩し、毎に覺醒して已まざる本誌は、來る新年號に於ても、雜誌界の一大王國を實現せんとす。先づ小說と脚本には現下文壇の重鎭たる

森鷗外氏。中村吉藏氏。

正宗白鳥氏。田村俊子氏。

の四氏が特に本誌の爲に苦心慘憺たる最新の傑作を寄せらる、價値ある讀物たるは言を俟たず。

一月元旦

新年特別號

豫告

紙數例號二倍三百餘頁
原色版寫寫版口繪澤山
本號に限定價金參拾錢
送料貳錢五厘

世の識者に問はんとして本號に捉へ來りし**婦人問題**は題『**上流婦人論**』として當代の**學者名士**が各方面より論評して餘す處なかるべし、また**與謝野晶子女史**より**新代の婦人**の爲に意義深き評論文を起草されたり、其他現代知名の人士に就て聞き得たる**有益な談話**及び○信濃の女○壁畫の話○湯屋の今昔○女性の姙孕力○光源氏の一生○三ヶ津自慢競○詩人と結婚する勿れ○私ハ顏○新年の巷など其他何人が讀むも興味を感ずる記事。本誌が獨得とする**誌友**の創作、感想文は特に材料を精選して清新の趣味溢る**表紙**杉浦非水氏銀刷極彩色**原色版**本誌二倍大美

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

口癖の様に頭痛がするといふ婦人あり

御婦人は十人寄れば、七八人まで頭痛して困ると仰しやいますが、頭痛の起る原因に色々あるけれども、婦人病の殆んど總てが頭痛の原因となるといふ事は、どの御醫者さんも申します、併し多くの婦人は、頭痛のするのは、時候の爲めだとかいつて、顳顬へ頭痛膏だの、梅干の皮などを貼て、それで治ると思ふ人もある様ですが之れは大なる誤解である、婦人病の根治を圖らない内は、頭痛は決して止むものでない、上述の如く頭痛がして困ると云ふ方は、多くの場合に於て婦人病に罹つて居るのであるから、特に是等の婦人の爲めに、婦人病の兆候及び療法に付て簡單に述べて見ませう。

ヒステリー症は俗に言ふ血の道で最初は頭が重く氣がふさぎ次で頭痛が起る、もう一歩進むと癇高ぶり、些細の事が氣にかゝり、過ぎ去つた事や、取越苦勞をする様になる、白血赤血こしけは子宮内膜炎の結果で多量のねばくくした帶下を漏らし、其帶下は時としては、血液又は膿を含む事があり、甚だ惡い臭がする、此病氣は懷姙の機能を奪ふから子供を擧げ難く、顏色は常に青く活氣に乏しい年頃になつて月のものを見ないとか、たとへあつても、時期一定せず、其量に多少あり、月經時に苦痛を感ずるのは皆病氣の結果である、「つわり」は姙婦の持前の如く考へて治療を怠る方があるけれども、營養分を攝取することが出來ない爲めに身體甚だ衰弱し、之が爲めに難産小産する恐れがある其他腰足が引釣り痛み、又胸先へ差込み錐を揉み込まれる様な痛みを覺えるとか目が眩んだり、耳が鳴つたり、肩が凝つたり、腰足が冷えたり、顏がほてつたりする容態は、多く婦人病から起るのである、此外産後古血が滯ると色々の病氣が起る、肥立ちが惡るければ手足が水腫が出來たり、しびれたりする、以上述べた所は、婦人病の大要であるが、是等の病氣に對する治療法は、津村順天堂の自宅治療法を以て最良とする、津村順天堂には内服藥としては中將湯あり以上の諸病に特効があります、外用藥即ち子宮座藥としては中將球があります、此兩藥を併用すれば、藥効は内外相應じて一層著しいどういふ時に中將球が必要かといふと、子宮内膜炎とか白帶下、赤帶下、こしけ、子宮痙攣、子宮炎、子宮加答兒、膣炎、膣加答兒、子宮糜爛、前の惡臭、前の瘙痒、月經時の疼痛及び夫の淋疾に罹り居る時等に中將湯を服用して中將球を兼用するの必要があります

◎中將湯、中將球は全國到る處の藥店にて販賣す、若し無き時は病人の容體詳しく書き添へ、本舖、東京日本橋通四丁目津村順天堂へ注文せられよ中將湯には數種の加減藥ありて本舖は其病症に應じ適當の加減藥を發送する

中將湯代價五週分貳圓五十錢、三週分一圓六十錢、二週分一圓十錢、一週分六十錢、四日分三十五錢、二日分廿錢

中將球定價百二十個入五圓、四十五個入貳圓、二十個入一圓、九個入五十錢、試分三個入二十錢

（明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可）